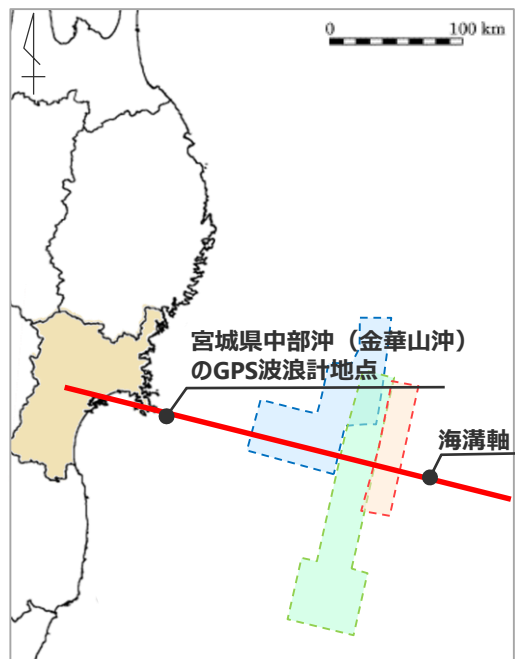


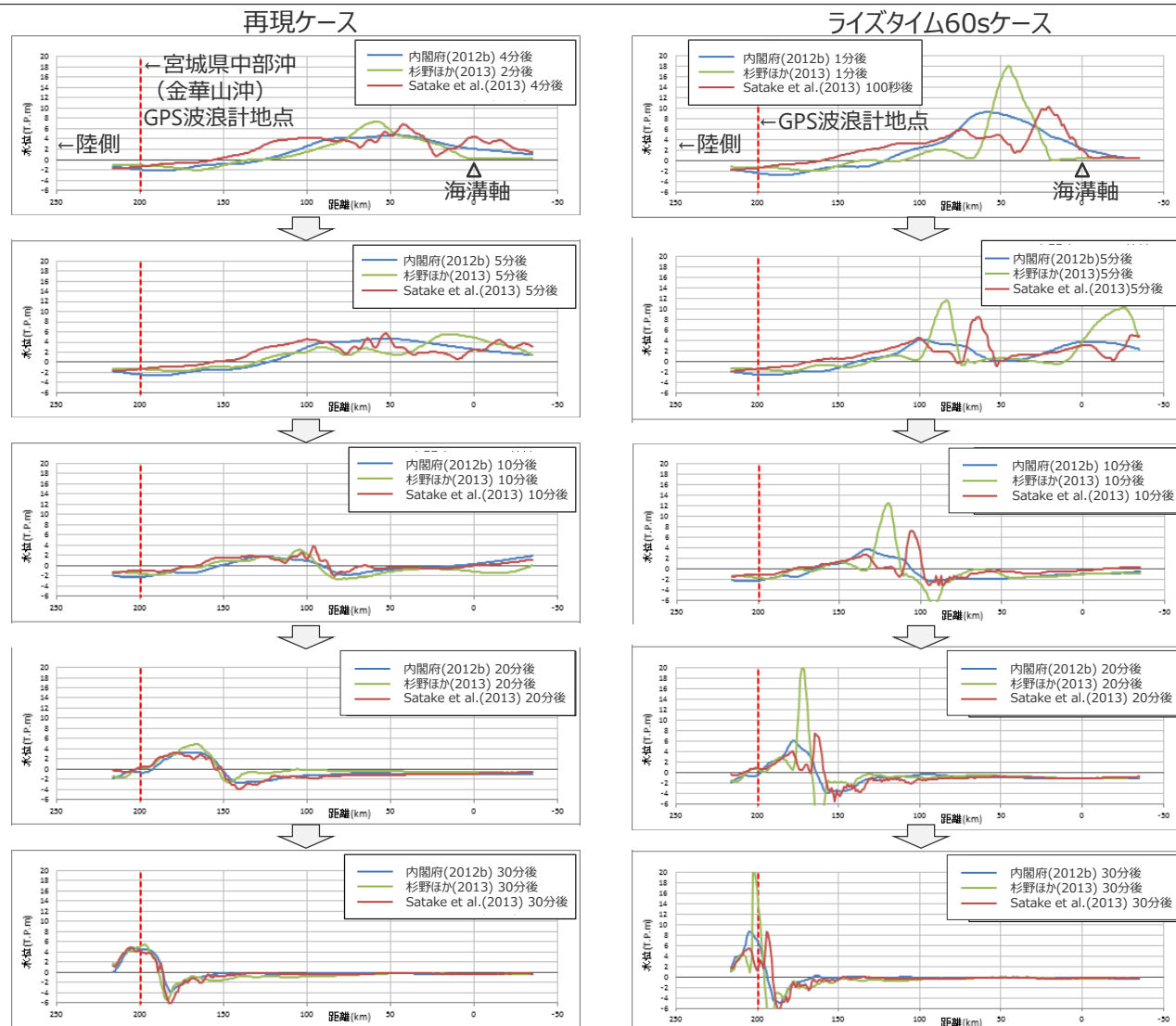
②-2 東北沖地震のライズタイムに関する分析

(ライズタイムが津波の発生・伝播に与える影響の分析：縦断面水位分布への影響)

- 大きくすべった領域が前面に位置する「宮城県中部沖」のGPS波浪計地点を対象に、再現ケースとライズタイム60sケースの波源付近からGPS波浪計地点付近までの縦断面水位分布のスナップショットによる比較を行った。
- その結果、ライズタイム60sケースでは、波源付近で再現ケースと比べて短波長の津波が発生し、それが沿岸域に近づくにつれ著しく増幅していることを確認した。



波源付近から宮城中部沖のGPS波浪計地点付近までの縦断面 (—)

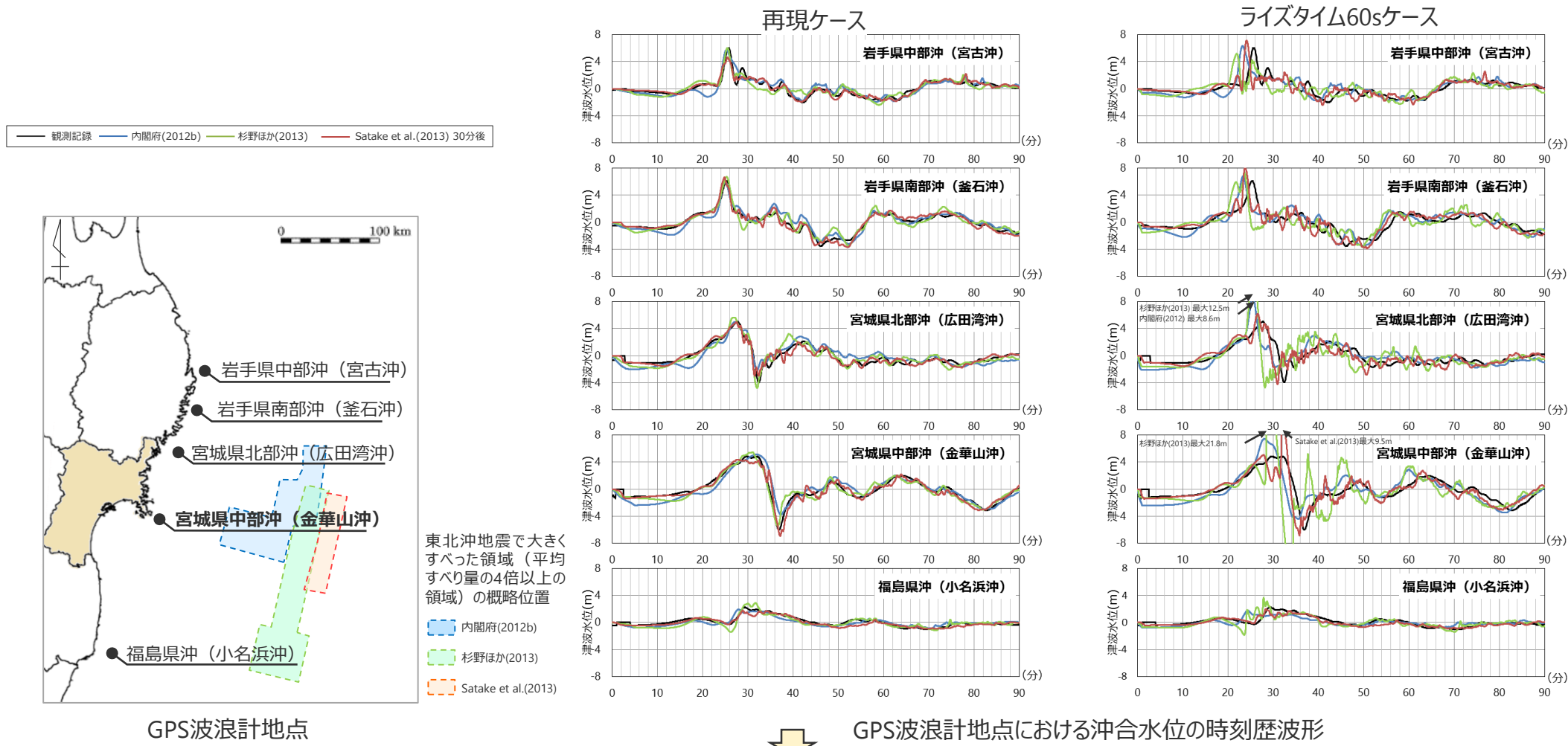


波源付近からGPS波浪計地点までの縦断面水位分布のスナップショット

②-2 東北沖地震のライズタイムに関する分析

(ライズタイムが津波の発生・伝播に与える影響の分析：GPS波浪計地点の沖合水位の時刻歴波形)

- 再現ケースおよびライズタイム60sケースによるGPS波浪計地点の水位の時刻歴波形について、観測記録と比較した。
- その結果、再現ケースでは津波の水位および周期が観測記録と良く一致しており、実現象を再現していることを確認した。
- 一方、ライズタイム60sケースでは、観測記録と比べて短周期の波が顕著になっているとともに、大きくすべった領域が前面に位置する宮城県沖において最大水位が観測波形の約1.5倍～3倍となっていることを確認した。



- 東北沖地震の再現モデルについて、すべり量を変更せずにライズタイムを60sと極端に短く設定すると、東北沖地震の津波の周期・波長等の物理特性は失われるとともに、東北沖地震の観測記録の津波高を大幅に上回ることを確認。Mw9クラスの地震に対して内閣府のライズタイムの設定は過大な設定となっていることを確認した。

②-2 東北沖地震のライズタイムに関する分析

(参考：東北沖地震津波の再現モデルの断層パラメータ)

■ 内閣府(2012b)、杉野ほか(2013)、Satake et al.(2013)の3つの再現モデルの断層パラメータを示す。

項目	内閣府(2012b)	杉野ほか(2013)	Satake et al.(2013)
モーメントマグニチュードM _w	9.0	9.1	9.0
断層面積S (km ²)	119,974	112,000	110,000
平均応力低下量 $\Delta\sigma$ (MPa)	2.47	3.86	2.79
剛性率 μ (N/m ²)	4.1×10^{10}	4.6×10^{10}	4.0×10^{10}
平均すべり量 (m)	8.6	11.4	9.5
最大すべり量 (m)	49.6	77.9	69.1
地震モーメントM ₀ (Nm)	4.2×10^{22}	5.9×10^{22}	4.2×10^{22}
すべり角 λ (°)	太平洋プレートの運動 方向に基づいて設定	81	81
ライズタイムT (s) ^{※1}	300	300	150
破壊伝播速度 (km/s)	2.0 ^{※2}	1.5	2.0 ^{※3}

※1 東北沖地震で大きくすべった領域のライズタイム。

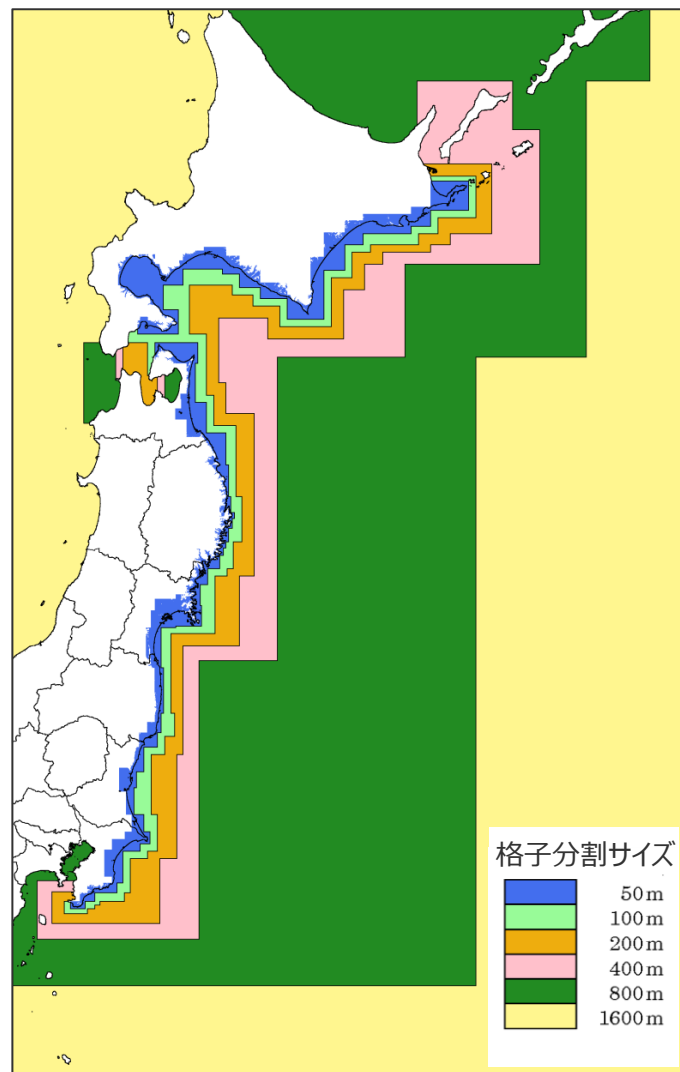
※2 杉野ほか(2014)による推定値。

※3 Satake et al.(2013)は、破壊伝播速度1.5、2.0、2.5km/sについて検討し、2.0km/sと設定。

②-2 東北沖地震のライズタイムに関する分析

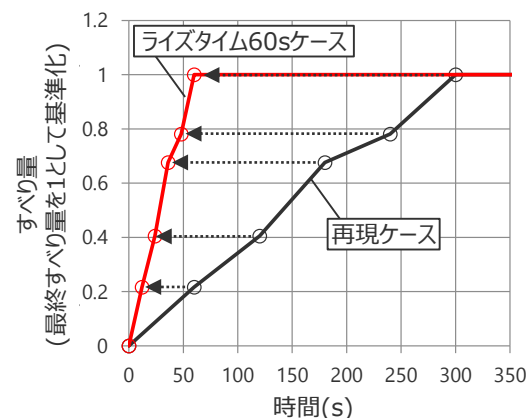
(参考：計算条件)

■ 解析領域・格子分割および計算条件を示す。



解析領域・格子分割

項目	計算条件 (津波の数値シミュレーション)
基礎方程式	・非線形長波理論 (浅水理論) の連続式及び運動方程式
計算領域	・北海道根室～房総半島の領域
格子分割サイズ	・沖合1,600m→800m→400m→200m→100m→沿岸域と陸域50m 注) Satake et al.(2013)モデルでは陸域は計算領域に含めず
境界条件	・沖側 ・吸収境界 (Cerjan et al.(1985))
	・陸側 ・内閣府(2012b)モデルおよび杉野ほか(2013)モデル：遡上計算 Satake et al.(2013)モデル：完全反射
潮位条件	・T.P.± 0.0m
海底の地盤変動量	・Mansinha and Smylie(1971)の方法 注) Satake et al.(2013)モデルでは水平変位による鉛直寄与分を考慮 ・海底地盤変動量は、タイムウィンドウごとに推定されたすべり量に基づき、一定の時間間隔 (5s以下) ごとに徐々に与える。
海底摩擦損失係数	・マンニングの粗度係数 $0.025\text{m}^{-1/3}\text{s}$
水平渦動粘性係数	・ $10\text{m}^2/\text{s}$
計算時間間隔	・0.2s
計算時間	・3時間

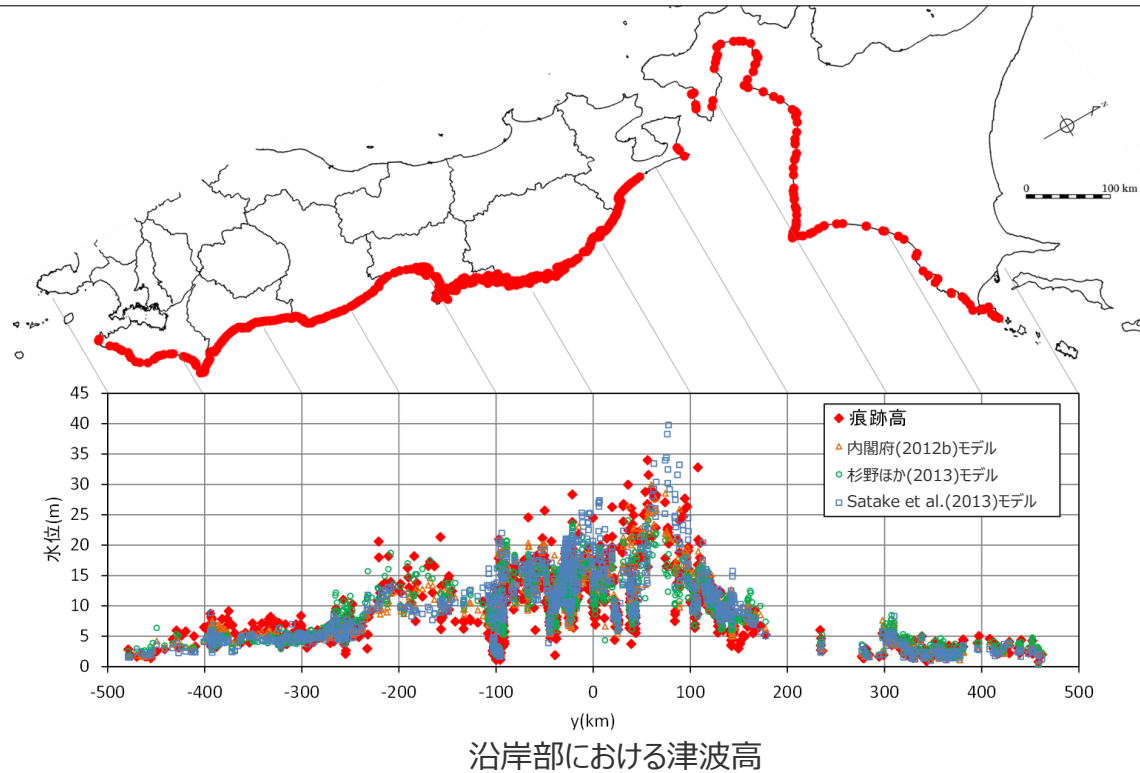


再現ケースおよびライズタイム60sケースの断層すべりの時刻歴の例

②-2 東北沖地震のライズタイムに関する分析

(参考：再現ケースによる東北沖地震の再現性確認)

- 内閣府(2012b)、杉野ほか(2013)、Satake et al.(2013)のそれぞれの再現ケースについて、津波伝播解析結果の津波高と東北沖地震の津波痕跡を比較し、東北沖地震津波の再現性を確認している。



モデル	地点数	K	κ	陸側境界条件
内閣府(2012b)	1099	0.985	1.319	遡上計算
杉野ほか(2013)	1099	0.974	1.350	遡上計算
Satake et al.(2013)	1099	0.948	1.430	完全反射

- ・ 痕跡高は津波痕跡データベースの痕跡Aランクのみ採用、沿岸から200m以内の痕跡のみ採用。200m以内の隣接地点の痕跡は平均化。計算結果は沿岸格子から抽出
- ・ 陸側境界条件は各文献に基づき設定
- ・ 相田の指標K（幾何平均）とκ（幾何標準偏差）
- ・ 土木学会(2016)による再現性の目安：
 $0.95 < K < 1.05$ 、 $\kappa < 1.45$

6-5 ライズタイムの設定

③Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討

ライズタイムの設定

①津波評価におけるライズタイムに関する知見

- 津波評価におけるライズタイムに関する知見について整理した。

②-1 国内外のMw9クラスの巨大地震・津波のライズタイムの推定事例

⇒ 近年のMw9クラスの巨大地震の津波インバージョンから推定されるライズタイムはすべり量が多い小断層ほど長く、大きくすべった領域の小断層のライズタイムは150~300sであることを確認した。

②-2 東北沖地震のライズタイムに関する分析

⇒ 東北沖地震の津波観測波形を対象として、タイムウィンドウの幅・個数を細かく設定して津波のタイムウィンドウインバージョンを実施した結果、東北沖地震のライズタイムとしては150~200s程度が最も適切であるとともに、ライズタイムを60sとした場合の津波インバージョンでは津波観測波形を再現できないことを確認した。

⇒ 東北沖地震の再現モデルについて、すべり量を変更せずにライズタイムを60sと極端に短く設定すると、東北沖地震の津波の周期・波長等の物理特性は失われるとともに、東北沖地震の観測記録の津波高を大幅に上回ることを確認。Mw9クラスの地震に対して内閣府のライズタイムの設定は過大な設定となっていることを確認した。

③Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討

⇒ 検討波源モデルのライズタイムは、Mw 8 ~ 9クラスの地震の津波インバージョン事例を踏まえても概ね保守的な設定となっているが、検討波源モデルのライズタイムを120sとすることにより、これらの地震の初期水位を上回る設定となることを確認した。

④内閣府の設定したライズタイムに関する検討

⇒ 津波評価に影響の大きい初期水位に着目した検討により、内閣府モデルは、国内外の巨大地震のスケールに基づく平均応力降下量、平均すべり量等のパラメータの保守的な設定を、更に上回る設定となっていることを確認した。

「(B)代表パラメータの検討による方法」により検討された内閣府の最大クラスモデルは、すべり量とライズタイムの組合せを非常に大きく設定することにより、その他のパラメータの津波影響を代表していることを確認した。
(補足説明資料5-5,5-6章)

まとめ（津波評価におけるライズタイムの設定方針）

- 国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の推定事例のほか、Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討及び内閣府のパラメータの設定を踏まえて、ライズタイムを設定した。

6-5 ライズタイムの設定

③Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (検討概要)

- 近年のMw9クラスの巨大地震・津波のライズタイムに関する推定事例および東北沖地震のライズタイムに関する分析から、Mw9クラスの巨大地震のライズタイムは150~300s程度であることを確認した。
- ここでは、近年のMw9クラスの巨大地震・津波の事例が少ないことを踏まえて、1960年チリ地震等Mw8~9クラスの地震の津波インバージョン事例を収集し、ライズタイムについて検討する。
- 検討フローは以下のとおり。

Mw8~9クラスの地震の津波インバージョン事例の収集

・2004年スマトラ島沖地震、2011年東北沖地震以外の津波インバージョン事例として、以下のプレート間地震を対象として津波インバージョン事例を収集した。

○収集対象とするプレート間地震

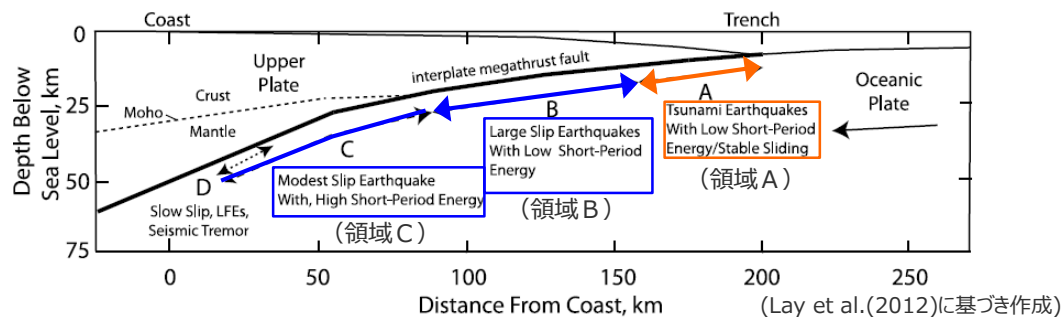
- ・Mw9クラスの巨大地震
- ・近年のMw8クラスの巨大地震(1990年以降)
- ・南海トラフの地震

※国内外の主な科学技術系論文データベース等を対象。

(JDREAM Ⅲ、ScienceDirect、SpringerLink、AGU Publications、BSSA online)

初期水位に対するすべり量とライズタイムの関係を踏まえた検討

・収集した津波インバージョン事例について、スケーリング則に基づき検討波源モデルの地震規模(Mw9.1)に基準化した上で、Kajiura(1970)による初期水位に対するすべり量とライズタイムの関係を踏まえて分析し、Mw9クラスの巨大地震のライズタイムを検討した。



プレート間地震の破壊領域の概念図

近年のMw9クラスの巨大地震・津波のライズタイムに関する推定事例

イベント名		Mw	破壊領域
Mw9クラスの巨大地震	2004年スマトラ島沖地震	9.1	ABC
	2011年東北沖地震	9.1	ABC

津波インバージョンの収集対象とするMw8~9クラスのプレート間地震

イベント名		Mw	破壊領域
Mw9クラスの巨大地震	1952年カムチャツカ地震	9.0	ABC
	1960年チリ地震	9.5	ABC
	1964年アラスカ地震	9.2	ABC
近年のMw8クラスの巨大地震	2001年ペルー地震	8.4	B
	2003年十勝沖地震	8.3	B
	2005年スマトラ島沖地震	8.6	BC
	2006年千島列島沖地震	8.3	(A)B
	2007年ソロモン諸島沖地震	8.1	(A)B
	2007年ペルー地震	8.0	BC
	2007年スマトラ島沖地震	8.4	B(C)
	2010年チリ地震	8.8	BC
	2013年ソロモン諸島沖地震	8.0	(A)B
	2014年チリ地震	8.2	B
2015年チリ地震	8.3	AB	
南海トラフの地震	1944年東南海地震	8.1	(A)B
	1946年南海地震	8.3	(A)B

・Mwは、USGSウェブサイトに基づく。

・破壊領域は、Lay et al.(2012)に基づく。破壊の有無が不明確な場合は()で示されている。Lay et al.(2012)に記載のない地震については、津波インバージョンモデルからLay et al.(2012)の方法に基づき判断した。

③Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (Mw8~9クラスの地震の津波インバージョン事例：Mw9クラスの地震)

■ Mw9クラスの巨大地震について、2004年スマトラ島沖地震、2011年東北沖地震以外のイベントの津波インバージョン事例の収集結果は以下のとおり。

その他のMw9クラスの地震の津波インバージョン事例

地震名	Mw ¹⁾	破壊領域 ²⁾	津波インバージョンの文献名	使用している津波観測データ	津波インバージョン結果					備考 ⁴⁾
					断層面積 A(km ²)	最大すべり量 D _{max} (m)	平均すべり量 D _{av} (m)	超大すべり域相当の領域のすべり量 D _{sa} (m) ³⁾	ライズタイム T(s)	
1952年カムチャツカ地震	9.0	ABC	Johnson and Satake (1999)	検潮記録	120,000	11.4	3.2	11.4	0・II	
1960年チリ地震	9.5	ABC	Fujii and Satake (2012)	検潮記録、地殻変動	135,000	30.1	11	27.4	60・II	
			Sanchez(2006)	検潮記録	200,000	26.4	16.0	26.4	0・II	
1964年アラスカ地震	9.2	ABC	Johnson and Satake(1996)	検潮記録、地殻変動	184,000	22.1	8.6	22.1	0・II	
			Ichinose et al.(2007)	検潮記録、地殻変動	225,000	17.4	4.0	11.9	24・II	

・各津波インバージョン結果の波源モデルを6-5の後段に示す。

1) USGSウェブサイトに基づく。

2) 破壊領域は、Lay et al.(2012)に基づく。破壊の有無が不明確な場合は()で示されている。Lay et al.(2012)に記載のない地震については、津波インバージョンモデルからLay et al.(2012)の方法に基づき判断した。

3) すべり量の大きい小断層から順に面積を積算したとき断層面積の5%となる小断層のすべり量。(内閣府(2012)の超大すべり域の分析に準じて算定。)

4) 備考の番号については、以下のとおり。

種別	内容		
I-(1)	すべり量とライズタイムの両方を推定するために重要となる数分程度以下の周期成分を観測可能な津波観測データが用いられている。	かつ	
I-(2)			ライズタイムを変数としたインバージョンもしくはタイムウィンドウインバージョン等により、すべり量とライズタイムが直接推定されている。パラメータスタディにより、適切なライズタイムが検討されている。
I-(3)			ライズタイムを0もしくは一定値と仮定して津波インバージョンが実施されている。(ライズタイムに関する記載がないものは、ライズタイムを0と仮定していると判断した。)
II	すべり量とライズタイムの両方を推定するために重要となる数分程度以下の周期成分を観測可能な津波観測データが用いられていない。		

(参考) 国内外の巨大地震の津波インバージョンによるライズタイムの推定事例

地震名	Mw ¹⁾	破壊領域 ²⁾	津波インバージョンの文献名	使用している津波観測データ	津波インバージョン結果					備考 ⁴⁾
					断層面積 A(km ²)	最大すべり量 D _{max} (m)	平均すべり量 D _{av} (m)	超大すべり域相当の領域のすべり量 D _{sa} (m) ³⁾	ライズタイム T(s)	
2004年スマトラ島沖地震	9.1	ABC	Hirata et al.(2006)	衛星海面高度計	210,000	29.1	13.4	29.1	150	I-(2)
			Fujii and Satake (2007)	衛星海面高度計、検潮記録	220,000	24.6	5.5	24.6	180	I-(2)
2011年東北沖地震	9.1	ABC	内閣府(2012b)	痕跡高、検潮記録、地殻変動、 海底圧力計、GPS波浪計、海底波浪計	119,974	49.6	8.6	33.8	300	I-(1)
			杉野ほか(2013)	痕跡高、地殻変動 海底圧力計、GPS波浪計、海底波浪計	112,000	77.9	11.4	49.2	300	I-(1)
			Satake et al. (2013)	検潮記録、海底圧力計 GPS波浪計、海底波浪計	110,000	69.1	9.5	31.7	150	I-(1)

6-5 ライズタイムの設定

③Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (Mw8~9クラスの地震の津波インバージョン事例一覧：Mw8クラスの地震（1990年以降）)

■ 近年のMw8クラスのプレート間地震の津波インバージョン事例の収集結果は以下のとおり。

地震名	Mw ¹⁾	破壊領域 ²⁾	津波インバージョンの文献名	使用している津波観測データ	津波インバージョン結果				備考 ⁴⁾
					断層面積 A(km ²)	最大すべり量 D _{max} (m)	平均すべり量 D _{av} (m)	超大すべり域相当の領域のすべり量 D _{sa} (m) ³⁾	
2001年ペルー地震	8.4	B	Adriano et al.(2016)	検潮記録	30,000	10.9	2.7	10.9	0・II
2003年十勝沖地震	8.3	B	Tanioka et al.(2004)	検潮記録、海底圧力計	22,400	4.3	0.7	4.3	30・I-(3)
			谷岡ほか(2004)	検潮記録、海底圧力計	19,200	3.3	0.9	3.1	0・I-(3)
			Romano et al.(2010)	検潮記録、地殻変動、海底圧力計	31,500	5.5	1.1	5.5	0・I-(3)
2005年スマトラ島沖地震	8.6	BC	Yatimantoro(2013)	検潮記録、地殻変動	45,000	12.4	4.4	12.4	0・II
2006年千島列島沖地震	8.3	(A)B	Fujii and Satake(2008a)	検潮記録、海底圧力計	20,000	7.4	3.1	7.4	60・I-(3)
			Baba et al.(2009)	海底圧力計	56,000	11.8	2.7	8.0	30・I-(1)
2007年ペルー地震	8.0	BC	Hebert et al.(2009)	海底圧力計	30,000	5.5	1.0	5.5	0・I-(3)
			Jimenez et al.(2014)	検潮記録、海底圧力計	16,200	7.0	3.1	7.0	0・I-(3)
2007年スマトラ島沖地震	8.4	B(C)	Fujii and Satake(2008b)	検潮記録、海底圧力計	25,000	9.3	2.7	9.3	60・I-(3)
			Lorito et al.(2008)	検潮記録、海底圧力計	70,000	12.0	1.1	10.0	0・I-(3)
			Gusman et al.(2010)	検潮記録、地殻変動、海底圧力計	100,000	5.4	1.2	4.4	0・I-(3)
2010年チリ地震	8.8	BC	Fujii and Satake(2012)	検潮記録、地殻変動、海底圧力計	90,000	22.2	3.8	13.4	30・I-(3)
			Yue et al.(2014)	検潮記録、地殻変動、海底圧力計	144,000	17.2	4.1	12.7	30・I-(3)
			Yoshimoto et al.(2016)	検潮記録、地殻変動、海底圧力計	96,250	16.1	4.7	14.0	0・I-(3)
2013年ソロモン諸島沖地震	8.0	(A)B	Romano et al.(2015)	検潮記録、海底圧力計	18,000	10.5	2.2	7.5	0・I-(3)
2014年チリ地震	8.2	B	Gusman et al.(2015)	検潮記録、地殻変動、海底圧力計	28,000	7.0	1.1	6.0	30・I-(1)
2015年チリ地震	8.3	AB	Melgar et al.(2016)	検潮記録、地殻変動	64,000	10.0	2.2	8.0	20・II
			Romano et al.(2016)	検討記録、地殻変動、海底圧力計	64,000	10.9	1.6	7.0	0・I-(3)
			Fuentes et al.(2016)	痕跡高	39,480	5.4	3.0	5.4	0・II

・2007年ソロモン諸島沖地震(Mw8.1)、津波インバージョンの事例なし。・各津波インバージョン結果の波源モデルを6-5の後段に示す。

1) USGSウェブサイトに基づく。

2) 破壊領域は、Lay et al.(2012)に基づく。破壊の有無が不明確な場合は()で示されている。Lay et al.(2012)に記載のない地震については、津波インバージョンモデルからLay et al.(2012)の方法に基づき判断した。

3) すべり量の大きい小断層から順に面積を積算したとき断層面積の5%となる小断層のすべり量。(内閣府(2012)の超大すべり域の分析に準じて算定。)

4) 備考の番号については、以下のとおり。

種別	内容	
I-(1)	すべり量とライズタイムの両方を推定するために重要となる数分程度以下の周期成分を観測可能な津波観測データが用いられている。	かつ ライズタイムを変数としたインバージョンもしくはタイムウィンドウインバージョン等により、すべり量とライズタイムが直接推定されている。パラメータスタディにより、適切なライズタイムが検討されている。
I-(2)		
I-(3)		
II	すべり量とライズタイムの両方を推定するために重要となる数分程度以下の周期成分を観測可能な津波観測データが用いられていない。	

③Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (Mw8~9クラスの地震の津波インバージョン事例一覧：南海トラフの地震)

■ 南海トラフの地震の津波インバージョン結果は以下のとおり。

地震名	Mw ¹⁾	破壊領域 ²⁾	津波インバージョンの文献名	使用している津波観測データ	津波インバージョン結果				備考 ⁴⁾
					断層面積 A(km ²)	最大すべり量 D _{max} (m)	平均すべり量 D _{av} (m)	超大すべり域相当の領域のすべり量 D _{sa} (m) ³⁾	
1944年東南海地震	8.1	(A)B	Tanioka and Satake (2001a)	検潮記録	46,575	3.3	0.9	2.7	0・II
			Baba et al. (2006)	検潮記録	44,100	4.6	1.0	3.2	60・II
			Satake (1993)	検潮記録、地殻変動	48,600	1.6	0.8	1.6	0・II
			Kato and Ando (1997)	検潮記録、地殻変動	43,200	4.5	1.1	4.5	110・II
1946年南海地震	8.3	(A)B	Tanioka and Satake (2001b)	検潮記録	58,725	6.2	1.9	5.9	180・II
			Baba et al. (2002)	検潮記録、地殻変動	58,725	6.1	1.7	5.6	60・II
			Satake (1993)	検潮記録、地殻変動	59,400	2.4	1.3	2.4	0・II
			Kato and Ando (1997)	検潮記録、地殻変動	64,800	3.3	1.1	3.3	150・II

・各津波インバージョン結果の波源モデルを6-5の後段に示す。

1) USGSウェブサイトに基づく。

2) 破壊領域は、Lay et al.(2012)に基づく。破壊の有無が不明確な場合は()で示されている。Lay et al.(2012)に記載のない地震については、津波インバージョンモデルからLay et al.(2012)の方法に基づき判断した。

3) すべり量の大きい小断層から順に面積を積算したとき断層面積の5%となる小断層のすべり量。(内閣府(2012)の超大すべり域の分析に準じて算定。)

4) 備考の番号については、以下のとおり。

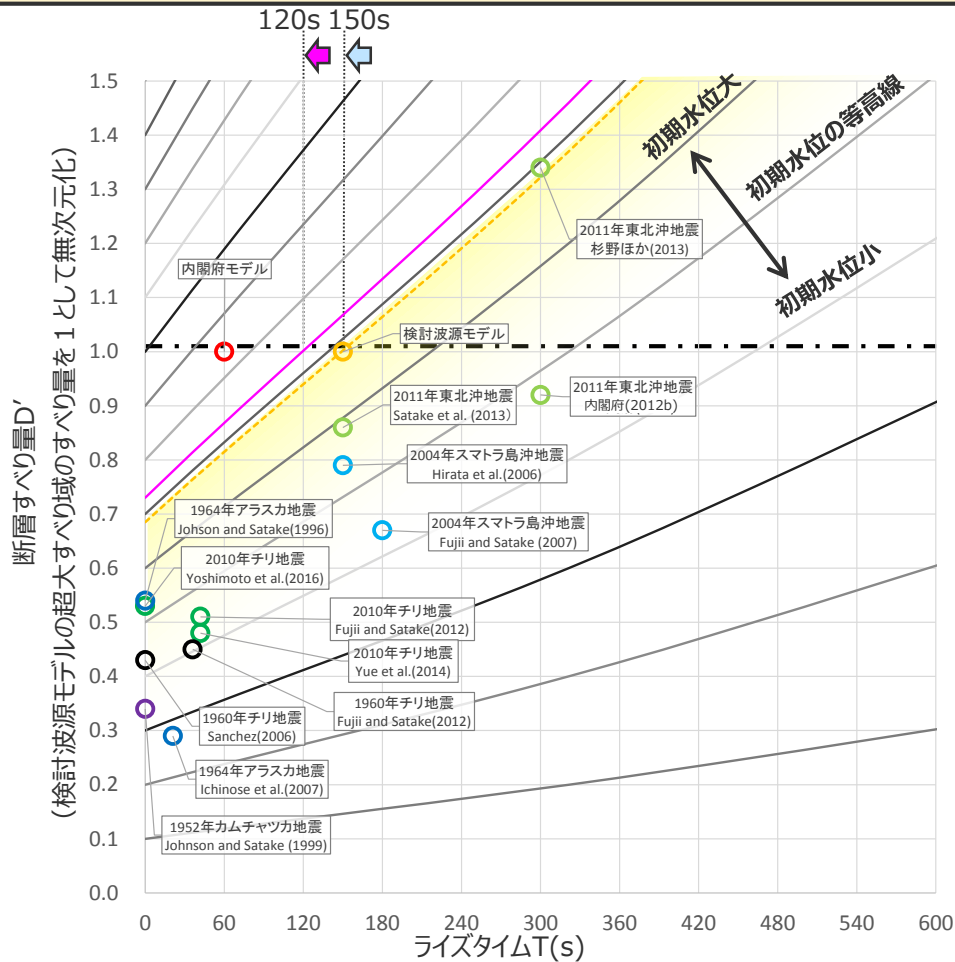
種別	内容	
I-(1)	すべり量とライズタイムの両方を推定するために重要となる数分程度以下の周期成分を観測可能な津波観測データが用いられている。	ライズタイムを変数としたインバージョンもしくはタイムウィンドウインバージョン等により、すべり量とライズタイムが直接推定されている。
I-(2)		パラメータスタディにより、適切なライズタイムが検討されている。
I-(3)		ライズタイムを0もしくは一定値と仮定して津波インバージョンが実施されている。 (ライズタイムに関する記載がないものは、ライズタイムを0と仮定していると判断した。)
II	すべり量とライズタイムの両方を推定するために重要となる数分程度以下の周期成分を観測可能な津波観測データが用いられていない。	

6-5 ライズタイムの設定

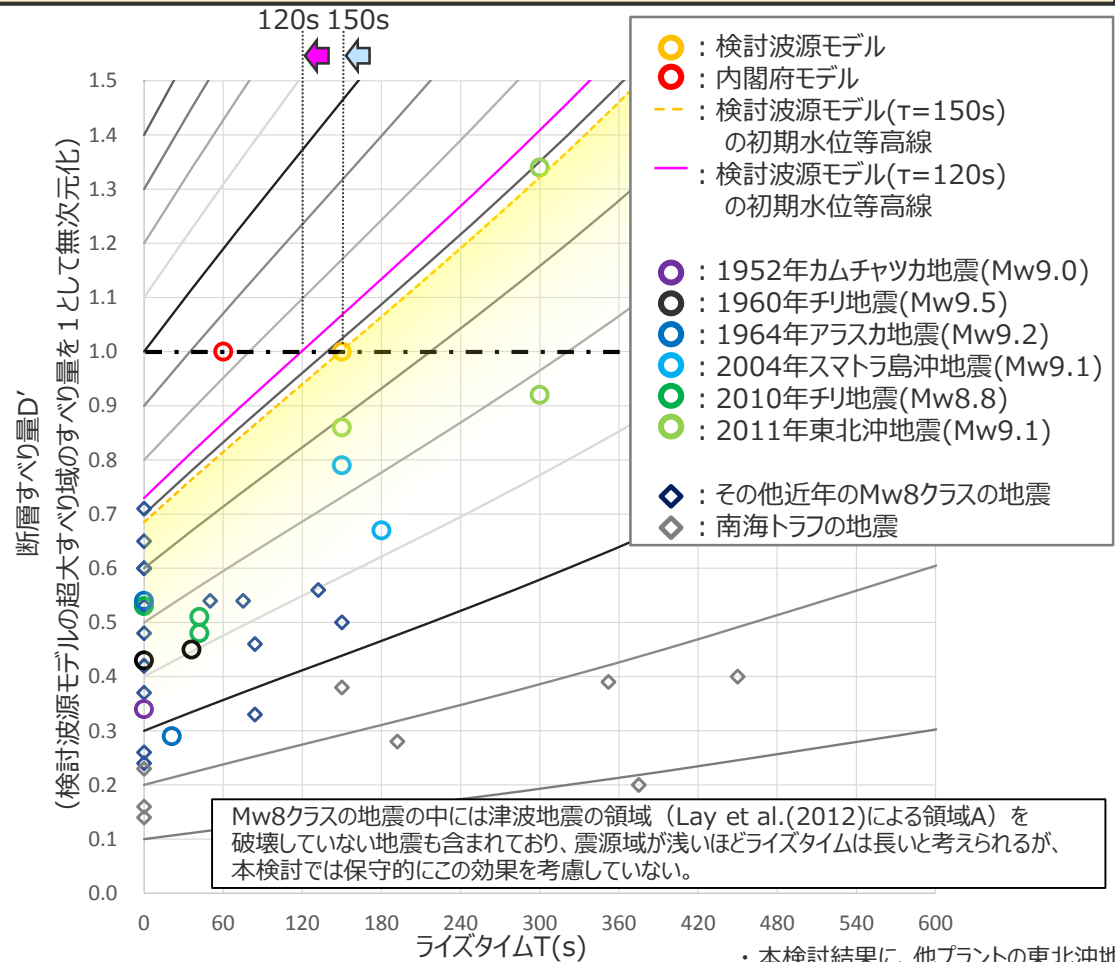
③Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (初期水位に対するすべり量とライズタイムの関係を踏まえた検討)

■ 収集したMw8~9クラスの地震の津波インバージョン結果の超大すべり域相当の領域におけるすべり量とライズタイムについて、スケーリング則に基づき検討波源モデルの地震規模(Mw9.1)で基準化した上で、Kajiura(1970)による初期水位に対するすべり量とライズタイムの関係を踏まえて検討した。

- ライズタイムが0もしくは小さい波源モデルでは断層すべり量も小さく、ライズタイムが長い波源モデルでは断層すべり量も大きくなっている。
- 検討波源モデルのライズタイムは、Mw8~9クラスの地震の津波インバージョン事例を踏まえても概ね保守的な設定となっているが、検討波源モデルのライズタイムを120sとすることにより、これらの地震の初期水位を上回る設定となることを確認した。



(a) Mw8.8以上の地震



(b) 収集した全地震

Mw8~9クラスの地震を含む津波インバージョンに基づくライズタイムの検討結果 (加藤ほか(2020)に基づき作成)

・ 本検討結果に、他プラントの東北沖地震型の基準断層モデルを図示した結果を6-5の後段に示す。

6-5 ライズタイムの設定

③Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討
(参考：すべり量、ライズタイムのスケーリング則に基づく基準化 (Mw9クラスの地震))

■ Mw9クラスの地震の津波インバージョン結果のすべり量、ライズタイムについて、スケーリング則に基づき検討波源モデルの地震規模(Mw9.1)に基準化した結果は、以下のとおり。

地震名	Mw ¹⁾	破壊領域 ²⁾	津波インバージョンの文献名	津波インバージョン結果 すべり量とライズタイム		検討波源モデル (Mw9.1)との モーメント比	すべり量と ライズタイムの 補正係数a ⁴⁾	検討波源モデル(Mw9.1)で基準化した すべり量とライズタイム			備考
				すべり量 D _{sa} (m) ³⁾	ライズタイム T(s)			すべり量 aD _{sa} (m) ⁵⁾	無次元化すべり量 D' _{sa} (m) ⁶⁾	ライズタイム aT (s) ⁵⁾	
1952年カムチャツカ地震	9.0	ABC	Johnson and Satake (1999)	11.4	0	1.4	1.1	12.5	0.34	0	
1960年チリ地震	9.5	ABC	Fujii and Satake (2012)	27.4	60	0.3	0.6	16.4	0.45	36	
			Sanchez(2006)	26.4	0			15.8	0.43	0	
1964年アラスカ地震	9.2	ABC	Johnson and Satake(1996)	22.1	0	0.7	0.9	19.9	0.54	0	
			Ichinose et al.(2007)	11.9	24			10.7	0.29	21	
2004年スマトラ島沖地震	9.1	ABC	Hirata et al.(2006)	29.1	150	1.0	1.0	29.1	0.79	150	
			Fujii and Satake (2007)	24.6	180			24.6	0.67	180	
2011年東北沖地震	9.1	ABC	内閣府(2012b)	33.8	300	1.0	1.0	33.8	0.92	300	
			杉野ほか(2013)	49.2	300			49.2	1.34	300	
			Satake et al. (2013)	31.7	150			31.7	0.86	150	
(参考) 検討波源モデル	9.1	ABC	-	36.8	150	-	-	36.8	1.00	150	
(参考) 内閣府モデル	9.1	ABC	-	36.8	60	-	-	36.8	1.00	60	

1) USGSウェブサイトに基づく。

2) 破壊領域は、Lay et al.(2012)に基づく。破壊の有無が不明確な場合は()で示されている。Lay et al.(2012)に記載のない地震については、津波インバージョンモデルからLay et al.(2012)の方法に基づき判断した。

3) 超大すべり域相当の領域のすべり量。(すべり量の大きい小断層から順に面積を積算したとき断層面積の5%となる小断層のすべり量。内閣府(2012)の超大すべり域の分析に準じて算定。)

4) スケーリング則D、 $T \propto M_0^{1/3}$ (Kanamori and Anderson(1975)) に基づき算出。

5) 津波インバージョン結果の数値に補正係数aをかけて算出。

6) 検討波源モデルのすべり量(36.8m)で無次元化。

6-5 ライズタイムの設定

③Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討

(参考：すべり量、ライズタイムのスケーリング則に基づく基準化(近年のMw8クラスの地震))

- 近年のMw8クラスの地震の津波インバージョン結果のすべり量、ライズタイムについて、スケーリング則に基づき検討波源モデルの地震規模(Mw9.1)に基準化した結果は、以下のとおり。

地震名	Mw ¹⁾	破壊領域 ²⁾	津波インバージョンの文献名	津波インバージョン結果 すべり量とライズタイム		検討波源モデル (Mw9.1)との モーメント比	すべり量と ライズタイムの 補正係数a ⁴⁾	検討波源モデル(Mw9.1)で基準化した すべり量とライズタイム			備考
				すべり量 D _{sa} (m) ³⁾	ライズタイム T(s)			すべり量 aD _{sa} (m) ⁵⁾	無次元化すべり量 D' _{sa} (m) ⁶⁾	ライズタイム aT(s) ⁵⁾	
2001年ペルー地震	8.4	B	Adriano et al.(2016)	10.9	0	11.2	2.2	24.1	0.65	0	
2003年十勝沖地震	8.3	B	Tanioka et al.(2004)	4.3	30	22.4	2.8	12.0	0.33	84	
			谷岡ほか(2004)	3.1	0			8.7	0.24	0	
			Romano et al.(2010)	5.5	0			15.4	0.42	0	
2005年スマトラ島沖地震	8.6	BC	Yatimantoro(2013)	12.4	0	5.6	1.8	22.2	0.60	0	
2006年千島列島沖地震	8.3	(A)B	Fujii and Satake(2008a)	7.4	60	15.8	2.5	18.5	0.50	150	
			Baba et al.(2009)	8.0	30			20.0	0.54	75	
2007年ペルー地震	8.0	BC	Hebert et al.(2009)	5.5	0	22.4	2.8	15.4	0.42	0	
			Jimenez et al.(2014)	7.0	0			19.6	0.53	0	
2007年スマトラ島沖地震	8.4	B(C)	Fujii and Satake(2008b)	9.3	60	11.2	2.2	20.5	0.56	132	
			Lorito et al.(2008)	10.0	0			22.0	0.60	0	
			Gusman et al.(2010)	4.4	0			9.7	0.26	0	
2010年チリ地震	8.8	BC	Fujii and Satake(2012)	13.4	30	2.8	1.4	18.8	0.51	42	
			Yue et al.(2014)	12.7	30			17.8	0.48	42	
			Yoshimoto et al.(2016)	14.0	0			19.6	0.53	0	
2013年ソロモン諸島沖地震	8.0	(A)B	Romano et al.(2015)	7.5	0	44.7	3.5	26.3	0.71	0	
2014年チリ地震	8.2	B	Gusman et al.(2015)	6.0	30	22.4	2.8	16.8	0.46	84	
2015年チリ地震	8.3	AB	Melgar et al.(2016)	8.0	20	15.8	2.5	20.0	0.54	50	
			Romano et al.(2016)	7.0	0			17.5	0.48	0	
			Fuentes et al.(2016)	5.4	0			13.5	0.37	0	
(参考) 検討波源モデル	9.1	ABC	-	36.8	150	-	-	36.8	1.00	150	
(参考) 内閣府モデル	9.1	ABC	-	36.8	60	-	-	36.8	1.00	60	

1) ~6)は前頁と同じ。

③Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (参考：すべり量、ライズタイムのスケーリング則に基づく基準化(南海トラフの地震))

■ 南海トラフの地震の津波インバージョン結果のすべり量、ライズタイムについて、スケーリング則に基づき検討波源モデルの地震規模(Mw9.1)に基準化した結果は、以下のとおり。

地震名	Mw ¹⁾	破壊領域 ²⁾	津波インバージョンの文献名	津波インバージョン結果 すべり量とライズタイム		検討波源モデル (Mw9.1)との モーメント比	すべり量と ライズタイムの 補正係数a ⁴⁾	検討波源モデル(Mw9.1)で基準化した すべり量とライズタイム			備考
				すべり量 D _{sa} (m) ³⁾	ライズタイム T(s)			すべり量 aD _{sa} (m) ⁵⁾	無次元化すべり量 D' _{sa} (m) ⁶⁾	ライズタイム aT(s) ⁵⁾	
1944年東南海地震	8.1	(A)B	Tanioka and Satake (2001a)	2.7	0	31.6	3.2	8.6	0.23	0	
			Baba et al.(2006)	3.2	60			10.2	0.28	192	
			Satake (1993)	1.6	0			5.1	0.14	0	
			Kato and Ando (1997)	4.5	110			14.4	0.39	352	
1946年南海地震	8.3	(A)B	Tanioka and Satake (2001b)	5.9	180	15.8	2.5	14.8	0.40	450	
			Baba et al.(2002)	5.6	60			14.0	0.38	150	
			Satake (1993)	2.4	0			6.0	0.16	0	
			Kato and Ando (1997)	3.0	150			7.5	0.20	375	
(参考) 検討波源モデル	9.1	ABC	—	36.8	150	—	—	36.8	1.00	150	
(参考) 内閣府モデル	9.1	ABC	—	36.8	60	—	—	36.8	1.00	60	

1) USGSウェブサイトに基づく。

2) 破壊領域は、Lay et al.(2012)に基づく。破壊の有無が不明確な場合は()で示されている。Lay et al.(2012)に記載のない地震については、津波インバージョンモデルからLay et al.(2012)の方法に基づき判断した。

3) 超大すべり域相当の領域のすべり量。(すべり量の大きい小断層から順に面積を積算したとき断層面積の5%となる小断層のすべり量。内閣府(2012)の超大すべり域の分析に準じて算定。)

4) スケーリング則 $D, T \propto M_0^{1/3}$ (Kanamori and Anderson(1975)) に基づき算出。

5) 津波インバージョン結果の数値に補正係数aをかけて算出。

6) 検討波源モデルのすべり量(36.8m)で無次元化。

6-5 ライズタイムの設定

④内閣府の設定したライズタイムに関する検討

ライズタイムの設定

①津波評価におけるライズタイムに関する知見

- 津波評価におけるライズタイムに関する知見について整理した。



②-1 国内外のMw9クラスの巨大地震・津波のライズタイムの推定事例

⇒ 近年のMw9クラスの巨大地震の津波インバージョンから推定されるライズタイムはすべり量が多い小断層ほど長く、大きくすべった領域の小断層のライズタイムは150～300sであることを確認した。

②-2 東北沖地震のライズタイムに関する分析

⇒ 東北沖地震の津波観測波形を対象として、タイムウィンドウの幅・個数を細かく設定して津波のタイムウィンドウインバージョンを実施した結果、東北沖地震のライズタイムとしては150～200s程度が最も適切であるとともに、ライズタイムを60sとした場合の津波インバージョンでは津波観測波形を再現できないことを確認した。

⇒ 東北沖地震の再現モデルについて、すべり量を変更せずにライズタイムを60sと極端に短く設定すると、東北沖地震の津波の周期・波長等の物理特性は失われるとともに、東北沖地震の観測記録の津波高を大幅に上回ることを確認。Mw9クラスの地震に対して内閣府のライズタイムの設定は過大な設定となっていることを確認した。



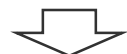
まとめ（津波評価におけるライズタイムの設定方針）

- 国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の推定事例のほか、Mw8～9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討及び内閣府のパラメータの設定を踏まえて、ライズタイムを設定した。



③Mw8～9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討

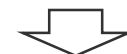
⇒ 検討波源モデルのライズタイムは、Mw 8～9クラスの地震の津波インバージョン事例を踏まえても概ね保守的な設定となっているが、検討波源モデルのライズタイムを120sとすることにより、これらの地震の初期水位を上回る設定となることを確認した。



④内閣府の設定したライズタイムに関する検討

⇒ 津波評価に影響の大きい初期水位に着目した検討により、内閣府モデルは、国内外の巨大地震のスケールに基づく平均応力降下量、平均すべり量等のパラメータの保守的な設定を、更に上回る設定となっていることを確認した。

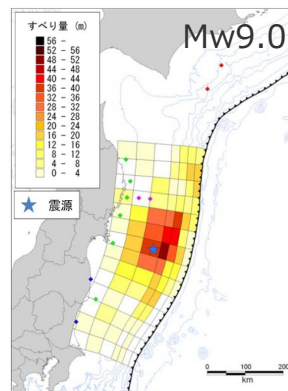
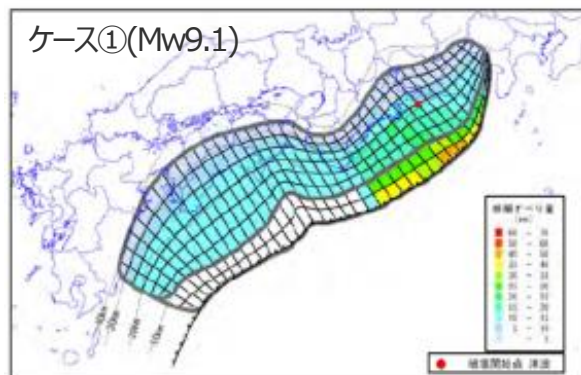
「(B)代表パラメータの検討による方法」により検討された内閣府の最大クラスモデルは、すべり量とライズタイムの組合せを非常に大きく設定することにより、その他のパラメータの津波影響を代表していることを確認した。
(補足説明資料5-5,5-6章)



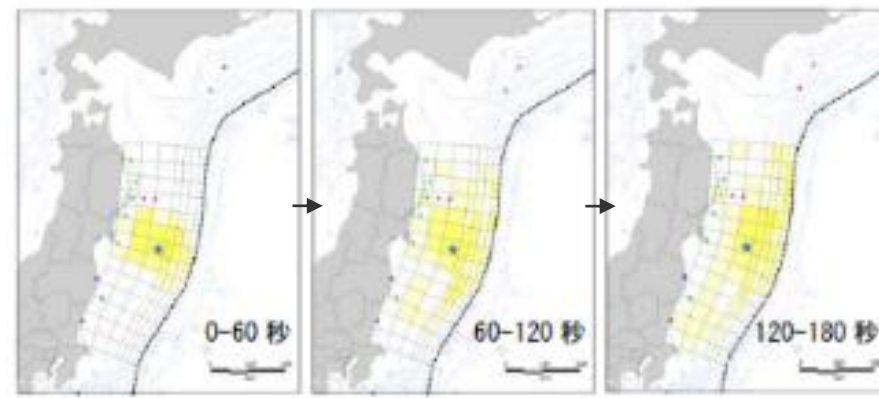
④内閣府の設定したライズタイムに関する検討

(内閣府「南海トラフの巨大地震モデル検討会」のライズタイムに関する記載(再掲))

- 内閣府(2012)は、南海トラフの最大クラスモデルのライズタイムについて、平均的に利用されている値を参考に、東北沖地震の解析結果も踏まえて、60s と設定している。
- 一方で、内閣府(2012b)の東北沖地震の解析結果によると東北沖地震のライズタイムは300sと推定されており、最大クラスモデルのライズタイムを60sとする明確な根拠は示されていない。



最終すべり量

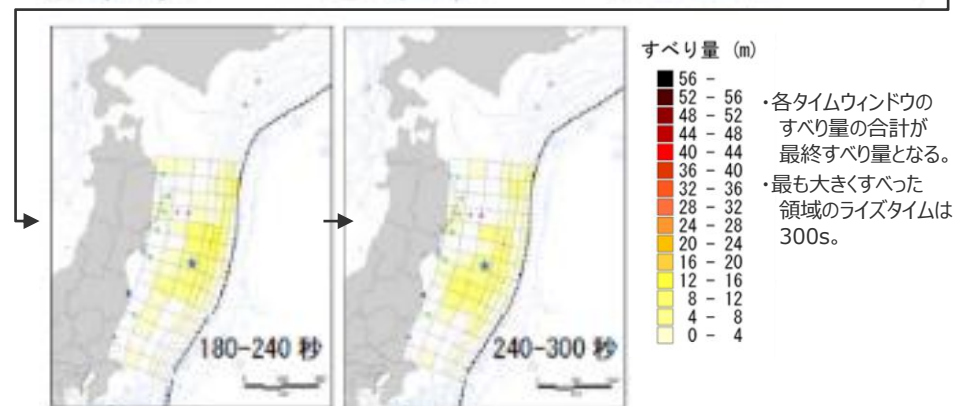


○破壊伝播速度及びライズタイム：
破壊伝播速度及びライズタイムについては、平均的に利用されている値を参考に、東北地方太平洋沖地震の解析結果も踏まえ、次のとおりに設定する。なお、東北地方太平洋沖地震では、海溝沿いの破壊伝播速度は、それよりも深い場所に比べ遅いとの解析結果もあるが、トラフ沿いの領域の幅が狭く、5秒程度の差しか見込めないことから、今回の解析では、破壊速度は全域で同じとする。

破壊速度 : 2.5km/s
ライズタイム : 1分

(内閣府(2012)を基に作成)

内閣府(2012)による南海トラフの最大クラスモデルのライズタイム



各タイムウィンドウのすべり量

(内閣府(2012b)を基に作成)

内閣府(2012b)による東北沖地震の解析結果
(津波インバージョン結果)

④内閣府の設定したライズタイムに関する検討 (内閣府の最大クラスモデルとの比較)

- 検討波源モデルは、内閣府(2012)の検討を確認した上で、それ以降の最新の科学的知見を調査し、国内外の巨大地震の発生事例を踏まえて保守的にパラメータを設定した。
- 一方、内閣府の最大クラスモデルは、同様に国内外の巨大地震の事例を踏まえてパラメータが設定されているが、前述のとおりライズタイムについては国内外の巨大地震の事例の範囲を超えて極端に短く設定されている。

波源モデル		検討波源モデル	
		検討波源モデルA 断層破壊がプレート境界面浅部に伝播するモデル	検討波源モデルB 断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播するモデル
設定方針		内閣府(2012)の検討を確認した上で、それ以降の最新の科学的知見を調査し、国内外の巨大地震・津波の発生事例を踏まえて保守的にパラメータを設定したモデル	
認識論的 不確かさ	面積	約14万km ²	約14万km ²
	地震規模	Mw9.1	Mw9.1
	すべり量	約37m	約37m
	浅部の破壊形態	断層破壊がプレート境界面浅部に伝播	断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播 (御前崎海脚東部の断層帯/東海断層系)
	超大すべり域・大すべり域の位置	駿河湾～紀伊半島沖	駿河湾～紀伊半島沖
	ライズタイム(すべり速度)	150s (0.25m/s)	150s (0.25m/s)
	破壊伝播速度	2.0km/s	2.0km/s
偶然的 不確かさ	破壊開始点	大すべり域の下端中央	大すべり域の下端中央

内閣府の最大クラスモデル	
ケース① 断層破壊がプレート境界面浅部に伝播するモデル	ケース⑥ 断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播するモデル
-	
約14万km ²	約14万km ²
Mw9.1	Mw9.1
約37m	約37m
断層破壊がプレート境界面浅部に伝播	断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播 (熊野灘の分岐断層)
駿河湾～紀伊半島沖	駿河湾～紀伊半島沖
60s (0.6m/s)	60s (0.6m/s)
2.5km/s	2.5km/s
大すべり域の下端中央	大すべり域の下端中央

・すべり量：超大すべり域のすべり量。超大すべり域が無いモデルについては、大すべり域のすべり量

・すべり速度：(すべり量)／(ライズタイム)

■ : 検討波源モデルにおいて、不確かさとして考慮したパラメータ

■ : 検討波源モデルに対して、概略および詳細パラメータスタディを実施するパラメータ

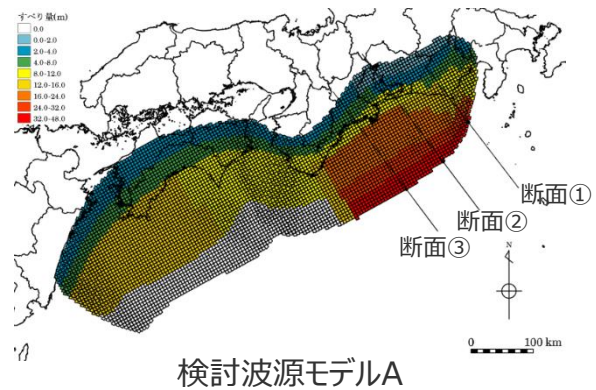
■ : 検討波源モデルと同様、不確かさとして考慮されていると考えられるパラメータ

■ : 国内外の巨大地震の事例の範囲を超えて極端に設定されているパラメータ

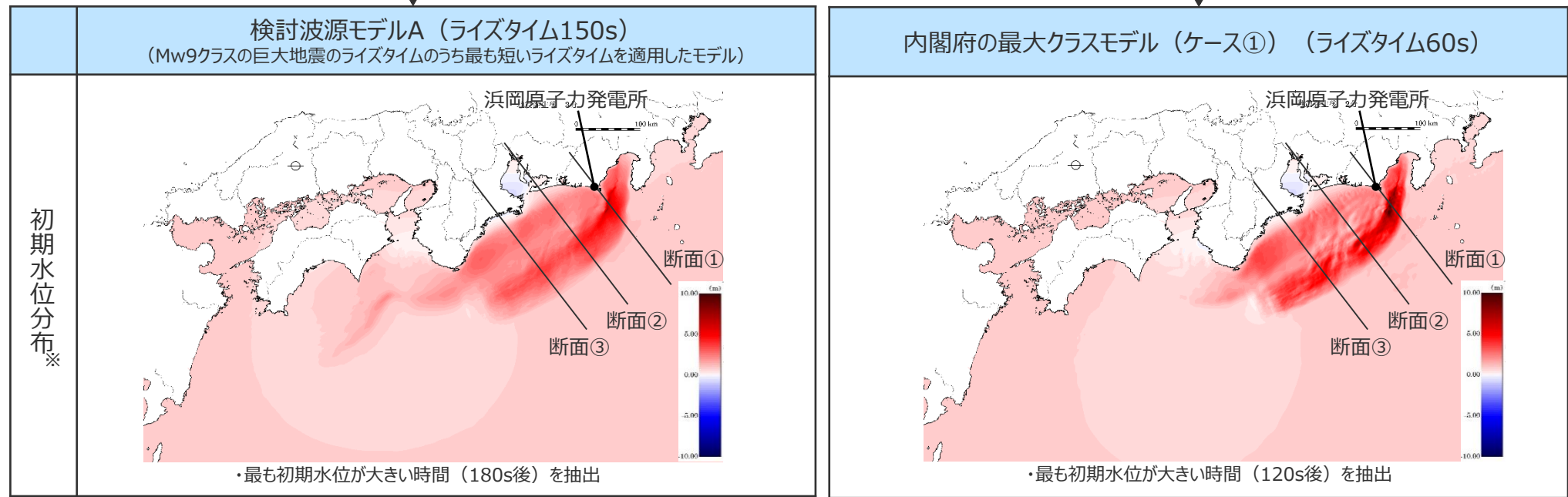
- ここでは、検討波源モデル(ライズタイム150s: Mw9クラスの巨大地震のライズタイムのうち最も短いライズタイムを適用したモデル)と内閣府の最大クラスモデル(ライズタイム60s)を比較することにより、ライズタイムを60sと極端に短くした場合の敷地への影響について検討するとともに、Mw9クラスの巨大地震のライズタイムを60sと設定することの考え方を整理し、検討波源モデルのライズタイムを設定する。

④内閣府の設定したライズタイムに関する検討 (ライズタイムの違いによる津波の初期水位分布の変化)

■ライズタイムの設定の影響を確認するため、検討波源モデル（ライズタイム150s）と内閣府の最大クラスモデル（ライズタイム60s）の初期水位について、最もすべりが大きい領域を含む200km程度の範囲でそれぞれ3断面を設定し、比較を行う。



検討波源モデルA

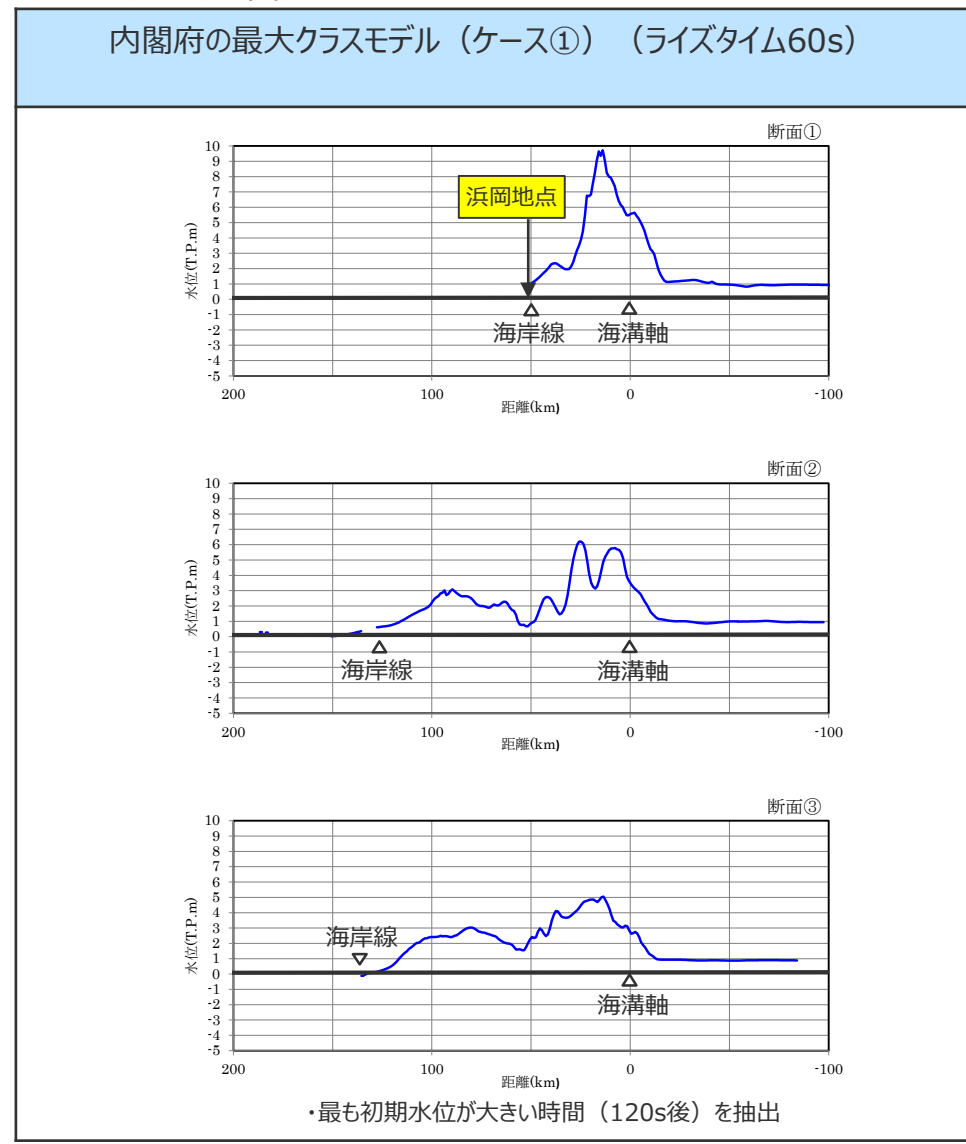
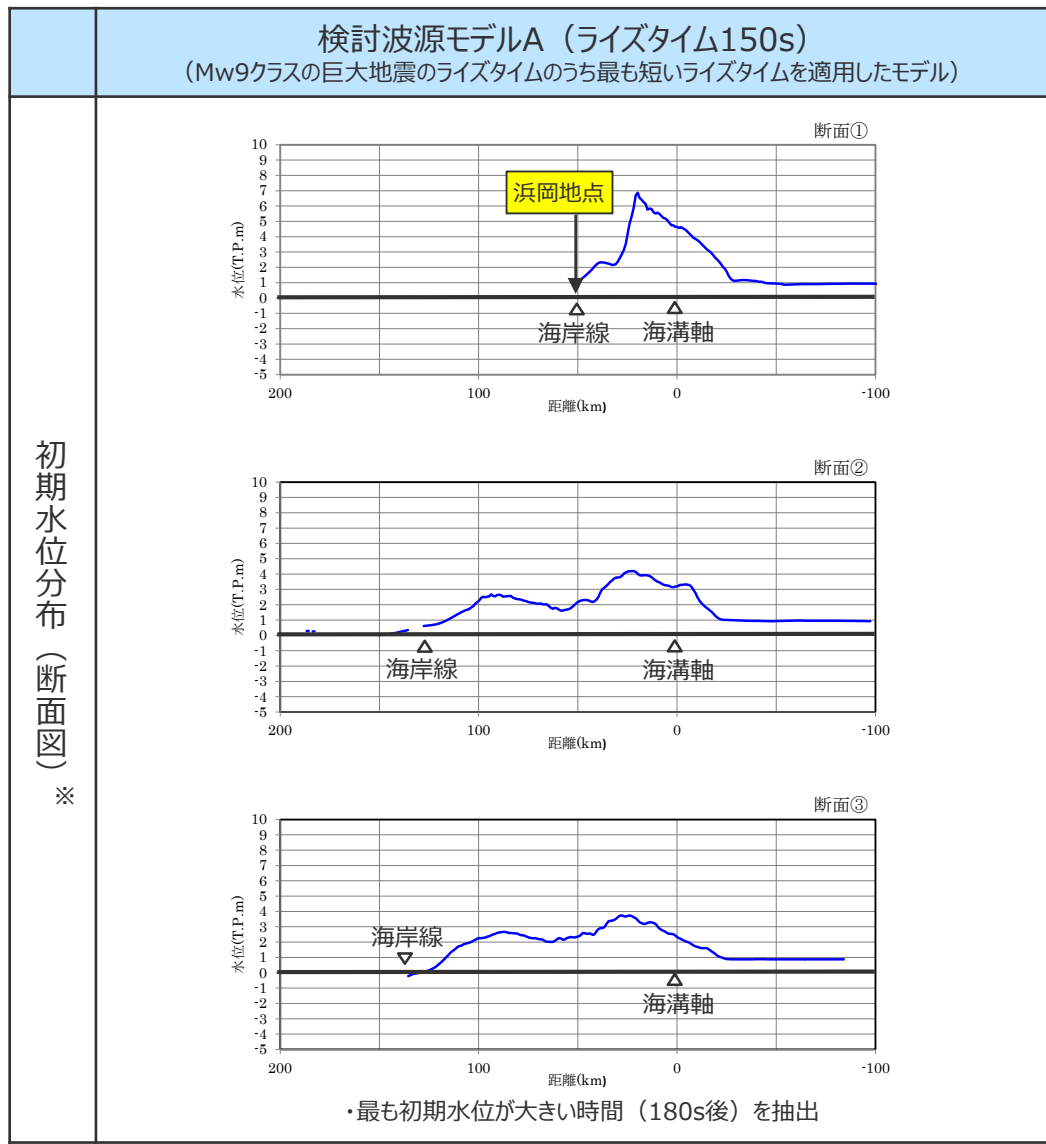


※朔望平均満潮位(T.P.+0.80m)を考慮

④内閣府の設定したライズタイムに関する検討 (ライズタイムの違いによる津波の初期水位分布の変化)

■内閣府の最大クラスモデル（ライズタイム60s）は、検討波源モデル（ライズタイム150s）と比べて、初期水位が全体的に大きいことが確認できる。

ライズタイムの違いによる津波の初期水位分布の変化



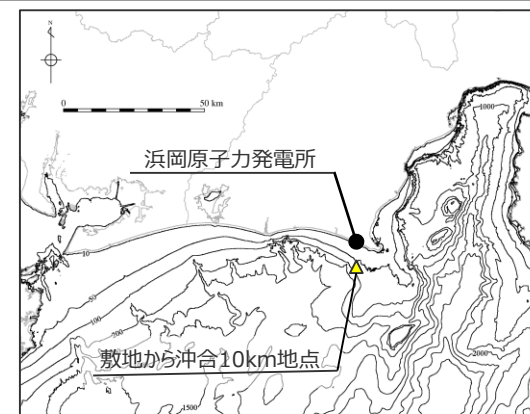
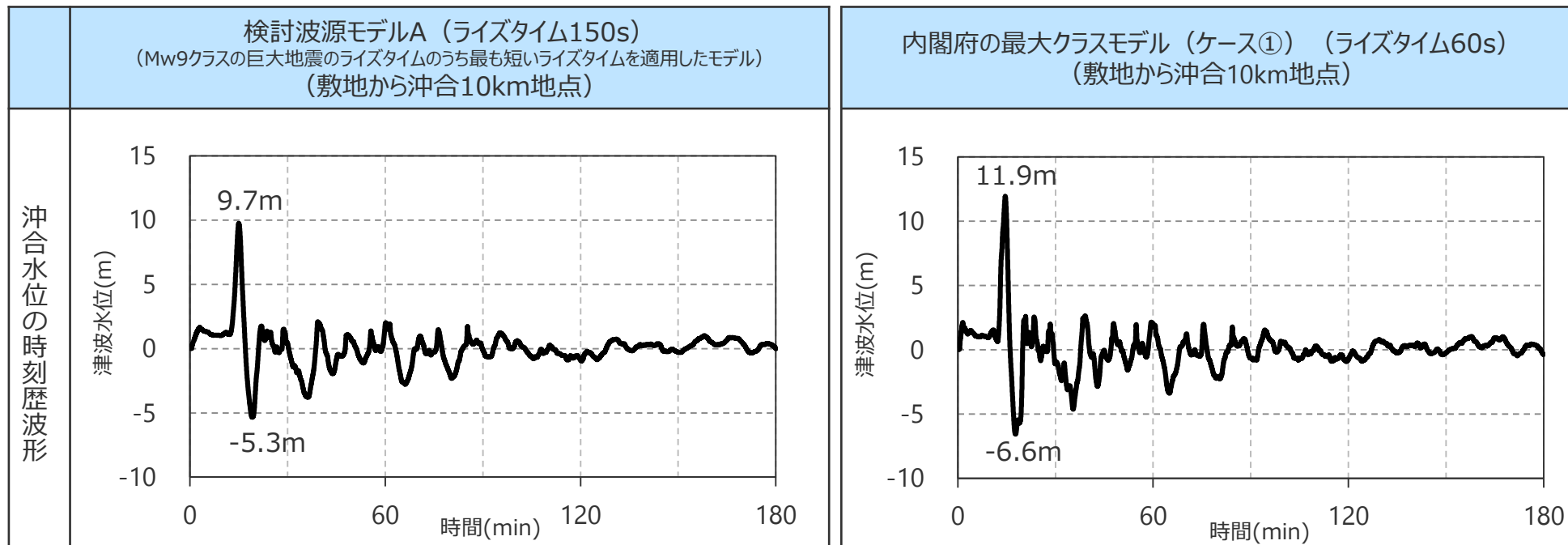
初期水位分布（断面図）※

※期望平均満潮位(T.P.+0.80m)を考慮

④内閣府の設定したライズタイムに関する検討 (ライズタイムの違いによる沖合津波水位の変化)

- ライズタイムを60sとしたケースは、ライズタイムを150sとしたケースと比べて、敷地から沖合10km地点の津波水位は約1.2～1.3倍となり、東北沖での検討と同様、短周期の波が顕著になることを確認した。

ライズタイムの違いによる沖合水位の変化

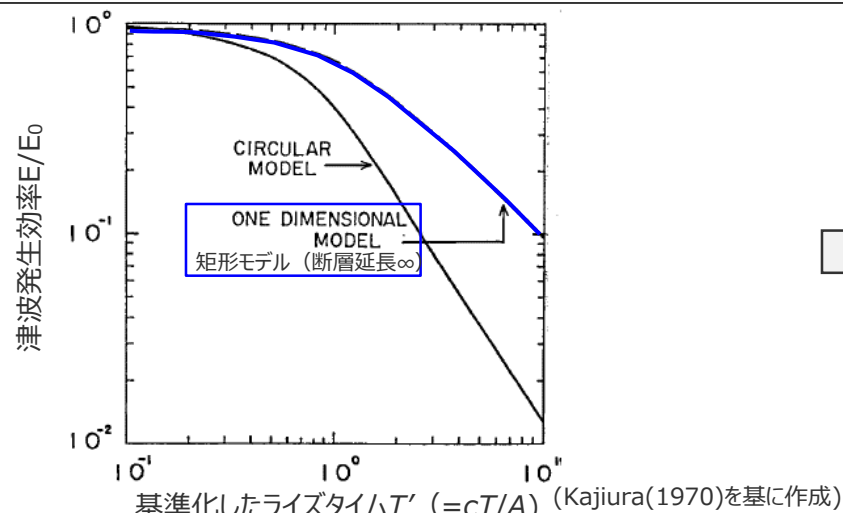


位置図 (敷地から沖合10km地点)

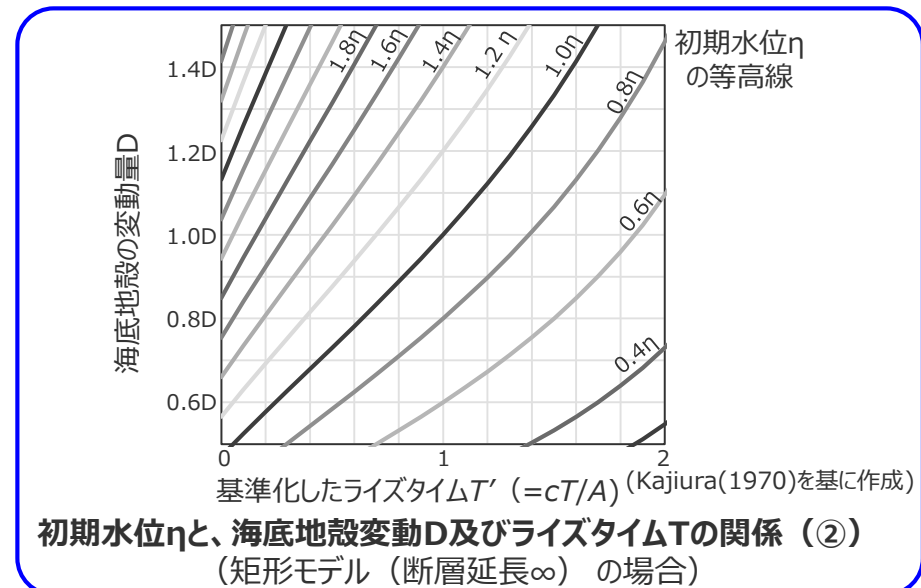
④内閣府の設定したライズタイムに関する検討

(ライズタイムが津波発生へ与える影響に関する知見 (再掲))

- Kajiura(1970)では、長波理論に基づき、地殻変動によって海水に伝えられるエネルギー効率とライズタイムとの関係が検討されている。
- Kajiura(1970)に基づく、海面の初期水位 η は、海底の地殻変動量 D のほか、ライズタイム T とも関係するパラメータであるとされている。



津波発生効率 E/E_0 とライズタイム T の関係 (①)



初期水位 η と、海底地殻変動 D 及びライズタイム T の関係 (②)
(矩形モデル (断層延長 ∞) の場合)

○ 初期水位比 η とライズタイム T の関係式 (Kajiura(1970)に基づく)

長波理論に基づく、矩形モデル (断層延長 ∞) の場合、ライズタイム T を考慮した津波エネルギー E と瞬時破壊での津波エネルギー E_0 の比は、

$$\frac{E}{E_0} = \left\{ \begin{array}{ll} 1 - T'/3 & (\text{for } T' \leq 1) \\ \frac{1}{T'^2} \cdot (T' - 1/3) & (\text{for } T' > 1) \end{array} \right\} \dots \textcircled{1}$$

ここで、 E : 津波エネルギー、 E_0 : 瞬時破壊での津波エネルギー
 T' : 基準化したライズタイム($=cT/A$)
 c : 波速、 T : ライズタイム、 A : 地殻変動幅

断層破壊終了後の津波エネルギーの分布幅を W とすると、ライズタイム0の場合の分布幅 W_0 との比は、

$$\frac{W}{W_0} = \frac{A + 2cT}{A} = 1 + 2T' \dots \textcircled{a}$$

また、津波エネルギー E_D と初期水位 η 、海底地殻変動量 D の関係は、

$$E \propto \eta^2 W, \quad E_0 \propto \eta_0^2 W_0 (= D^2 W_0) \dots \textcircled{b}$$

①、(a)、(b)より初期水位 η と、海底地殻変動 D 及びライズタイム T' の関係は、

$$\frac{D}{\eta} = \sqrt{\frac{W/W_0}{E/E_0}} = \left\{ \begin{array}{ll} \sqrt{\frac{1 + 2T'}{1 - T'/3}} & (\text{for } T' \leq 1) \\ \sqrt{\frac{T'^2(1 + 2T')}{T' - 1/3}} & (\text{for } T' > 1) \end{array} \right\} \dots \textcircled{2}$$

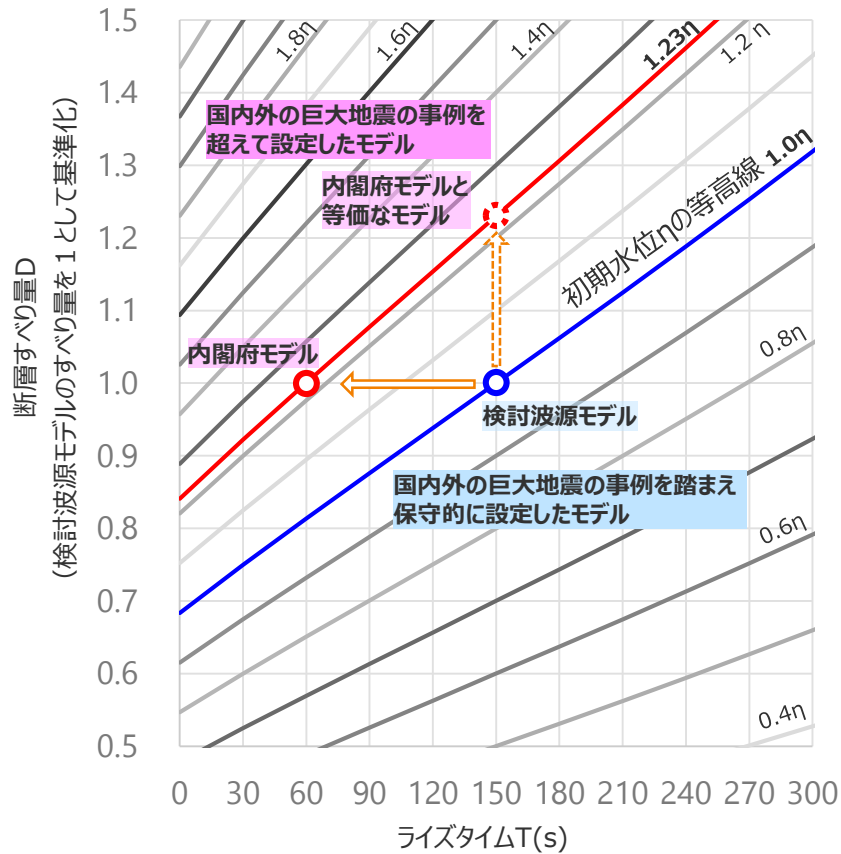
・敷地と南海トラフとの位置関係から、敷地に対する南海トラフの延長 (約700km) は無限大とみなせるため、Kajiura(1970)に基づく関係は矩形モデル (断層延長 ∞) の場合で検討した。
 また、Kajiura(1970)に基づく関係については、実験的に検証されているほか、ライズタイムの違いによる敷地の沖合津波水位の変化からもその妥当性を確認している。

6-5 ライズタイムの設定

④内閣府の設定したライズタイムに関する検討

(検討波源モデルのライズタイムを60sと設定することの考え方)

- 前述のKajiura(1970)に基づく、ライズタイムTと、海底の地殻変動量すなわち断層すべり量Dは、ともに海面の初期水位ηに直接関係するパラメータである。
- 検討波源モデルのライズタイムを60sと設定すると、巨大地震・津波で考慮すべき津波の周期・波長等の物理特性は失われると考えられるが、津波評価に影響の大きい初期水位ηにのみ着目した場合、国内外の巨大地震の事例を踏まえ地震規模等を保守的に設定した検討波源モデルのすべり量を、更に1.2~1.3倍すること等価であると考えられる。



Kajiura(1970)に基づく
初期水位に対して等価となる断層すべり量とライズタイムの関係

Kajiura(1970)に基づく初期水位と断層すべり量、ライズタイムの関係

$$\frac{D}{\eta} = \sqrt{\frac{1 + 2T'}{1 - T'/3}} \quad \text{for } T' \leq 1$$

ここで、 η : 初期水位
 D : 海底面の地形変動量 (\propto 断層すべり量)
 T' : 基準化したライズタイム ($=cT/A$)
 T : ライズタイム、 c : 波速、 A : 地殻変動幅

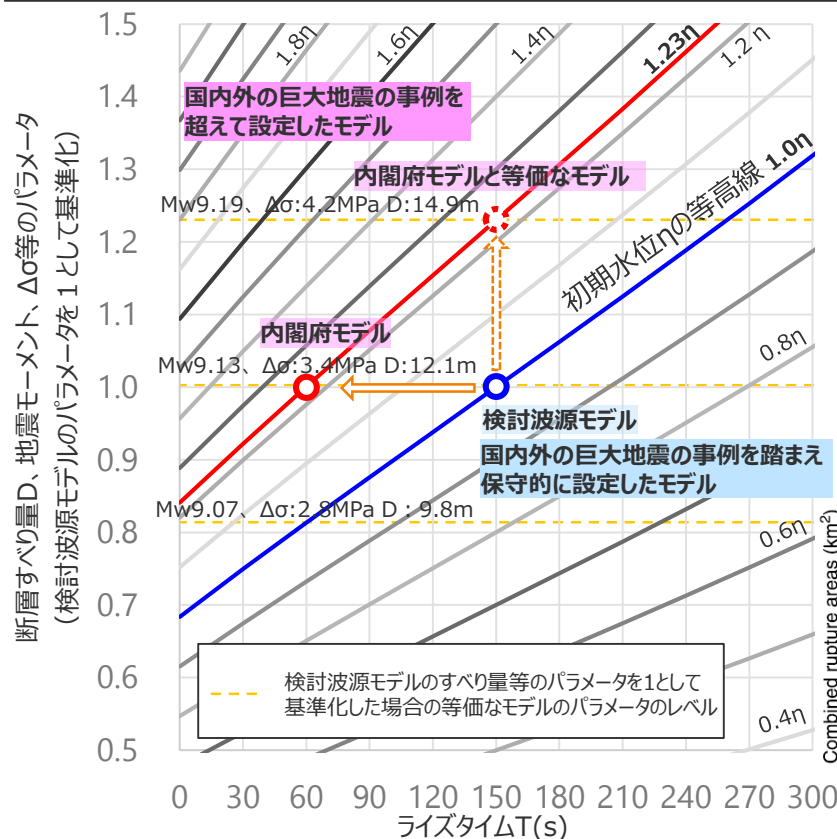
Kajiura(1970)に基づく「内閣府モデルと等価なモデル」の断層すべり量

モデル	平均水深 H(m) ¹⁾	波速 c(m/s) ²⁾	断層幅 A(km) ³⁾	ライズタイム T(s)	断層すべり量 (m)	初期水位η (m)
検討波源モデル (ライズタイム150s)	2,000	140	50	150	1D	1η
内閣府モデル (ライズタイム60s)	同上	同上	同上	60	1D	1.23η
初期水位に関して等価なモデル						
内閣府モデルと等価なモデル (ライズタイム150s)	同上	同上	同上	150	1.23D	1.23η

- 1) 陸域から南海トラフ域までの平均水深として設定
- 2) $c = \sqrt{gH}$
- 3) 敷地前面の初期水位分布に基づく隆起域の断層幅

④内閣府の設定したライズタイムに関する検討 (検討波源モデルライズタイムを60sと設定することの考え方)

- Kajiura(1970)に基づき「内閣府モデル」のすべり量を係数倍した「内閣府モデルと等価なモデル」の断層パラメータを示す。
- Murotani et al.(2013)によると、巨大地震の津波断層モデルを含めたスケーリングに関する検討から、平均応力降下量の平均値は1.57MPaであり、標準偏差を考慮した値は3.0MPaである。また、巨大地震の津波断層モデルの平均すべり量は最大約10mである。
- 検討波源モデルは、国内外の巨大地震のスケーリングに基づき、平均応力降下量、平均すべり量等のパラメータを保守的に設定しているが、津波評価に影響の大きい初期水位 η に着目した検討により、内閣府モデルと等価なモデルの断層パラメータを考えると、内閣府モデルは、国内外の巨大地震のスケーリングに基づく平均応力降下量、平均すべり量等の保守的な設定を、更に大きく上回る設定となっている。

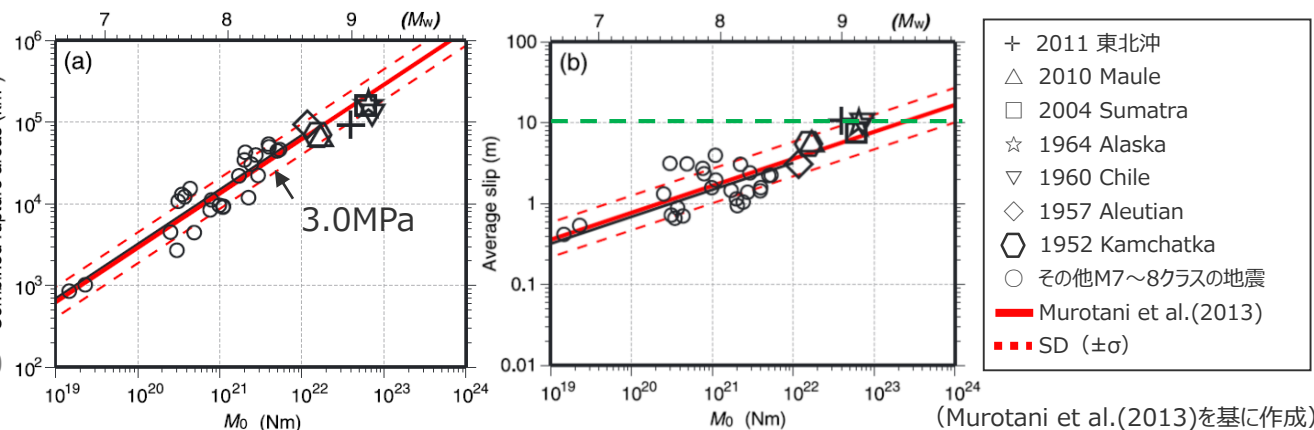


Kajiura(1970)に基づく
初期水位に対して等価となる断層すべり量とライズタイムの関係

「内閣府モデルと等価なモデル」の断層パラメータ

モデル	面積 (km ²)	M ₀ (Nm)	M _w	Δσ (MPa)	平均すべり量(m)	ライズタイム (s)
検討波源モデル (ライズタイム150s)	123,700	6.1×10 ²²	9.13	3.4	12.1	150
内閣府モデル (ライズタイム60s)	123,700	6.1×10 ²²	9.13	3.4	12.1	60
初期水位に関して等価なモデル						
内閣府モデルと等価なモデル (ライズタイム150s)	123,700	7.5×10 ²²	9.19	4.2	14.9	150

・ Murotani et al.(2013)と同じ条件で比較するため、津波断層域のうちすべり量0 (ゼロ) の領域を含めない面積に基づき検討した。



断層面積と地震モーメント
平均すべり量と地震モーメント
Murotani et al.(2013)によるスケーリング則

- 津波評価に影響の大きい初期水位 η に着目した検討により、内閣府モデルは、国内外の巨大地震のスケーリングに基づく平均応力降下量、平均すべり量等のパラメータの保守的な設定を、更に上回る設定となっていることを確認した。

6-5 ライズタイムの設定

まとめ（津波評価におけるライズタイムの設定方針）

①津波評価におけるライズタイムに関する知見

- 津波評価におけるライズタイムに関する知見について整理した。

②-1 国内外のMw9クラスの巨大地震・津波のライズタイムの推定事例

⇒ 近年のMw9クラスの巨大地震の津波インバージョンから推定されるライズタイムはすべり量が大きい小断層ほど長く、大きくすべった領域の小断層のライズタイムは150～300sであることを確認した。

②-2 東北沖地震のライズタイムに関する分析

⇒ 東北沖地震の津波観測波形を対象として、タイムウィンドウの幅・個数を細かく設定して津波のタイムウィンドウインバージョンを実施した結果、東北沖地震のライズタイムとしては150～200s程度が最も適切であるとともに、ライズタイムを60sとした場合の津波インバージョンでは津波観測波形を再現できないことを確認した。

⇒ 東北沖地震の再現モデルについて、すべり量を変更せずにライズタイムを60sと極端に短く設定すると、東北沖地震の津波の周期・波長等の物理特性は失われるとともに、東北沖地震の観測記録の津波高を大幅に上回ることを確認。Mw9クラスの地震に対して内閣府のライズタイムの設定は過大な設定となっていることを確認した。

Mw9クラスの巨大地震・津波のライズタイムの推定事例および東北沖地震のライズタイムに関する分析から推定されるライズタイムの設定

: **150～300s**

③Mw8～9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討

⇒ 検討波源モデルのライズタイムは、Mw 8～9クラスの地震の津波インバージョン事例を踏まえても概ね保守的な設定となっているが、検討波源モデルのライズタイムを120sとすることにより、これらの地震の初期水位を上回る設定となることを確認した。

Mw8～9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの保守的な設定

: **120s**

④内閣府の設定したライズタイムに関する検討

⇒ 津波評価に影響の大きい初期水位に着目した検討により、内閣府モデルは、国内外の巨大地震のスケールリングに基づく平均応力降下量、平均すべり量等のパラメータの保守的な設定を、更に上回る設定となっていることを確認した。

「(B)代表パラメータの検討による方法」により検討された内閣府の最大クラスモデルは、すべり量とライズタイムの組合せを非常に大きく設定することにより、その他のパラメータの津波影響を代表していることを確認した。

(補足説明資料5-5,5-6章)

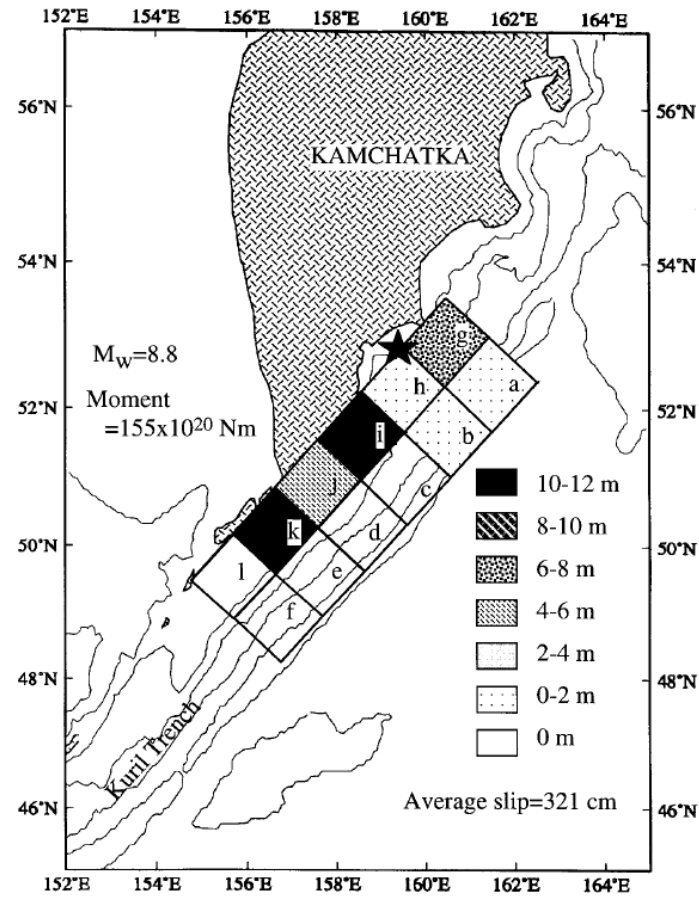
「(B)代表パラメータの検討による方法」により検討された内閣府の最大クラスモデルのライズタイムの設定

: **60s**

(津波評価におけるライズタイムの設定方針)

- 検討波源モデルのライズタイムは、国内外のMw9クラスの巨大地震・津波のライズタイムの推定事例および東北沖地震のライズタイムに関する分析結果に基づき設定することとし、推定されたライズタイム150～300sのうち、最も短い150sと設定する。
- 検討波源モデルの詳細パラメータスタディでは、Mw9クラスの巨大地震・津波のライズタイムの推定事例に基づくライズタイム150～300sの他、Mw8～9クラスの地震の津波インバージョンの検討結果に基づき保守的にライズタイム120sを考慮する。
- 更に、国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例に限られていることを踏まえ、国内外の巨大地震・津波の発生事例に対してより慎重に裕度を持って、敷地の津波評価に影響の大きいすべり量とライズタイムの組合せを検討することとし、「(B)代表パラメータの検討による方法」により検討された内閣府の最大クラスモデルにおいて他のパラメータの影響を代表するよう非常に大きく設定されているすべり量(37m)とライズタイム(60s)の組合せを、「(A)各種パラメータの網羅的検討による方法」により検討しているプレート間地震の津波評価のうち検討波源モデルの詳細パラメータスタディにおいて考慮することとした。

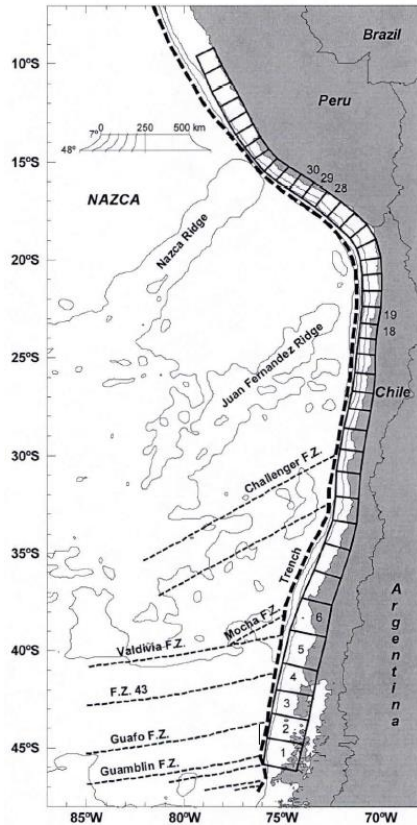
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (1952年カムチャッカ地震の波源モデル)



Johnson and Satake (1999)による波源モデル

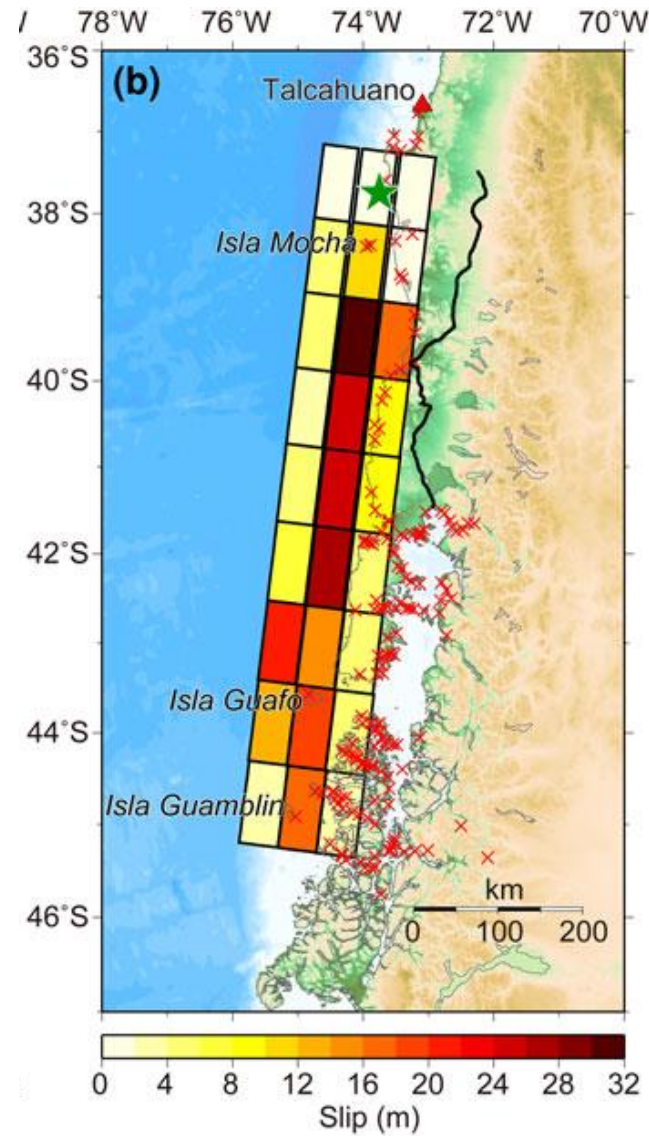
1952年カムチャッカ地震の波源モデル

6-5 ライズタイムの設定 Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (1960年チリ地震の波源モデル)



Event	1960 Valdivia-Chile		1995 Antofagasta-Chile		2001 Atico-Peru	
	Conventional	Adaptive	Conventional	Adaptive	Conventional	Adaptive
Slip Distribution	$x_1(0) = 15.48$	$x_2(2) = 2.19$	$x_{17}(0) = 3.48$	$x_{17}(4) = 2.51$	$x_{20}(0) = 0.81$	
	$x_2(0) = 13.95$	$x_3(3) = 15.79$	$x_{18}(0) = 0.37$	$x_{18}(5) = 2.85$	$x_{20}(3) = 4.84$	$x_{20}(3) = 2.65$
	$x_3(0) = 8.81$	$x_4(3) = 13.97$	$x_{17}(0) = 0.07$		$x_{20}(0) = 1.04$	$x_{20}(4) = 5.67$
	$x_4(0) = 24.71$	$x_5(4) = 11.28$				
	$x_5(0) = 29.65$	$x_6(4) = 26.36$				
R	0.823	0.832	0.666	0.904	0.515	0.657
RMSE	0.1896	0.1854	0.1231	0.0707	0.1365	0.1202
M_w - Inversion	9.14	9.15	7.93	8.03	8.11	8.17
M_w - Literature	9.35 - 9.7		8.0 - 8.1		8.2 - 8.4	

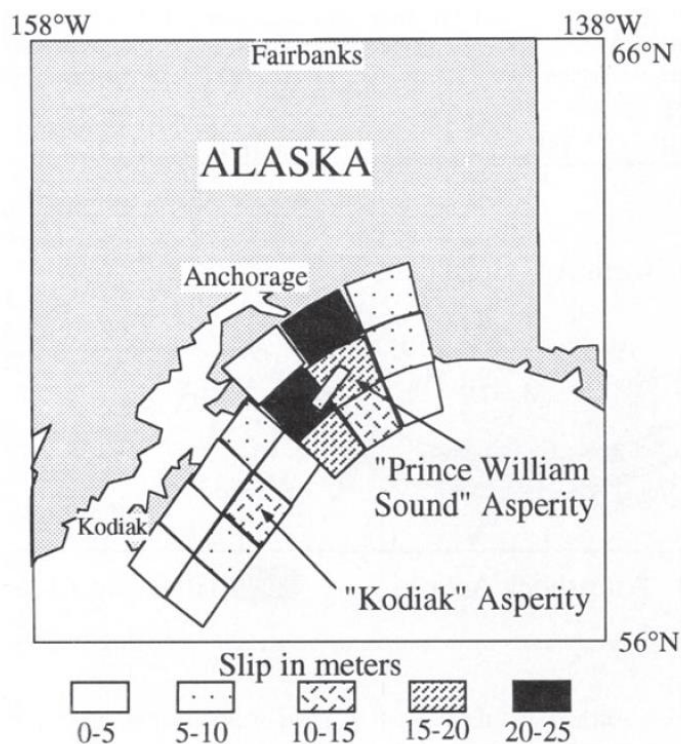
Sanchez(2006)による波源モデル



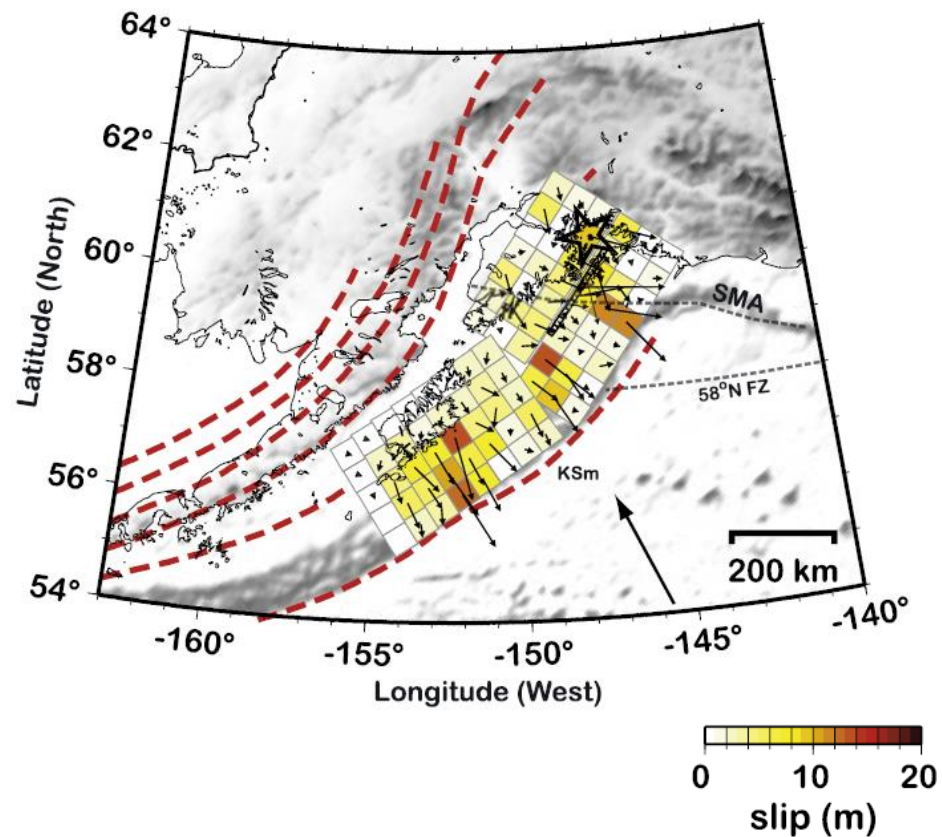
Fujii and Satake (2012)による波源モデル

1960年チリ地震の波源モデル

Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (1964年アラスカ地震の波源モデル)

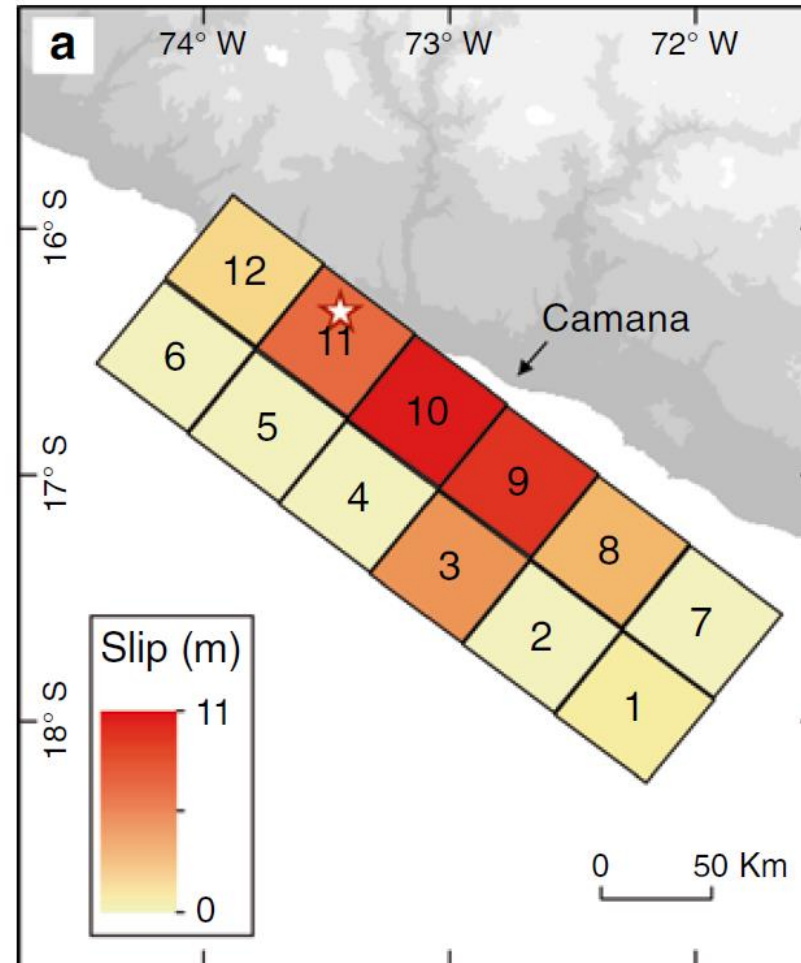


Johnson and Satake(1996)による波源モデル



Ichinose et al.(2007)による波源モデル

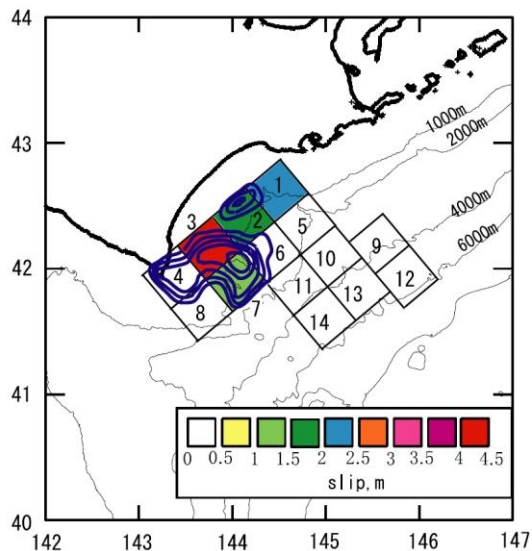
1964年アラスカ地震の波源モデル



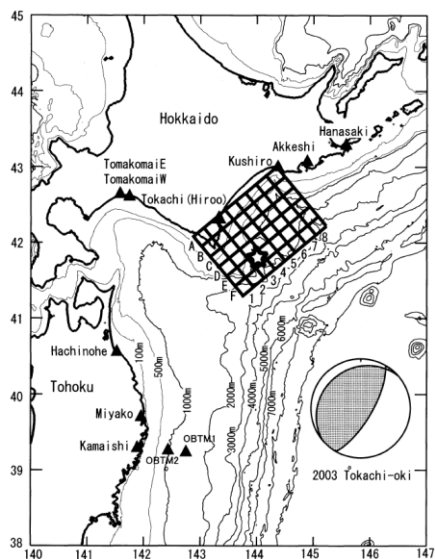
Adriano et al.(2016)による波源モデル

2001年ペルー地震の波源モデル

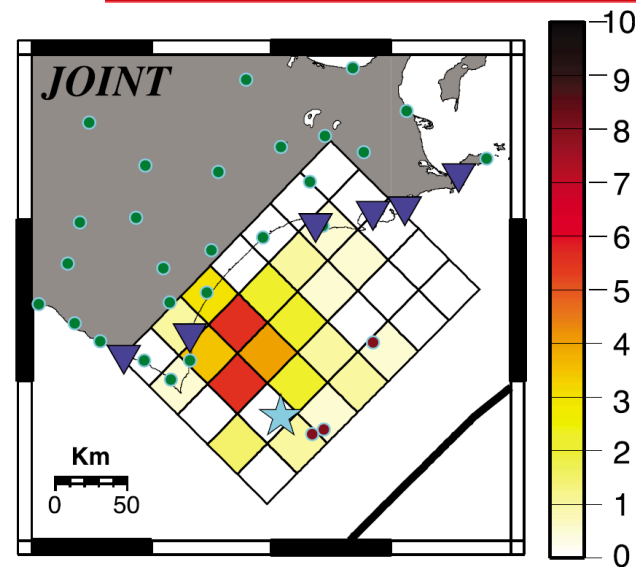
6-5 ライズタイムの設定 Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2003年十勝沖地震の波源モデル)



Tanioka et al.(2004)による波源モデル



谷岡ほか(2004)による波源モデル

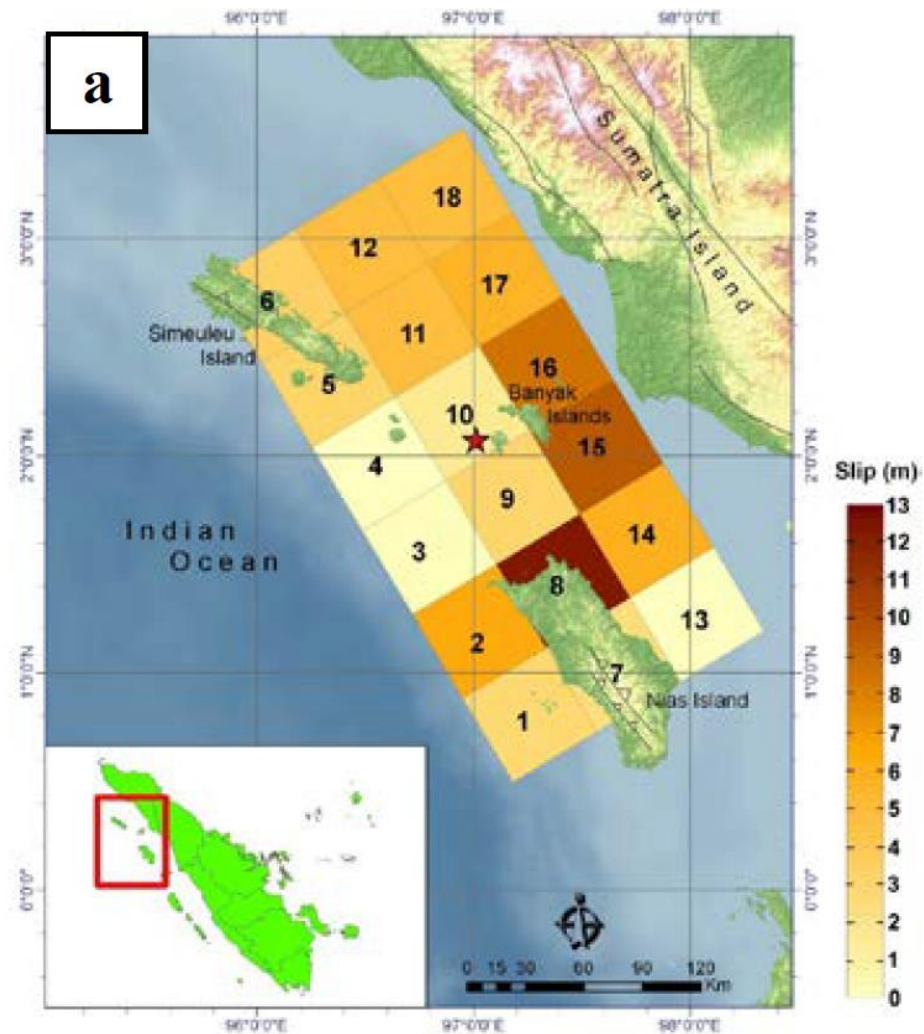


Romano et al.(2010)による波源モデル Slip (m)

小断層 番号	小断層南東端の位置			すべり量 m	誤差 m
	経度	緯度	深さ, km		
A1	143°14'	42°04'	53	0.0	0.0
A2	143°25'	42°11'	53	0.0	0.0
A3	143°36'	42°18'	53	0.4	0.6
A4	143°47'	42°25'	53	1.5	0.5
A5	143°58'	42°32'	53	1.8	0.3
A6	144°09'	42°39'	53	1.6	0.5
A7	143°20'	42°46'	53	1.4	0.4
A8	143°31'	42°53'	53	1.0	0.4
B1	143°23'	41°56'	46	0.0	0.0
B2	143°34'	42°03'	46	0.0	0.3
B3	143°45'	42°10'	46	2.0	0.3
B4	143°56'	42°17'	46	3.3	0.5
B5	144°07'	42°24'	46	2.7	0.4
B6	144°18'	42°31'	46	2.0	0.5
B7	144°29'	42°38'	46	2.0	0.4
B8	144°40'	42°45'	46	1.5	0.3
C1	143°32'	41°48'	39	0.4	0.4
C2	143°43'	41°55'	39	1.4	0.5
C3	143°54'	42°02'	39	3.1	0.3
C4	144°05'	42°09'	39	3.1	0.5
C5	144°16'	42°16'	39	1.5	0.4
C6	144°27'	42°23'	39	0.6	0.4
C7	144°38'	42°30'	39	0.8	0.6
C8	144°49'	42°37'	39	1.4	0.6

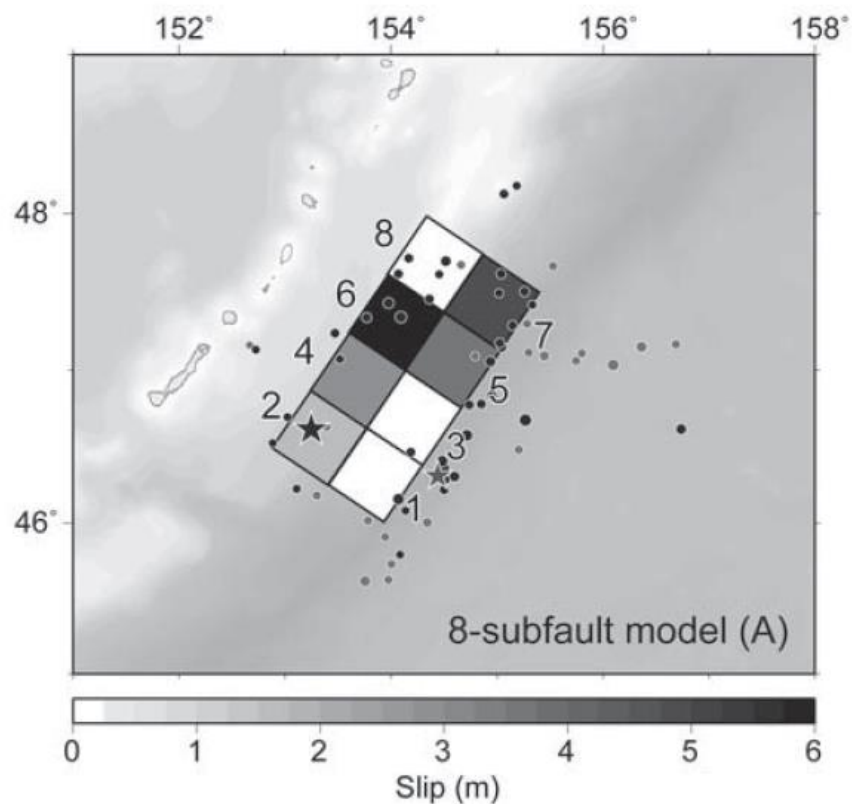
小断層 番号	小断層南東端の位置			すべり量 m	誤差 m
	経度	緯度	深さ, km		
D1	143°41'	41°40'	32	0.0	0.0
D2	143°52'	41°47'	32	0.5	0.4
D3	144°03'	41°54'	32	2.0	0.6
D4	144°14'	42°01'	32	1.7	0.5
D5	144°25'	42°08'	32	0.1	0.3
D6	144°36'	42°15'	32	0.0	0.0
D7	144°47'	42°22'	32	0.0	0.3
D8	144°58'	42°29'	32	0.9	0.8
E1	143°50'	41°32'	25	0.0	0.0
E2	144°01'	41°39'	25	0.0	0.0
E3	144°12'	41°46'	25	0.5	0.5
E4	144°23'	41°53'	25	0.5	0.5
E5	144°34'	42°00'	25	0.0	0.2
E6	144°45'	42°07'	25	0.0	0.1
E7	144°56'	42°14'	25	0.0	0.5
E8	145°07'	42°21'	25	1.0	0.7
F1	143°59'	41°24'	18	0.6	0.3
F2	144°10'	41°31'	18	0.6	0.3
F3	144°21'	41°38'	18	0.2	0.2
F4	144°32'	41°45'	18	0.0	0.2
F5	144°43'	41°52'	18	0.0	0.4
F6	144°54'	41°59'	18	0.3	0.7
F7	145°05'	42°06'	18	0.6	0.8
F8	145°16'	42°13'	18	1.1	0.7

2003年十勝沖地震の波源モデル

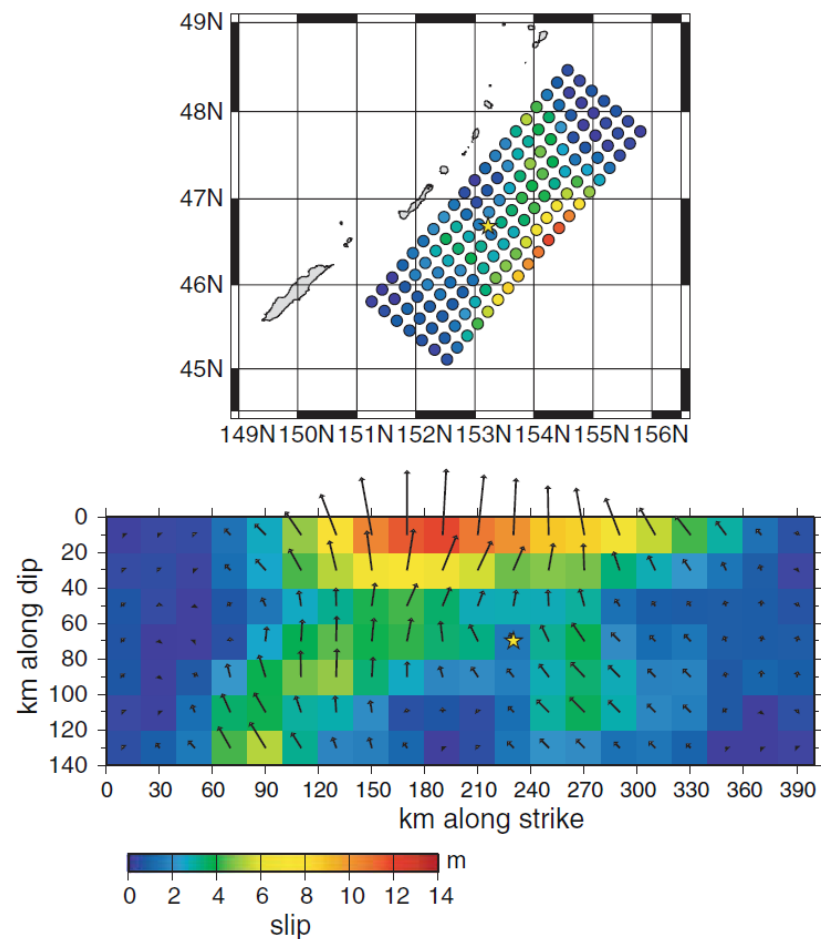


Yatimantoro(2013)による波源モデル

2005年スマトラ島沖地震の波源モデル



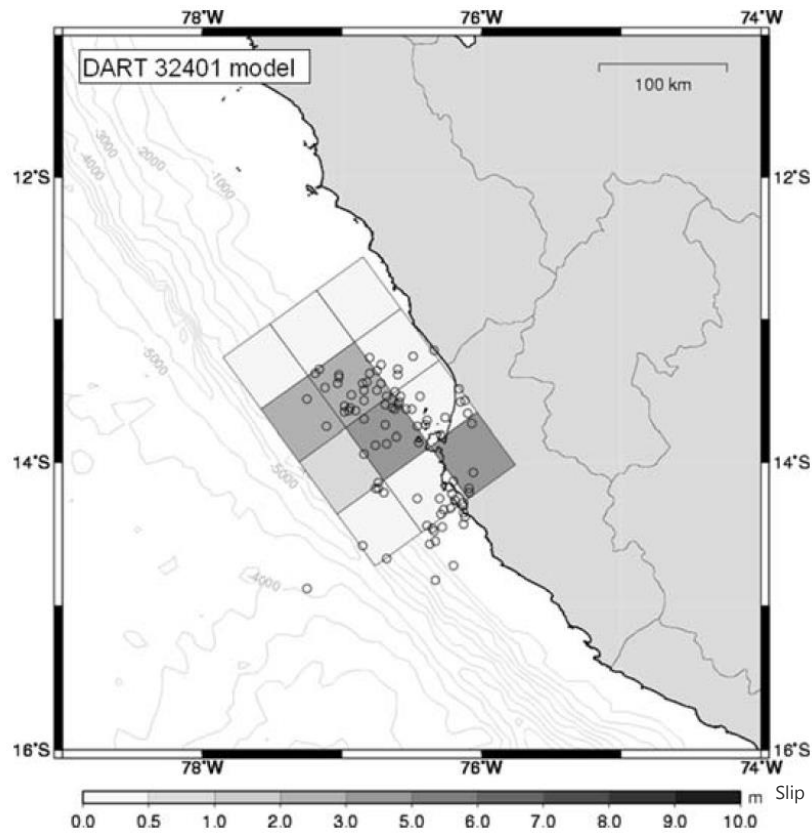
Fujii and Satake(2008a)による波源モデル



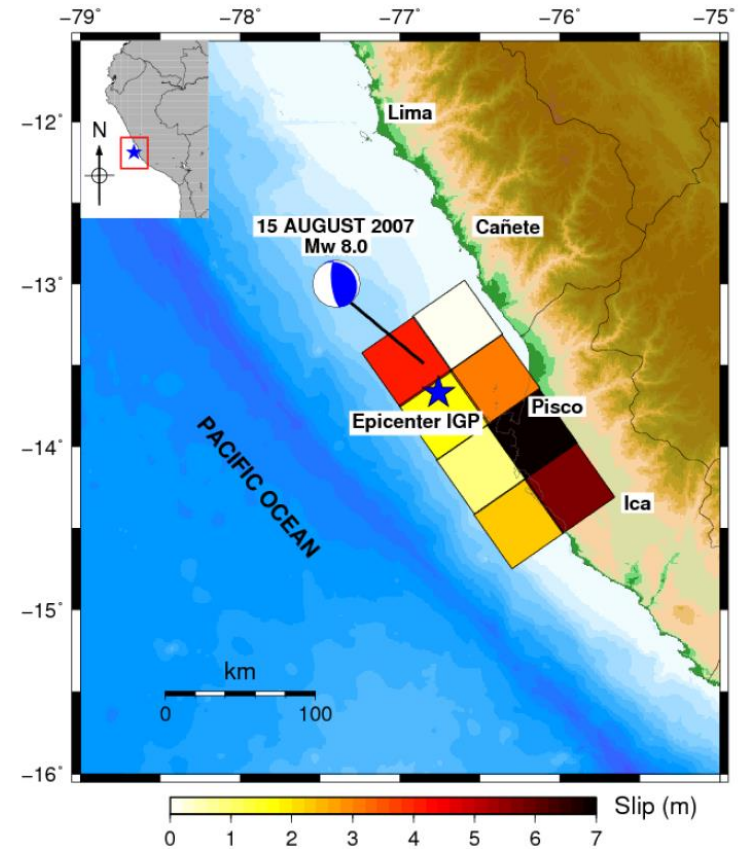
Baba et al.(2009)による波源モデル

2006年千島列島沖地震の波源モデル

6-5 ライズタイムの設定 Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2007年ペルー地震の波源モデル)

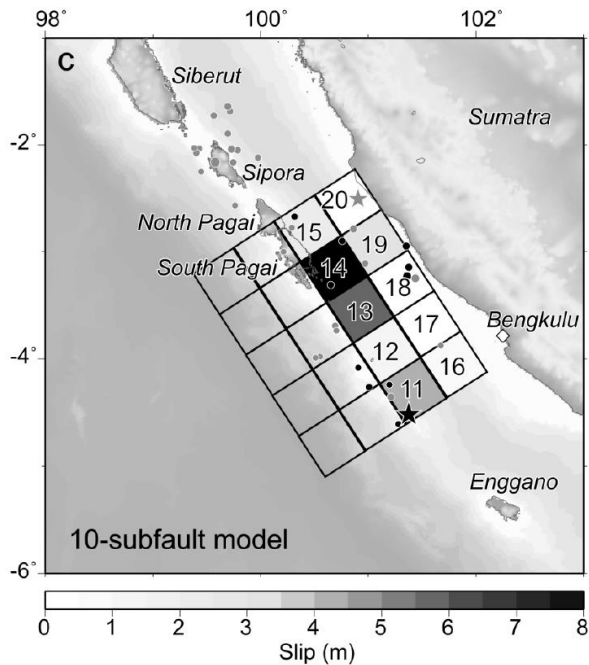


Herbert et al.(2009)による波源モデル

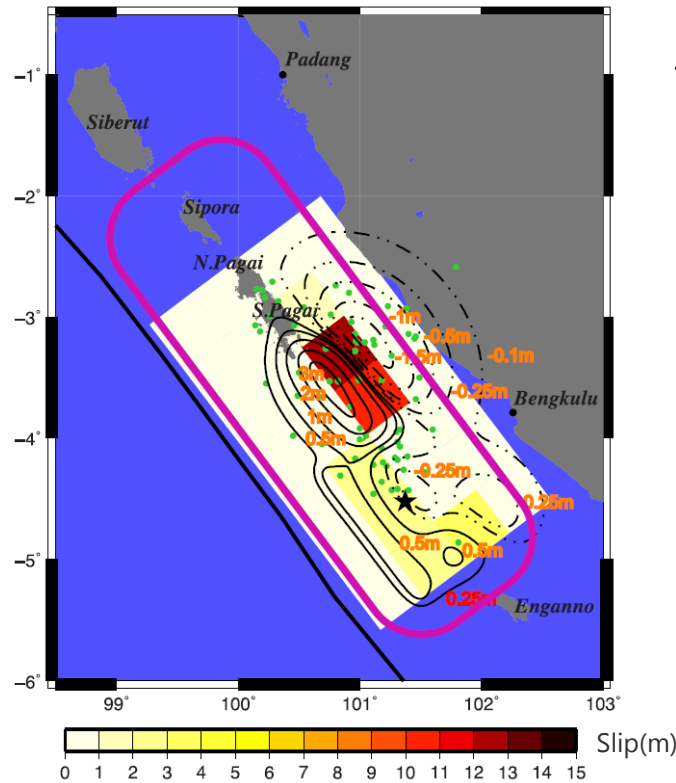


Jimenez et al.(2014)による波源モデル

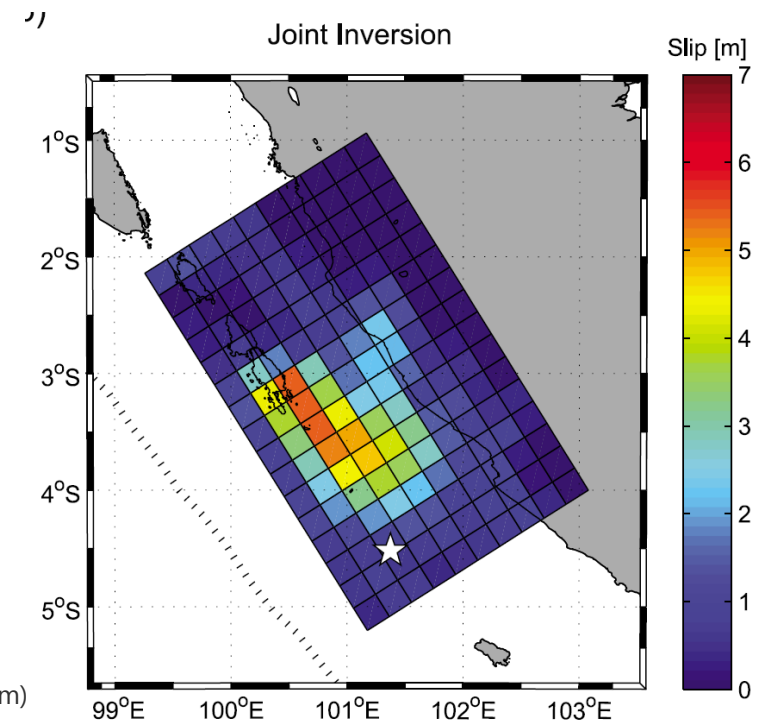
2007年ペルー地震の波源モデル



Fujii and Satake(2008b)による波源モデル



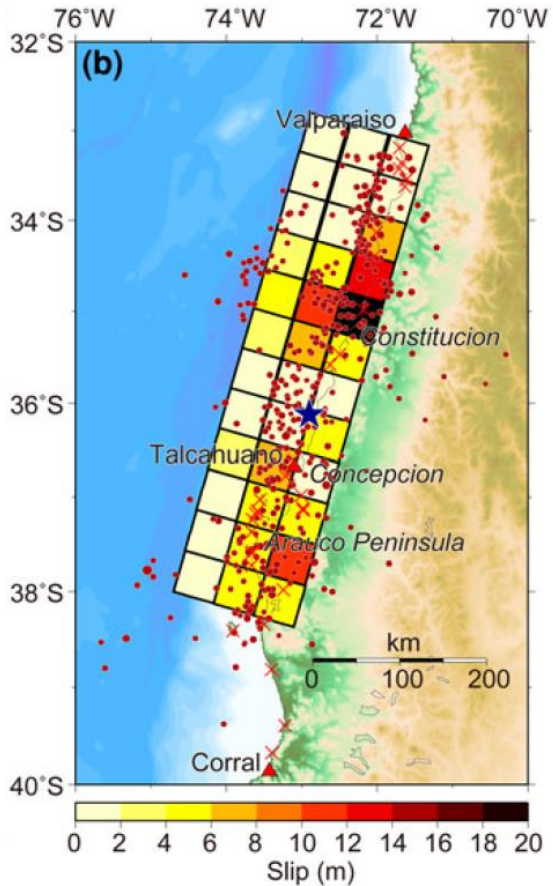
Lorito et al.(2008)による波源モデル



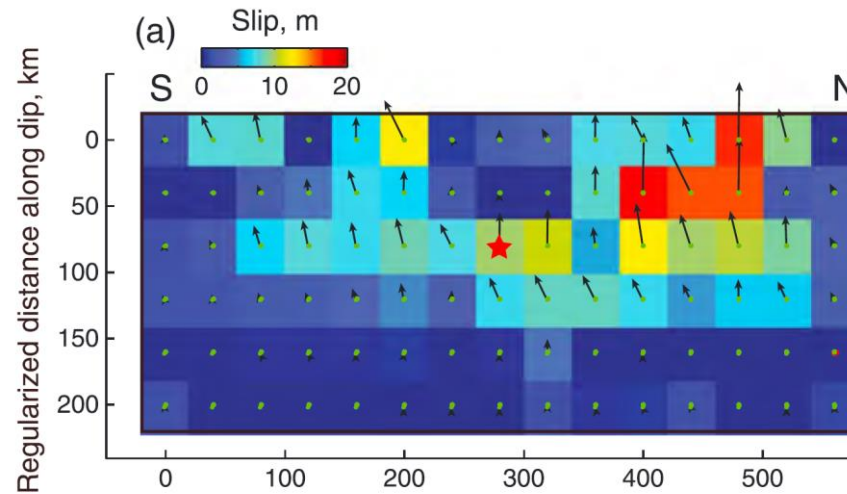
Gusman et al.(2010)による波源モデル

2007年スマトラ島沖地震の波源モデル

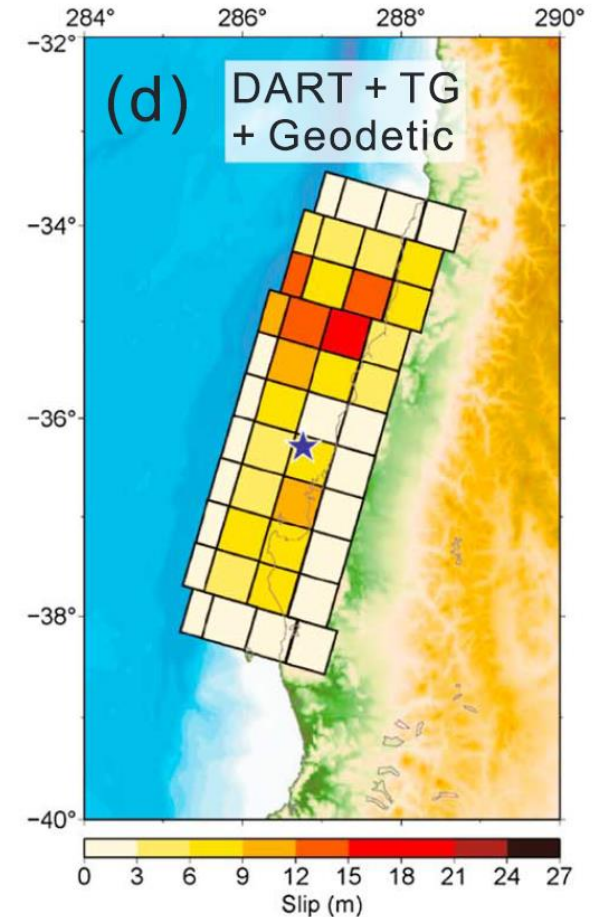
6-5 ライズタイムの設定 Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2010年チリ地震の波源モデル)



Fujii and Satake(2012)による波源モデル



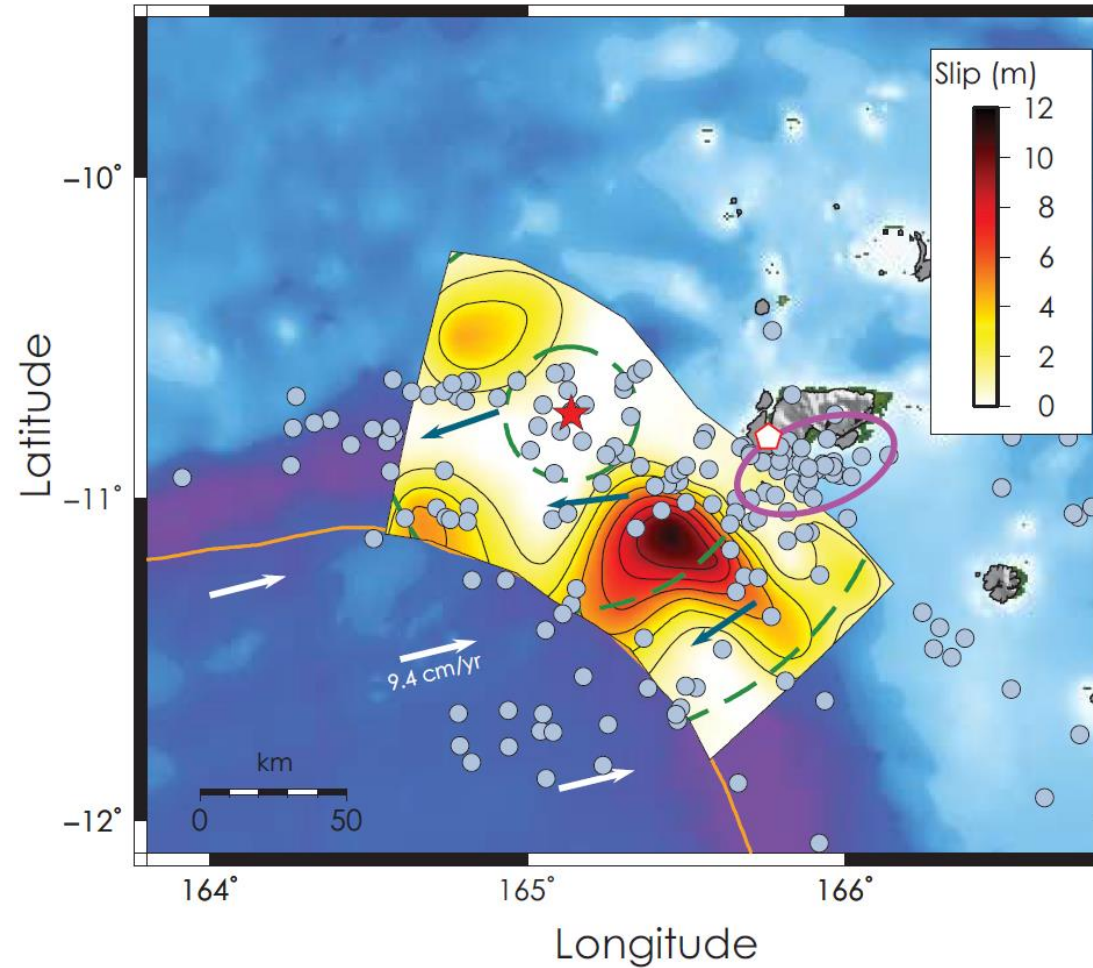
Yue et al.(2014)による波源モデル



Yoshimoto et al.(2016)による波源モデル

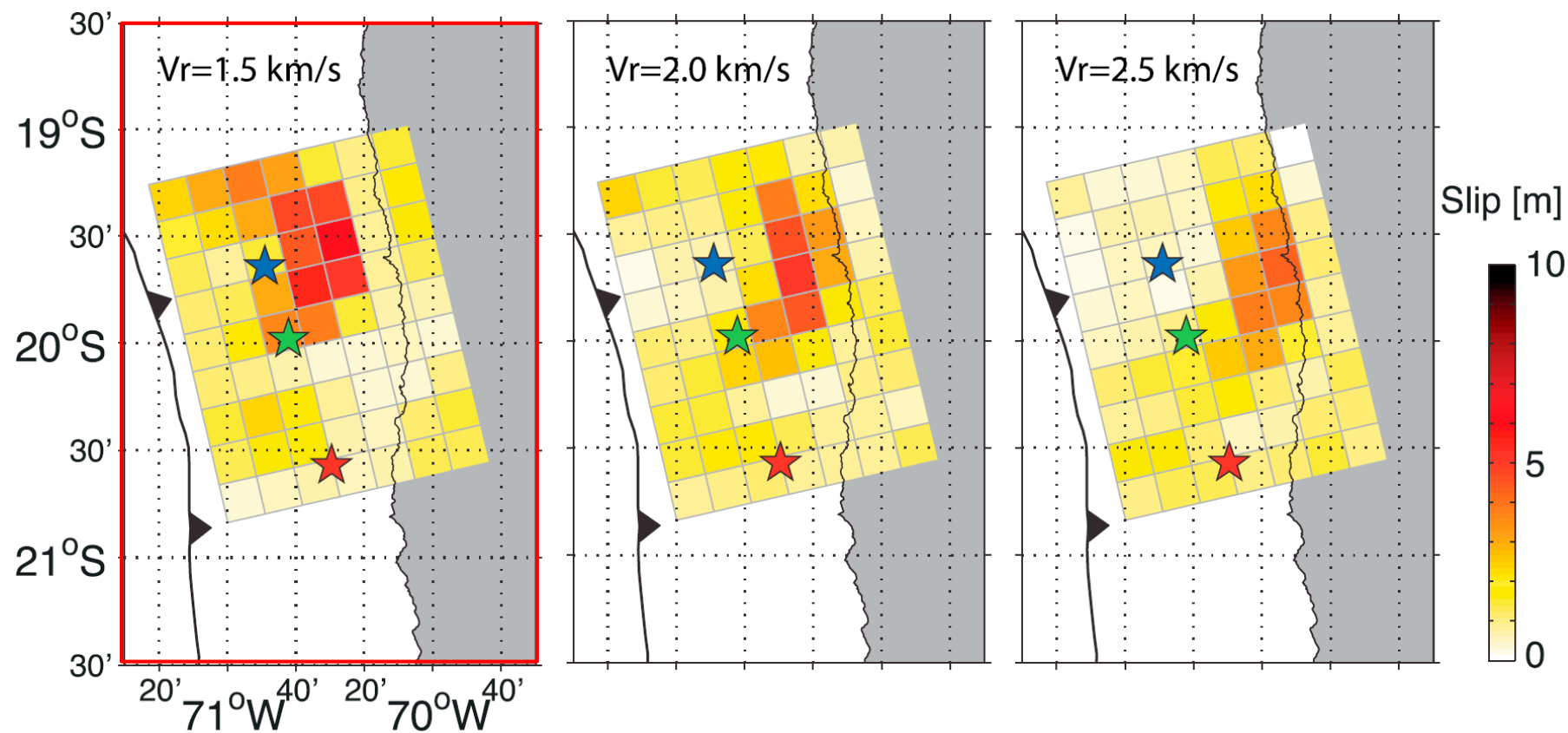
2010年チリ地震の波源モデル

Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2013年ソロモン諸島沖地震の波源モデル)



Romano et al.(2015)による波源モデル

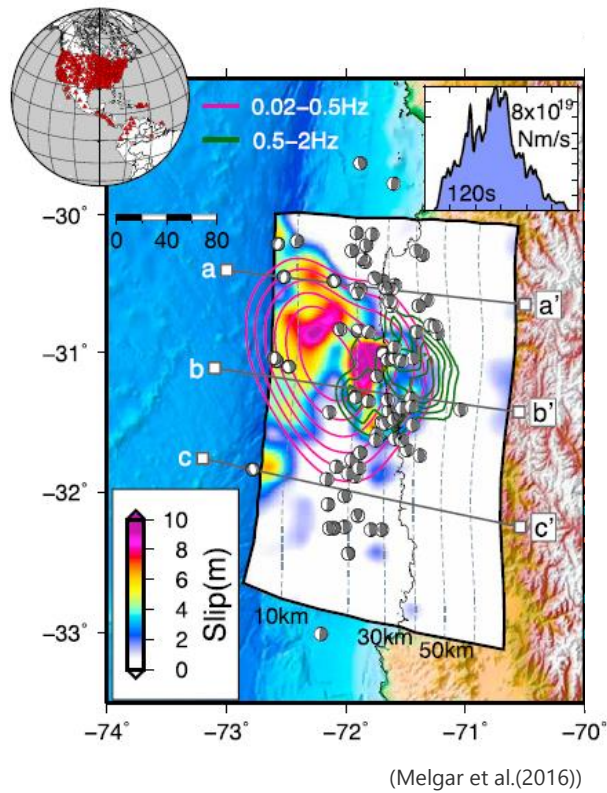
2013年ソロモン諸島沖地震の波源モデル



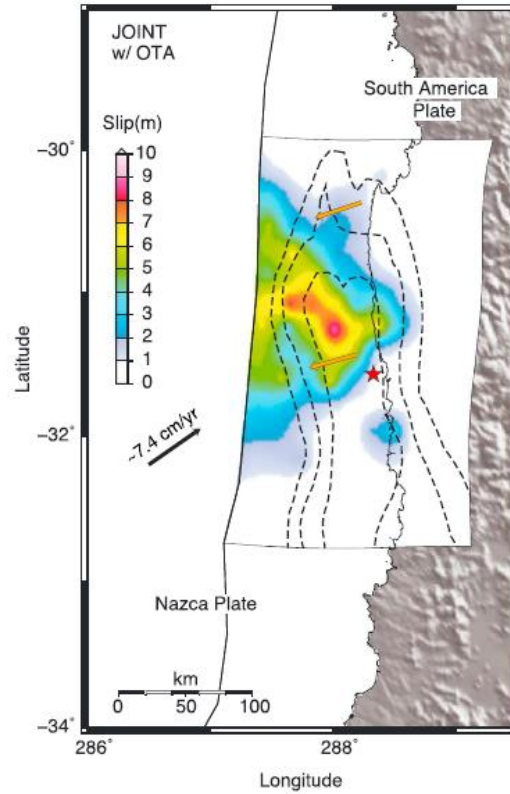
Gusman et al.(2015)による波源モデル

2014年チリ地震の波源モデル

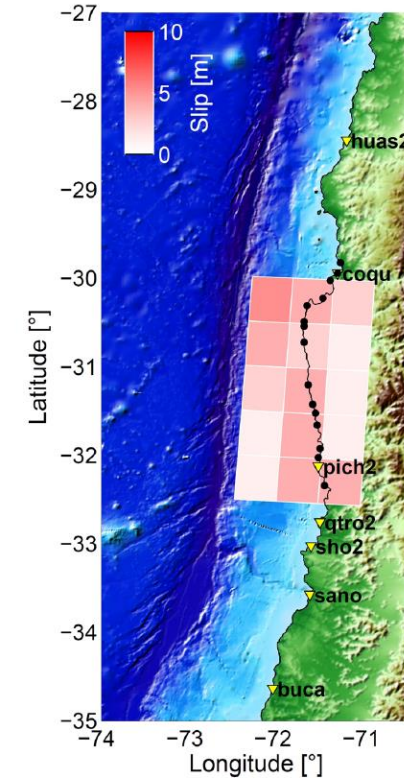
6-5 ライズタイムの設定 Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2015年チリ地震の波源モデル)



Melgar et al.(2016)による波源モデル



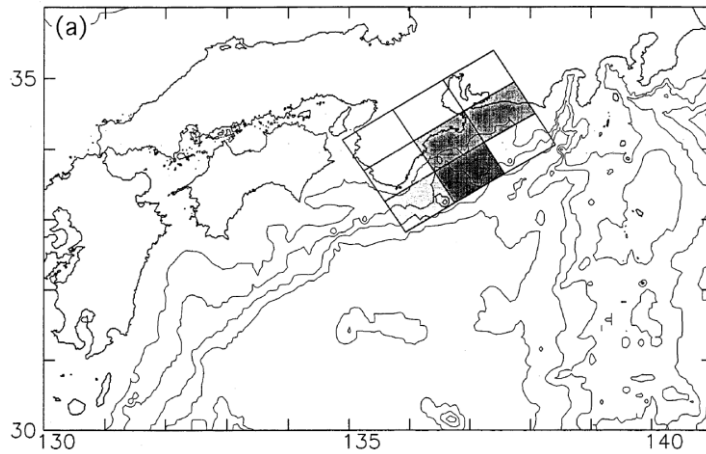
Romano et al.(2016)による波源モデル



Fuentes et al.(2016)による波源モデル

2015年チリ地震の波源モデル

Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (1944年東南海地震の波源モデル)



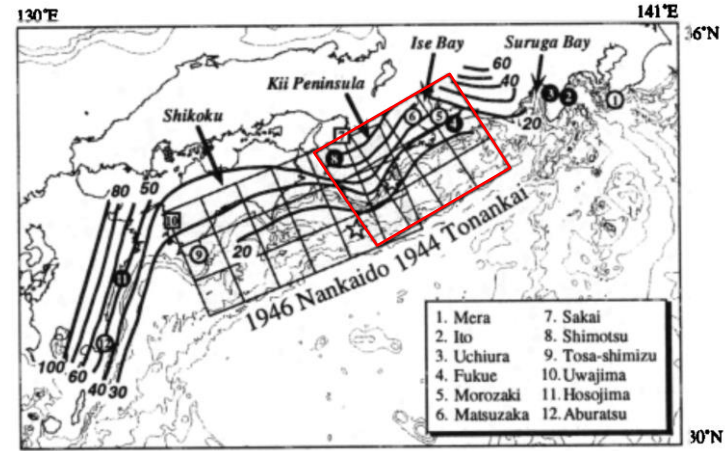
Satake(1993)による波源モデル

各小断層のすべり量

-0.74 ±0.15	0.29 ±0.12	0.62 ±0.14
0.66 ±0.15	1.54 ±0.18	1.49 ±0.15
1.15 ±0.20	1.63 ±0.22	0.19 ±0.14

凡例

a	a: すべり量(m)
± b	b: 誤差(m)



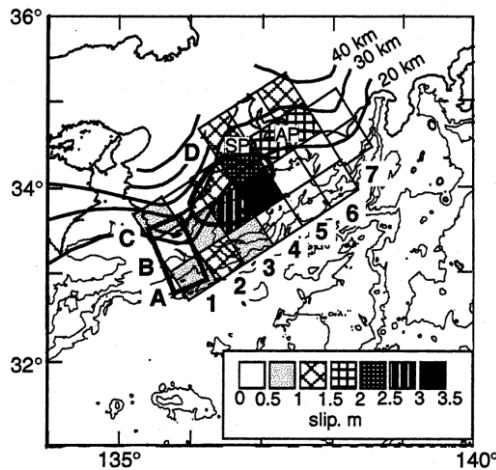
Kato and Ando(1997)による波源モデル

各小断層のすべり量

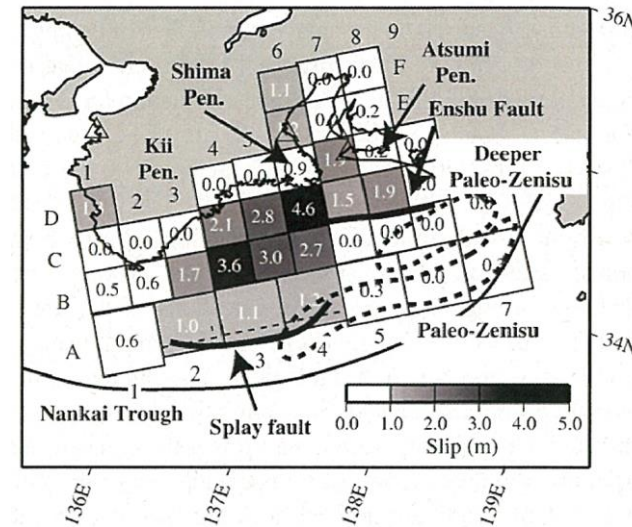
-2.13 ±0.25	0.17 ±0.25	0.59 ±0.13	0.76 ±0.12
0.78 ±0.13	0.60 ±0.21	2.29 ±0.19	1.15 ±0.15
0.59 ±0.16	2.72 ±0.28	1.23 ±0.30	4.48 ±0.39

凡例

a	a: すべり量(m)
± b	b: 誤差(m)
c	c: ライズタイム(min)



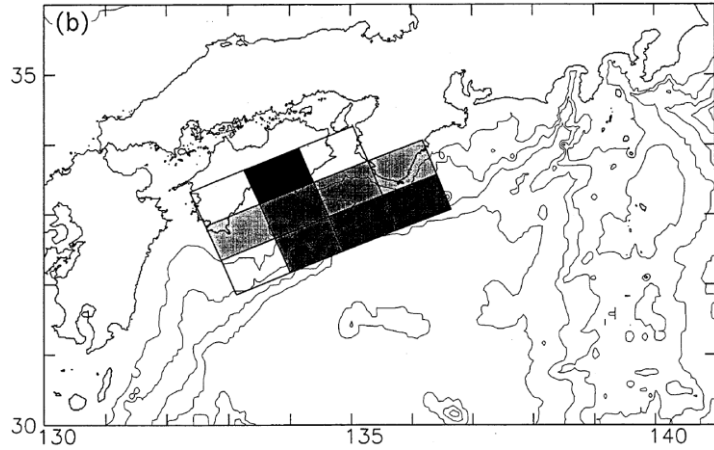
Tanioka and Satake(2001a)による波源モデル



Baba et al.(2006)による波源モデル

1944年東南海地震の波源モデル

6-5 ライズタイムの設定 Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (1946年南海地震の波源モデル)

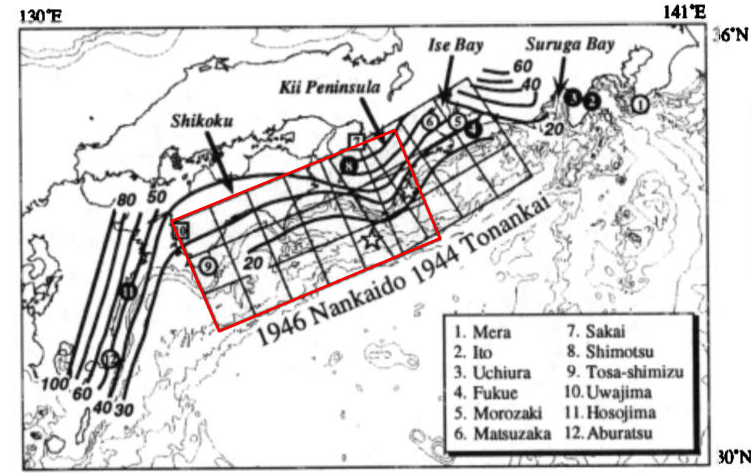


Satake(1993)による波源モデル

各小断層のすべり量

0.48 ±0.13	2.41 ±0.11	-0.46 ±0.15	
1.35 ±0.17	1.77 ±0.17	1.47 ±0.18	1.31 ±0.21
0.01 ±0.16	1.74 ±0.38	1.95 ±0.27	2.01 ±0.27

凡例
a: すべり量(m)
± b: 誤差(m)

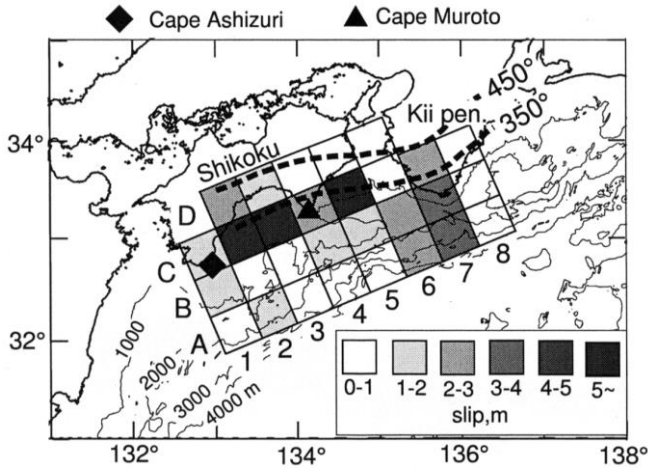


Kato and Ando(1997)による波源モデル

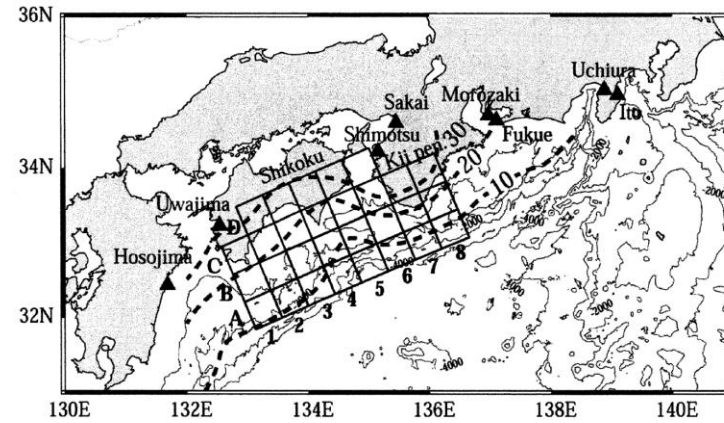
各小断層のすべり量

-0.03 ±0.09	1.63 ±0.17	2.56 ±0.12	1.40 ±0.20	0.10 ±0.23	-0.51 ±0.24
0.08 ±0.13	2.88 ±0.23	1.61 ±0.21	3.04 ±0.24	1.34 ±0.15	0.38 ±0.22
-0.44 ±0.16	-0.57 ±0.27	0.17 ±0.49	3.29 ±0.41	1.62 ±0.27	2.06 ±0.34

凡例
a: すべり量(m)
± b: 誤差(m)
c: ライズタイム(min)



Tanioka and Satake(2001b)による波源モデル

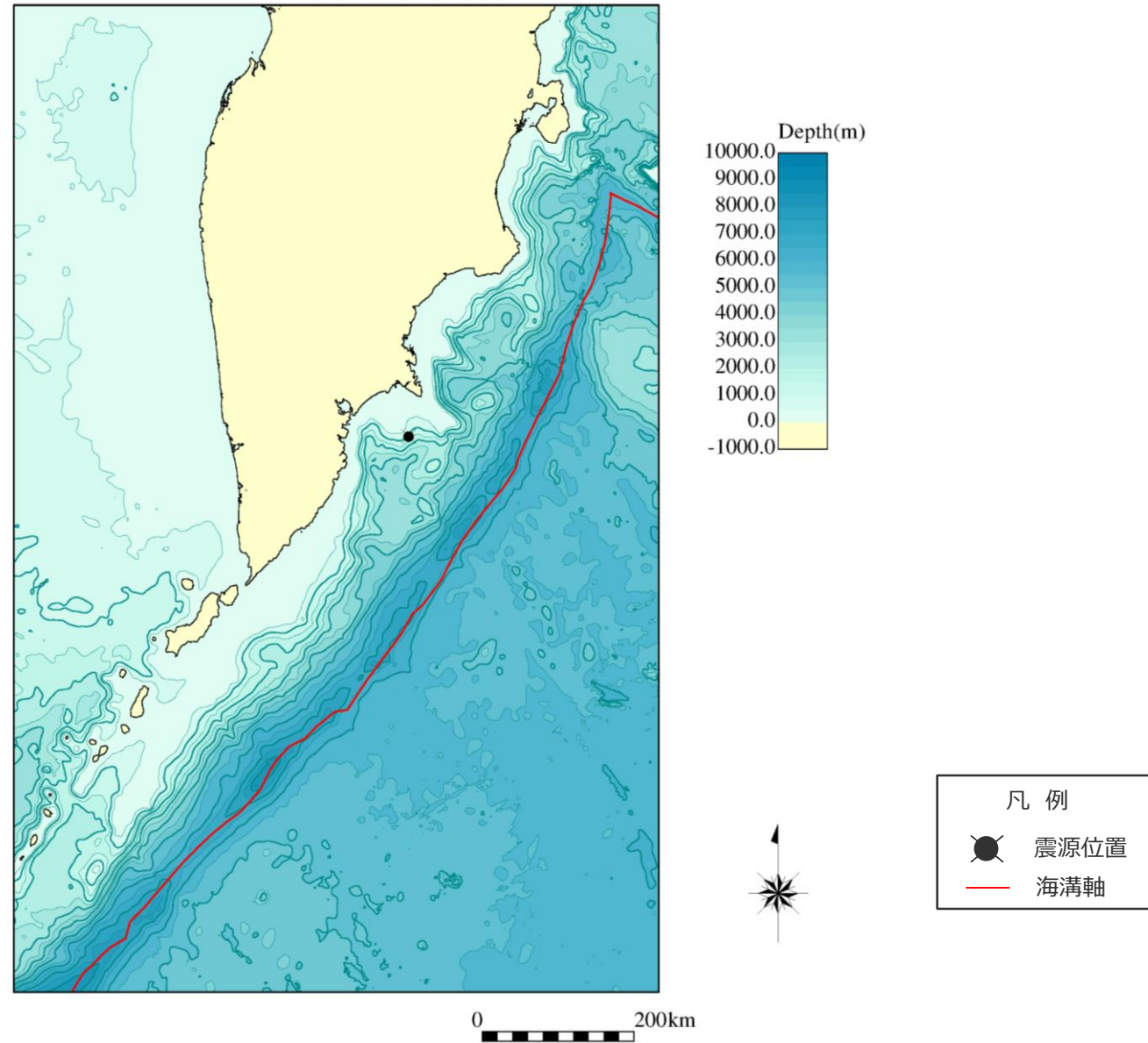


Baba et al.(2002)による波源モデル

Subfault	Depth of top edge (km)	Dip angle (°)	Slip (m)	S.E. (m)
1A	8	8	0.00	0.02
2A	7	8	1.06	0.13
3A	5	6	0.00	0.00
4A	3	4	0.04	0.24
5A	1	6	0.90	0.18
6A	1	9	3.02	0.16
7A	1	9	3.76	0.18
8A	1	9	0.00	0.01
1B	14	9	0.43	0.04
2B	13	8	0.06	0.10
3B	10	9	0.00	0.01
4B	6	9	0.52	0.14
5B	6	9	2.02	0.14
6B	8	14	2.49	0.11
7B	8	18	3.12	0.09
8B	8	19	0.54	0.05
1C	21	8	2.22	0.06
2C	19	9	4.11	0.28
3C	17	6	6.06	0.27
4C	13	9	3.52	0.13
5C	13	14	5.55	0.13
6C	19	14	0.08	0.08
7C	22	22	3.48	0.21
8C	23	22	0.00	0.05
2D	26	9	0.00	0.00
3D	22	10	4.88	0.23
4D	20	13	0.00	0.06
5D	24	14	0.17	0.04
6D	30	26	1.12	0.05

1946年南海地震の波源モデル

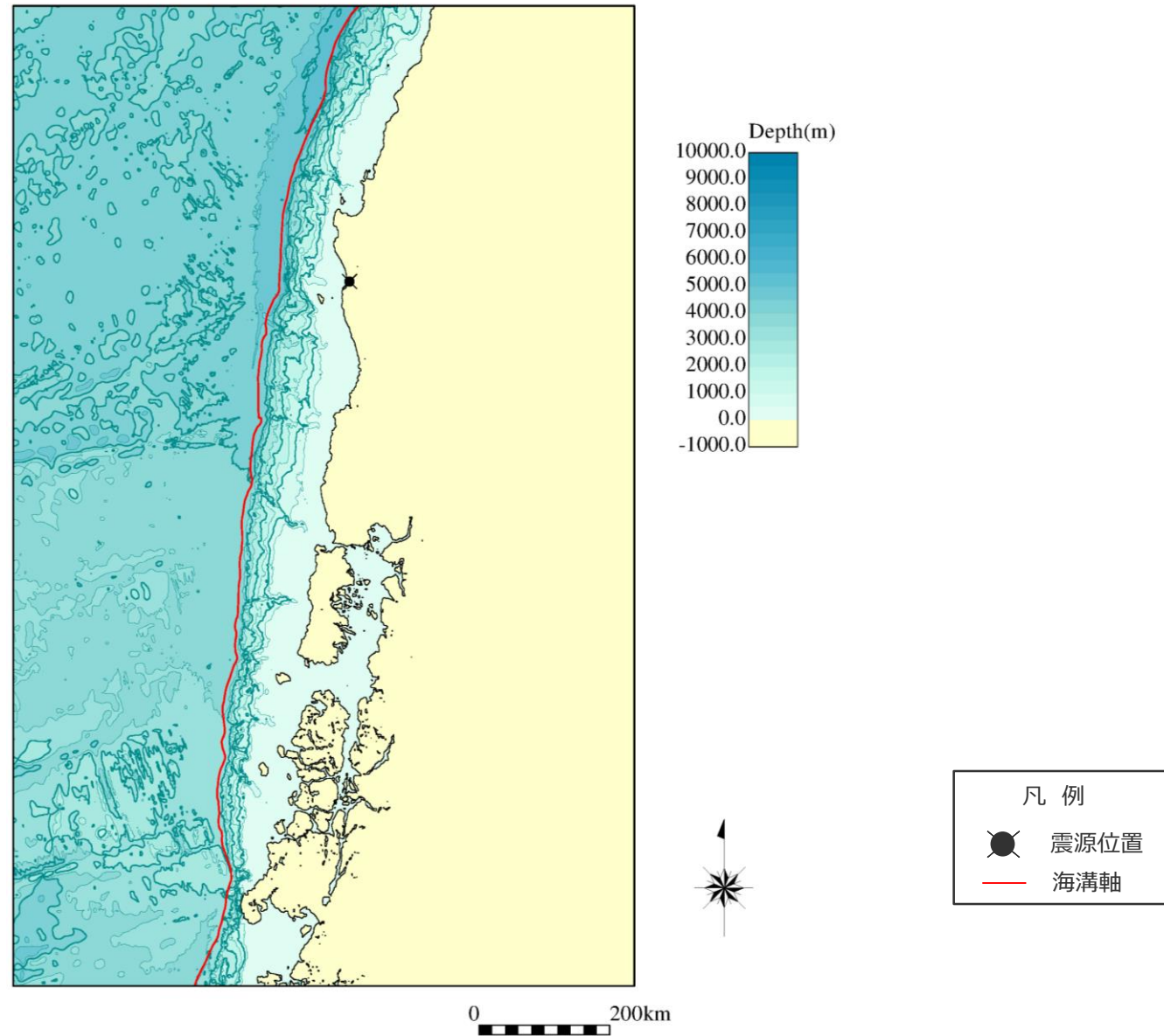
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (1952年カムチャッカ地震の震源付近の水深図)



1952年カムチャッカ地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

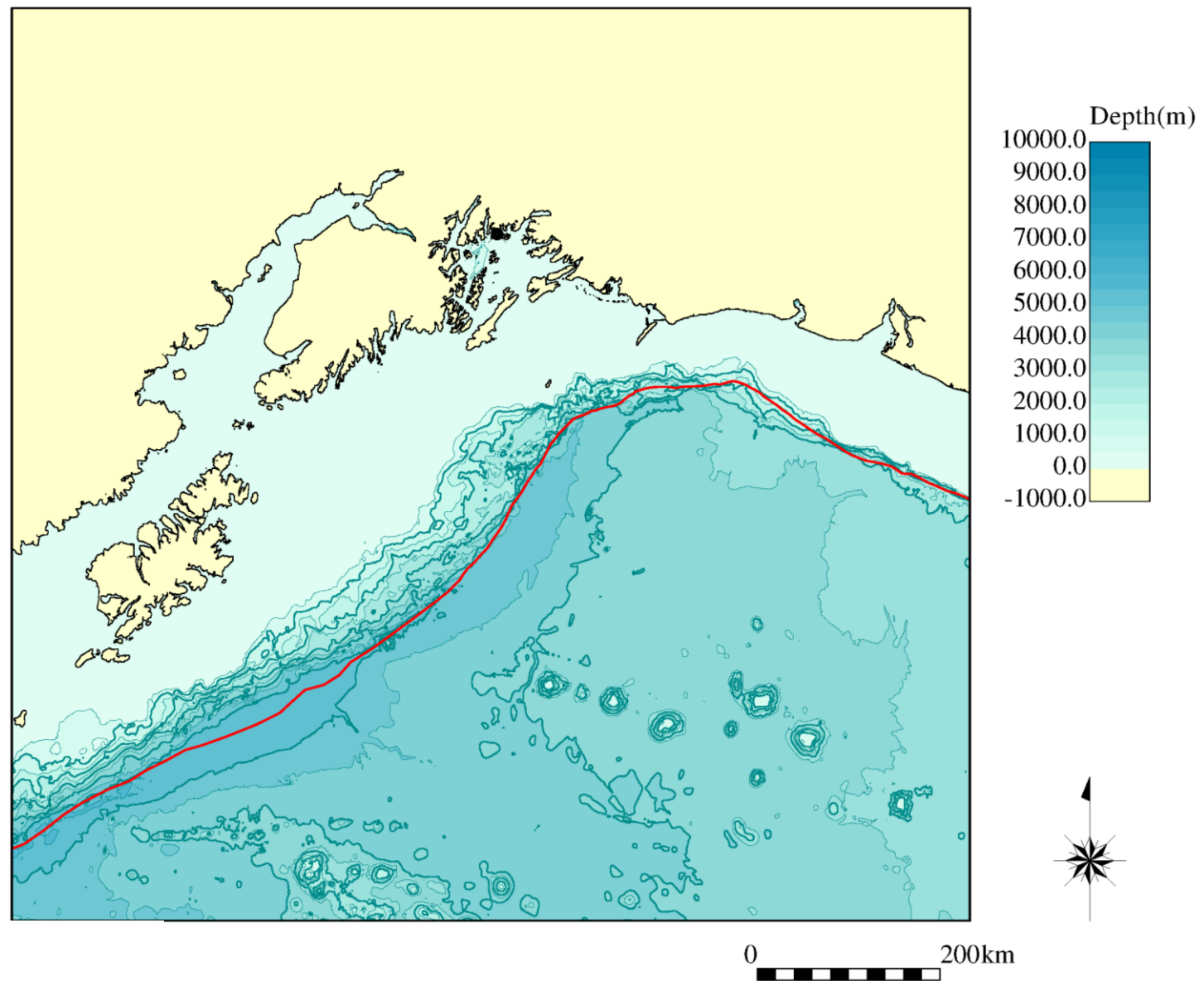
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (1960年チリ地震の震源付近の水深図)



1960年チリ地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

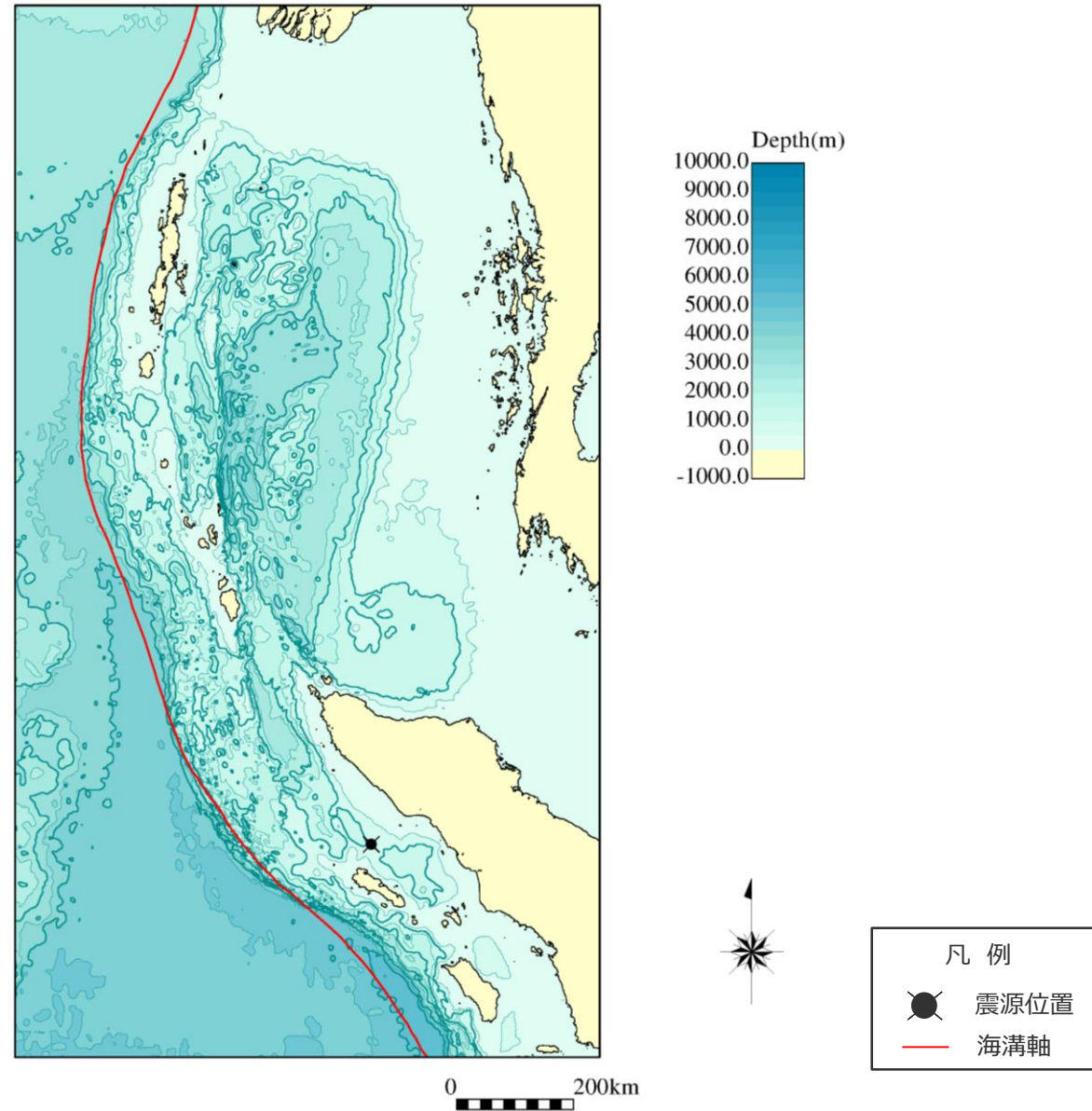
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (1964年アラスカ地震の震源付近の水深図)



1964年アラスカ地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

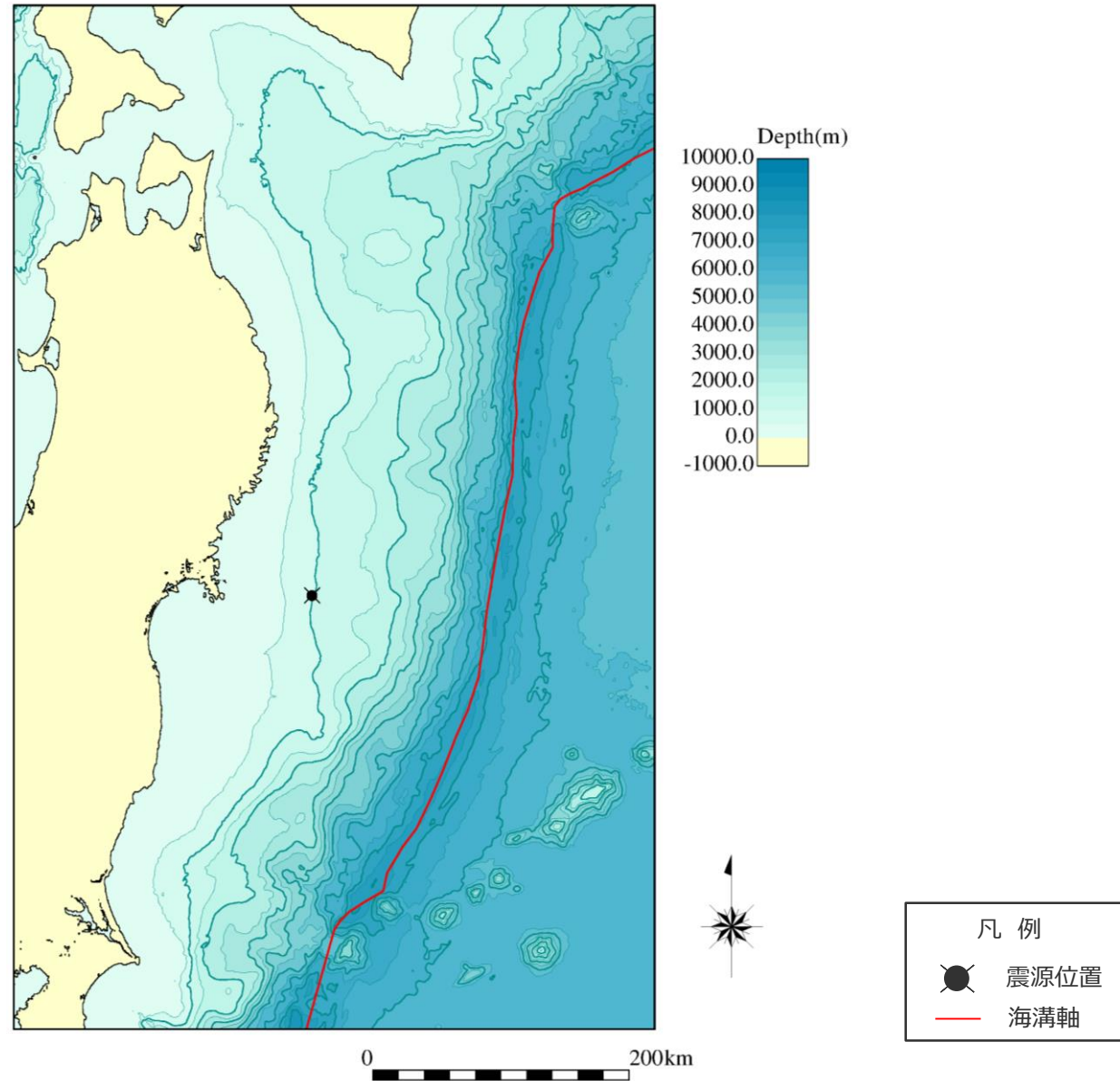
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2004年スマトラ島沖地震の震源付近の水深図)



2004年スマトラ島沖地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

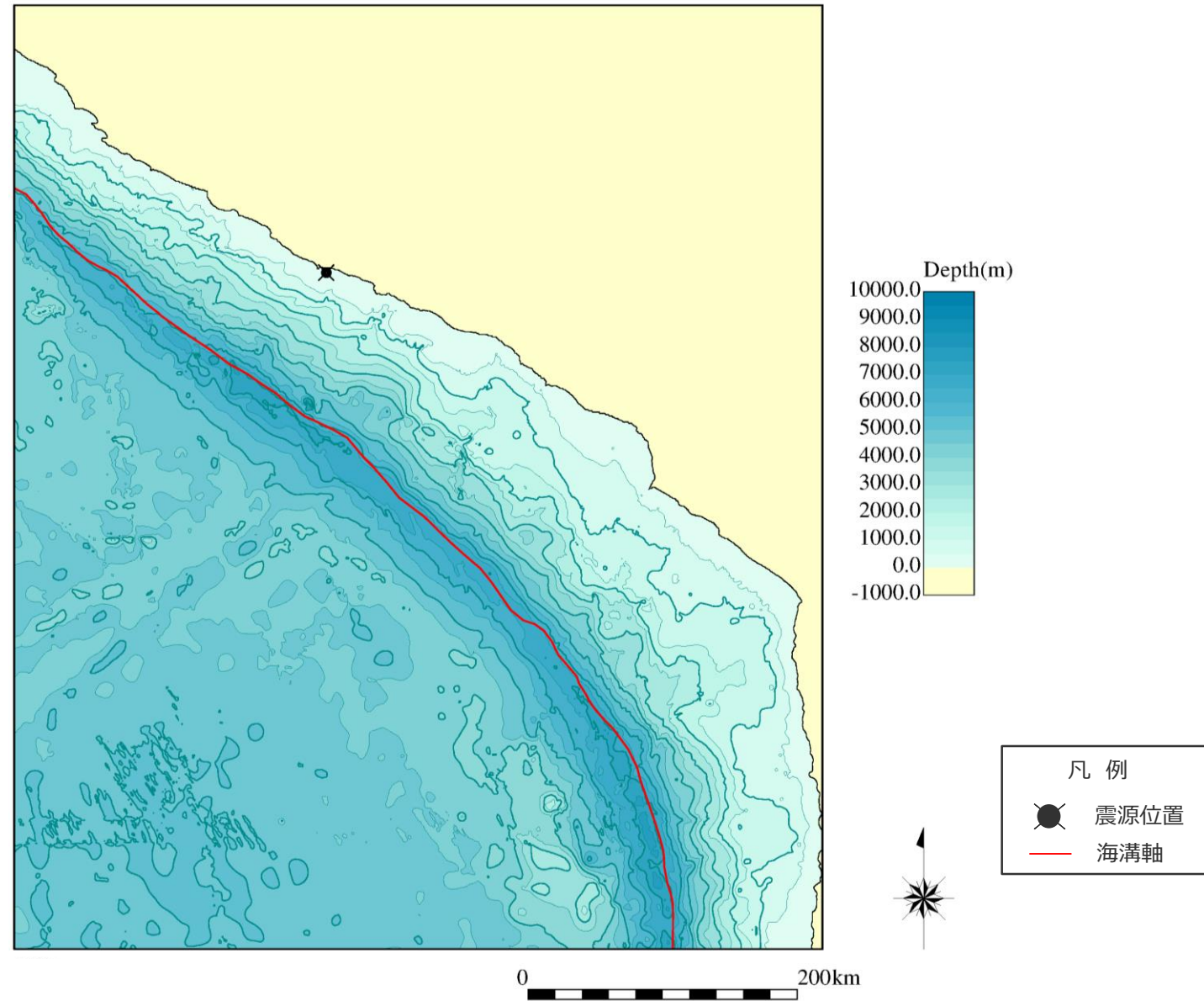
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2011年東北沖地震の震源付近の水深図)



2011年東北沖地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

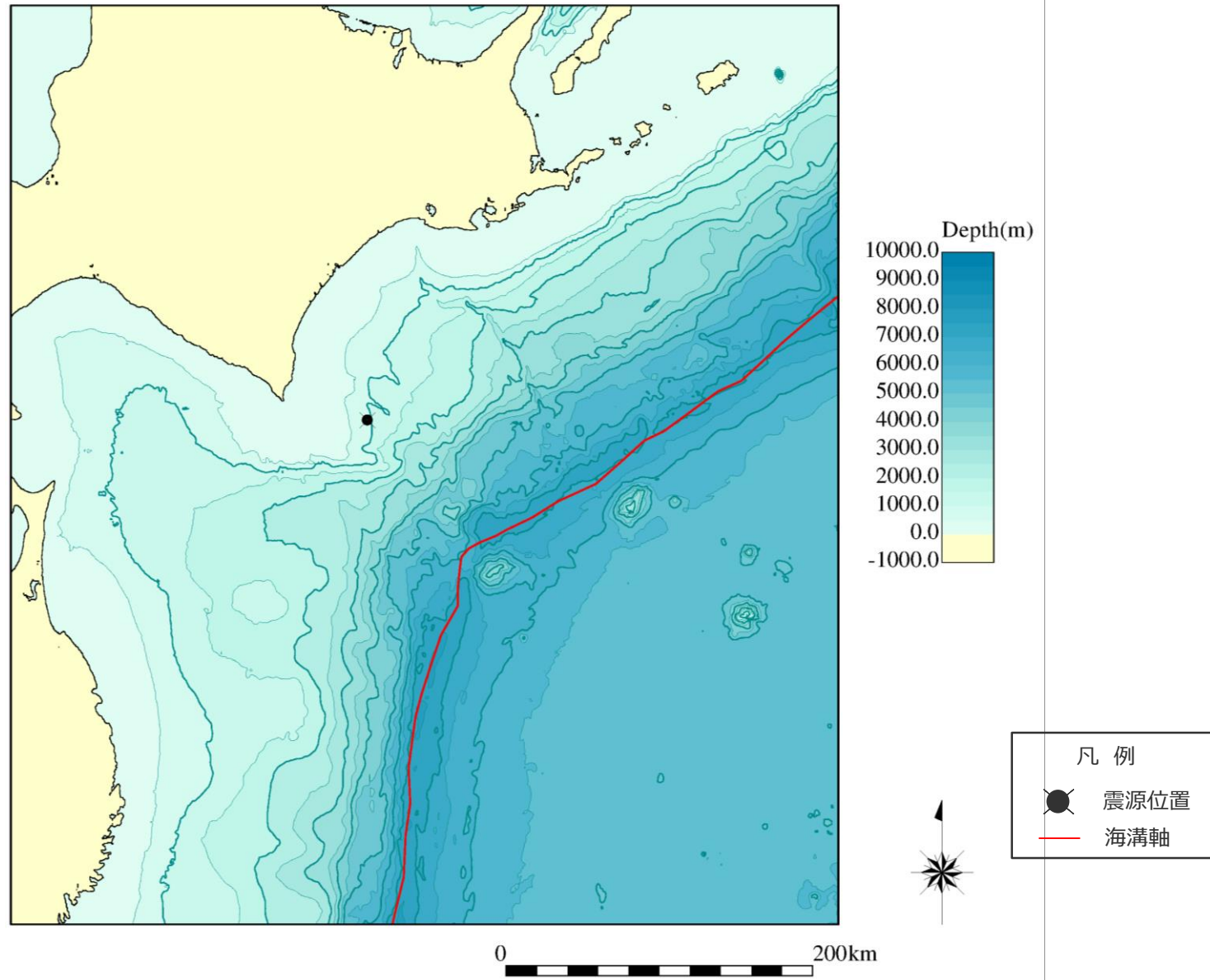
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2001年ペルー地震の震源付近の水深図)



2001年ペルー地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

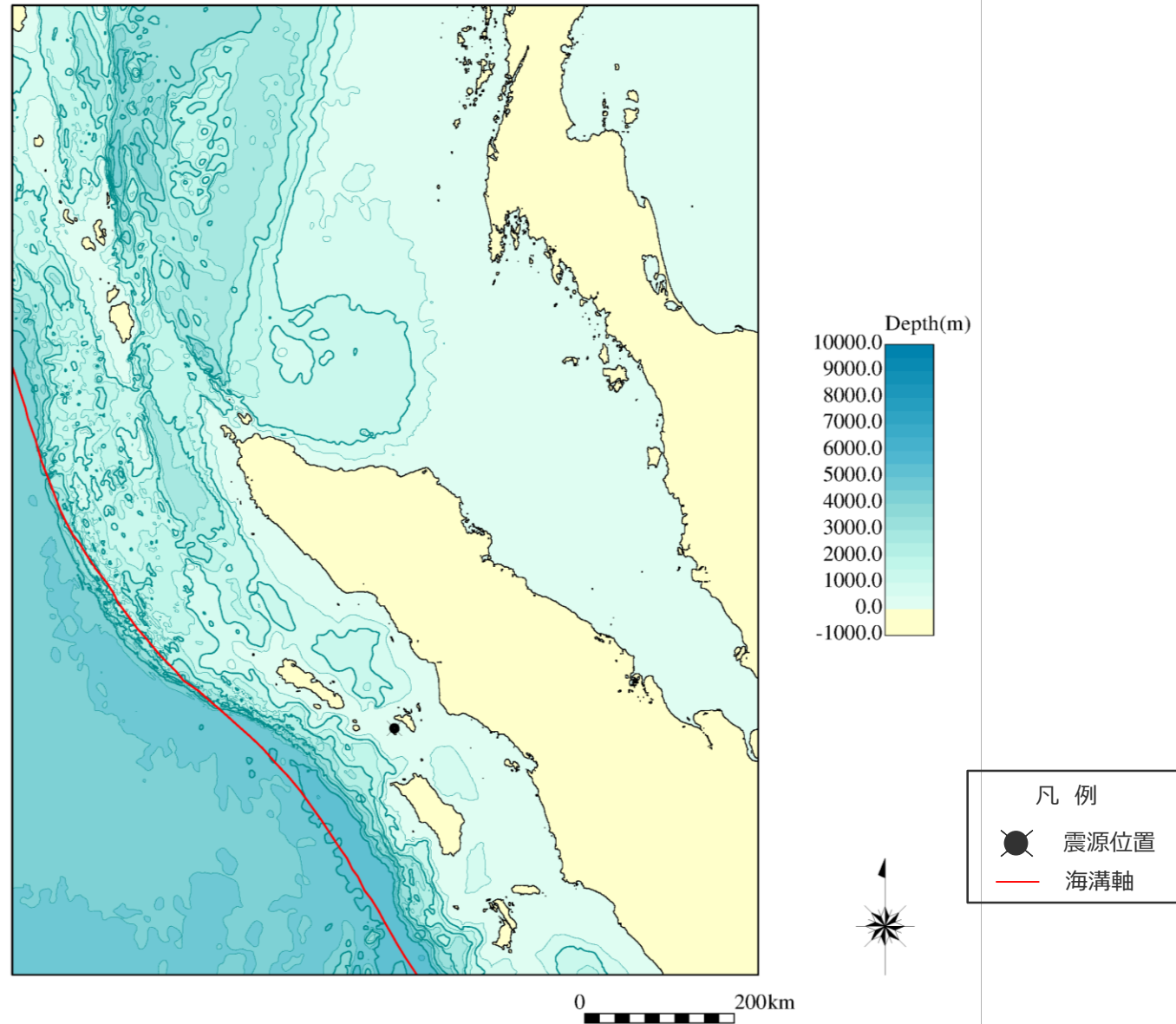
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2003年十勝沖地震の震源付近の水深図)



2003年十勝沖地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

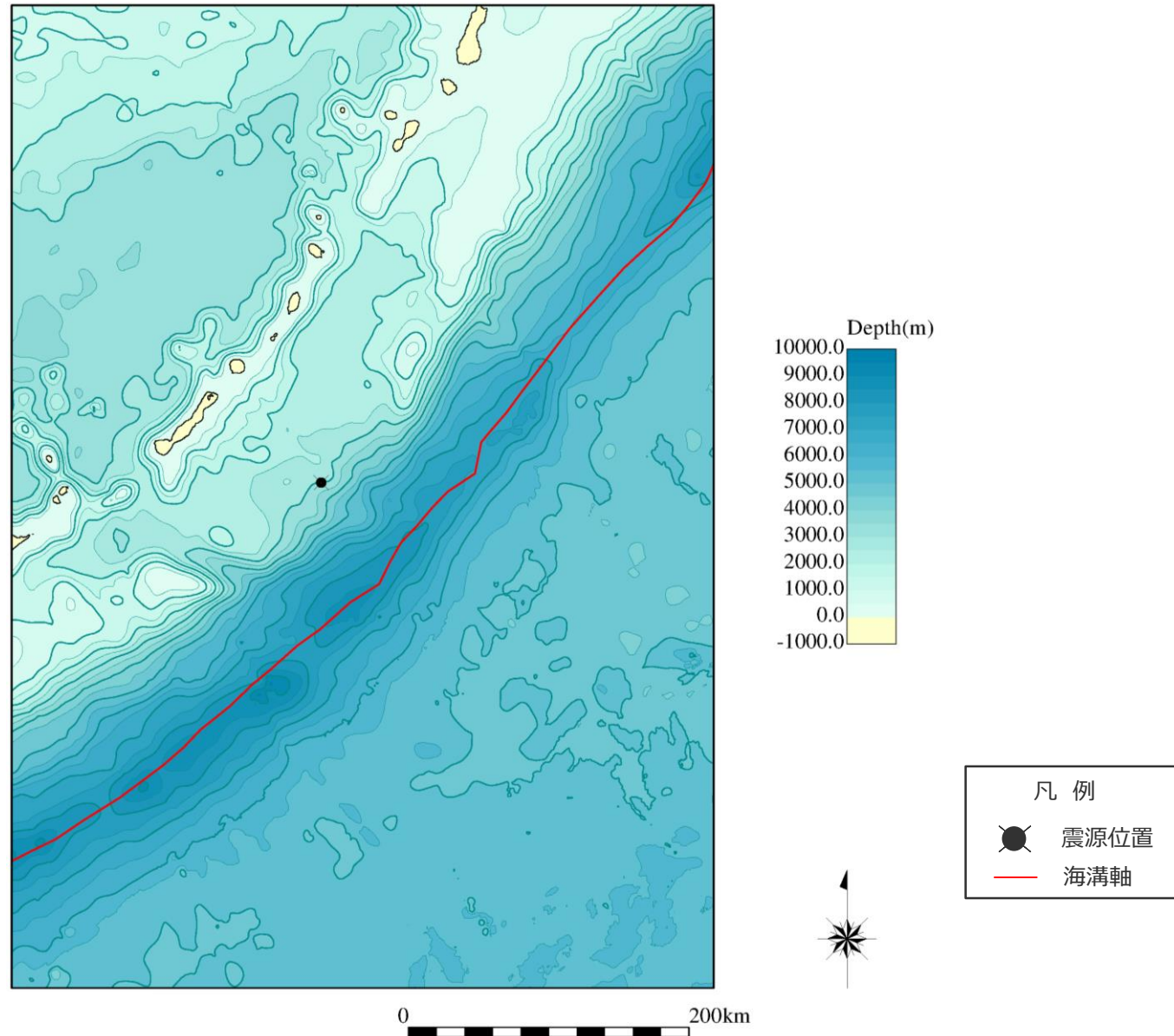
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2005年スマトラ島沖地震の震源付近の水深図)



2005年スマトラ島沖地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

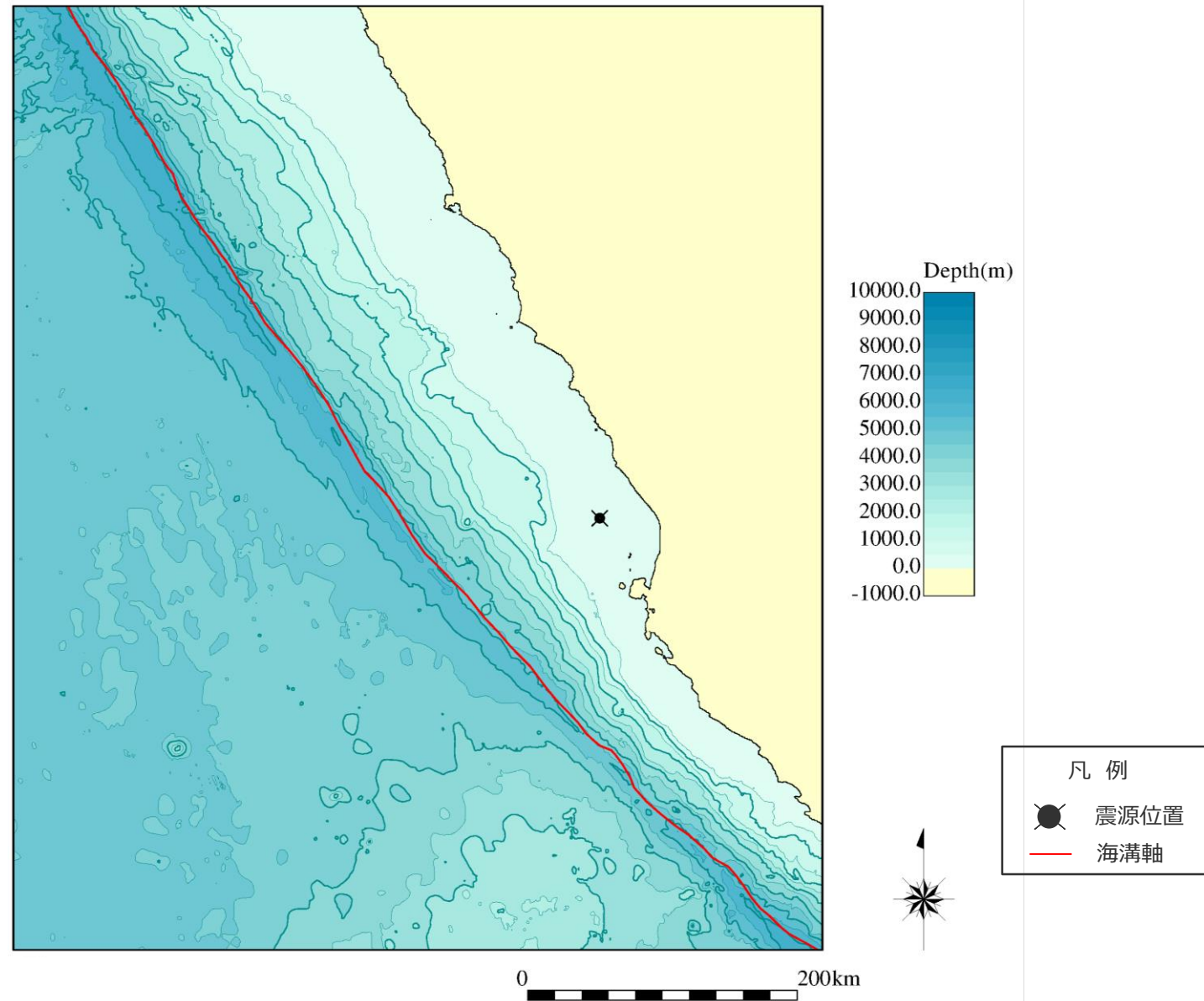
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2006年千島列島沖地震の震源付近の水深図)



2006年千島列島沖地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

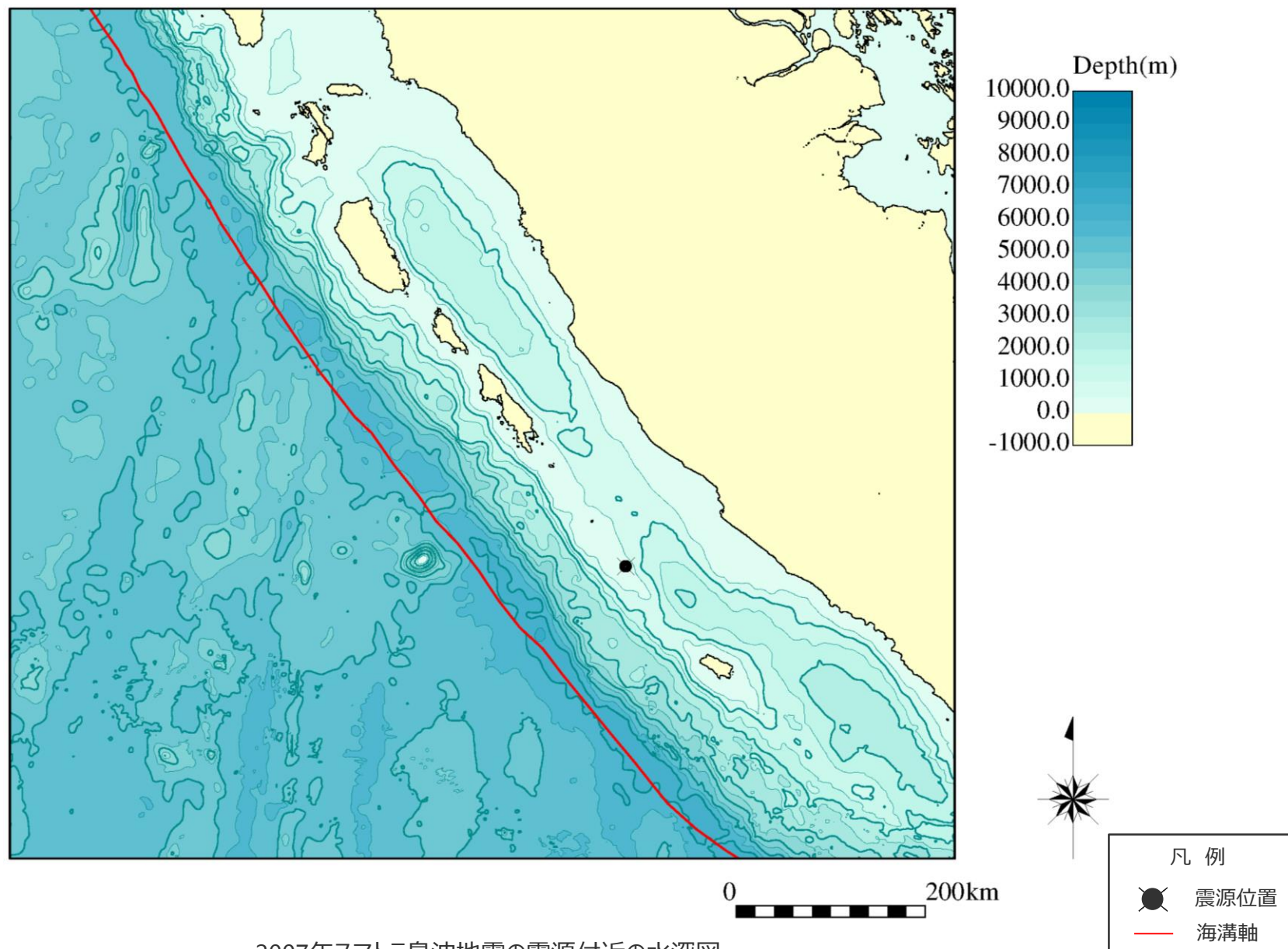
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2007年ペルー地震の震源付近の水深図)



2007年ペルー地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

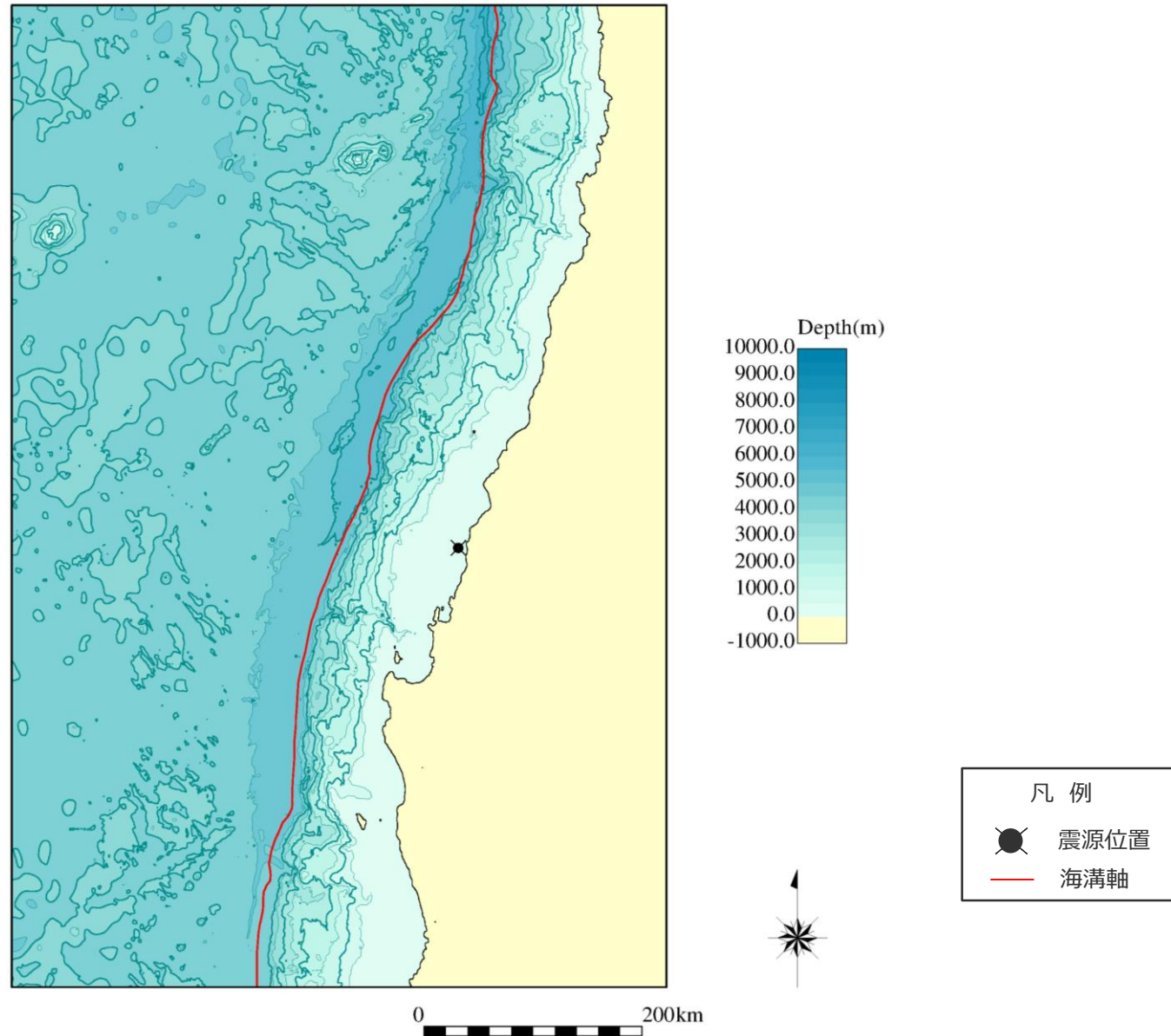
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2007年スマトラ島沖地震の震源付近の水深図)



2007年スマトラ島沖地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

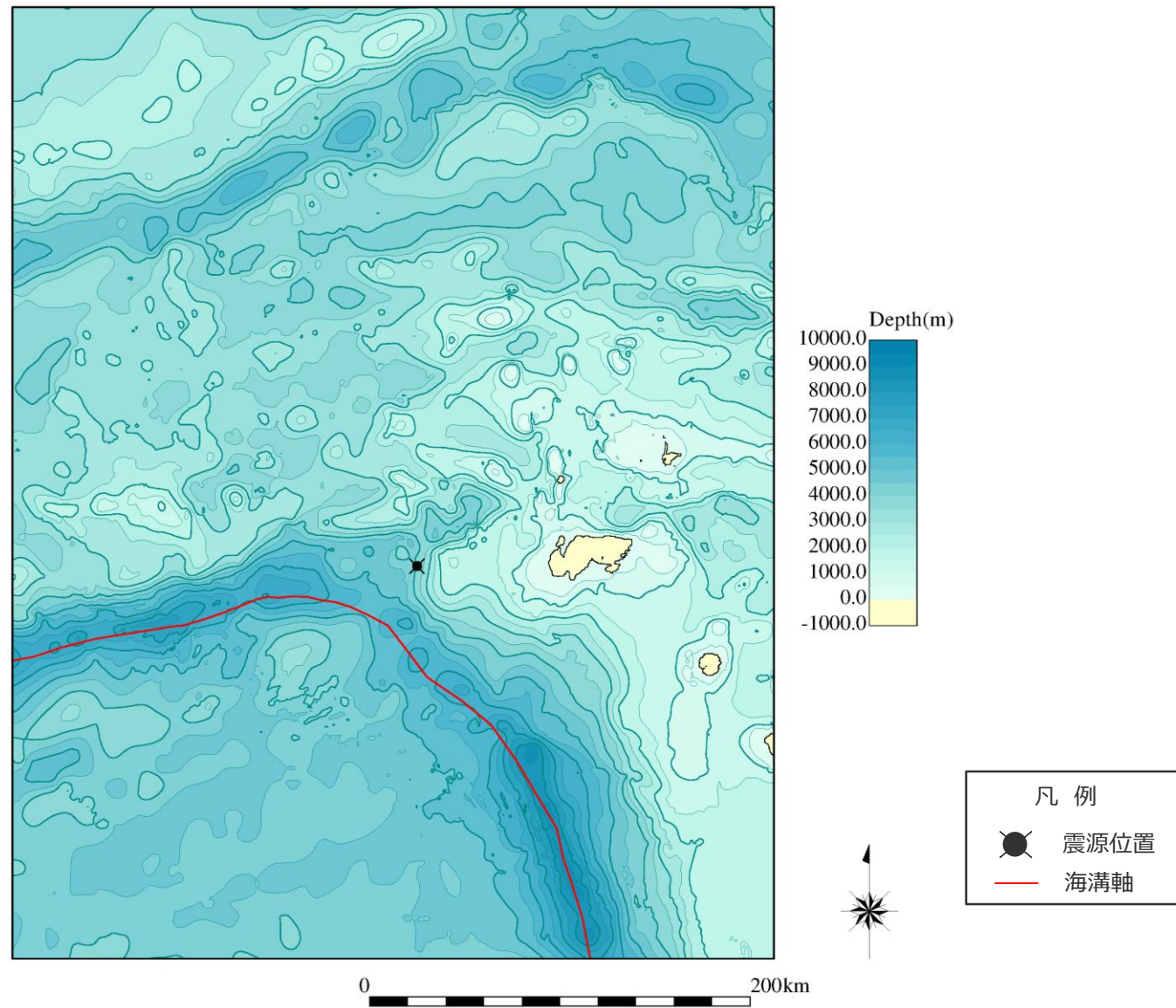
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2010年チリ地震の震源付近の水深図)



2010年チリ地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

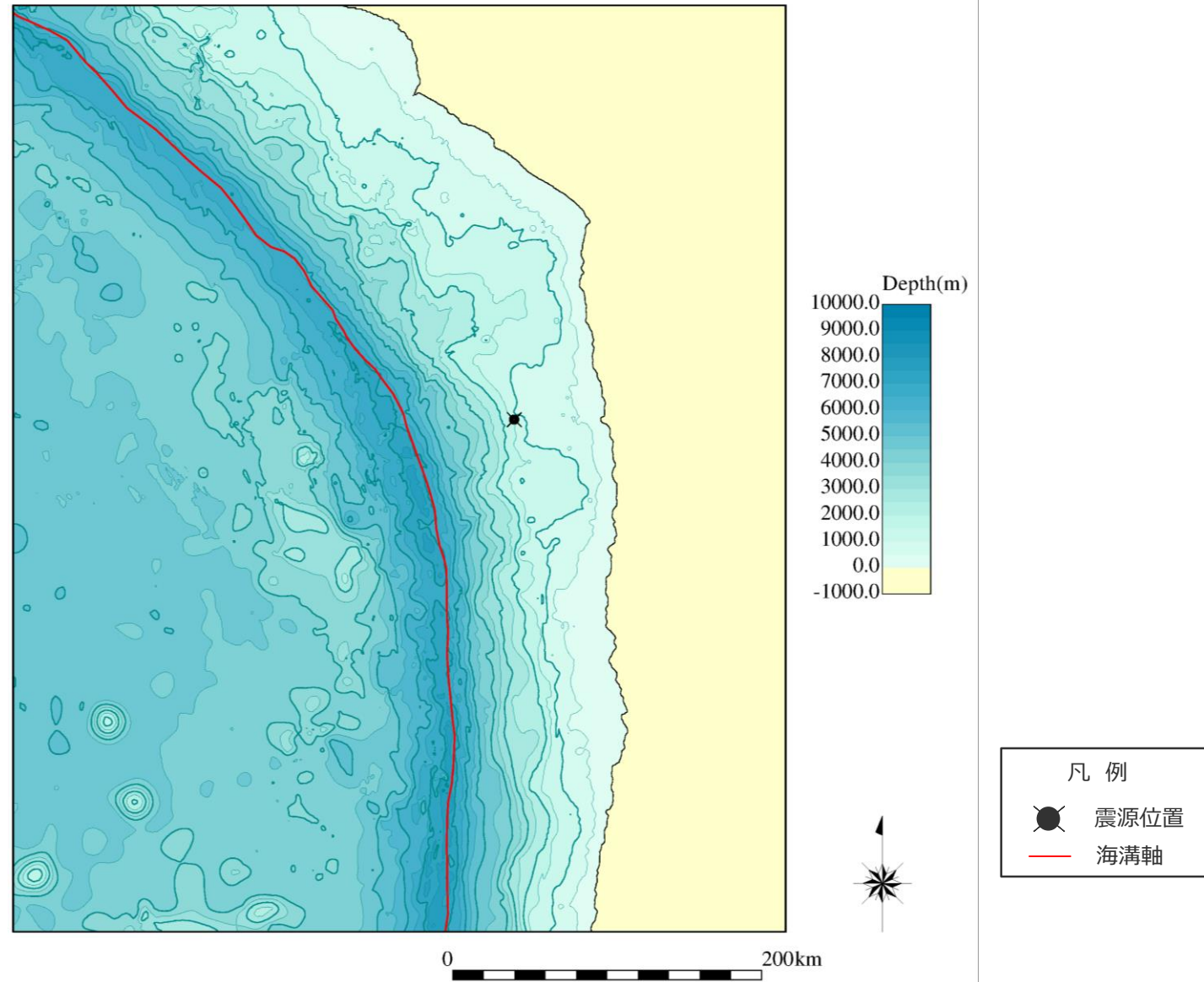
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2013年ソロモン諸島沖地震の震源付近の水深図)



2013年ソロモン諸島沖地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

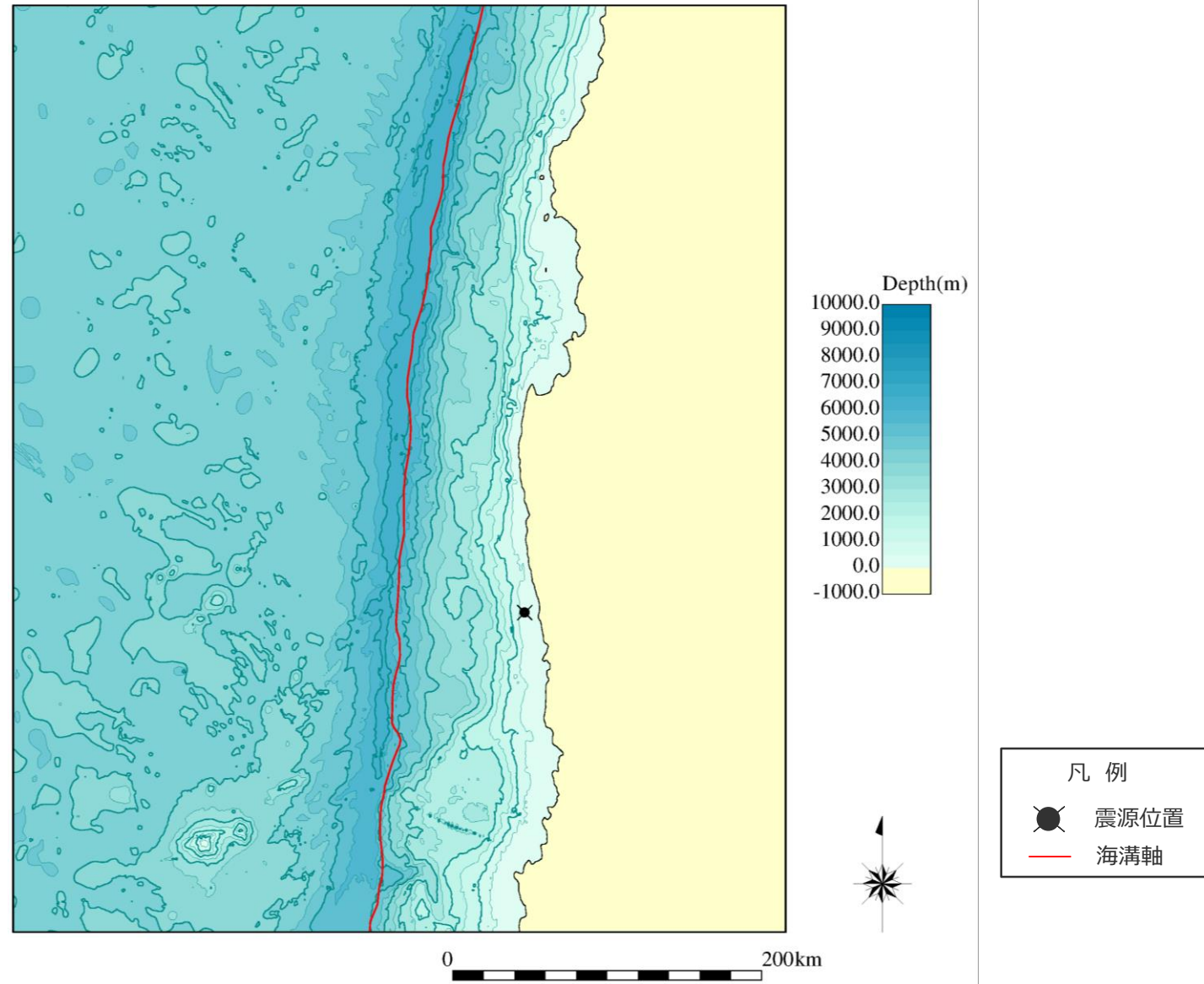
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2014年チリ地震の震源付近の水深図)



2014年チリ地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

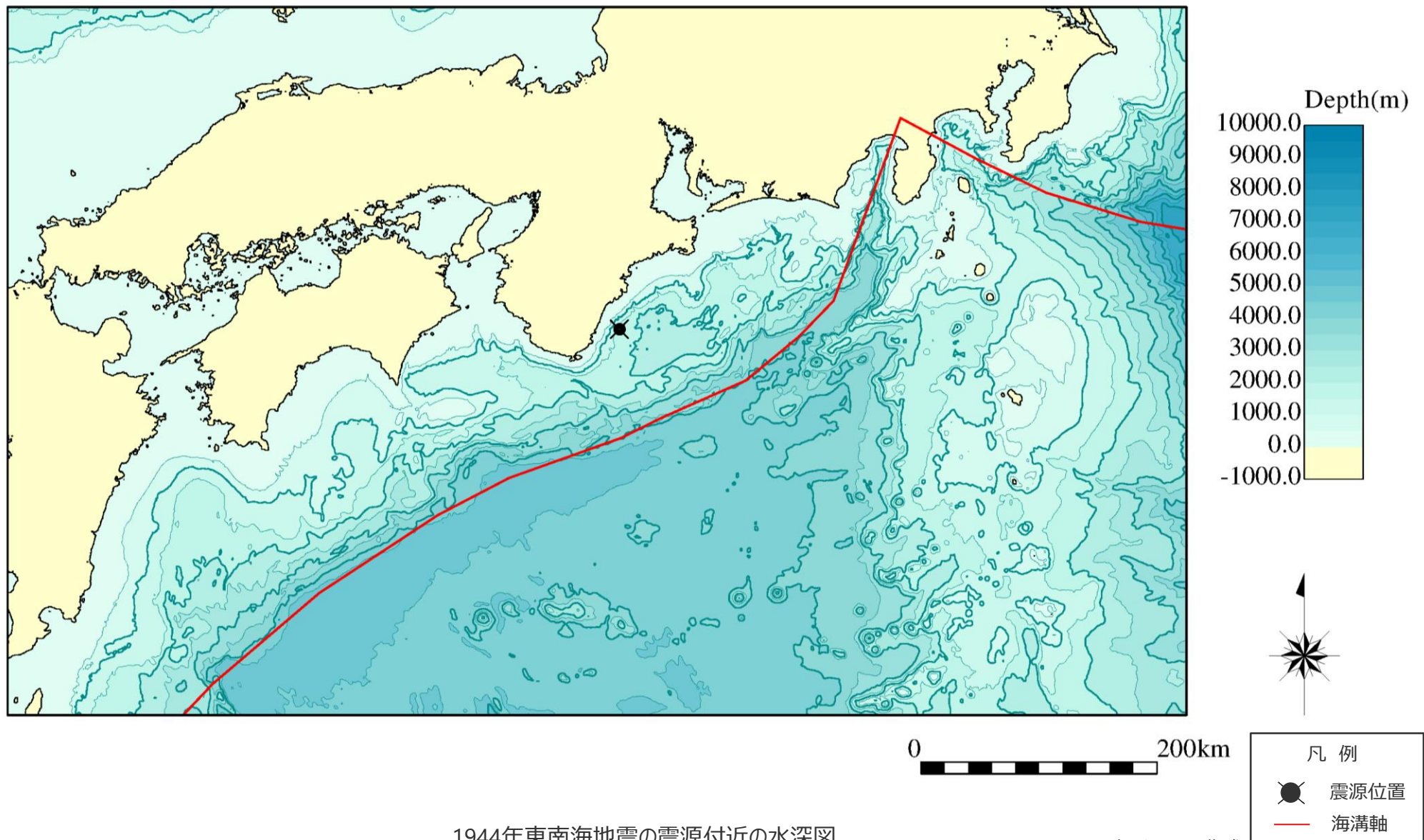
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (2015年チリ地震の震源付近の水深図)



2015年チリ地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

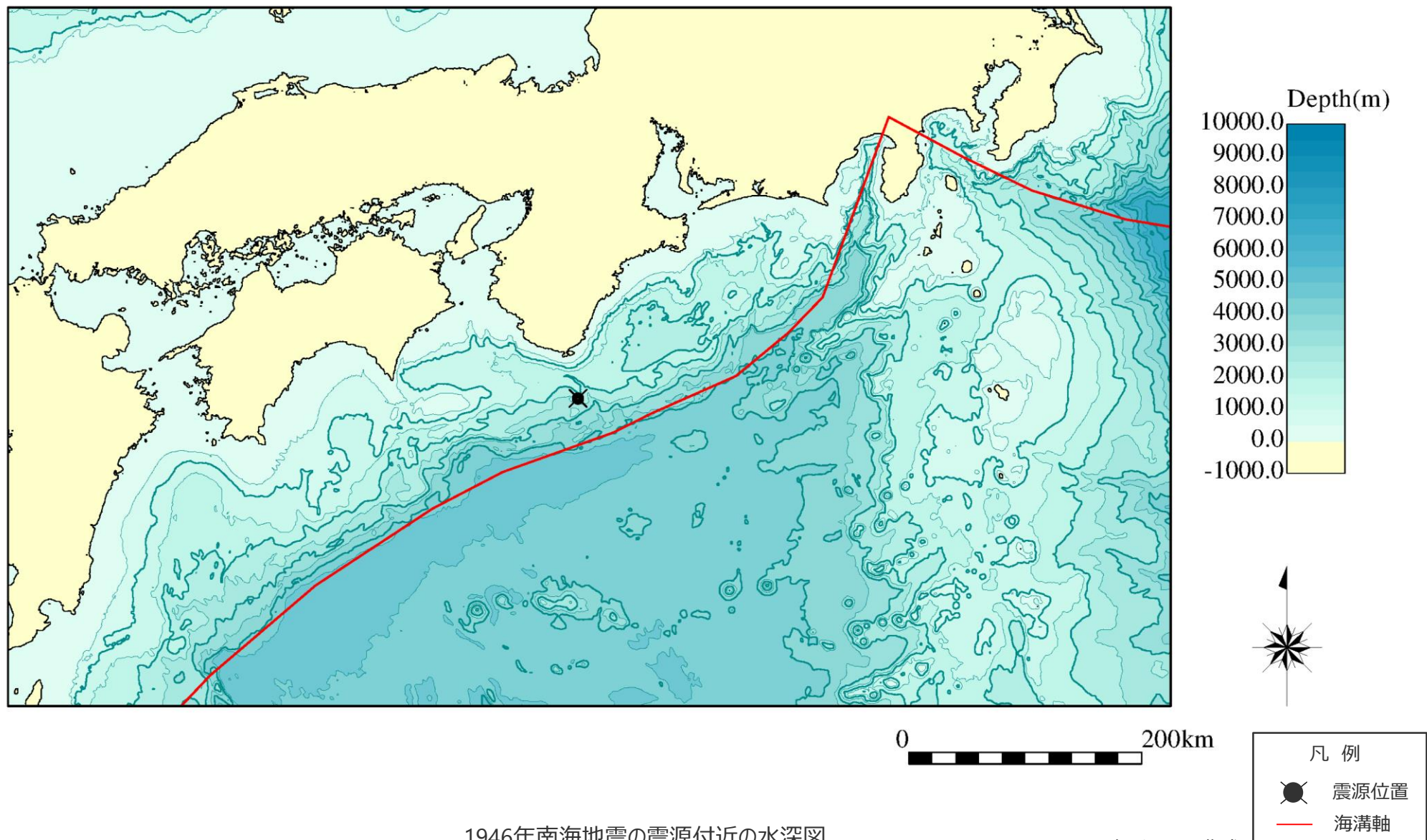
Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (1944年東南海地震の震源付近の水深図)



1944年東南海地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (1946年南海地震の震源付近の水深図)

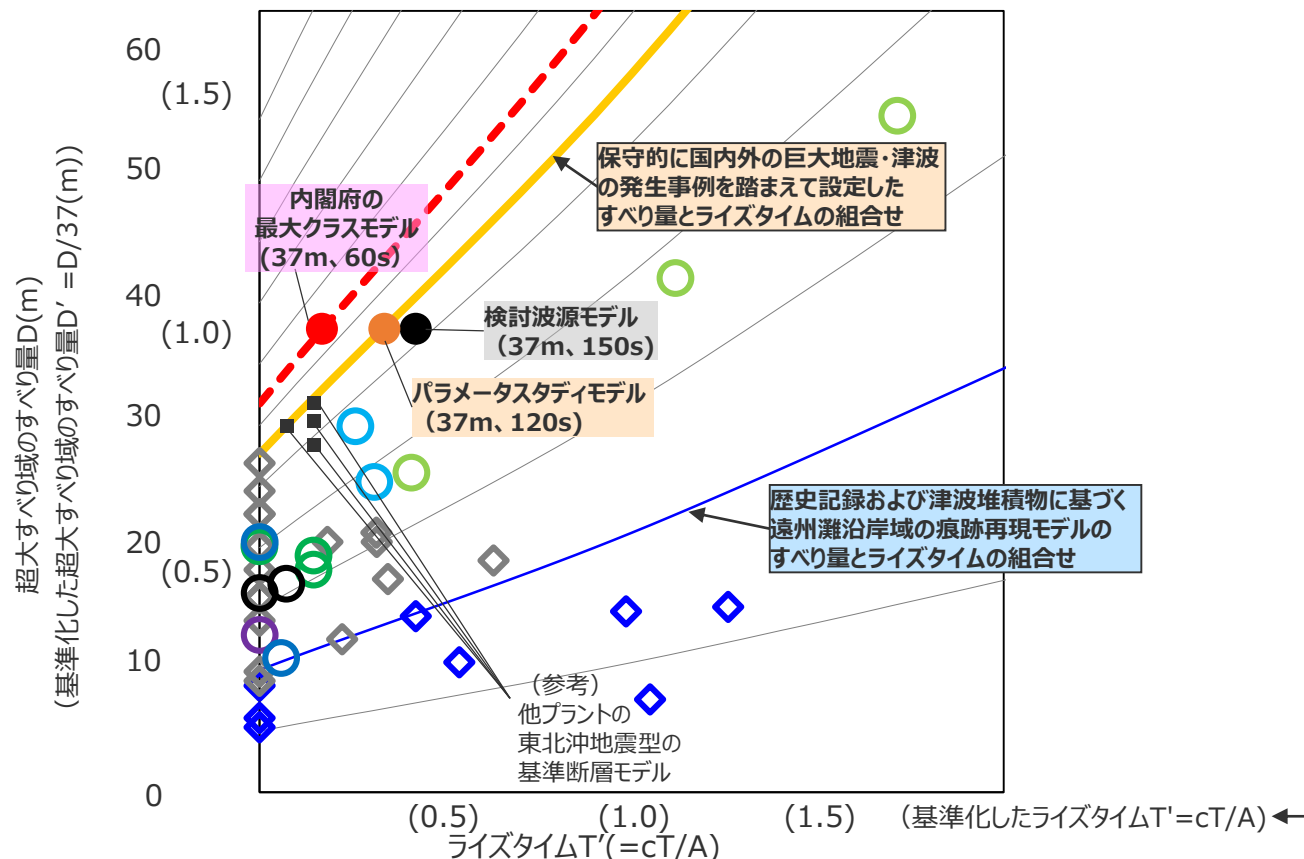


1946年南海地震の震源付近の水深図

GEBCO(2010年)を用いて作成

Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (初期水位に対するすべり量とライズタイムの関係を踏まえた検討)

■ Kajiura(1970)による初期水位に対するすべり量とライズタイムの関係について、他プラントの東北沖地震型の基準断層モデルを図示した結果は以下のとおり。



- : 内閣府の最大クラスモデル
- : パラメータスタディモデル
- : 検討波源モデル
- : 1952年カムチャツカ地震(Mw9.0)
- : 1960年チリ地震(Mw9.5)
- : 1964年アラスカ地震(Mw9.2)
- : 2004年スマトラ島沖地震(Mw9.1)
- : 2010年チリ地震(Mw8.8)
- : 2011年東北沖地震(Mw9.1)
- ◇ : その他近年のMw8クラスの地震
- ◇ : 南海トラフの地震

Mw8クラスの地震の中には津波地震の領域 (Lay et al.(2012)による領域A) を破壊していない地震も含まれており、震源域が浅いほどライズタイムは長いと考えられるが、本検討では保守的にこの効果を考慮していない。

・津波水位の等高線は、加藤ほか(2020)に基づく

海域ごとのライズタイムの基準化パラメータ

項目	算定根拠
波速c	各海域の浅部断層の波速は、海溝軸の水深の1/2を浅部領域の平均水深hとし \sqrt{gh} により算定
海底隆起幅A	各海域の浅部領域の幅は、地震調査委員会の長期評価の評価対象領域等から算定

国内外の地震のすべり量とライズタイムの組合せの比較分析結果 (加藤ほか(2020)を基に作成)
(ライズタイムを海域ごとの波速と隆起幅により基準化)

Mw8~9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討 (初期水位に対するすべり量とライズタイムの関係を踏まえた検討)

- 他プラントの東北沖地震型の基準断層モデルのすべり量、ライズタイムは以下のとおり。

モデル名		超大すべり域のすべり量 $D_{sa}(m)$ ¹⁾	基準化すべり量 D'_{sa} ²⁾	ライズタイム T (s)
他プラントの 東北沖地震型の 基準断層モデル	モデルa(Mw9.1)	27.4	0.75	60
	モデルb(Mw9.0)	30.7	0.84	60
	モデルc(Mw9.0)	29.4	0.80	60
	モデルd(Mw9.1)	28.9	0.79	30
(参考) 痕跡再現モデル(南海トラフ、Mw8.8) (遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル) (南海トラフ広域の痕跡再現モデル)		8.7	0.24	60
(参考) 検討波源モデル(南海トラフ、Mw9.1)		36.8	1.00	150
(参考) 内閣府モデル(南海トラフ、Mw9.1)		36.8	1.00	60

1) 痕跡再現モデルは、大すべり域のすべり量。

2) 検討波源モデルのすべり量(36.8m)で基準化。

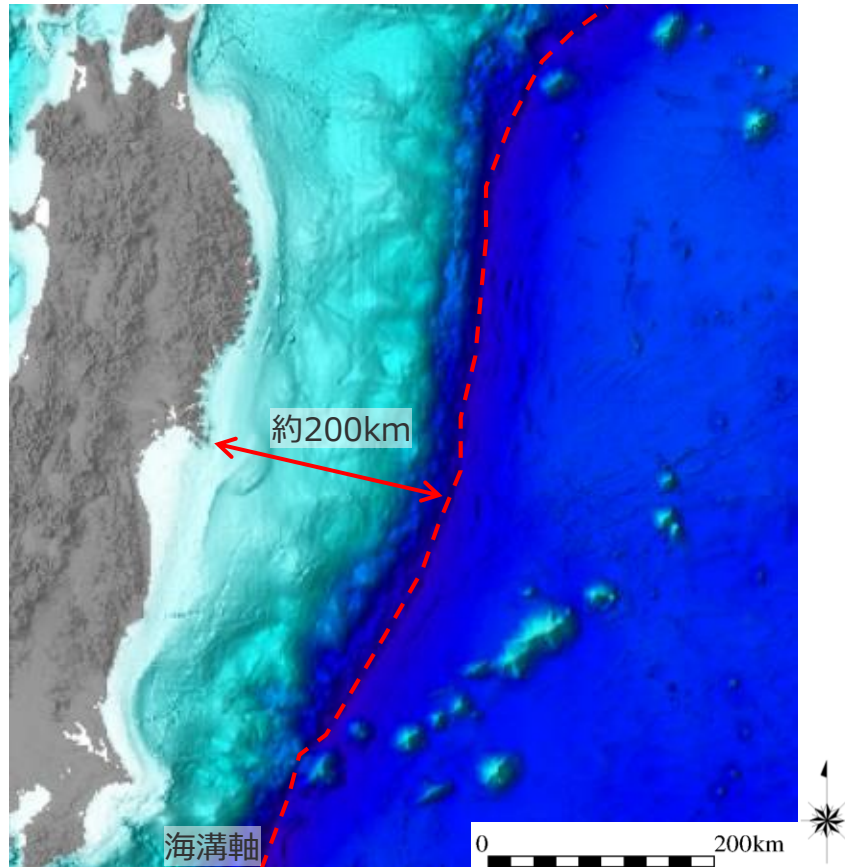
6 検討波源モデルの津波評価の詳細

6-6 海溝軸付近のすべりの不均質性の影響

- ・第1020回審査会合 No.4コメント回答を一部修正
（「更なる不確かさの考慮」に関する記載を修正）

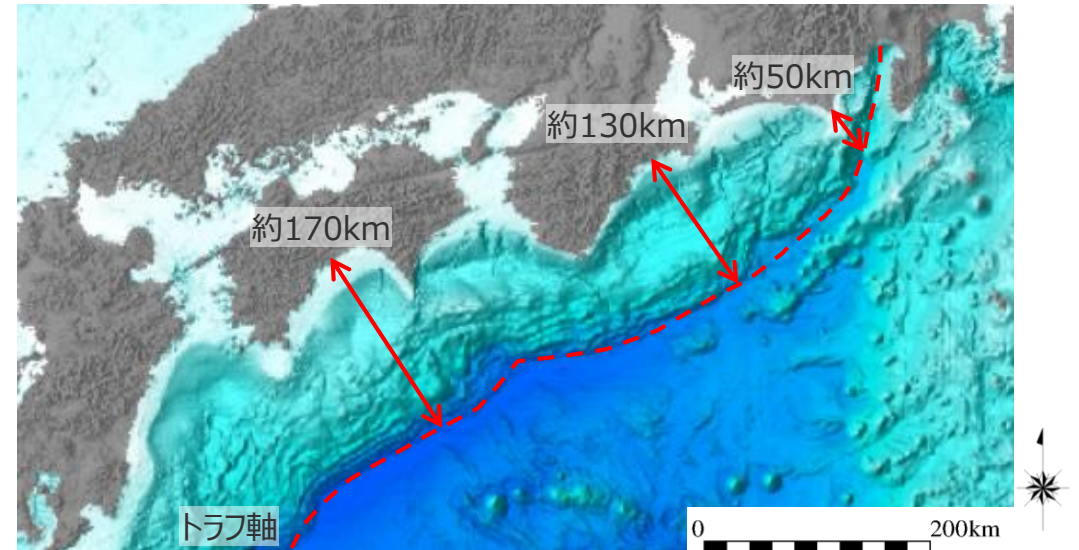
6-6 海溝軸付近のすべりの不均質性の影響 海溝軸から陸域までの距離

- 日本海溝と南海トラフの海溝軸から陸域までの距離は、おおよそ以下のとおり。
- 海溝軸から陸域までの距離は、日本海溝では約200kmであるのに対して、南海トラフでは約170km～50kmとなっており、敷地前面では約50km。



・内閣府(2012b)による津波断層面メッシュの陸沖方向の距離を記載。

日本海溝



・内閣府(2012)による津波断層面メッシュの陸沖方向の距離を記載。

南海トラフ

(海上保安庁「海洋台帳」を基に作成)

日本海溝と南海トラフの海溝軸から陸域までの距離

6-6 海溝軸付近のすべりの不均質性の影響 検討概要

○第981回審査会合（2021年6月4日）コメント

- 東北沖地震では、海溝軸付近で顕著なすべりの不均質が確認されている。海溝軸付近のすべりの不均質性の影響は、海溝軸から遠ければ津波伝播の過程で平均化されるが、海溝軸からの距離が近ければ平均化されずに到達するので、小さなすべりの不均質であっても影響が出やすい。国内外の巨大地震の津波事例に限られているなか、トラフ軸から近い浜岡においては、敷地の津波評価に影響の大きいすべり量、ライズタイムについて、更なる不確かさを考慮して裕度を持って設定する必要がある。

【検討方針】

- 東北沖地震型の特性化モデルでは、海溝軸付近において大きくすべった領域が、超大すべり域として大きく一様なすべりを持つ領域に特性化されてパラメータスタディが検討され、観測記録との比較により、その妥当性が確認されている。（土木学会(2016)等）
- 一方で、海溝軸付近において大きくすべった領域の内部のすべりは実際には不均質であることから、海溝軸付近のすべりの不均質性の影響について、海溝軸からの距離の観点を含めて検討することとした。

①海溝軸付近の不均質性の影響に関する検討

- 実際に海溝軸付近のすべりの不均質性が確認された東北沖地震の津波波源モデルを対象として、海溝軸付近において大きくすべった領域のすべりが一様なケースと不均質なケースとを設定して津波解析を実施し、海溝軸付近の不均質性の影響を、海溝軸からの距離の観点から比較・整理した。
- その結果、海溝軸付近のすべりの不均質性による影響は、水深がほぼ一様な海溝軸から沖合側では、海溝軸から離れるに従い徐々に浅くなる海溝軸から陸域側では、海底勾配があることによって津波が陸方向に直進する傾向が強くなり、海溝軸から離れた地点でも影響がなくなることを確認した。
- このことから、海溝軸付近のすべりの不均質性による影響は、海溝軸から陸域側では、海溝軸から沖合側で見られるような海溝軸からの距離の影響は見られず、海溝軸から陸域までの距離が近いことによって特別な考慮をする必要はないことを確認した。

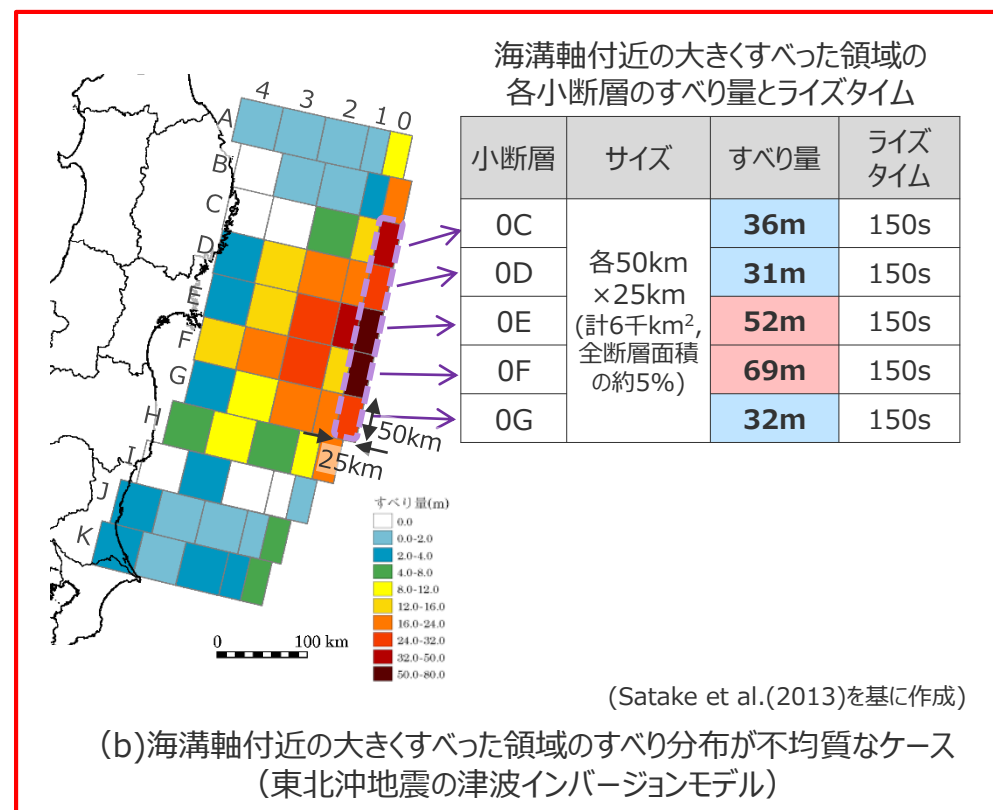
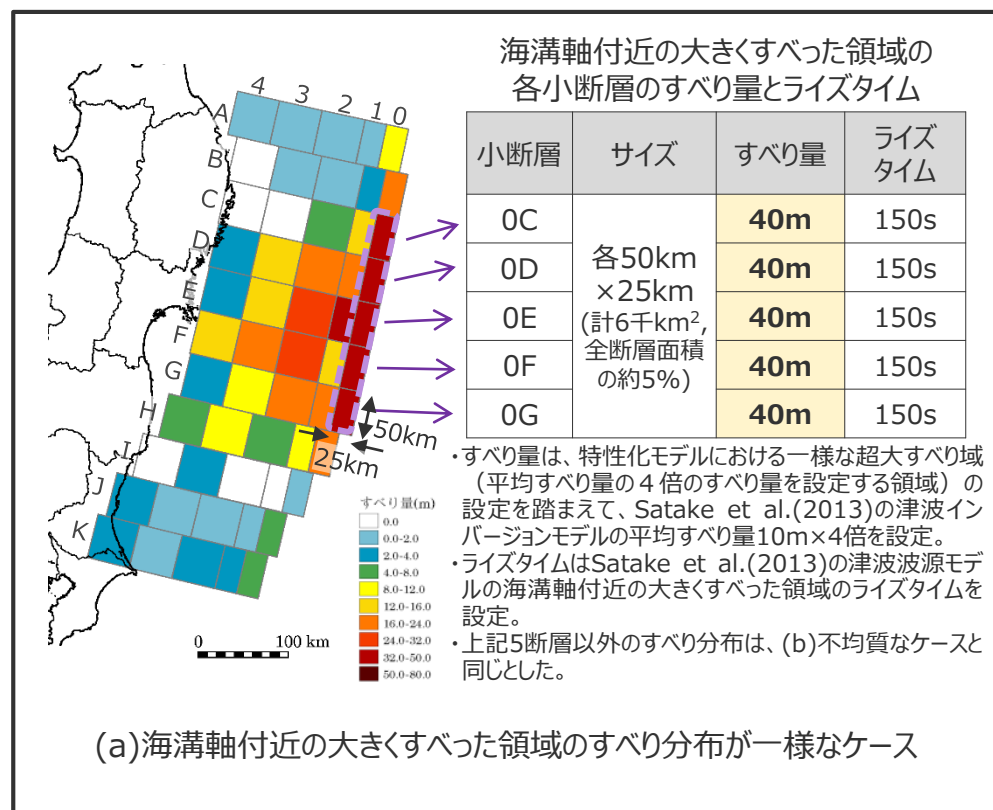
②プレート間地震の津波評価への反映

- 海溝軸付近のすべりの不均質性の影響に関する検討の結果、海溝軸から陸域側では、海溝軸から沖合側で見られるような海溝軸からの距離の影響は見られず、海溝軸から陸域までの距離が近いことによって特別な考慮をする必要はないことを確認した。
また、当社のプレート間地震の津波評価は、不確かさの考慮として、国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例に基づき「(A)各種パラメータの網羅的検討による方法」による検討を行っており、内閣府(2020)および南海トラフにおける津波堆積物調査の拡充を踏まえると、2020年までに確認されている痕跡高を再現する津波が最大クラスの津波として想定されるところ、この痕跡高を2~3倍程度上回る保守的なものとなっている。
これらのことから、当社のプレート間地震の津波評価は、国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例や津波波源のすべりの不均質性の影響を踏まえても、不確かさの考慮として十分保守的なものと考えられるが、第981回審査会合におけるコメントおよび国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例に限られていることを踏まえ、敷地の津波評価に影響の大きいすべり量とライズタイムの組合せを国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例に対してより慎重に裕度を持って設定することとした。
- 具体的には、「(B)代表パラメータの検討による方法」により検討された内閣府の最大クラスモデルの津波評価において他のパラメータの影響を代表するよう非常に大きく設定されているすべり量(37m)とライズタイム(60s)の組合せを、「(A)各種パラメータの網羅的検討による方法」により検討している当社のプレート間地震の津波評価の中で考慮することとした。

・各種パラメータの不確かさに対し、安全側の評価を行うため波源モデル設定の方法は、以下 (A) の方法のほか、(B) の方法があると考えられる。
 (A) 各種パラメータの網羅的検討による方法：各パラメータの不確かさの組合せの科学的知見に基づく網羅的な検討により安全側の評価を行う考え方の方法
 (B) 代表パラメータの検討による方法：影響の大きい代表パラメータを非常に大きく設定することにより、その他の現象の津波評価への影響を代表させて安全側の評価を行う考え方の方法

①海溝軸付近の不均質性の影響に関する検討 (検討方針)

- 海溝軸付近のすべりの不均質性の影響について、実際に海溝軸付近のすべりの不均質性が確認された東北沖地震の津波波源モデルを対象として、海溝軸付近において大きくすべった領域の断層すべりが、(a)一様なケースと(b)不均質なケースとを設定し、両ケースによる津波評価結果の差異について、海溝軸からの距離の観点から比較した。
- ここで、(b)不均質なケースは、海溝軸付近において不均質なすべり分布が推定されている東北沖地震の津波インバージョンモデルそのものとした。
(a)一様なケースは、東北沖地震の特性化モデルにおいて、一様な超大すべり域（平均すべり量の4倍のすべり量を設定する領域）が全断層面積の5%の領域に設定される事例（内閣府(2012)等）を踏まえ、東北沖地震の津波インバージョンモデルに対して、海溝軸付近において大きくすべった全断層面積の約5%の領域の小断層のすべり量とライズタイムを、一様に40m・150sとした。

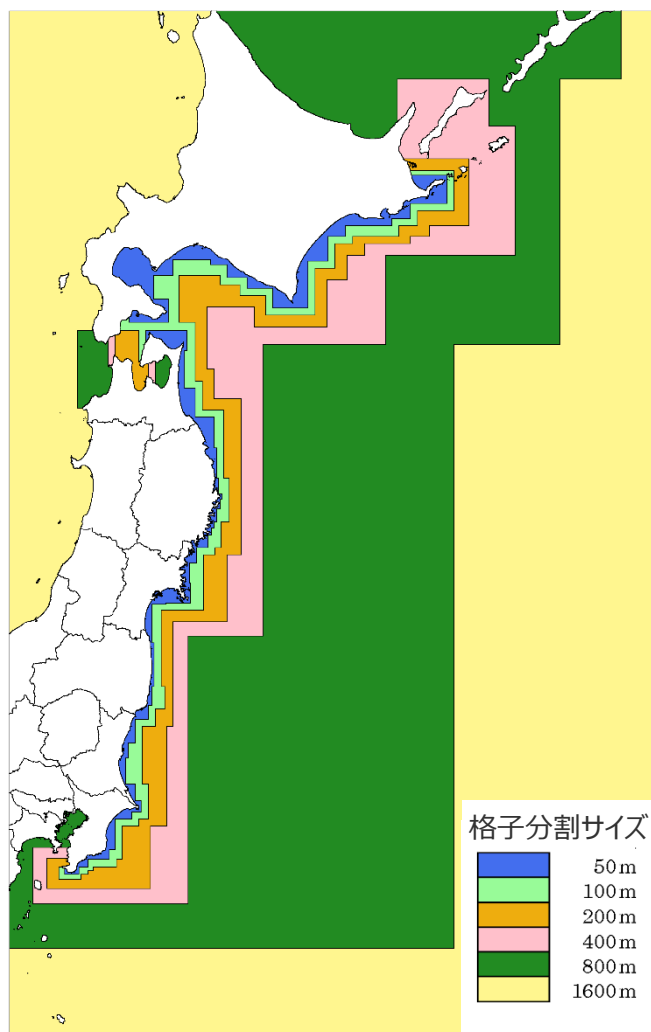


海溝軸からの距離の観点から解析結果を比較

① 海溝軸付近の不均質性の影響に関する検討

(計算条件)

■ 東北沖地震の津波波源モデルに関する計算条件を示す。



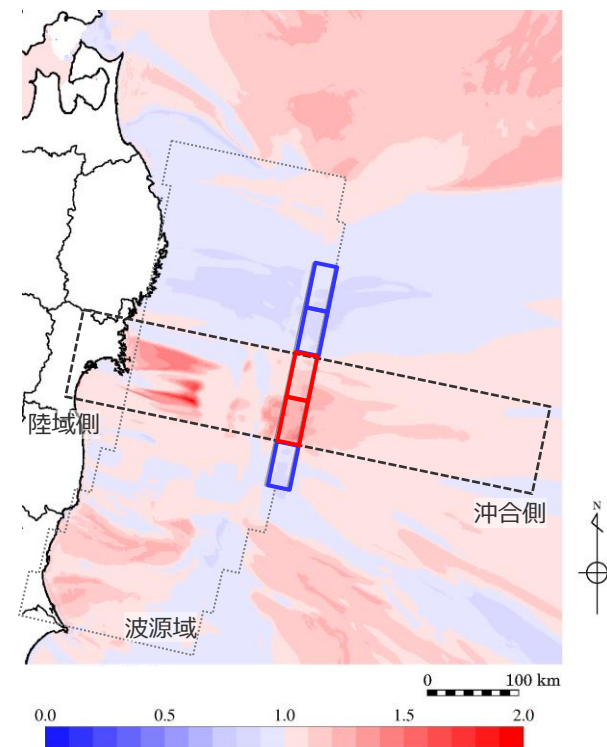
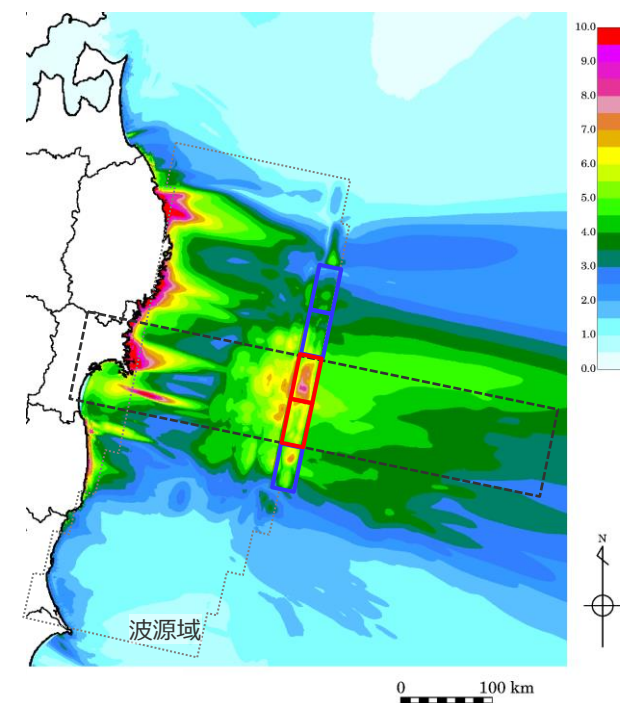
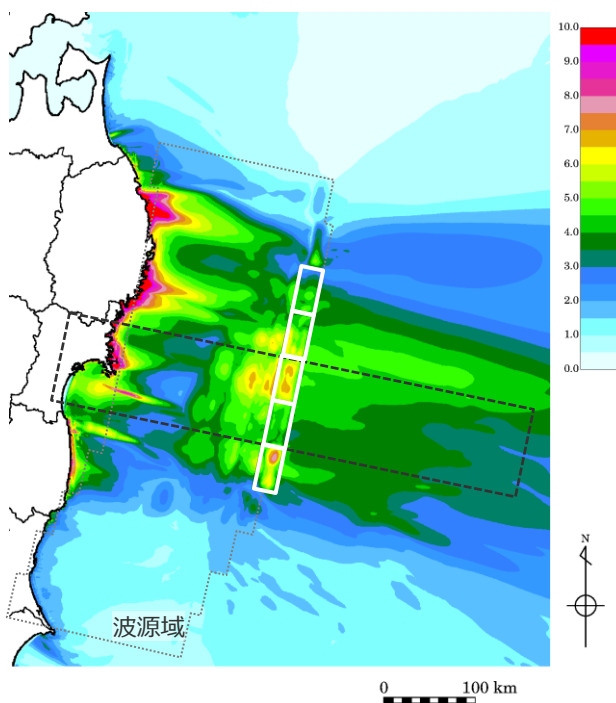
計算領域・格子分割

項目	計算条件 (津波の数値シミュレーション)	
基礎方程式	・非線形長波理論 (浅水理論) の連続式及び運動方程式	
計算領域	・北海道根室～房総半島の領域	
格子分割サイズ	・沖合1,600m→800m→400m→200m→100m→50m	
境界条件	・沖側	・吸収境界 (Cerjan et al.(1985))
	・陸側	・完全反射
潮位条件	・T.P.± 0.0m	
海底の地盤変動量 (初期水位の算定方法)	・Mansinha and Smylie(1971)の方法 (水平変位による鉛直寄与分を考慮) ・海底地盤変動量は、タイムウィンドウごとに推定されたすべり量に基づき、一定の時間間隔(5s)ごとに徐々に与える。	
海底摩擦損失係数	・マンニングの粗度係数 $0.025\text{m}^{-1/3}\text{s}$	
水平渦動粘性係数	・ $10\text{m}^2/\text{s}$	
計算時間間隔	・0.2s	
計算時間	・1時間	

①海溝軸付近の不均質性の影響に関する検討 (最大上昇水位の平面分布)

- 海溝軸付近において大きくすべった領域内部の断層すべりが、(a)一様なケースと (b)不均質なケースの最大上昇水位分布を示す。
- 両ケースの最大上昇水位分布は、全体としては大きな違いはないが、(b)不均質なケースでは、(a)一様なケースよりも大きなすべり量を設定した小断層の正対した陸域側および沖合側において、津波水位が大きくなっていることが確認できる。

□ 一様なすべり (40m・150s) を設定した小断層
 □ 一様なケースよりも大きいすべりを設定した小断層
 □ 一様なケースよりも小さいすべりを設定した小断層



(a)海溝軸付近の大きくすべった領域のすべり分布が一様なケース

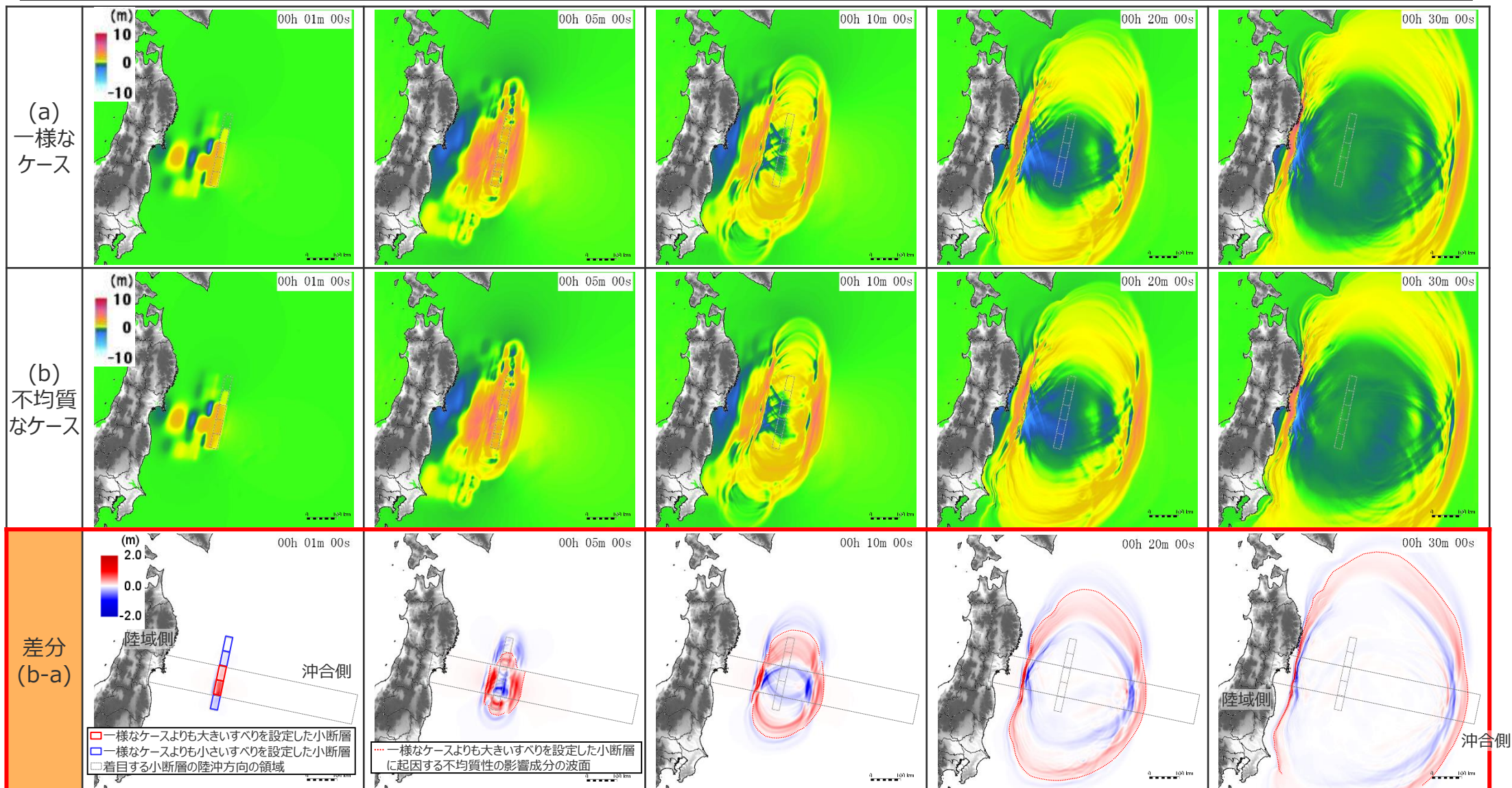
(b)海溝軸付近の大きくすべった領域のすべり分布が不均質なケース

最大上昇水位分布

最大上昇水位比 (b/a)

① 海溝軸付近の不均質性の影響に関する検討 (各時刻の水位の平面分布)

- 海溝軸付近の大きくすべった領域のすべり分布が、(a)一様なケースと(b)不均質なケースの、各時刻の津波水位の平面分布およびその差分を示す。
- (a)一様なケースと(b)不均質なケースの水位の平面分布に大きな違いはなく、また、両ケースの水位の差分の平面分布からは、海溝軸付近のすべりの不均質性の影響（津波水位の差分）の波面が、平面的に広がりながら伝播していく様子が確認できる。

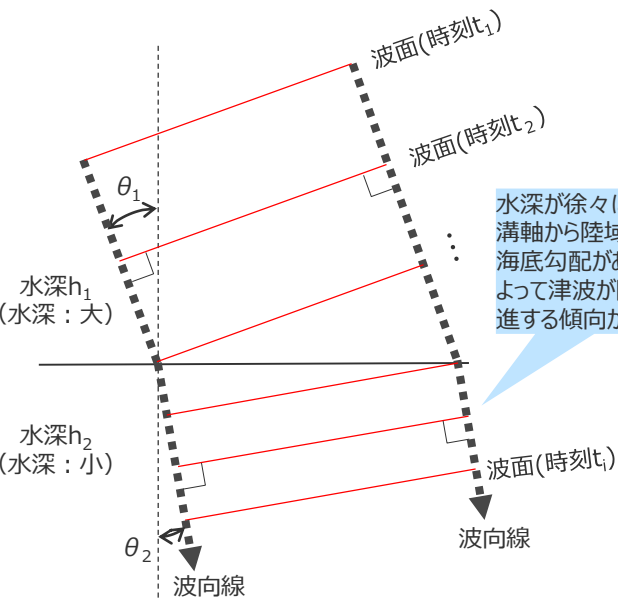


6-6 海溝軸付近のすべりの不均質性の影響

① 海溝軸付近の不均質性の影響に関する検討

(各時刻の水位の平面分布：波向線の検討)

- 一般的に、沖合で発生する津波は、水深が徐々に浅くなる海溝軸から陸域側では、海底勾配があることによって波向線（津波の進行方向）が陸方向に直進する傾向が強くなるとされる。（首藤ほか(2007)、石原・本間(1965)、羽鳥(1976)等）
- すべりの不均質性の影響成分（津波水位の差分）について、各時刻の波面からそれと直交する波向線を検討した結果、着目する小断層起因のすべりの不均質性の影響は、水深がほぼ一樣な海溝軸から沖合側では平面的に広がりながら伝播し、水深が徐々に浅くなる海溝軸から陸域側では、海底勾配があることによって陸方向に直進していることを確認した。



水深が徐々に浅くなる海溝軸から陸域側では、海底勾配があることによって津波が陸方向に直進する傾向が強くなる

- ・各時刻の波面と波向線（波の進行方向）とは直交する。
- ・波向線と水深には以下の関係がある。

$$\sin\theta_1/\sin\theta_2 = \sqrt{h_1/h_2}$$

(石原・本間(1965)を基に作成)

海底勾配による波向線の屈折

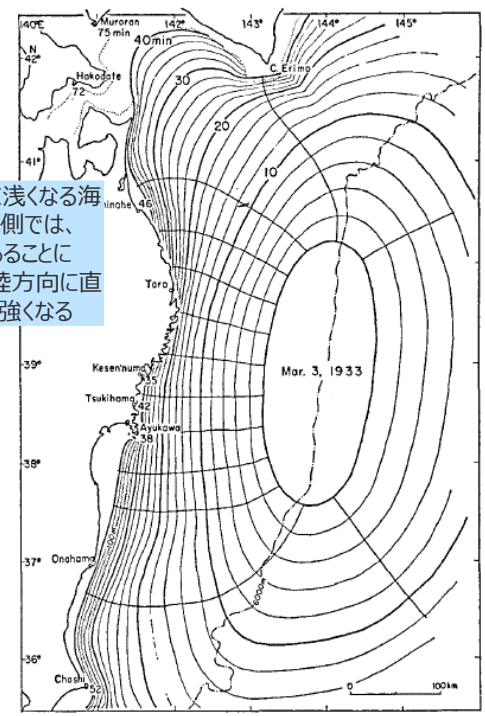
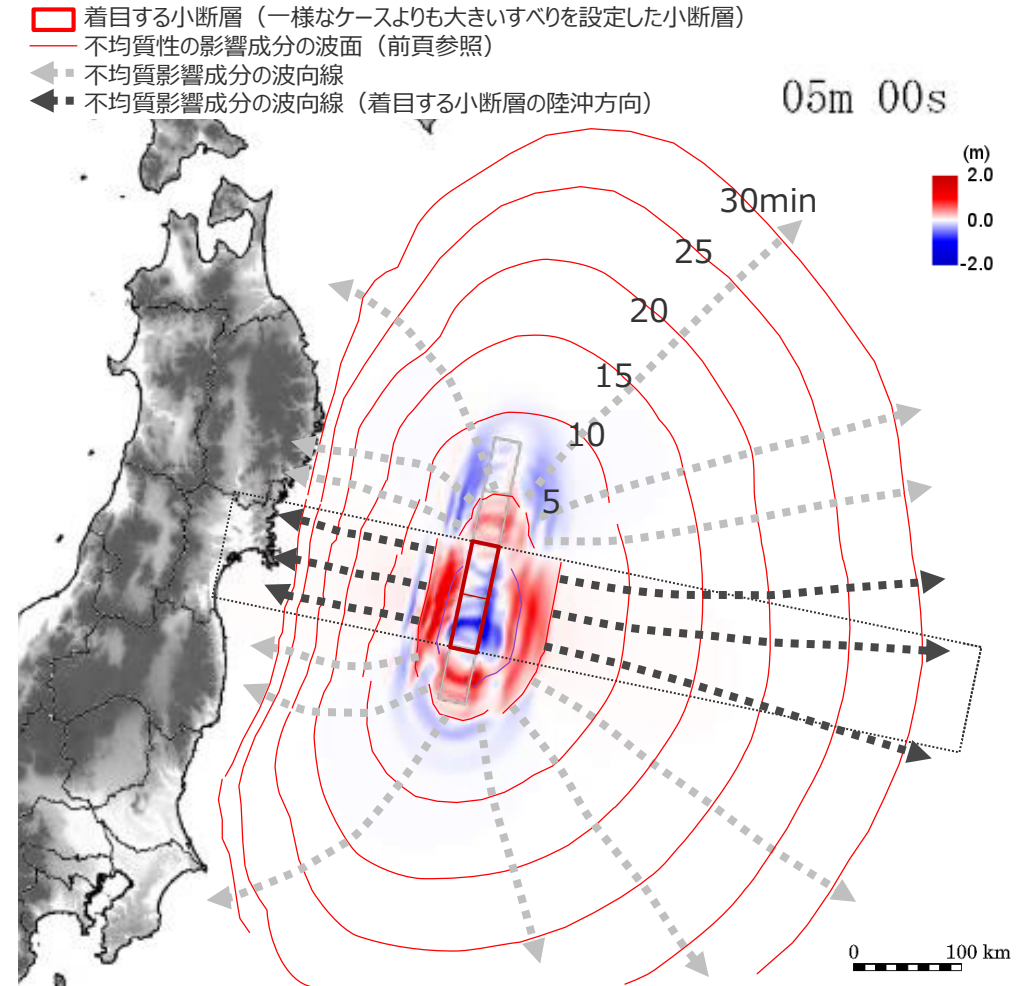


Fig. 2. Refraction diagram of the 1933 Sanriku tsunami (time interval: 2 min) and travel times (min) observed by tide gauges. Tsunami rays are emitted from each unit segment (35 km length) of the source margin.

(羽鳥(1976))

津波波源からの波向線の検討事例

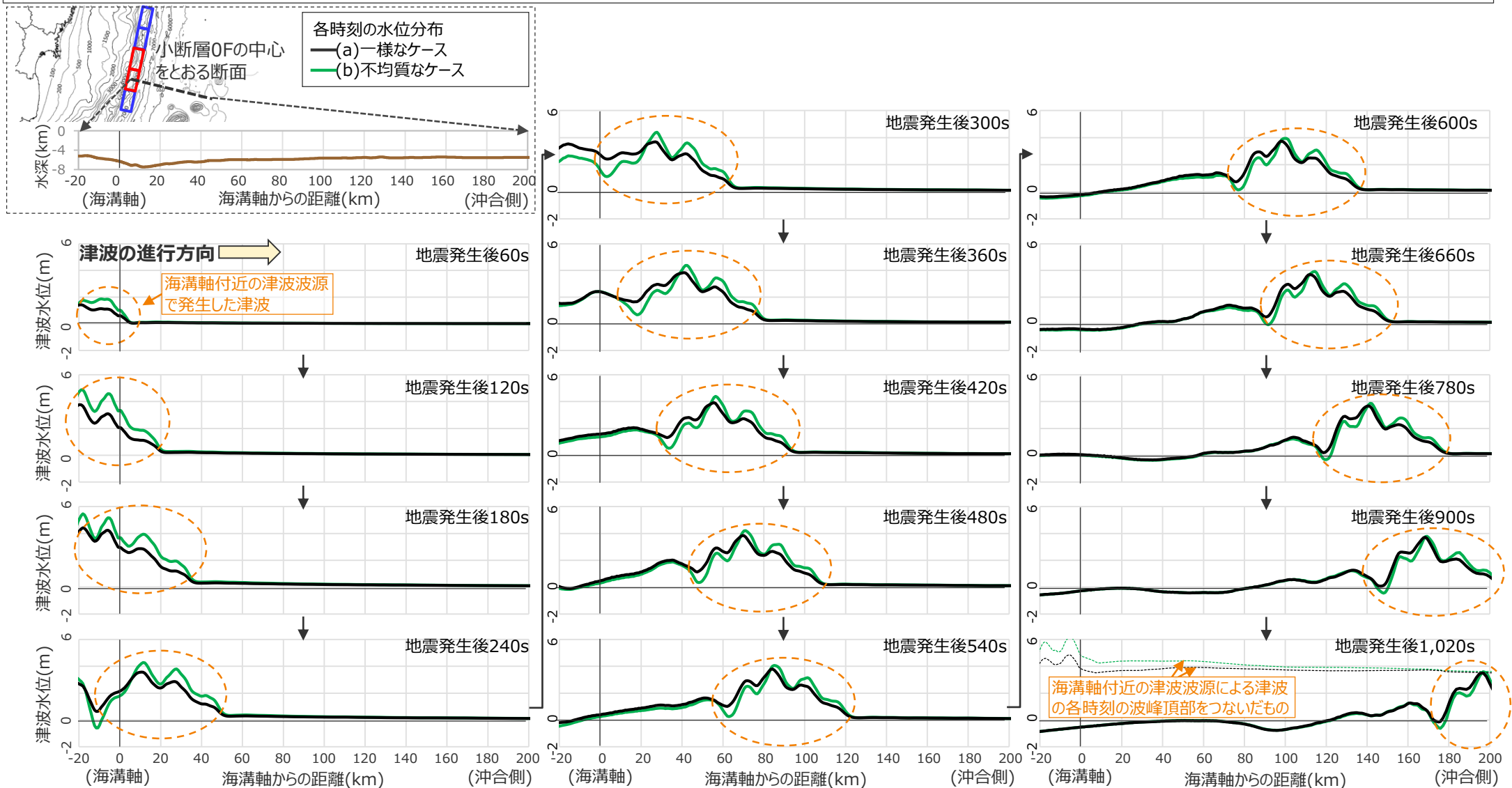


海溝軸付近の不均質性による影響の広がり波向線の検討

① 海溝軸付近の不均質性の影響に関する検討

(各時刻の水位の断面分布：海溝軸から沖合側)

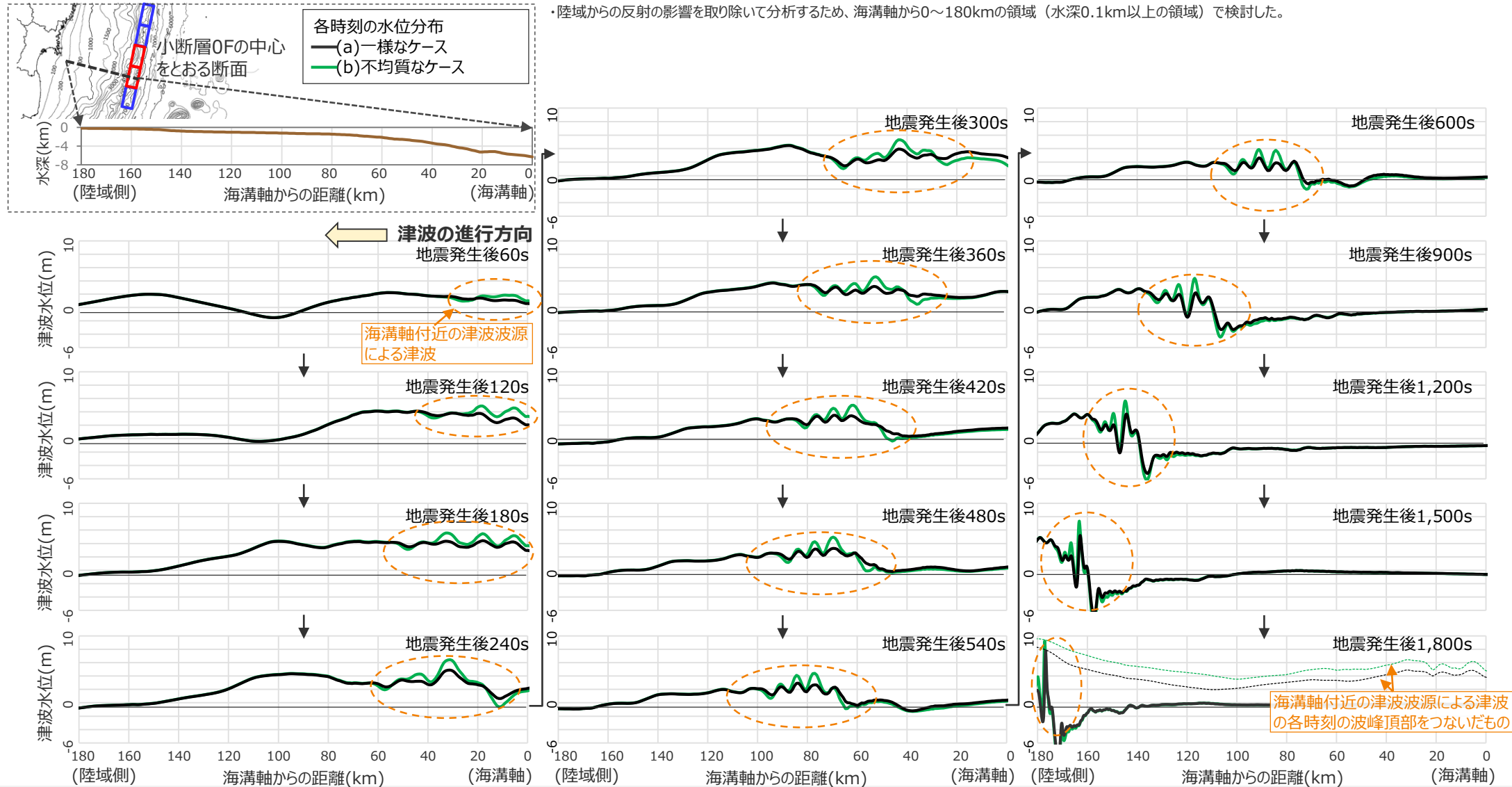
- 一様なケースよりも大きなすべり量を設定した小断層0Fの海溝軸から沖合方向断面について、(a)一様なケースと(b)不均質なケースの各時刻の水位の断面分布を示す。
- 海溝軸付近の津波波源で発生した津波は、海溝軸から沖合側へは波長が長い津波として伝播し、海溝軸から離れるほど、両ケースの水位分布の違いは小さくなっていく。



① 海溝軸付近の不均質性の影響に関する検討

(各時刻の水位の断面分布：海溝軸から陸域側)

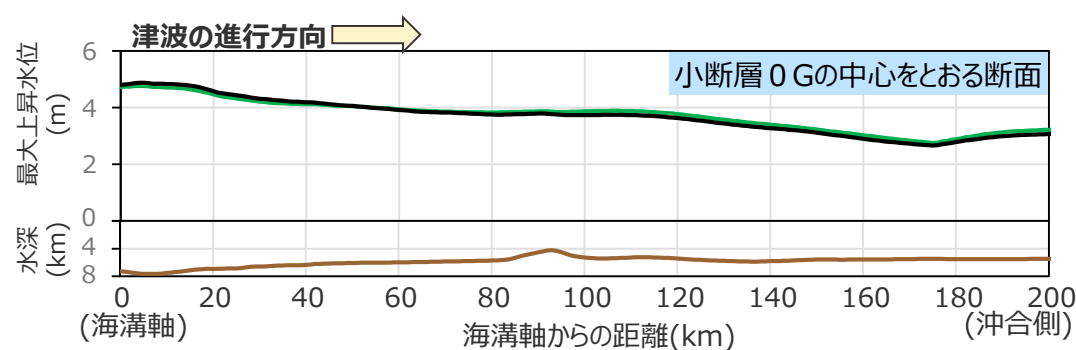
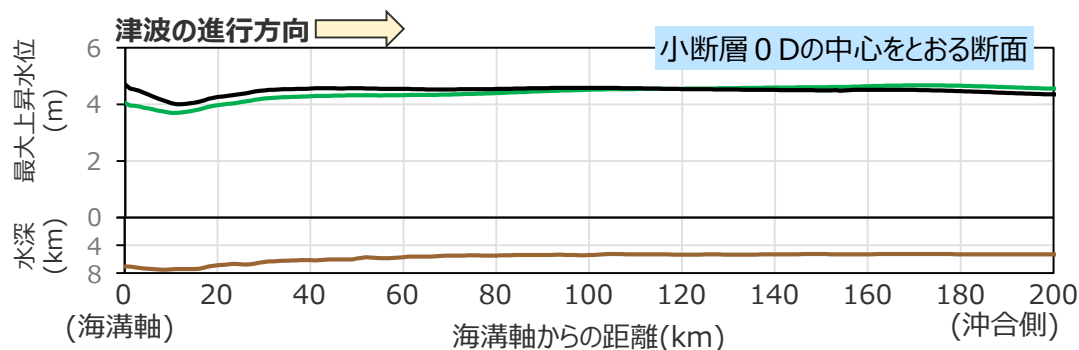
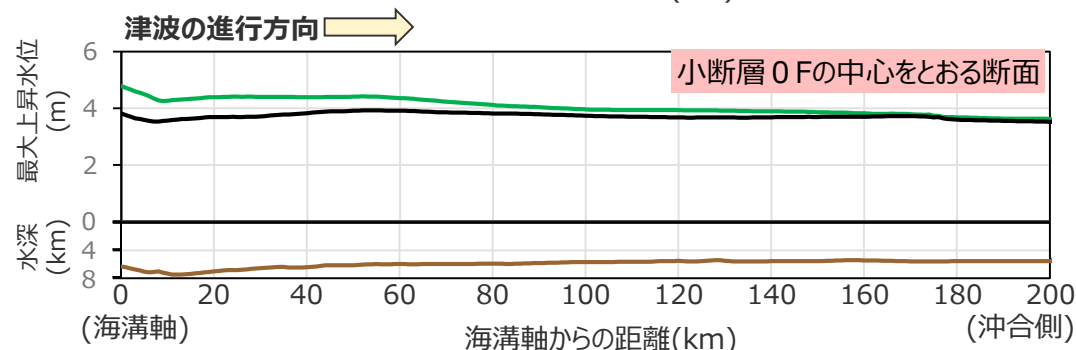
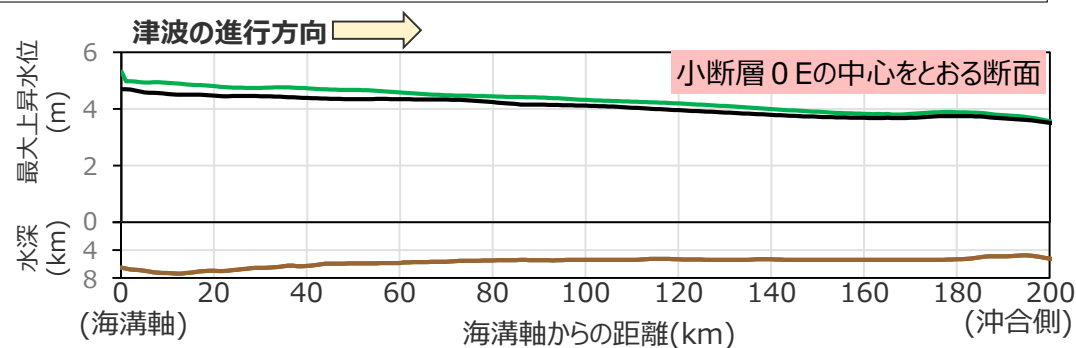
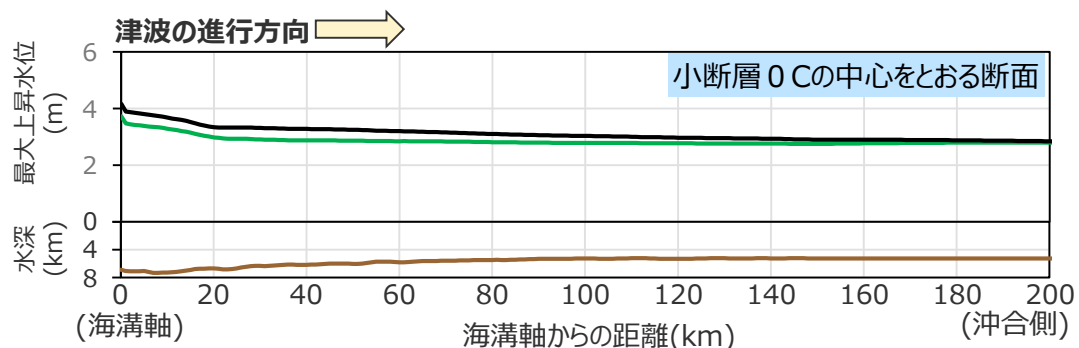
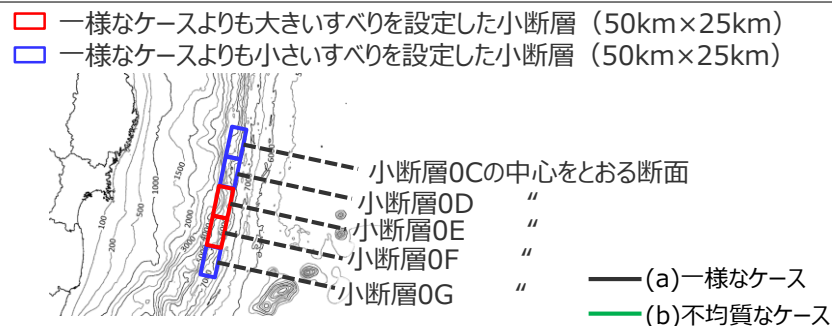
- 一樣なケースよりも大きなすべり量を設定した小断層OFの海溝軸から陸域方向断面について、(a)一樣なケースと(b)不均質なケースの各時刻の水位の断面分布を示す。
- 海溝軸付近の津波波源で発生した津波は、海溝軸から陸域側へは比較的波長の短い津波として伝播し、どの距離においても、両ケースの水位分布には違いが認められる。



①海溝軸付近の不均質性の影響に関する検討

(最大上昇水位の断面分布：海溝軸から沖合側)

- 各小断層の海溝軸から沖合方向断面について、(a)一様なケースと (b)不均質なケースの海溝軸付近の津波波源による津波の最大上昇水位の分布を示す。
- 水深がほぼ一様な海溝軸から沖合側では、最大上昇水位の違いは、海溝軸付近で相対的に大きく、海溝軸から沖合側に向かうにつれて小さくなり、検討している小断層のサイズ (50km×25km) よりも離れた約100～200kmの地点ではほぼなくなっていることが確認できる。



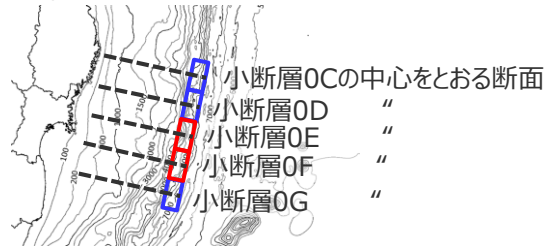
海溝軸付近のすべりの不均質性による影響は、水深がほぼ一様な海溝軸から沖合側では、津波が平面的に広がりながら伝播することに伴う幾何減衰によって、海溝軸から離れるに従い徐々に小さくなっていくことを確認した。

①海溝軸付近の不均質性の影響に関する検討

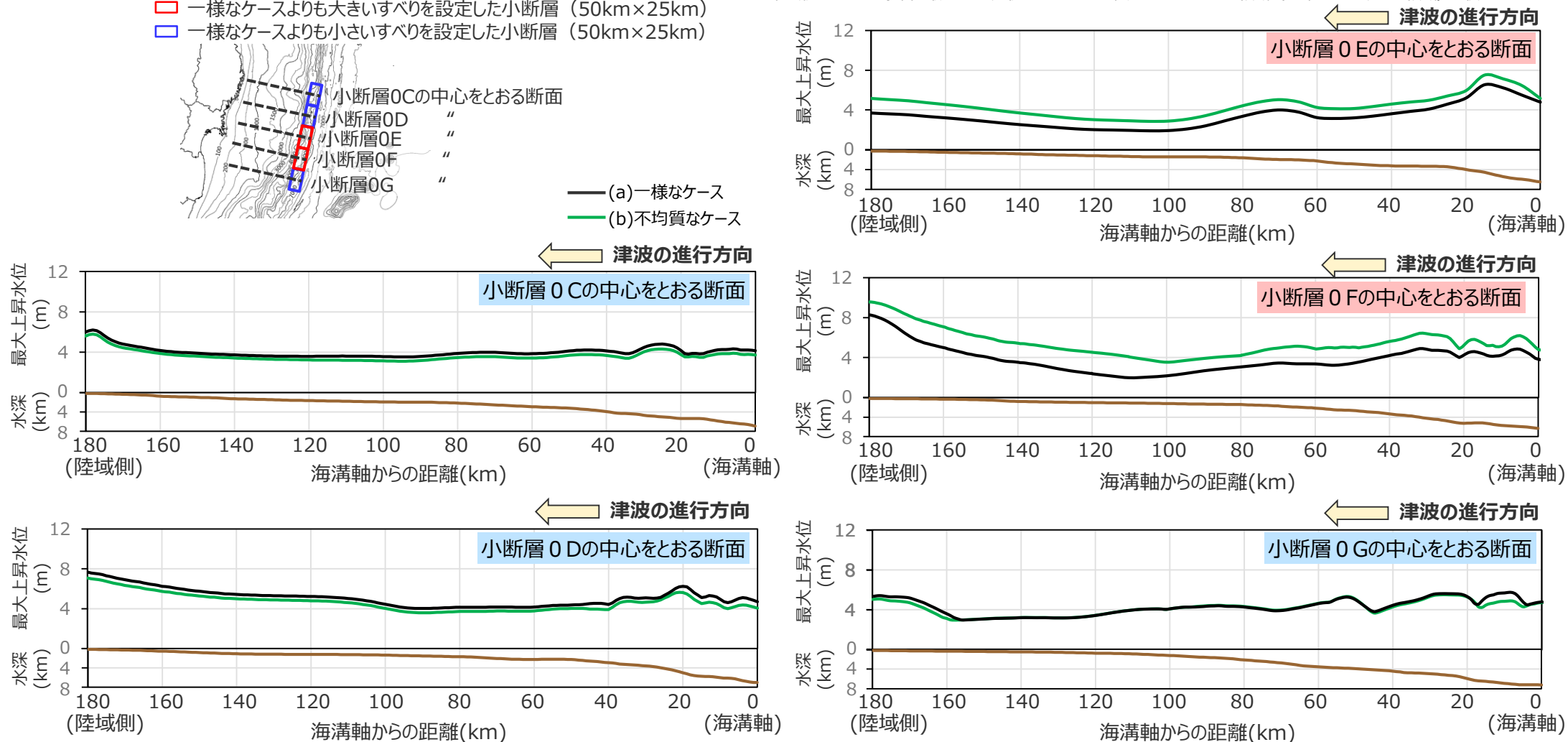
(最大上昇水位の断面分布：海溝軸から陸域側)

- 各小断層の海溝軸から陸側方向断面について、(a)一様なケースと (b)不均質なケースの海溝軸付近の津波波源による津波の最大上昇水位の分布を示す。
- 水深が徐々に浅くなる海溝軸から陸域側では、最大上昇水位の差異は、海溝軸から沖合側とは異なり、海溝軸から約100km以上離れた地点でも認められる。

- 一様なケースよりも大きいすべりを設定した小断層 (50km×25km)
- 一様なケースよりも小さいすべりを設定した小断層 (50km×25km)



・陸域からの反射の影響を取り除いて分析するため、海溝軸から0～180kmの領域 (水深0.1km以上の領域) で検討した。

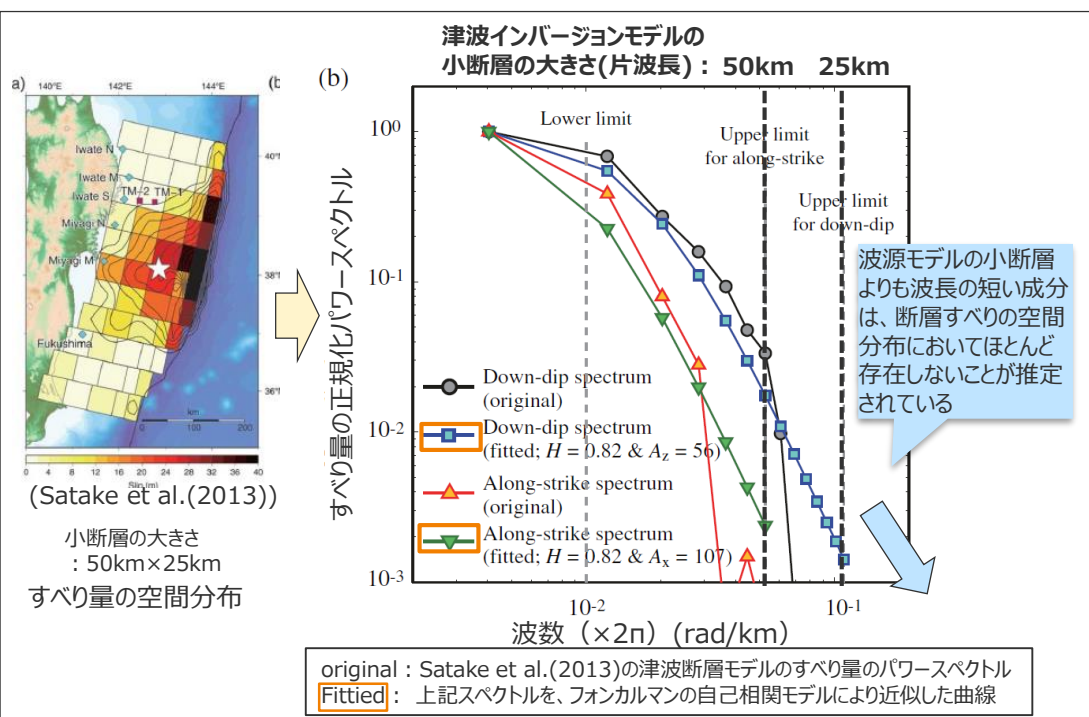


海溝軸付近のすべりの不均質性による影響は、水深が徐々に浅くなる海溝軸から陸域側では、海底勾配があることによって津波が陸方向に直進する傾向が強く、海溝軸から離れた地点でも影響がなくならないことを確認した。

① 海溝軸付近の不均質性の影響に関する検討

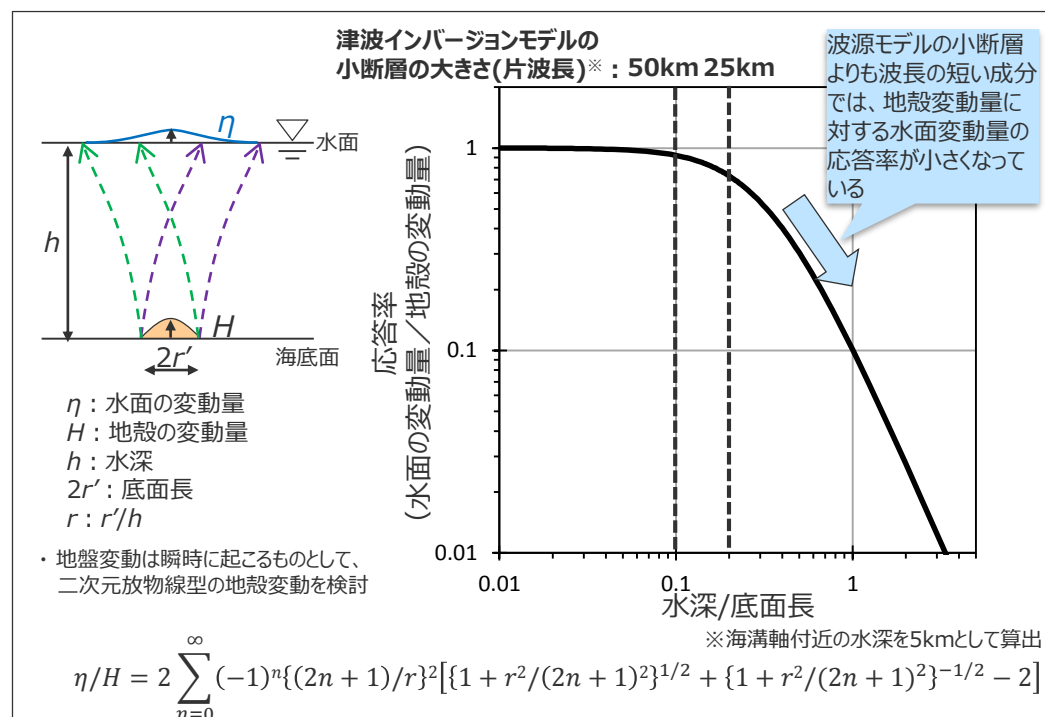
(補足：津波波源モデルの小断層よりも小さいすべりの不均質性の影響)

- Goda et al.(2014)は、東北沖地震の津波インバージョンモデルから、すべり量のパワースペクトルを算出して近似曲線を検討し、Mw8クラス以下の地震と同様に、すべり量の高波数領域（波長の短い領域）では急速な減衰傾向があり、波源モデルの小断層よりも波長の短い成分は、断層すべりの空間分布においてほとんど存在しないことが推定されている。
- また、Kajiura(1963)は、水深を考慮した場合の地殻変動量に対する水面変動量の応答率を理論的に検討し、波長の短い成分では、応答率が小さくなっていることを示している。



東北沖地震の津波インバージョンモデルのすべり量のパワースペクトルおよびその近似曲線の検討

Mai and Beroza(2002)によると、Mw8クラス以下の既往地震のインバージョンモデルの分析から、断層面上の波数に対するすべり量のパワースペクトルは、地震規模に依存して求まるコーナー波数よりも高波数領域において一様に減衰傾向を示し、フォンカルマン型の自己相関モデルにより最もよく近似できるとされている。



津波インバージョンモデルの小断層(50km×25km)よりも小さい不均質は、断層すべりの空間分布においてほとんど存在しないと推定されているとともに、地殻変動量に対する水面変動量の応答率も小さく、津波の初期水位にほとんど現れないと考えられる。

①海溝軸付近の不均質性の影響に関する検討

(まとめ)

①海溝軸付近の不均質性の影響に関する検討

- 実際に海溝軸付近のすべりの不均質性が確認された東北沖地震の津波波源モデルを対象として、海溝軸付近において大きくすべった領域のすべりが一様なケースと不均質なケースとを設定して津波解析を実施し、海溝軸付近の不均質性の影響を、海溝軸からの距離の観点から比較・整理した。
- その結果、海溝軸付近のすべりの不均質性による影響は、水深がほぼ一様な海溝軸から沖合側では、海溝軸から離れるに従い徐々になくなるが、水深が徐々に浅くなる海溝軸から陸域側では、海底勾配があることによって津波が陸方向に直進する傾向が強く、海溝軸から離れた地点でも影響がなくなることを確認した。
- このことから、海溝軸付近のすべりの不均質性による影響は、海溝軸から陸域側では、海溝軸から沖合側で見られるような海溝軸からの距離の影響は見られず、海溝軸から陸域までの距離が近いことによって特別な考慮をする必要はないことを確認した。

6-6 海溝軸付近のすべりの不均質性の影響

②プレート間地震の津波評価への反映

(説明概要)

○第981回審査会合における説明

- **「(A)各種パラメータの網羅的検討による方法」**により検討を行っている当社のプレート間地震の津波評価では、津波審査ガイドに従い、文献調査及び津波堆積物調査の結果に基づき設定した痕跡再現モデルをベースとして、保守的にMw9クラスの東北沖地震型の波源モデルを設定し、国内外の巨大地震・津波の発生事例を踏まえてすべり量(37m)とライズタイム(120s)の組合せを含め網羅的なパラメータスタディを実施した。
- **「(B)代表パラメータの検討による方法」**で検討された内閣府の最大クラスモデルの津波評価では、非常に大きく設定されたパラメータ(すべり量(37m)とライズタイム(60s)の組合せ)により、その他のパラメータの不確かさの影響を代表する方法で不確かさが考慮され、少ない検討ケースで南海トラフの全域を網羅する最大クラスの津波として想定された。
- 上記の両評価は、波源設定の考え方が異なるものの、いずれも、2020年時点までの津波堆積物に関する最新知見を含め、確認されている痕跡高を2～3倍程度上回る想定となっており、内閣府(2020)では2020年時点までに実施された津波堆積物の調査資料から最大クラスの津波を推定できることを示唆するとされていることを踏まえると、いずれも、十分な不確かさが考慮されていることを確認した。

○第981回審査会合におけるコメント

- 東北沖地震では、海溝軸付近で顕著なすべりの不均質が確認されている。海溝軸付近のすべりの不均質性の影響は、海溝軸から遠ければ津波伝播の過程で平均化されるが、海溝軸からの距離が近ければ平均化されずに到達するので、小さなすべりの不均質であっても影響が出やすい。
国内外の巨大地震の津波事例に限られているなか、トラフ軸から近い浜岡においては、敷地の津波評価に影響の大きいすべり量、ライズタイムについて、更なる不確かさを考慮して裕度を持って設定する必要がある。

○第981回審査会合におけるコメントを踏まえた、プレート間地震の津波評価への反映

- 海溝軸付近のすべりの不均質性の影響に関する検討の結果、海溝軸から陸域側では、海溝軸から沖合側で見られるような海溝軸からの距離の影響は見られず、海溝軸から陸域までの距離が近いことによって特別な考慮をする必要はないことを確認した。
また、当社のプレート間地震の津波評価は、不確かさの考慮として、国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例に基づき「(A)各種パラメータの網羅的検討による方法」による検討を行っており、内閣府(2020)および南海トラフにおける津波堆積物調査の拡充を踏まえると、2020年までに確認されている痕跡高を再現する津波が最大クラスの津波として想定されるところ、この痕跡高を2～3倍程度上回る保守的なものとなっている。
これらのことから、当社のプレート間地震の津波評価は、国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例や津波波源のすべりの不均質性の影響を踏まえても、不確かさの考慮として十分保守的なものと考えられるが、第981回審査会合におけるコメントおよび国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例に限られていることを踏まえ、敷地の津波評価に影響の大きい**すべり量とライズタイムの組合せ**を国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例に対してより慎重に裕度を持って設定することとした。
- 具体的には、**「(B)代表パラメータの検討による方法」**により検討された内閣府の最大クラスモデルの津波評価において他のパラメータの影響を代表するよう非常に大きく設定されている**すべり量(37m)とライズタイム(60s)の組合せ**を、「(A)各種パラメータの網羅的検討による方法」により検討している当社のプレート間地震の津波評価の中で考慮することとした。

・各種パラメータの不確かさに対し、安全側の評価を行うため波源モデル設定の方法は、以下(A)の方法のほか、(B)の方法があると考えられる。

(A) 各種パラメータの網羅的検討による方法：各パラメータの不確かさの組合せの科学的知見に基づく網羅的な検討により安全側の評価を行う考え方の方法

(B) 代表パラメータの検討による方法：影響の大きい代表パラメータを非常に大きく設定することにより、その他の現象の津波評価への影響を代表させて安全側の評価を行う考え方の方法

②プレート間地震の津波評価への反映 (反映方針)

○第981回審査会合におけるコメント

- 東北沖地震では、海溝軸付近で顕著なすべりの不均質が確認されている。海溝軸付近のすべりの不均質性の影響は、海溝軸から遠ければ津波伝播の過程で平均化されるが、海溝軸からの距離が近ければ平均化されずに到達するので、小さなすべりの不均質であっても影響が出やすい。国内外の巨大地震の津波事例に限られているなか、トラフ軸から近い浜岡においては、敷地の津波評価に影響の大きいすべり量、ライズタイムについて、更なる不確かさを考慮して裕度を持って設定する必要がある。

すべり量とライズタイムの組合せの比較分析(加藤ほか(2020)) において収集・検討したプレート間地震

	イベント名	Mw	破壊領域
Mw9クラスの巨大地震	1952年カムチャツカ地震	9.0	ABC
	1960年チリ地震	9.5	ABC
	1964年アラスカ地震	9.2	ABC
	2004年スマトラ島沖地震	9.1	ABC
	2011年東北沖地震	9.1	ABC
近年のMw8クラスの巨大地震	2001年ペルー地震	8.4	B
	2003年十勝沖地震	8.3	B
	2005年スマトラ島沖地震	8.6	BC
	2006年千島列島沖地震	8.3	(A)B
	2007年ソロモン諸島沖地震	8.1	(A)B
	2007年ペルー地震	8.0	BC
	2007年スマトラ島沖地震	8.4	B(C)
	2010年チリ地震	8.8	BC
	2013年ソロモン諸島沖地震	8.0	(A)B
	2014年チリ地震	8.2	B
	2015年チリ地震	8.3	AB
南海トラフの地震	1944年東南海地震	8.1	(A)B
	1946年南海地震	8.3	(A)B

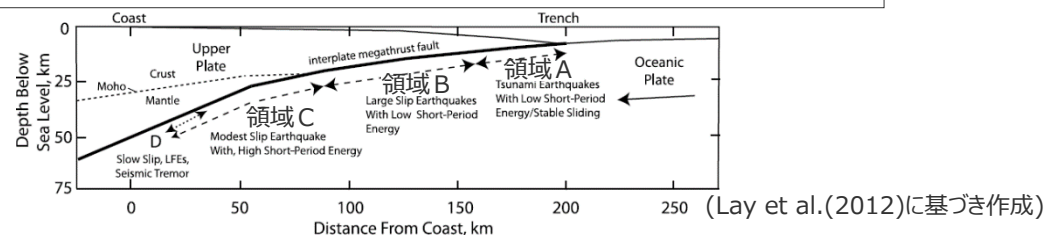
○津波インバージョン事例の収集対象としたプレート間地震

- ・Mw9クラスの巨大地震
- ・近年のMw8クラスの巨大地震(1990年以降)
- ・南海トラフの地震

※国内外の主な科学技術系論文データベース等を対象。

(JDREAM III、ScienceDirect、SpringerLink、AGU Publications、BSSA online)

※収集した知見は「すべり量とライズタイムの組合せの比較分析」に用いている。



プレート間地震の破壊領域の概念図

・Mwは、USGSウェブサイトに基づく。

・破壊領域は、Lay et al.(2012)に基づく。破壊の有無が不明確な場合は()で示されている。Lay et al.(2012)に記載のない地震については、津波インバージョンモデルからLay et al.(2012)の方法に基づき判断した。

○第981回審査会合におけるコメントを踏まえた、プレート間地震の津波評価への反映

- 当社のプレート間地震の津波評価は、国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例や津波波源のすべりの不均質性の影響を踏まえても、不確かさの考慮として十分保守的なものと考えられるが、第981回審査会合におけるコメントおよび国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例に限られていることを踏まえ、敷地の津波評価に影響の大きいすべり量とライズタイムの組合せを国内外の巨大地震・津波の発生事例に対してより慎重に裕度を持って設定することとした。
- 具体的には、「(B)代表パラメータの検討による方法」により検討された内閣府の最大クラスモデルの津波評価において他のパラメータの影響を代表するよう非常に大きく設定されているすべり量(37m)とライズタイム(60s)の組合せを、「(A)各種パラメータの網羅的検討による方法」により検討を行っているプレート間地震の津波評価の中で考慮することとした。

6-6 海溝軸付近のすべりの不均質性の影響

②プレート間地震の津波評価への反映

(プレート間地震の津波評価と内閣府の最大クラスモデルの津波評価との比較)

■ 詳細パラメータスタディでは、国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例に限られていることを踏まえ、国内外の巨大地震・津波の発生事例に対してより慎重に裕度を持って、敷地の津波評価に影響の大きいすべり量とライズタイムの組合せを検討することとし、「(B)代表パラメータの検討による方法」により検討された内閣府の最大クラスモデルにおいて非常に大きく設定されているパラメータ (すべり量(37m)とライズタイム(60s)の組合せ) を、「(A)各種パラメータの網羅的検討による方法」により検討しているプレート間地震の津波評価の中で考慮することとした。

		当社による検討		内閣府(2012)による検討	
		プレート間地震の津波評価		行政機関による津波評価	
波源設定の考え方		(A)各種パラメータの網羅的検討による方法		(B)代表パラメータの検討による方法	
波源モデル		詳細パラメータスタディモデル (国内外の発生事例に基づく) (保守的に国内外の巨大地震・津波の発生事例を踏まえてパラメータを設定し、国内外の巨大地震・津波の発生事例に基づき、各パラメータの組合せを網羅的に検討したモデル)		内閣府の最大クラスモデル (2020年時点までの津波堆積物等の最新知見を踏まえて検討し、十分に保守的な評価となっていることを確認したモデル)	
パラメータの設定根拠		国内外の巨大地震・津波の発生事例		内閣府(2012)	
歴史記録および津波堆積物調査に基づく痕跡高		約14万km ²		約14万km ²	
面積		約14万km ²		約14万km ²	
地震規模		Mw9.1		Mw9.1	
すべり量・ライズタイム (すべり速度)		約37m・120~約37m・300s (0.3~0.1m/s)		約37m・60s (0.6m/s)	
浅部の破壊形態 (駿河湾域)		境界面浅部/境界面浅部・分岐断層 (超大すべり域のすべり量を設定する)		境界面浅部 (超大すべり域のすべり量を設定しない)	
東海地域の超大すべり域・大すべり域の位置		東西約10kmごとに移動 (駿河湾~紀伊半島沖を含む) 1箇所・2箇所		駿河湾~紀伊半島沖 1箇所	
破壊伝播速度		0.7~2.5km/s		2.5km/s	
偶然的不確かさ		大すべり域の周囲の6地点 (大すべり域の下端中央を含む)		大すべり域の周囲の6地点 (大すべり域の下端中央を含む)	

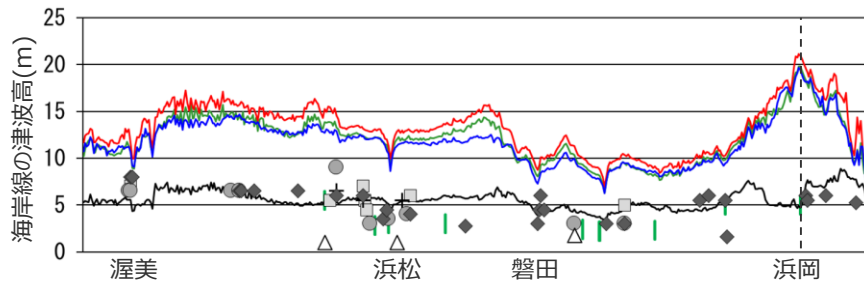
青字：国内外の発生事例に基づいた詳細パラメータスタディにおいて、内閣府の最大クラスモデルよりも不確かさの考慮がされているパラメータ
 緑字：内閣府の最大クラスモデルにおいて非常に大きく設定されているパラメータ

「(B)代表パラメータの検討による方法」により検討された内閣府の最大クラスモデルにおいて他のパラメータの影響を代表するよう非常に大きく設定されているすべり量(37m)とライズタイム(60s)の組合せを考慮

津波堆積物から推定される津波高 (津波堆積物の最大標高+0~2mの高さを幅で示した)

歴史記録に基づく痕跡高

- 明応
- + 慶長
- 宝永
- ◆ 安政東海
- △ 昭和東南海



「(A)各種パラメータの網羅的検討による方法」による津波評価結果

- : 国内外の発生事例に基づいた詳細パラメータスタディ
- : より慎重に裕度を持って検討した詳細パラメータスタディ

「(B)代表パラメータの検討による方法」による津波評価結果

- : 内閣府の最大クラスモデル
- : 痕跡再現モデル (遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル) の津波高

・(A)の方法による津波評価結果は、偶然的不確かさである破壊開始点を変えたケースの包絡値を記載。

(A) 各種パラメータの網羅的検討による方法：各パラメータの不確かさの組合せの科学的知見に基づく網羅的な検討により安全側の評価を行う考え方の方法
 (B) 代表パラメータの検討による方法：影響の大きい代表的なパラメータを科学的知見の範囲を超えて非常に大きく設定することにより、その他の現象の津波影響を代表させて安全側の評価を行う考え方の方法

6-6 海溝軸付近のすべりの不均質性の影響

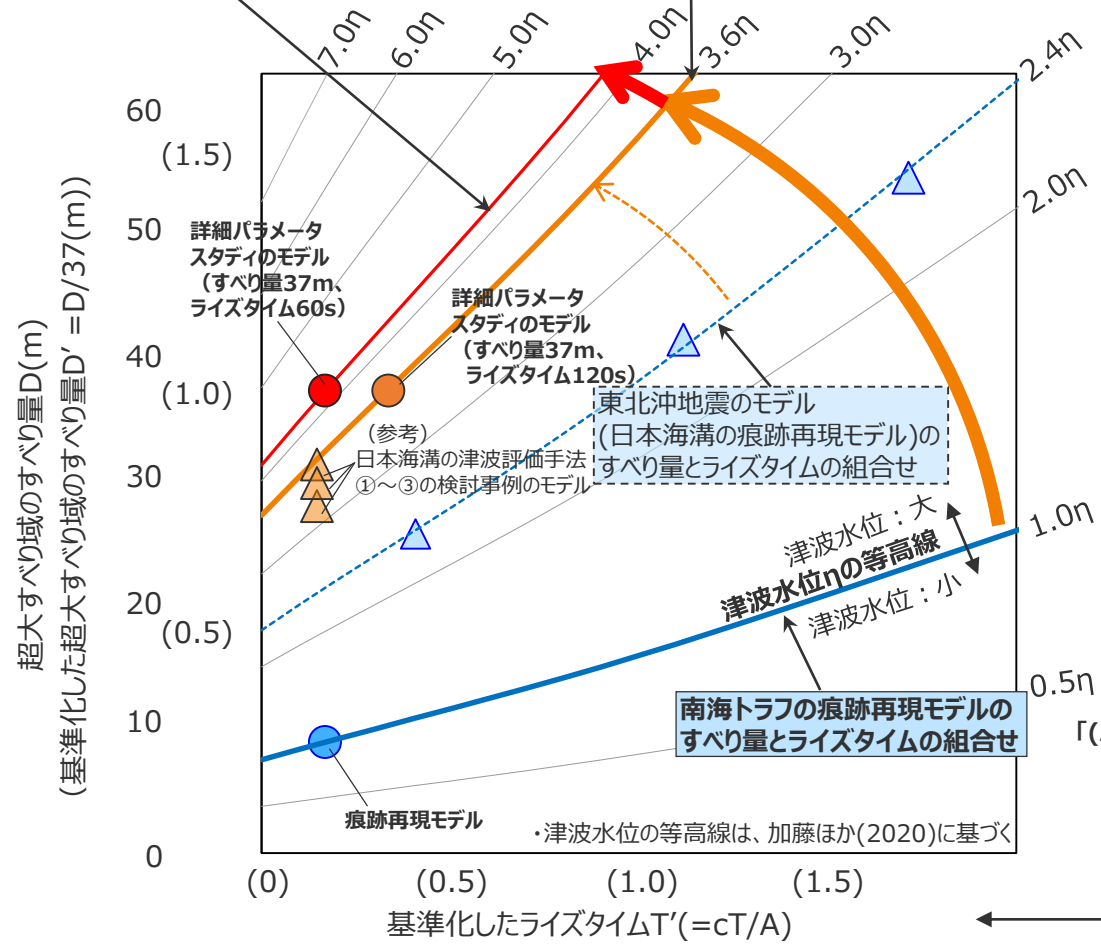
②プレート間地震の津波評価への反映

(すべり量とライズタイムの組合せの分析)

■ 検討波源モデルの詳細パラメータスタディにおいて、国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例に限られていることを踏まえて考慮することとした内閣府の最大クラスモデルのすべり量(37m)とライズタイム(60s)の組合せは、加藤ほか(2020)に基づく検討により、東北沖地震によるすべり量とライズタイムの組合せ、および、国内外の巨大地震・津波の発生事例に基づき保守的に設定したすべり量とライズタイムの組合せに対して、より慎重に裕度をもった設定となっていることを確認した。

国内外の巨大地震・津波の発生事例に対してより慎重に裕度を持って設定したすべり量とライズタイムの組合せ

国内外の巨大地震・津波の発生事例に基づき保守的に設定したすべり量とライズタイムの組合せ



【南海トラフの津波評価のモデル (当社評価)】

- (Red): より慎重に裕度を持って検討した詳細パラメータスタディのモデル (すべり量37m、ライズタイム60sのケース)
- (Orange): 国内外の発生事例に基づいた詳細パラメータスタディのモデル (すべり量37m、ライズタイム120sのケース)
- (Blue): 痕跡再現モデル

(参考) 日本海溝の津波評価のモデル

- ▲ (Orange): 日本海溝の津波評価手法①～③の検討事例のモデル
- ▲ (Blue): 東北沖地震のモデル (日本海溝の痕跡再現モデル)

「(A)各種パラメータの網羅的検討による方法」による津波評価結果

- (Red): 詳細パラメータスタディ
- (Orange): より慎重に裕度を持って検討した詳細パラメータスタディ

海域ごとのライズタイムの基準化パラメータ

項目	算定根拠
波速c	各海域の浅部断層の波速は、海溝軸の水深の1/2を浅部領域の平均水深hとし、 \sqrt{gh} により算定
海底隆起幅A	各海域の浅部領域の幅は、地震調査委員会の長期評価の評価対象領域等から算定

T: ライズタイム

すべり量とライズタイムの組合せの比較分析結果 (ライズタイムを海域ごとの波速と隆起幅により基準化)

6-6 海溝軸付近のすべりの不均質性の影響 まとめ

○第981回審査会合における説明

- **「(A)各種パラメータの網羅的検討による方法」**により検討を行っている当社のプレート間地震の津波評価では、津波審査ガイドに従い、文献調査及び津波堆積物調査の結果に基づき設定した痕跡再現モデルをベースとして、保守的にMw9クラスの東北沖地震型の波源モデルを設定し、国内外の巨大地震・津波の発生事例を踏まえてすべり量(37m)とライズタイム(120s)の組合せを含め網羅的なパラメータスタディを実施した。
- **「(B)代表パラメータの検討による方法」**で検討された内閣府の最大クラスモデルの津波評価では、非常に大きく設定されたパラメータ(すべり量(37m)とライズタイム(60s)の組合せ)により、その他のパラメータの不確かさの影響を代表する方法で不確かさが考慮され、少ない検討ケースで南海トラフの全域を網羅する最大クラスの津波として想定された。
- 上記の両評価は、波源設定の考え方が異なるものの、いずれも、2020年時点までの津波堆積物に関する最新知見を含め、確認されている痕跡高を2～3倍程度上回る想定となっており、内閣府(2020)では2020年時点までに実施された津波堆積物の調査資料から最大クラスの津波を推定できることを示唆するとされていることを踏まえると、いずれも、十分な不確かさが考慮されていることを確認した。



○第981回審査会合におけるコメント

- 東北沖地震では、海溝軸付近で顕著なすべりの不均質が確認されている。海溝軸付近のすべりの不均質性の影響は、海溝軸から遠ければ津波伝播の過程で平均化されるが、海溝軸からの距離が近ければ平均化されずに到達するので、小さなすべりの不均質であっても影響が出やすい。
国内外の巨大地震の津波事例が限られているなか、トラフ軸から近い浜岡においては、敷地の津波評価に影響の大きいすべり量、ライズタイムについて、更なる不確かさを考慮して裕度を持って設定する必要がある。



○第981回審査会合におけるコメントを踏まえた、プレート間地震の津波評価への反映

- 海溝軸付近のすべりの不均質性の影響に関する検討の結果、海溝軸から陸域側では、海溝軸から沖合側で見られるような海溝軸からの距離の影響は見られず、海溝軸から陸域までの距離が近いことによって特別な考慮をする必要はないことを確認した。
また、当社のプレート間地震の津波評価は、不確かさの考慮として、国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例に基づき「(A)各種パラメータの網羅的検討による方法」による検討を行っており、内閣府(2020)および南海トラフにおける津波堆積物調査の拡充を踏まえると、2020年までに確認されている痕跡高を再現する津波が最大クラスの津波として想定されるところ、この痕跡高を2～3倍程度上回る保守的なものとなっている。
これらのことから、当社のプレート間地震の津波評価は、国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例や津波波源のすべりの不均質性の影響を踏まえても、不確かさの考慮として十分保守的なものと考えられるが、第981回審査会合におけるコメントおよび国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例が限られていることを踏まえ、敷地の津波評価に影響の大きいすべり量とライズタイムの組合せを国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例に対してより慎重に裕度を持って設定することとした。
- 具体的には、**「(B)代表パラメータの検討による方法」**により検討された内閣府の最大クラスモデルの津波評価において他のパラメータの影響を代表するよう非常に大きく設定されているすべり量(37m)とライズタイム(60s)の組合せを、**「(A)各種パラメータの網羅的検討による方法」**により検討している当社のプレート間地震の津波評価の中で考慮することとした。

・各種パラメータの不確かさに対し、安全側の評価を行うため波源モデル設定の方法は、以下(A)の方法のほか、(B)の方法があると考えられる。

(A) 各種パラメータの網羅的検討による方法：各パラメータの不確かさの組合せの科学的知見に基づく網羅的な検討により安全側の評価を行う考え方の方法

(B) 代表パラメータの検討による方法：影響の大きい代表パラメータを非常に大きく設定することにより、その他の現象の津波評価への影響を代表させて安全側の評価を行う考え方の方法

余 白

6 検討波源モデルの津波評価の詳細

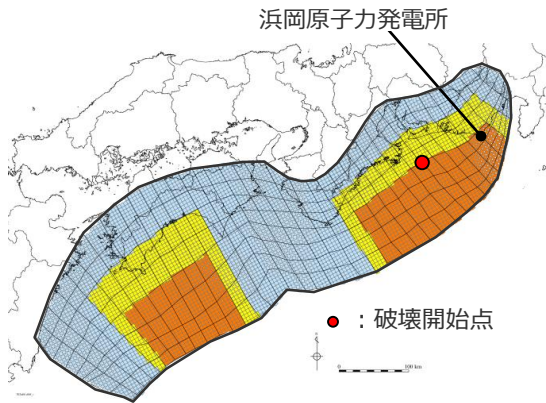
6-7 日本海溝の手法による妥当性確認

日本海溝の津波評価手法モデル①の設定

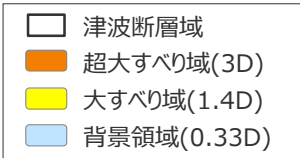
6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル①の設定 (パラメータの設定方法)

- 日本海溝の津波評価手法モデル①の設定フローを、以下に示す。
- 日本海溝の津波評価手法モデル①では、広域の津波に着目した日本海溝の津波評価手法①※を用い、南海トラフおよび国内外の最新の科学的知見について調査し、保守的に東北沖地震を含む国内外の巨大地震の発生事例を踏まえてパラメータを設定した。なお、検討対象海域が日本海溝ではなく南海トラフとなることを踏まえ、波源域に関連するパラメータ（断層の形状・面積・剛性率、沈み込むプレート運動）には、南海トラフの知見を反映した。

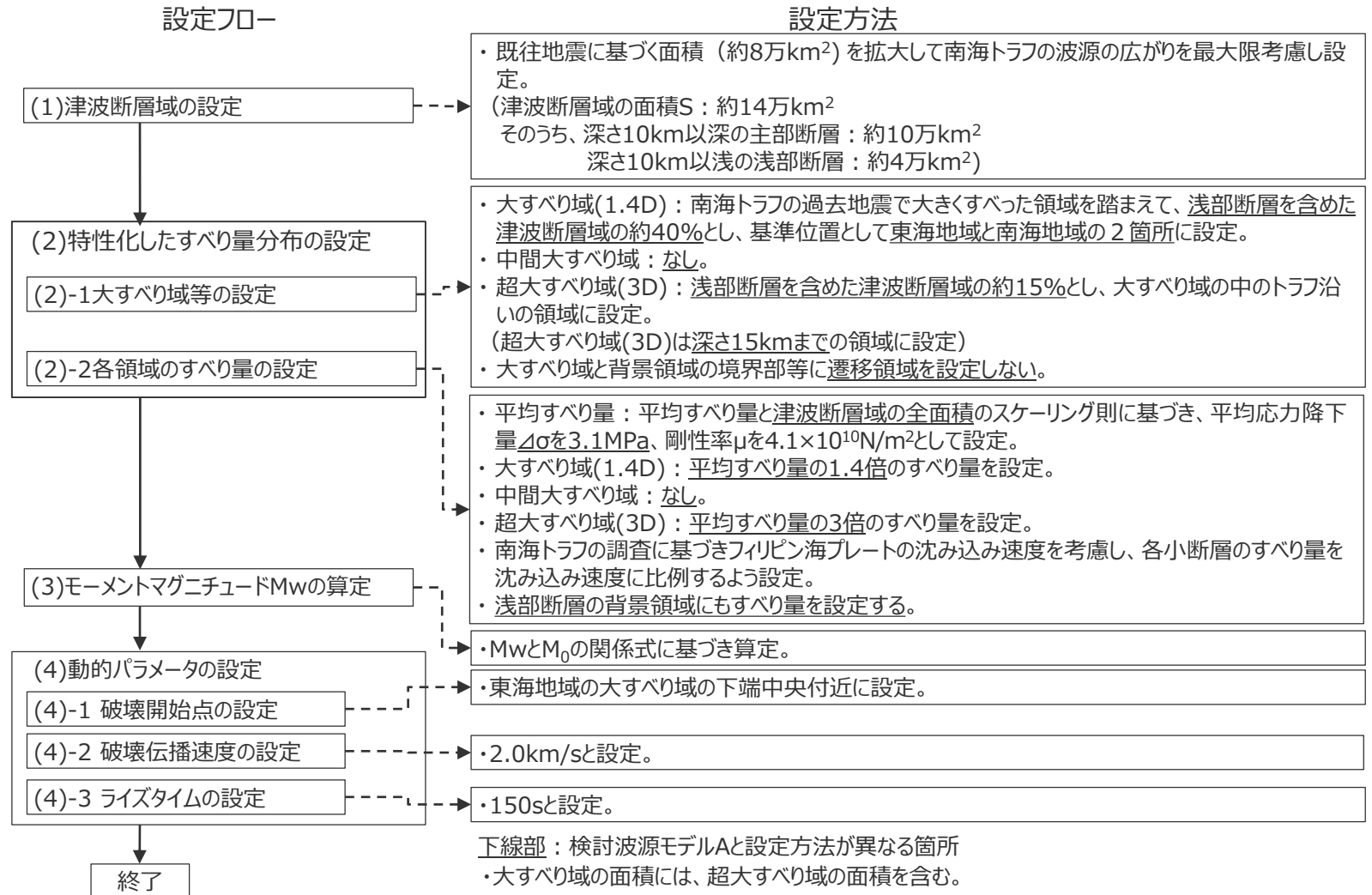
※女川原子力発電所2号炉の津波評価における基準断層モデル①の手法（第778回審査会合 資料1-5-1「女川原子力発電所2号炉津波評価について」参照）



日本海溝の津波評価手法モデル①



(D : 平均すべり量)



6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル①の設定 大すべり域の位置

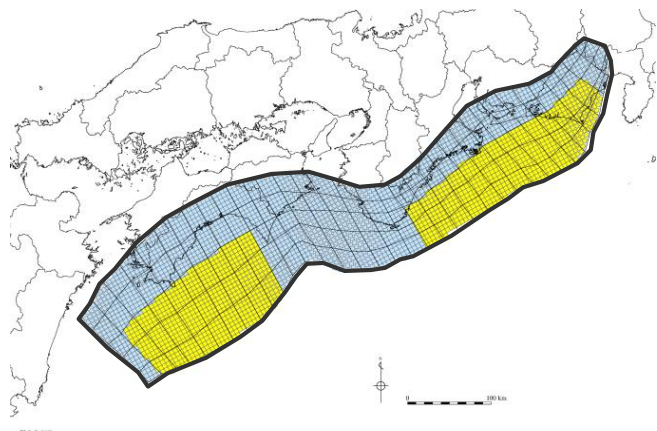
■ 日本海溝の津波評価手法モデル①の大すべり域は、南海トラフ広域の痕跡再現モデルに基づき、トラフ軸付近を含めた領域に設定し、これを基準位置とした。

・なお、大すべり域の位置については、別途概略パラメータスタディを実施し、大すべり域の位置を東西に移動させて敷地への影響の大きいケースを検討している。

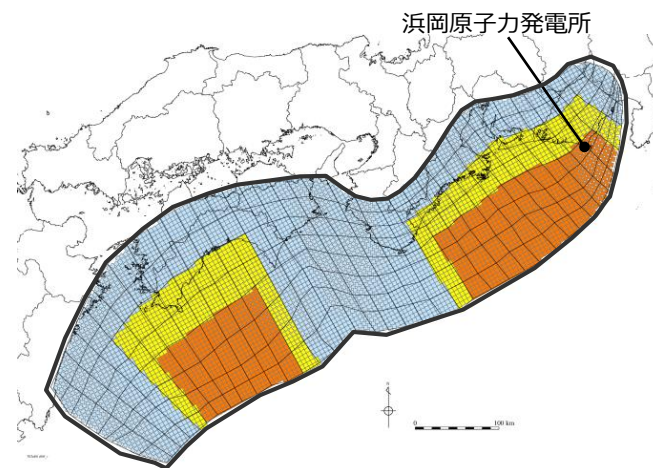
【日本海溝の津波評価手法モデル①の設定】

- ・大すべり域(1.4D)は、津波断層域の全面積の約40%の面積で、遠州灘沖～紀伊半島沖および室戸岬沖～日向灘沖の深さ約20kmより浅い側の領域に設定した。(各大すべり域の面積比は1 : 1)
- ・超大すべり域(3D)は、津波断層域の全面積の約15%の面積で、大すべり域の中のトラフ軸沿いの領域に設定した。

・D : 平均すべり量



南海トラフ広域の痕跡再現モデル



日本海溝の津波評価手法モデル①

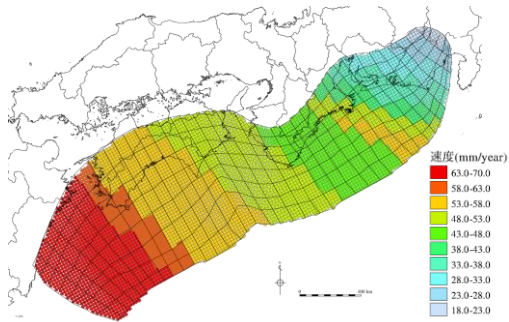
- 津波断層域 ➔ 144,379km²
- 大すべり域(1.4D) ➔ 津波断層域の全面積の約40%¹⁾
- 超大すべり域(3D) ➔ 津波断層域の全面積の約15%

1) 大すべり域の面積には、超大すべり域の面積を含む。

津波断層域 超大すべり域 大すべり域 背景領域

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル①の設定 すべり量分布の設定方法

- プレート境界面浅部に破壊が伝播するケースのすべり量分布の設定については、各小断層のすべり量をフィリピン海プレートの沈み込み速度に比例するよう設定し、超大すべり域には平均すべり量の3倍、大すべり域には1.4倍のすべり量を設定した。
- プレート境界面浅部に破壊が伝播するケースのすべり量分布の設定方法は以下のとおり。



(Loveless and Meade(2010)を基に作成)
各小断層の沈み込み速度分布

【すべり量の設定】

平均応力降下量を3.1MPa、剛性率を $4.1 \times 10^{10} \text{N/m}^2$ として、各小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が津波断層域の全面積のスケールリング則から求められる地震モーメント M_0 になるように設定。

$$M_0 = \sum M_{0i} = \sum \mu D_i S_i \rightarrow \text{小断層毎のすべり量はプレートの沈み込み速度に比例するよう設定。}^*$$

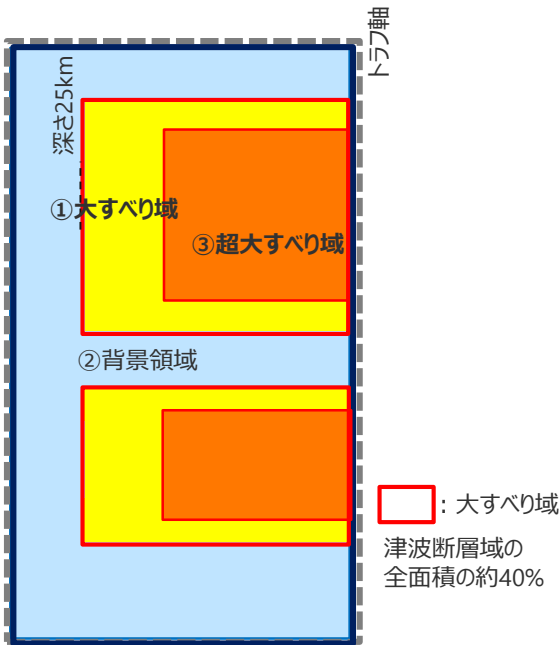
次に、各小断層の平均すべり量 D_i に対して、以下の関係を与えて各小断層のすべり量を設定。

- ① 大すべり域 : $1.4D_i$
- ② 背景領域 : $0.33D_i$
- ③ 超大すべり域 : $3D_i$

D_i : 各小断層の平均すべり量 S_i : 各小断層の面積

M_0 : スケールリング則から算定される主部断層の地震モーメント M_{0i} : 各小断層の地震モーメント

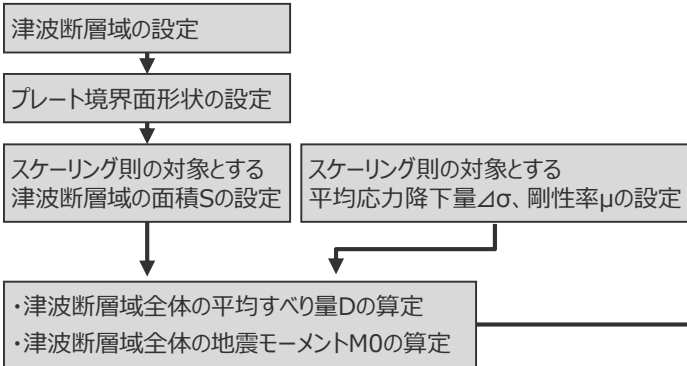
※ 内閣府(2012)と同様、上記のすべり量設定を行うにあたり、フィリピン海プレートの沈み込み速度を考慮した痕跡再現モデルにより歴史記録及び津波堆積物調査等による津波痕跡高の再現性を確認。



日本海溝の津波評価手法モデル①
によるすべり量分布概念図

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル①の設定 すべり量分布の設定方法

1. 巨視的波源特性の設定



- スケーリング則の適用 (円形破壊面を仮定した関係式)



各パラメーター一覧

項目	設定方法	設定値
スケーリング則の対象とする津波断層域の面積S	駿河湾～日向灘沖の深さ0km～40kmの領域	144,379(km ²)
スケーリング則の対象とする平均応力降下量Δσ	杉野ほか(2013)	3.1(MPa)
スケーリング則の対象とする剛性率μ	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
津波断層域全体の平均すべり量D	$16/(7\pi^{3/2}) \cdot \Delta\sigma \cdot S^{1/2} / \mu$	11.8(m)
津波断層域全体の地震モーメント M ₀	μDS	7.0×10 ²² (Nm)

2. 微視的波源特性の設定

各領域のすべり量の設定、地震モーメントの合計値M₀'の算定

- 断層面積S₃, S_{1.4}, S_{0.33}の算定
- すべり量D₃, D_{1.4}, D_{0.33}の算定
- 地震モーメントM₀₃, M_{01.4}, M_{00.33}の算定

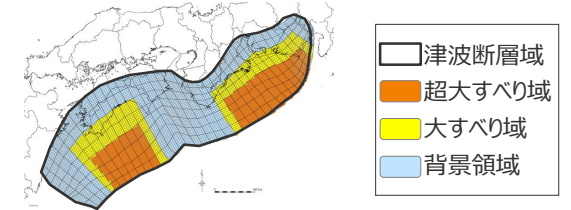
	項目	設定方法	設定値
超 大 す べ り 域	断層面積S ₃	津波断層域の面積 Sの15%	21,657(km ²)
	平均すべり量D ₃	津波断層域の平均すべり量Dの3倍	35.4(m)
	剛性率μ	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
	地震モーメントM ₀₃	$\mu D_3 S_3$	3.1×10 ²² (Nm)
大 す べ り 域	断層面積S _{1.4}	津波断層域の面積 Sの25%	36,095(km ²)
	平均すべり量D _{1.4}	津波断層域の平均すべり量Dの1.4倍	16.5(m)
	剛性率μ	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
	地震モーメントM _{01.4}	$\mu D_{1.4} S_{1.4}$	2.4×10 ²² (Nm)
背 景 領 域	断層面積S _{0.33}	津波断層域の面積 Sの60%	86,628(km ²)
	平均すべり量D _{0.33}	津波断層域の平均すべり量Dの0.33倍	3.9(m)
	剛性率μ	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
	地震モーメントM _{00.33}	$\mu D_{0.33} S_{0.33}$	1.4×10 ²² (Nm)
	地震モーメント(M ₀ ')	M ₀₃ +M _{01.4} +M _{00.33}	7.0×10 ²² (Nm)

3. 日本海溝の津波評価手法モデルの設定

断層モデルへの微視的波源特性の反映 (次頁参照)

- 設定したプレート境界面 (すべり量分布のブロック割図) に微視的波源特性を反映
- 各小断層のすべり量をフィリピン海プレートの沈み込み速度に比例するように設定
- 上記設定により、地震モーメントが大きくなるが、保守的な評価となるため、地震モーメントの調整 (背景領域のすべり量の調整) は行わない

モーメントマグニチュードM_wの算定

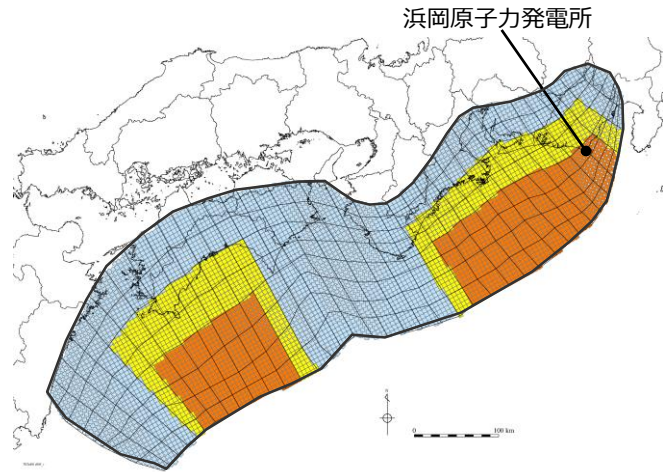


	項目	設定値
津 波 断 層 域 全 体	津波断層域の面積S	144,379(km ²)
	地震モーメントM ₀	8.4×10 ²² (Nm)
	M _w	9.2
	平均応力降下量Δσ※1	3.1(MPa)
	平均すべり量D	14.2(m)
	最大すべり量D _{max} ※2	36.7(m)
	剛性率 μ	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
	破壊伝播速度v _r	2.0(km/s)
	すべり角λ	フィリピン海プレートの運動方向に基づいて設定
	ライズタイムτ	150(s)

※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量
※2 東海地域の最大すべり量を記載

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル①の設定 すべり量分布の設定方法

■ 日本海溝の津波評価手法モデル①の各小断層のすべり量分布は以下のとおり。

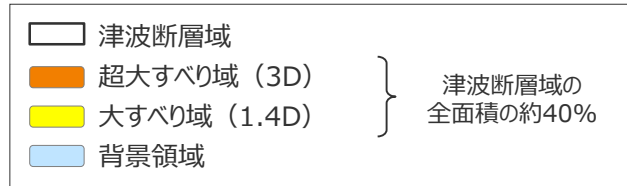


日本海溝の津波評価手法モデル①

日本海溝の津波評価手法モデル①のすべり量

最大すべり量 (m) [※]	平均すべり量 (m)
36.7	14.2

※ 東海地域の最大すべり量を記載



・D : 平均すべり量

日本海溝の津波評価手法モデル①の小断層のすべり量分布 (m)

		西 ←											南海地域																東海地域												→ 東	
陸側 ⇄			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
海溝軸	深度40km ↓		5.2	5.2	5.0	5.0	4.9	4.9	4.5	4.3	4.2	4.1	4.1	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8	3.8	3.6	3.6	3.6	3.5	3.5	3.5	3.5	3.4	3.6	3.2	3.2	2.7	2.7	2.1	2.1	2.1	2.1	1.9	1.9	1.4	1.4		
	30km ↓	1	5.2	5.2	5.0	5.0	4.9	4.9	4.5	4.3	4.3	4.2	4.1	4.1	4.0	3.9	3.8	3.8	3.8	3.6	3.6	3.6	3.5	3.5	3.5	3.5	3.4	3.6	3.6	3.2	3.2	2.7	2.7	2.1	2.1	2.1	2.1	1.9	1.9	1.4	1.4	
	20km ↓	2	5.2	5.2	5.0	5.0	4.9	4.9	4.5	4.3	4.3	4.2	4.1	4.1	4.0	3.9	3.8	3.8	3.8	3.6	3.6	3.6	3.5	3.5	3.5	3.5	3.4	3.6	3.6	3.2	3.2	2.7	2.7	2.1	2.1	2.1	2.1	1.9	1.9	1.4	1.4	
		3	5.2	5.2	5.0	5.0	20.8	20.8	18.9	18.9	18.3	17.8	17.8	17.4	16.8	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8	3.6	3.6	3.6	3.5	14.9	14.7	14.2	14.2	15.2	15.2	13.4	13.4	11.4	11.4	11.4	11.4	9.0	9.0	8.0	1.9	1.4	1.4
	10km ↓	4	5.2	5.2	5.0	5.0	20.8	20.8	18.9	18.9	18.3	18.3	17.8	17.4	17.4	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8	3.8	3.6	3.6	3.5	14.9	14.7	14.2	14.2	17.1	15.2	15.2	13.4	11.4	11.4	11.4	11.4	9.0	9.0	1.9	1.4	1.4	
		5	5.2	5.2	5.0	5.0	20.8	44.6	44.6	40.5	40.5	39.2	38.2	38.2	17.4	4.1	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8	3.8	3.6	3.6	14.9	31.6	31.6	30.5	30.5	36.7	32.6	32.6	28.7	28.7	24.4	24.4	19.3	9.0	1.9	1.9	1.9	
	0km ↓	6	5.2	5.2	5.0	5.0	20.8	44.6	44.6	40.5	40.5	39.2	39.2	38.2	17.4	4.1	4.0	3.9	3.9	3.9	3.8	3.8	3.6	3.6	14.9	32.0	31.6	31.6	30.5	36.7	36.7	32.6	32.6	28.7	28.7	24.4	24.4	9.0	1.9	1.9	1.9	
		7	5.2	5.2	5.0	5.0	20.8	44.6	44.6	40.5	40.5	40.5	39.2	39.2	17.8	4.1	4.0	4.0	3.9	3.9	3.9	3.8	3.8	3.6	14.9	32.0	31.6	31.6	30.5	30.5	36.7	36.7	32.6	32.6	28.7	28.7	24.4	9.0	1.9	1.9	1.9	
⇄	8	5.2	5.2	5.0	5.0	21.4	44.6	44.6	44.6	40.5	40.5	39.2	39.2	17.8	4.1	4.0	4.0	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8	3.6	15.4	32.0	32.0	31.6	30.5	30.5	36.7	36.7	36.7	32.6	32.6	28.7	24.4	9.0	1.9	1.9	1.9		

- すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
- 駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10kmの位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす（内閣府(2012)）とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル①の設定 断層パラメータ

日本海溝の津波評価手法モデル①の断層パラメータ

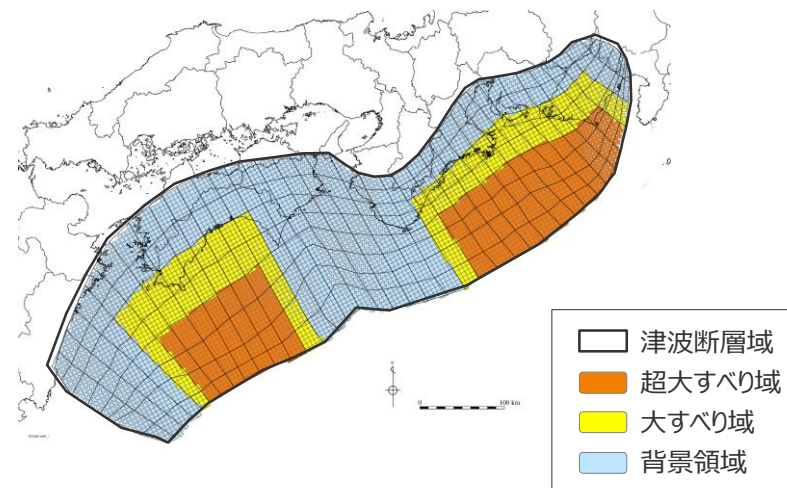
項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	8.4×10^{22}
	Mw	9.2
	平均応力低下量 (MPa) ^{※1}	3.1
	平均すべり量 (m)	14.2
	最大すべり量 (m) ^{※2}	36.7
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	5.5×10^{22}
	平均すべり量 (m)	12.2
	最大すべり量 (m) ^{※2}	36.7
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	2.9×10^{22}
	平均すべり量 (m)	20.3
	最大すべり量 (m) ^{※2}	36.7

※1 スケーリング則の対象とした平均応力低下量

※2 東海地域の最大すべり量を記載

主部断層：深さ10km以深の断層

浅部断層：深さ10km以浅の断層



日本海溝の津波評価手法モデル①

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル①の設定 (超大すべり域・大すべり域のすべり量)

- 日本海溝の津波評価手法モデル①は、南海トラフにおけるフィリピン海プレートの沈み込み速度を考慮して設定しており、すべり量の設定は小断層ごとに異なっている。
- 津波評価に影響の大きい日本海溝の津波評価手法モデル①の超大すべり域、大すべり域のすべり量について、平均値および最大値を算出した結果は以下のとおり。
超大すべり域の平均すべり量は、約31.5mとなっている。

日本海溝の津波評価手法モデル①のすべり量

項目	算定値	
超大すべり域	平均	31.5m
	最大	36.7m
大すべり域	平均	14.3m
	最大	17.1m
平均すべり量	14.2m	

- 超大すべり域、大すべり域の平均すべり量の算定方法
遠州灘沖の各小断層のすべり量と面積から重みを考慮して算出。
なお、津波励起に寄与しない陸域の小断層のすべり量は含めない。
 $D_{ave} = \sum(D_i \cdot S_i) \div \sum S_i$
 D_i : 各小断層のすべり量、 S_i : 各小断層の面積
- 陸域の小断層については、灰色の文字で記載。

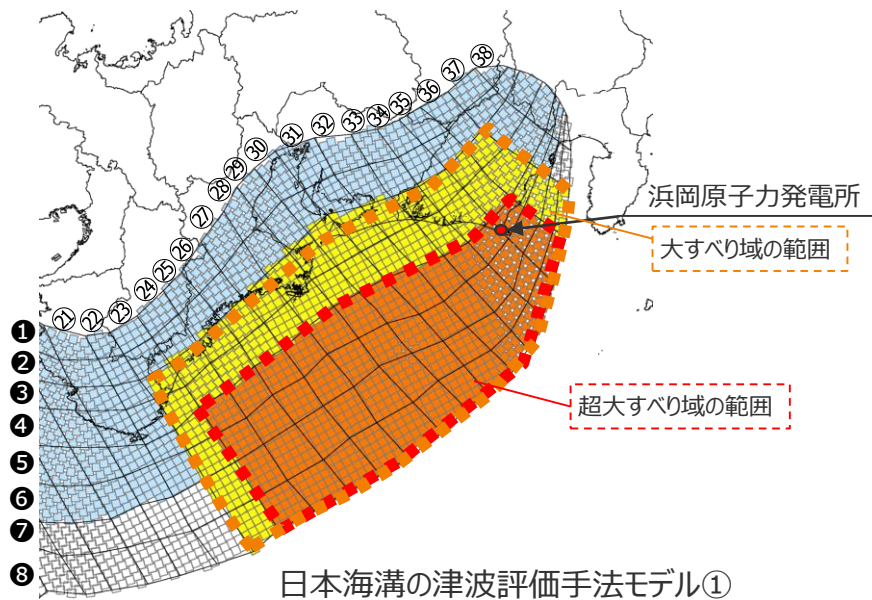


日本海溝の津波評価手法モデル①の大すべり域周辺のすべり量(m)

		遠州灘														駿河湾			
深度40km↓		21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	3.5	3.5	3.5	3.5	3.4	3.6	3.2	3.2	2.7	2.7	2.1	2.1	2.1	2.1	1.9	1.9	1.4	1.4
	2	3.5	3.5	3.5	3.5	3.4	3.6	3.6	3.2	3.2	2.7	2.7	2.1	2.1	2.1	1.9	1.9	1.4	1.4
20km↓	3	3.6	3.5	14.9	14.7	14.2	14.2	15.2	15.2	13.4	13.4	11.4	11.4	11.4	9.0	9.0	8.0	1.9	1.4
	4	3.6	3.5	14.9	14.7	14.7	14.2	17.1	15.2	15.2	13.4	11.4	11.4	11.4	11.4	9.0	9.0	1.9	1.4
10km↓	5	3.6	3.6	14.9	31.6	31.6	30.5	30.5	36.7	32.6	32.6	28.7	28.7	24.4	24.4	9.0	9.0	1.9	1.9
	6	3.6	3.6	14.9	32.0	31.6	31.6	30.5	36.7	36.7	32.6	32.6	28.7	28.7	24.4	24.4	9.0	1.9	1.9
0km↓	7	3.8	3.6	14.9	32.0	31.6	31.6	30.5	30.5	36.7	36.7	32.6	32.6	28.7	28.7	24.4	9.0	1.9	1.9
	8	3.8	3.6	15.4	32.0	32.0	31.6	30.5	30.5	36.7	36.7	32.6	32.6	28.7	24.4	9.0	1.9	1.9	1.9

日本海溝の津波評価手法モデル①の大すべり域周辺の小断層の面積(km²)

		遠州灘														駿河湾			
深度40km↓		21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	360	257	311	337	283	359	434	383	459	457	583	432	408	307	361	287	319	107
	2	359	258	415	391	416	416	439	462	407	330	431	432	409	361	337	287	340	237
20km↓	3	360	284	313	339	472	288	417	462	458	507	508	433	359	360	285	260	339	236
	4	514	492	363	362	360	409	434	484	331	381	355	482	406	485	411	468	429	331
10km↓	5	312	336	359	409	382	431	431	482	483	507	556	404	354	381	286	134	116	116
	6	463	409	432	406	405	404	479	430	455	378	378	428	404	254	308	157	108	87
0km↓	7	454	554	579	578	679	578	528	653	503	378	378	354	280	307	284	236	136	86
	8	552	602	527	627	527	652	552	727	477	453	378	253	279	229	205	208	134	56

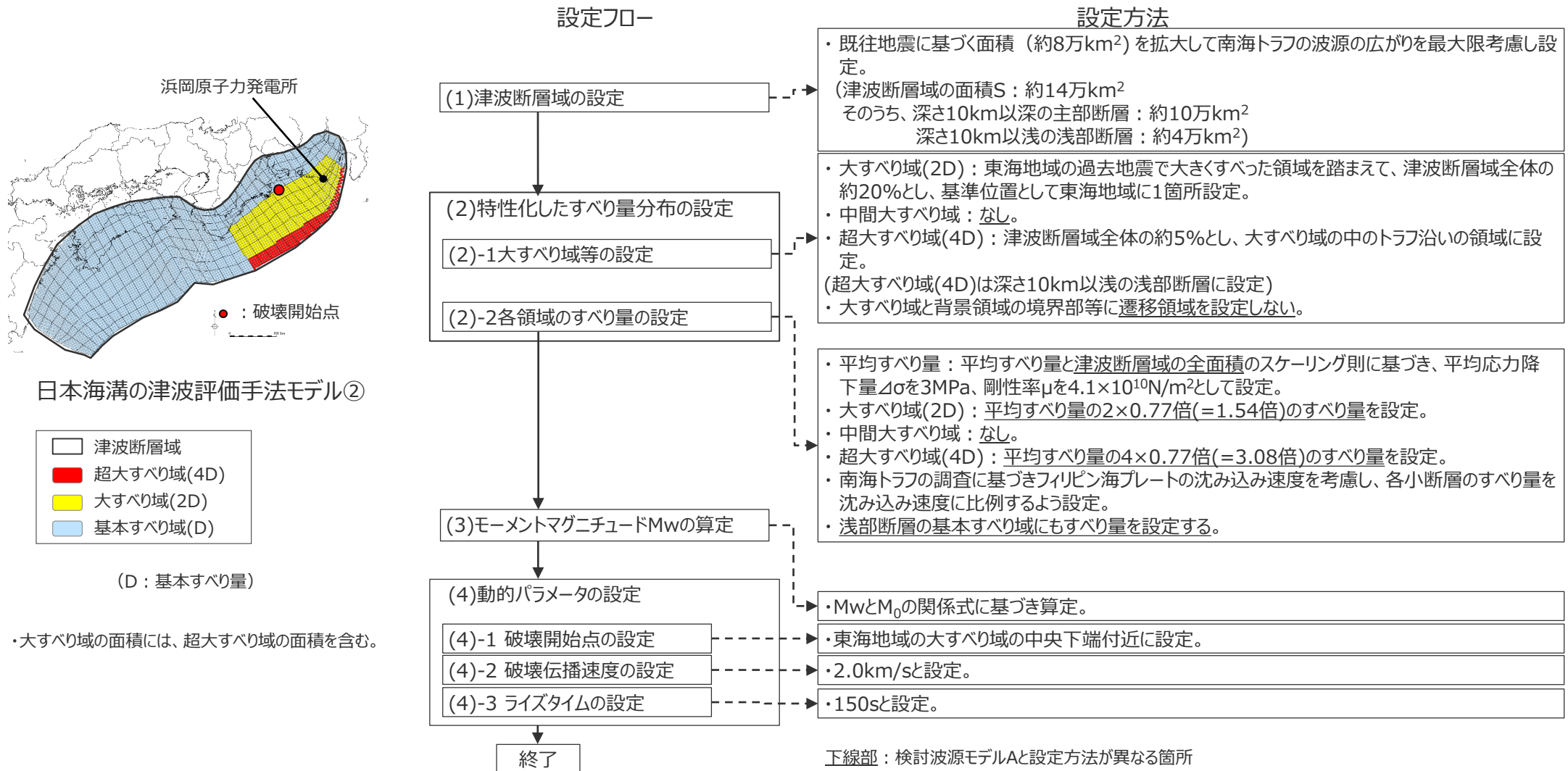


日本海溝の津波評価手法モデル②の設定

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル②の設定 パラメータの設定方法

- 日本海溝の津波評価手法モデル②の設定フローを、以下に示す。
- 日本海溝の津波評価手法モデル②では、敷地周辺の津波に着目した日本海溝の津波評価手法②※を用い、南海トラフおよび国内外の最新の科学的知見について調査し、保守的に東北沖地震を含む国内外の巨大地震の発生事例を踏まえてパラメータを設定した。なお、検討対象海域が日本海溝ではなく南海トラフとなることを踏まえ、波源域に関連するパラメータ（断層の形状・面積・剛性率、沈み込むプレート運動）には、南海トラフの知見を反映した

※ 女川原子力発電所2号炉の津波評価における基準断層モデル②の手法（第778回審査会合 資料1-5-1「女川原子力発電所2号炉津波評価について」参照）



6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル②の設定 大すべり域の位置

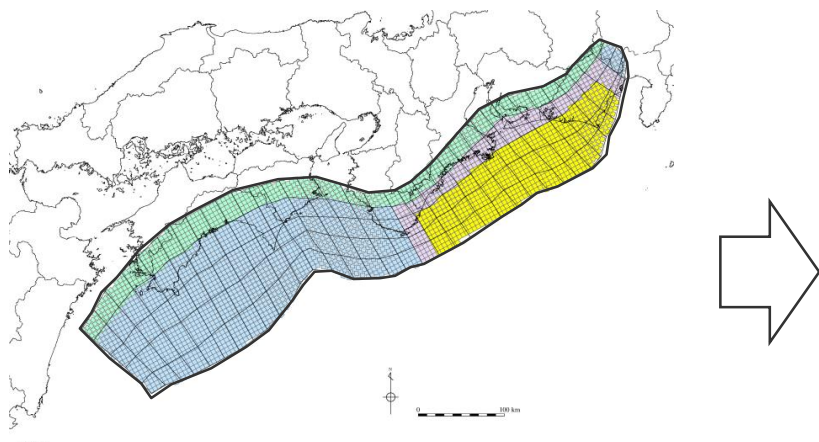
■ 日本海溝の津波評価手法モデル②の大すべり域は、遠州灘沿岸域の痕跡再現モデルに基づき、トラフ軸付近を含めた領域に設定し、これを基準位置とした。

・なお、大すべり域の位置については、別途概略パラメータスタディを実施し、大すべり域の位置を東西に移動させて敷地への影響の大きいケースを検討している。

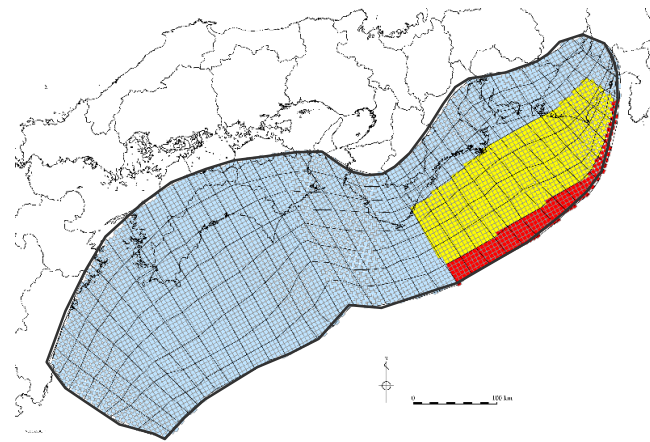
【日本海溝の津波評価手法モデル②の設定】

- ・大すべり域(2D)は、遠州灘沖～紀伊半島沖の深さ約20kmより浅い側の領域に、津波断層域の全面積の約20%の面積で設定した。
- ・超大すべり域(4D)は、津波断層域の全面積の約5%の面積で、大すべり域の中のトラフ軸沿いの領域に設定した。

・D：基本すべり量



遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル



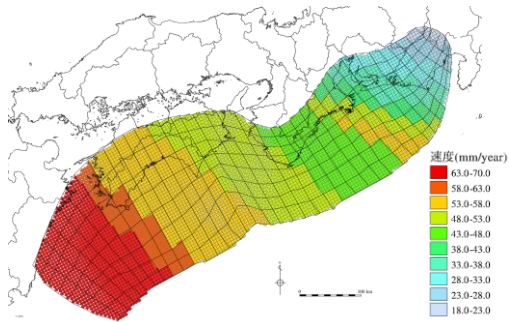
日本海溝の津波評価手法モデル②

- 津波断層域 ➡ 144,379km²
 - 大すべり域(2D) ➡ 津波断層域の全面積の約20%¹⁾
 - 超大すべり域(4D) ➡ 大すべり域の中のトラフ軸沿いの領域
(津波断層域の全面積の約5%)
- 1) 大すべり域の面積には、超大すべり域の面積を含む。

□ 津波断層域 ■ 超大すべり域 ■ 大すべり域 ■ 遷移領域 ■ 背景領域もしくは基本すべり域 ■ 深い背景領域

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル②の設定 すべり量分布の設定方法

- プレート境界面浅部に破壊が伝播するケースのすべり量分布の設定については、各小断層のすべり量をフィリピン海プレートの沈み込み速度に比例するよう設定し、超大すべり域には平均すべり量の4倍、大すべり域には2倍のすべり量を設定した。
- プレート境界面浅部に破壊が伝播するケースのすべり量分布の設定方法は以下のとおり。



(Loveless and Meade(2010)を基に作成)
各小断層の沈み込み速度分布

【すべり量の設定】

平均応力降下量を3MPa、剛性率を $4.1 \times 10^{10} \text{N/m}^2$ として、各小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が津波断層域の全面積のスケーリング則から求められる地震モーメント M_0 になるように設定。

$$M_0 = \sum M_{0i} = \sum \mu D_i S_i \rightarrow \text{小断層毎のすべり量はプレートの沈み込み速度に比例するよう設定。}^{\ast 1}$$

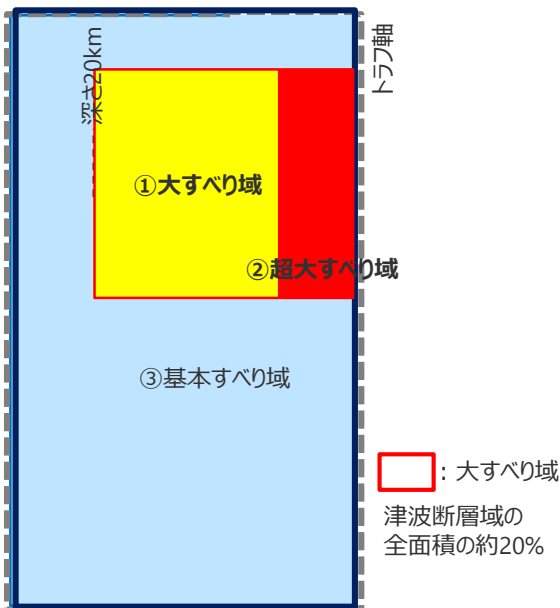
次に、各小断層の平均すべり量 D_i に対して、以下の関係を与えて各小断層のすべり量を設定。

- ① 大すべり域 ■ : $2D_i$ $\ast 2$
- ② 超大すべり域 ■ : $4D_i$ $\ast 2$
- ③ 基本すべり域 ■ : 領域①～③の小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が、 M_0 となるすべり量 D_b を設定

D_i : 各小断層の平均すべり量 D_b : 基本すべり域のすべり量(= aD_i 、 a は定数) S_i : 各小断層の面積
 M_0 : スケーリング則から算定される地震モーメント M_{0i} : 各小断層の地震モーメント

$\ast 1$ 内閣府(2012)と同様、上記のすべり量設定を行うにあたり、フィリピン海プレートの沈み込み速度を考慮した痕跡再現モデルにより歴史記録及び津波堆積物調査等による津波痕跡高の再現性を確認。

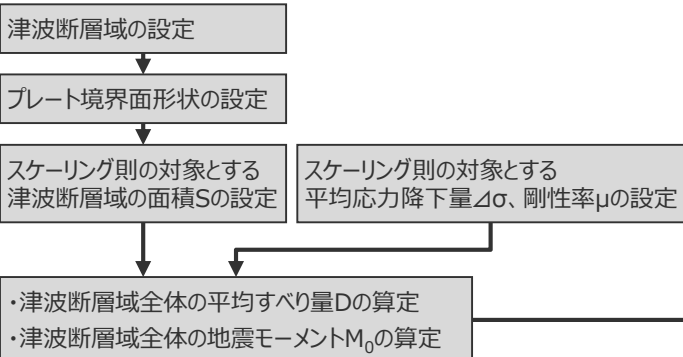
$\ast 2$ 各小断層の地震モーメントの総和がスケーリング則から算定される地震モーメントと整合するよう、①大すべり域、②超大すべり域のすべり量に係数0.77を乗じた。



日本海溝の津波評価手法モデル②による
すべり量分布概念図

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル②の設定 すべり量分布の設定方法

1. 巨視的波源特性の設定



- スケーリング則の適用
(円形破壊面を仮定した関係式)



各パラメーター一覧

項目	設定方法	設定値
津波断層域の面積S	駿河湾～日向灘沖の深さ0km～40kmの領域	144,379(km ²)
スケーリング則の対象とする平均応力降下量Δσ	内閣府(2012)、Murotani et al.(2013)	3.0(MPa)
スケーリング則の対象とする剛性率μ	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
津波断層域全体の平均すべり量D	$16/(7n^{3/2}) \cdot \Delta\sigma \cdot S^{1/2} / \mu$	11.4(m)
津波断層域全体の地震モーメント M ₀	μDS	6.8×10 ²² (Nm)

2. 微視的波源特性の設定

各領域のすべり量の設定、地震モーメントの合計値Mo'の算定

- 断層面積S₄, S₂, S₁の算定
- すべり量D₄, D₂, D₁の算定
- 地震モーメントM₀₄, M₀₂, M₀₁の算定

	項目	設定方法	設定値
超 大 す べ り 域	断層面積(S ₄)	津波断層域の断層面積Sの5%	7,219(km ²)
	平均すべり量(D ₄)	津波断層域の平均すべり量Dの4倍	45.7(m)
	剛性率(μ)	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
	地震モーメント(M ₀₄)	$\mu D_4 S_4$	1.4×10 ²² (Nm)
大 す べ り 域	断層面積(S ₂)	津波断層域の断層面積Sの15%	21,657(km ²)
	平均すべり量(D ₂)	津波断層域の平均すべり量Dの2倍	22.8(m)
	剛性率(μ)	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
	地震モーメント(M ₀₂)	$\mu D_2 S_2$	2.0×10 ²² (Nm)
基 本 す べ り 域	断層面積(S ₁)	津波断層域の断層面積Sの80%	115,504(km ²)
	平均すべり量(D ₁)	津波断層域の平均すべり量Dの1倍	11.4(m)
	剛性率(μ)	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
	地震モーメント(M ₀₁)	$\mu D_1 S_1$	5.4×10 ²² (Nm)
	地震モーメント(M _{0')}	M ₀₄ +M ₀₂ +M ₀₁	8.8×10 ²² (Nm)

地震モーメントの調整 (すべり量の調整)

- Mo/Mo' = 6.8×10²²(Nm) ÷ 8.8×10²²(Nm) = 0.77
- 上記係数を用いて、各領域のすべり量を一律に調整する。

	調整前	調整後
超 大 す べ り 域	45.7(m)	35.1(m)
大 す べ り 域	22.8(m)	17.6(m)
基 本 す べ り 域	11.4(m)	8.8(m)

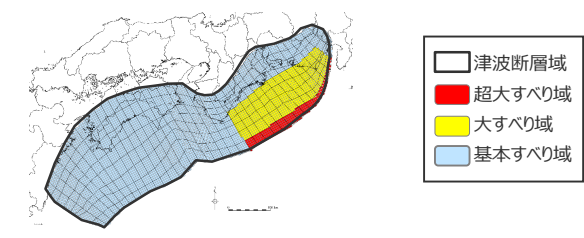
・基本すべり域の平均すべり量を、基本すべり量とする。

3. 日本海溝の津波評価手法モデルの設定

断層モデルへの微視的波源特性の反映 (次頁以降参照)

- 設定したプレート境界面 (すべり量分布のブロック割図) に微視的波源特性を反映
- 各小断層のすべり量をフィリピン海プレートの沈み込み速度に比例するよう設定
- 上記設定による地震モーメントの変化分を、背景領域のすべり量で調整

モーメントマグニチュードMwの算定



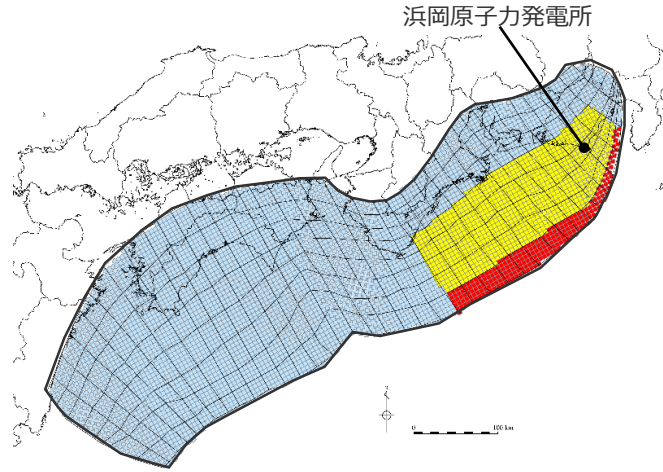
項目	設定値
津波断層域の面積S	144,379(km ²)
地震モーメントM ₀	6.8×10 ²² (Nm)
Mw	9.2
平均応力降下量Δσ*	3.0(MPa)
平均すべり量D	11.4(m)
最大すべり量Dmax	36.5(m)
剛性率 μ	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
破壊伝播速度v _r	2.0(km/s)
すべり角λ	フィリピン海プレートの運動方向に基づいて設定
ライズタイムτ	150(s)

※スケーリング則の対象とした平均応力降下量

・「日本海溝の津波評価手法②③の検証事例のモデル」は、「日本海溝の津波評価手法①の検証事例のモデル」との断層面積比率を考慮して、大すべり域・超大すべり域のすべり量の割増しと、それに応じて基本すべり域のすべり量を割引いた背景領域を設定する考え方の手法となっている。(第778回審査会合 資料1-5-1「女川原子力発電所2号炉津波評価について」 p.54参照)
当社の「日本海溝の津波評価手法モデル②③」は、「日本海溝の津波評価手法モデル①」との断層面積比率が1であることから、大すべり域・超大すべり域のすべり量を割増しせず、それに応じて背景領域を設定せずにモデル設定を行った。

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル②の設定 すべり量分布の設定方法

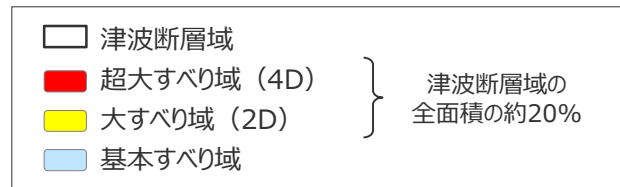
■ 日本海溝の津波評価手法モデル②の各小断層のすべり量分布は以下のとおり。



日本海溝の津波評価手法モデル②

日本海溝の津波評価手法モデル②のすべり量

最大すべり量 (m)	平均すべり量 (m)
36.5	11.4



・D: 基本すべり量

西 ←

日本海溝の津波評価手法モデル②の小断層のすべり量分布 (m)

⇒ 東

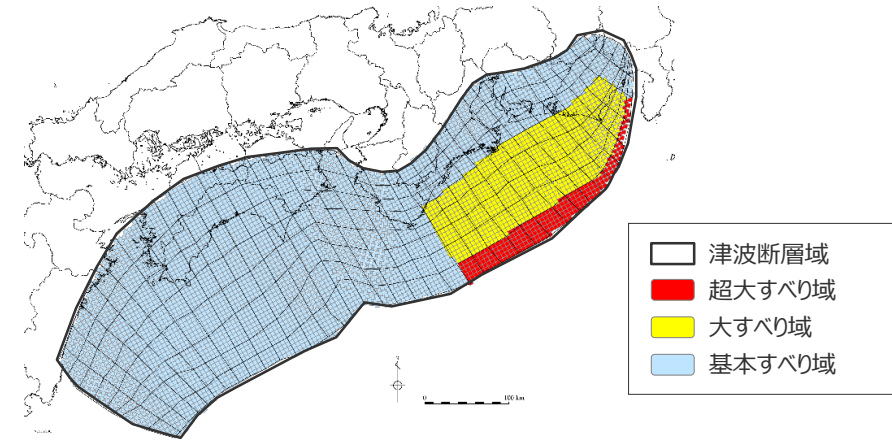
海溝軸 ⇕ 陸側 ⇐	深度40km↓		すべり量分布 (m)																																					
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
⇕	30km↓		1	12.5	12.5	12.1	12.1	11.7	11.7	10.7	10.3	10.0	9.8	9.8	9.5	9.2	9.2	9.0	9.0	8.7	8.7	8.7	8.4	8.4	8.3	8.3	8.0	8.6	7.6	7.6	6.4	6.4	5.1	5.1	5.1	5.1	4.5	4.5	3.3	3.3
	20km↓		2	12.5	12.5	12.1	12.1	11.7	11.7	10.7	10.3	10.3	10.0	9.8	9.8	9.5	9.2	9.0	9.0	8.7	8.7	8.7	8.4	8.4	8.3	8.3	8.0	8.6	8.6	7.6	7.6	6.4	6.4	6.4	5.1	5.1	5.1	5.1	4.5	4.5
⇕	10km↓		3	12.5	12.5	12.1	12.1	11.7	11.7	10.7	10.7	10.3	10.0	10.0	9.8	9.5	9.2	9.2	9.0	9.0	8.7	8.7	8.7	8.4	8.4	8.3	8.0	8.0	8.6	8.6	7.6	7.6	6.4	6.4	6.4	5.1	5.1	4.5	4.5	3.3
	8km↓		4	12.5	12.5	12.1	12.1	11.7	11.7	10.7	10.7	10.3	10.3	10.0	9.8	9.8	9.5	9.2	9.2	9.0	9.0	8.7	8.7	8.4	15.9	15.7	15.7	15.1	18.2	16.2	16.2	14.3	12.1	12.1	12.1	12.1	9.6	9.6	4.5	3.3
⇕	6km↓		5	12.5	12.5	12.1	12.1	11.7	11.7	10.7	10.7	10.3	10.0	10.0	9.8	9.8	9.5	9.2	9.2	9.0	9.0	8.7	8.7	15.9	15.7	15.7	15.1	15.1	18.2	16.2	16.2	14.3	14.3	12.1	12.1	9.6	9.6	4.5	4.5	
	4km↓		6	12.5	12.5	12.1	12.1	11.7	11.7	10.7	10.7	10.3	10.3	10.0	9.8	9.8	9.5	9.2	9.2	9.2	9.0	9.0	8.7	8.7	15.9	15.9	15.7	15.7	15.1	18.2	18.2	16.2	16.2	14.3	14.3	12.1	12.1	9.6	4.5	4.5
⇕	2km↓		7	12.5	12.5	12.1	12.1	11.7	11.7	10.7	10.7	10.3	10.3	10.0	9.8	9.5	9.5	9.2	9.2	9.2	9.0	9.0	8.7	15.9	15.9	15.7	15.7	15.1	15.1	18.2	18.2	16.2	16.2	14.3	14.3	12.1	9.6	4.5	4.5	
	0km↓		8	12.5	12.5	12.1	12.1	11.7	11.7	10.7	10.7	10.3	10.3	10.0	9.8	9.5	9.5	9.5	9.2	9.2	9.0	9.0	8.7	32.8	31.7	31.7	31.3	30.3	30.3	36.5	36.5	36.5	32.3	32.3	28.5	24.2	19.1	4.5	4.5	

- すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
- 駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10kmの位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす（内閣府(2012)）とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル②の設定 断層パラメータ

日本海溝の津波評価手法モデル②の断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	6.8×10^{22}
	Mw	9.2
	平均応力降下量 (MPa)*	3.0
	平均すべり量 (m)	11.4
	最大すべり量 (m)	36.5
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	60
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	4.6×10^{22}
	平均すべり量 (m)	10.3
	最大すべり量 (m)	18.2
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	2.1×10^{22}
	平均すべり量 (m)	15.0
	最大すべり量 (m)	36.5



日本海溝の津波評価手法モデル②

主部断層：深さ10km以深の断層
浅部断層：深さ10km以浅の断層

*スケーリング則の対象とした平均応力降下量

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル②の設定 (超大すべり域・大すべり域のすべり量)

- 日本海溝の津波評価手法モデル②は、南海トラフにおけるフィリピン海プレートの沈み込み速度を考慮して設定しており、すべり量の設定は小断層ごとに異なっている。
- 津波評価に影響の大きい日本海溝の津波評価手法モデル②の超大すべり域、大すべり域のすべり量について、平均値および最大値を算出した結果は以下のとおり。
超大すべり域の平均すべり量は、約32.2mとなっている。

日本海溝の津波評価手法モデル②のすべり量

項目	算定値	
超大すべり域	平均	32.2m
	最大	36.5m
大すべり域	平均	15.4m
	最大	18.2m
平均すべり量	11.4m	

- 超大すべり域、大すべり域の平均すべり量の算定方法
遠州灘沖の各小断層のすべり量と面積から重みを考慮して算出。
なお、津波励起に寄与しない陸域の小断層のすべり量は含めない。
 $D_{ave} = \sum(D_i \cdot S_i) \div \sum S_i$
 D_i : 各小断層のすべり量、 S_i : 各小断層の面積
- 陸域の小断層については、灰色の文字で記載。

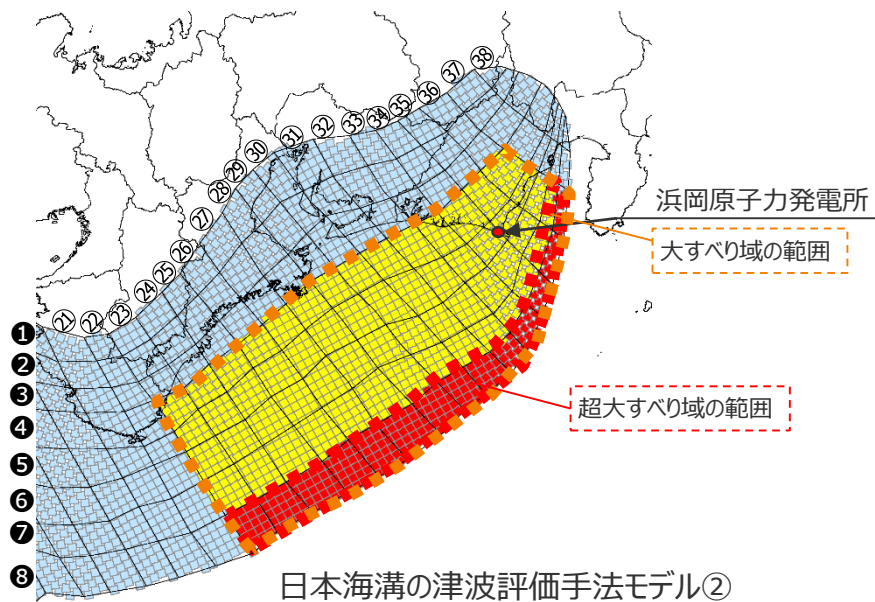


日本海溝の津波評価手法モデル②の大すべり域周辺のすべり量(m)

		遠州灘														駿河湾			
深度40km↓		21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	8.4	8.4	8.3	8.3	8.0	8.6	7.6	7.6	6.4	6.4	5.1	5.1	5.1	5.1	4.5	4.5	3.3	3.3
	2	8.4	8.4	8.3	8.3	8.0	8.6	8.6	7.6	7.6	6.4	6.4	6.4	5.1	5.1	5.1	4.5	4.5	3.3
20km↓	3	8.7	8.4	8.4	8.3	8.0	8.0	8.6	8.6	7.6	7.6	6.4	6.4	6.4	5.1	5.1	4.5	4.5	3.3
	4	8.7	8.4	15.9	15.7	15.7	15.1	18.2	16.2	16.2	14.3	12.1	12.1	12.1	12.1	9.6	9.6	4.5	3.3
10km↓	5	8.7	8.7	15.9	15.7	15.7	15.1	15.1	18.2	16.2	16.2	14.3	14.3	12.1	12.1	9.6	9.6	4.5	4.5
	6	8.7	8.7	15.9	15.9	15.7	15.7	15.1	18.2	18.2	16.2	16.2	14.3	14.3	12.1	12.1	9.6	4.5	4.5
0km↓	7	9.0	8.7	15.9	15.9	15.7	15.7	15.1	15.1	18.2	18.2	16.2	16.2	14.3	14.3	12.1	9.6	4.5	4.5
	8	9.0	8.7	32.8	31.7	31.7	31.3	30.3	30.3	36.5	36.5	36.5	36.5	32.3	32.3	28.5	24.2	19.1	4.5

日本海溝の津波評価手法モデル②の大すべり域周辺の小断層の面積(km²)

		遠州灘														駿河湾			
深度40km↓		21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	360	257	311	337	283	359	434	383	459	457	583	432	408	307	361	287	319	107
	2	359	258	415	391	416	416	439	462	407	330	431	432	409	361	337	287	340	237
20km↓	3	360	284	313	339	472	288	417	462	458	507	508	433	359	360	285	260	339	236
	4	514	492	363	362	360	409	434	484	331	381	355	482	406	485	411	468	429	331
10km↓	5	312	336	359	409	382	431	431	482	483	507	556	404	354	381	231	286	134	116
	6	463	409	432	406	405	404	479	430	455	378	378	428	404	254	308	157	108	87
0km↓	7	454	554	579	578	679	578	528	653	503	378	378	354	280	307	284	236	136	86
	8	552	602	527	627	527	652	552	727	477	453	378	253	279	229	205	208	134	56

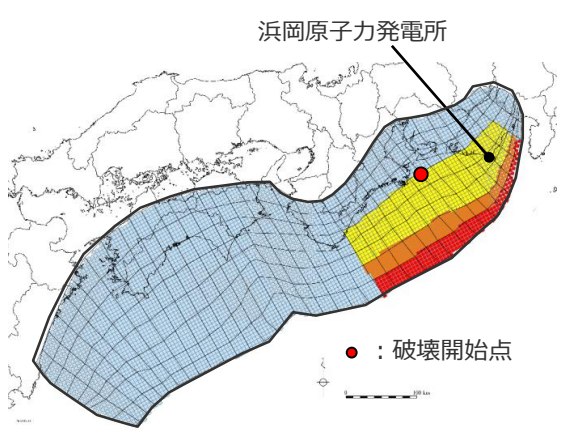


日本海溝の津波評価手法モデル③の設定

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル③の設定 パラメータの設定方法

- 日本海溝の津波評価手法モデル③の設定フローを、以下に示す。
- 日本海溝の津波評価手法モデル③では、敷地周辺の津波に着目した日本海溝の津波評価手法③※を用い、南海トラフおよび国内外の最新の科学的知見について調査し、保守的に東北沖地震を含む国内外の巨大地震の発生事例を踏まえてパラメータを設定した。なお、検討対象海域が日本海溝ではなく南海トラフとなることを踏まえ、波源域に関連するパラメータ（断層の形状・面積・剛性率、沈み込むプレート運動）には、南海トラフの知見を反映した。

※女川原子力発電所2号炉の津波評価における基準断層モデル③の手法（第778回審査会合 資料1-5-1「女川原子力発電所2号炉津波評価について」参照）

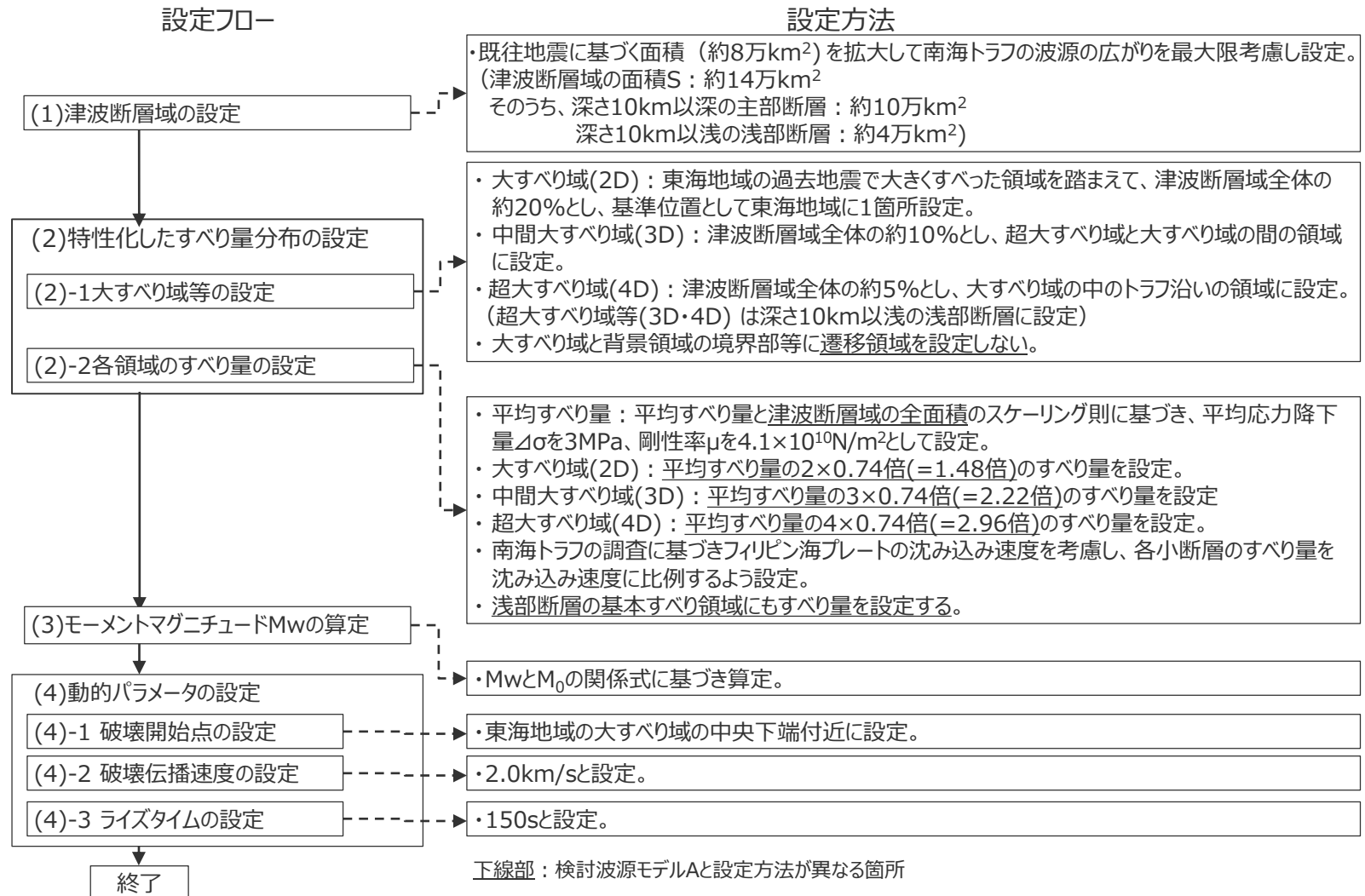


日本海溝の津波評価手法モデル③

- 津波断層域
- 超大すべり域(4D)
- 中間大すべり域(3D)
- 大すべり域(2D)
- 基本すべり域(D)

(D：基本すべり量)

- ・大すべり域の面積には、超大すべり域、中間大すべり域の面積を含む。
- ・中間大すべり域の面積には、超大すべり域の面積を含む。



6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル③の設定 大すべり域の位置

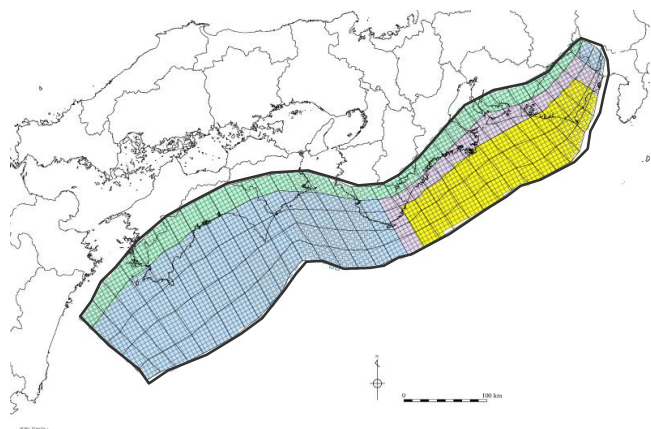
■ 日本海溝の津波評価手法モデル③の大すべり域は、遠州灘沿岸域の痕跡再現モデルに基づき、トラフ軸付近を含めた領域に設定し、これを基準位置とした。

・なお、大すべり域の位置については、別途概略パラメータスタディを実施し、大すべり域の位置を東西に移動させて敷地への影響の大きいケースを検討している。

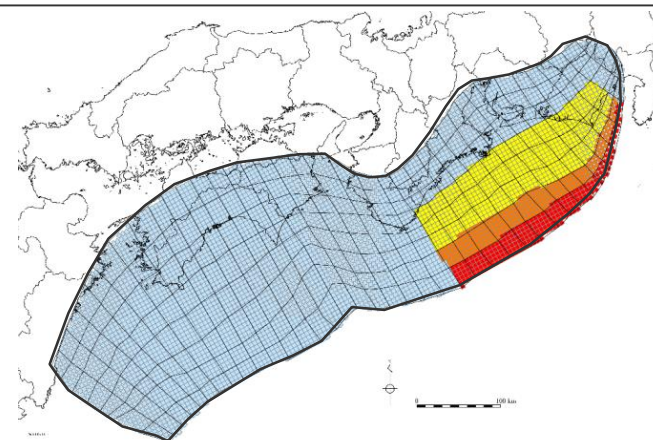
【日本海溝の津波評価手法モデル③の設定】

- ・大すべり域(2D)は、遠州灘沖～紀伊半島沖の深さ約20kmより浅い側の領域に、津波断層域の全面積の約20%の面積で設定した。
- ・中間大すべり域(3D)は、津波断層域の全面積の約10%の面積で、超大すべり域と大すべり域の間の領域に設定した。
- ・超大すべり域(4D)は、津波断層域の全面積の約5%の面積で、大すべり域の中のトラフ軸沿いの領域に設定した。

・D：基本すべり量



遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル



日本海溝の津波評価手法モデル③

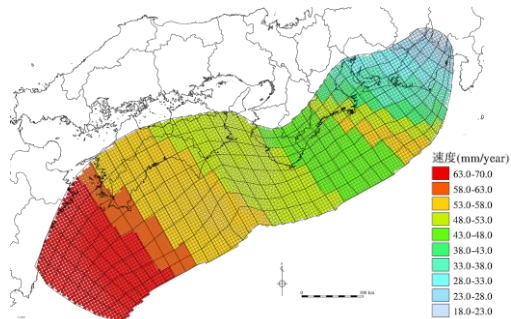
- 津波断層域 ➔ 144,379km²
- 大すべり域(2D) ➔ 津波断層域の全面積の約20%¹⁾
- 中間大すべり域(3D) ➔ 超大すべり域と大すべり域の間の領域 (津波断層域の全面積の約10%²⁾)
- 超大すべり域(4D) ➔ 大すべり域の中のトラフ軸沿いの領域 (津波断層域の全面積の約5%)

1) 大すべり域の面積には、超大すべり域、中間大すべり域の面積を含む。
2) 中間大すべり域の面積には、超大すべり域の面積を含む。

津波断層域
 ■ 超大すべり域
 ■ 中間大すべり域
 ■ 大すべり域
 ■ 遷移領域
 ■ 背景領域もしくは基本すべり域
 ■ 深い背景領域

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル③の設定 すべり量分布の設定方法

- プレート境界面浅部に破壊が伝播するケースのすべり量分布の設定については、各小断層のすべり量をフィリピン海プレートの沈み込み速度に比例するよう設定し、超大すべり域には平均すべり量の4倍、中間大すべり域には3倍、大すべり域には2倍のすべり量を設定した。
- プレート境界面浅部に破壊が伝播するケースのすべり量分布の設定方法は以下のとおり。



(Loveless and Meade(2010)を基に作成)

各小断層の沈み込み速度分布

【すべり量の設定】

平均応力降下量を3MPa、剛性率を $4.1 \times 10^{10} \text{N/m}^2$ として、各小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が津波断層域の全面積のスケーリング則から求められる地震モーメント M_0 になるように設定。

$$M_0 = \sum M_{0i} = \sum \mu D_i S_i \rightarrow \text{小断層毎のすべり量はプレートの沈み込み速度に比例するよう設定。}^{\ast 1}$$

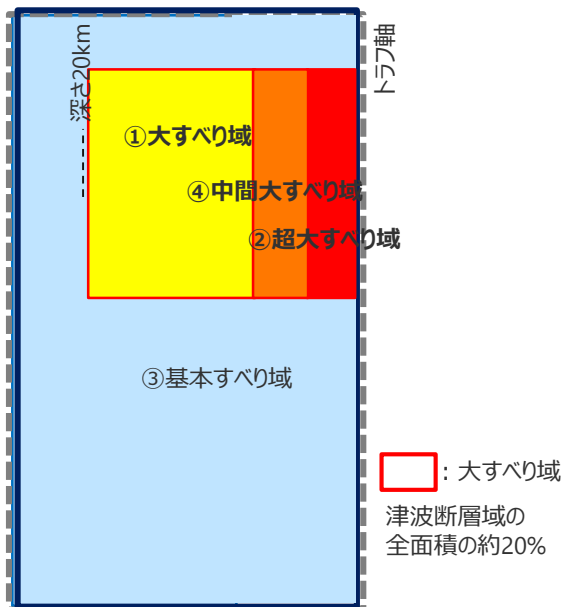
次に、各小断層の平均すべり量 D_i に対して、以下の関係を与えて各小断層のすべり量を設定。

- ① 大すべり域 ■ : $2D_i$ $\ast 2$
- ② 超大すべり域 ■ : $4D_i$ $\ast 2$
- ③ 基本すべり域 ■ : 領域①～④の小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が、 M_0 となるすべり量 D_b を設定
- ④ 中間大すべり域 ■ : $3D_i$ $\ast 2$

D_i : 各小断層の平均すべり量 D_b : 基本すべり量のすべり量(= aD_i 、 a は定数) S_i : 各小断層の面積
 M_0 : スケーリング則から算定される地震モーメント M_{0i} : 各小断層の地震モーメント

$\ast 1$ 内閣府(2012)と同様、上記のすべり量設定を行うにあたり、フィリピン海プレートの沈み込み速度を考慮した痕跡再現モデルにより歴史記録及び津波堆積物調査等による津波痕跡高の再現性を確認。

$\ast 2$ 各小断層の地震モーメントの総和がスケーリング則から算定される地震モーメントと整合するよう、①大すべり域、②超大すべり域、④中間大すべり域のすべり量に係数0.74を乗じた。



日本海溝の津波評価手法モデル③による
すべり量分布概念図

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル③の設定 すべり量分布の設定方法

1. 巨視的波源特性の設定

津波断層域の設定
↓
プレート境界面形状の設定
↓
スケール則の対象とする津波断層域の面積Sの設定
スケール則の対象とする平均応力降下量 $\Delta\sigma$ 、剛性率 μ の設定
↓
・津波断層域全体の平均すべり量Dの算定
・津波断層域全体の地震モーメント M_0 の算定

➢ スケール則の適用
(円形破壊面を仮定した関係式)

プレート境界面 (すべり量分布のブロック割図)

各パラメータ一覧

項目	設定方法	設定値
津波断層域の面積S	駿河湾～日向灘沖の深さ0km～40kmの領域	144,379(km ²)
スケール則の対象とする平均応力降下量 $\Delta\sigma$	内閣府(2012)、Murotani et al.(2013)	3.0(MPa)
スケール則の対象とする剛性率 μ	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
津波断層域全体の平均すべり量D	$16/(7\pi^{3/2}) \cdot \Delta\sigma \cdot S^{1/2} / \mu$	11.4(m)
津波断層域全体の地震モーメント M_0	μDS	6.8×10 ²² (Nm)

2. 微視的波源特性の設定

各領域のすべり量の設定、地震モーメントの合計値 M_0' の算定

➢ 断層面積 $S_4 \sim S_1$ 、すべり量 $D_4 \sim D_1$ 、地震モーメント $M_{04} \sim M_{01}$ の算定

項目	設定方法	設定値
超大すべり域 断層面積 S_4	津波断層域の断層面積Sの5%	7,219(km ²)
平均すべり量 D_4	津波断層域の平均すべり量Dの4倍	45.7(m)
剛性率 μ	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
地震モーメント M_{04}	$\mu D_4 S_4$	1.4×10 ²² (Nm)
中間大すべり域 断層面積 S_3	津波断層域の断層面積Sの5%	7,219(km ²)
平均すべり量 D_3	津波断層域の平均すべり量Dの3倍	34.2(m)
剛性率 μ	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
地震モーメント M_{03}	$\mu D_3 S_3$	1.0×10 ²² (Nm)
大すべり域 断層面積 S_2	津波断層域の断層面積Sの10%	14,438(km ²)
平均すべり量 D_2	津波断層域の平均すべり量Dの2倍	22.8(m)
剛性率 μ	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
地震モーメント M_{02}	$\mu D_2 S_2$	1.4×10 ²² (Nm)
基本すべり域 断層面積 S_1	津波断層域の断層面積Sの80%	115,504(km ²)
平均すべり量 D_1	津波断層域の平均すべり量Dの1倍	11.4(m)
剛性率 μ	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
地震モーメント M_{01}	$\mu D_1 S_1$	5.4×10 ²² (Nm)
地震モーメント M_0'	$M_{04} + M_{03} + M_{02} + M_{01}$	9.1×10 ²² (Nm)

地震モーメントの調整 (すべり量の調整)

➢ $M_0 / M_0' = 6.8 \times 10^{22} \text{ (Nm)} \div 9.1 \times 10^{22} \text{ (Nm)} = 0.74$
 ➢ 上記係数を用いて、各領域のすべり量を一律に調整する。

	調整前	調整後
超大すべり域	45.7(m)	33.8(m)
中間大すべり域	34.2(m)	25.4(m)
大すべり域	22.8(m)	16.9(m)
基本すべり域	11.4(m)	8.5(m)

・基本すべり域の平均すべり量を、基本すべり量とする。

3. 日本海溝の津波評価手法モデルの設定

断層モデルへの微視的波源特性の反映 (次頁以降参照)

➢ 設定したプレート境界面 (すべり量分布のブロック割図) に微視的波源特性を反映
 ➢ 各小断層のすべり量をフィリピン海プレートの沈み込み速度に比例するよう設定
 ➢ 上記設定による地震モーメントの変化分を、背景領域のすべり量で調整

モーメントマグニチュード M_w の算定

津波断層域
超大すべり域
中間大すべり域
大すべり域
基本すべり域

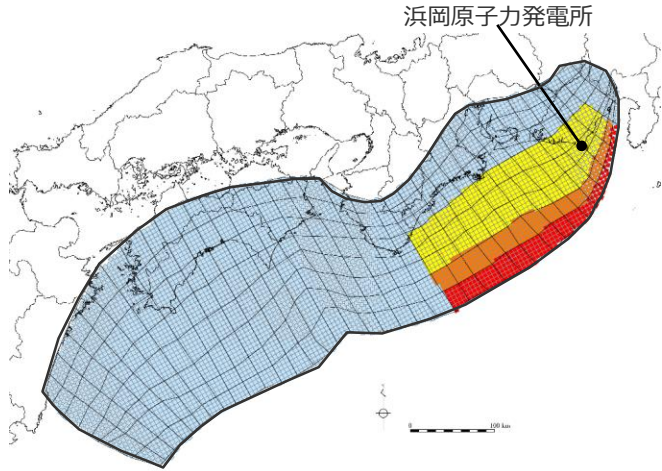
項目	設定値
津波断層域の面積S	144,379(km ²)
地震モーメント M_0	6.8×10 ²² (Nm)
M_w	9.2
平均応力降下量 $\Delta\sigma^*$	3.0(MPa)
平均すべり量D	11.4(m)
最大すべり量 D_{max}	35.1(m)
剛性率 μ	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
破壊伝播速度 v_r	2.0(km/s)
すべり角 λ	フィリピン海プレートの運動方向に基づいて設定
ライズタイム τ	150(s)

※ スケール則の対象とした平均応力降下量

・「日本海溝の津波評価手法②③の検証事例のモデル」は、「日本海溝の津波評価手法①の検証事例のモデル」との断層面積比率を考慮して、大すべり域・超大すべり域のすべり量の割増しと、それに応じて基本すべり域のすべり量を割引いた背景領域を設定する考え方の手法となっている。(第778回審査会合 資料1-5-1「女川原子力発電所2号炉津波評価について」p.54参照)
 当社の「日本海溝の津波評価手法モデル②③」は、「日本海溝の津波評価手法モデル①」との断層面積比率が1であることから、大すべり域・超大すべり域のすべり量を割増しせず、それに応じて背景領域を設定せずにモデル設定を行った。

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル③の設定 すべり量分布の設定方法

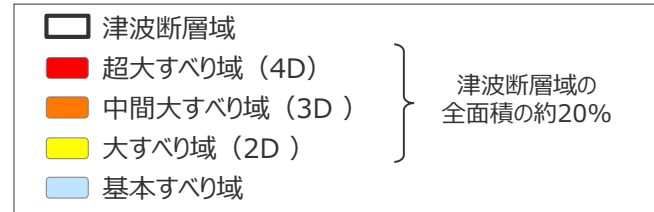
■ 日本海溝の津波評価手法モデル③の各小断層のすべり量分布は以下のとおり。



日本海溝の津波評価手法モデル③

日本海溝の津波評価手法モデル③

最大すべり量 (m)	平均すべり量 (m)
35.1	11.4



・D：基本すべり量

日本海溝の津波評価手法モデル③ のすべり量分布 (m)

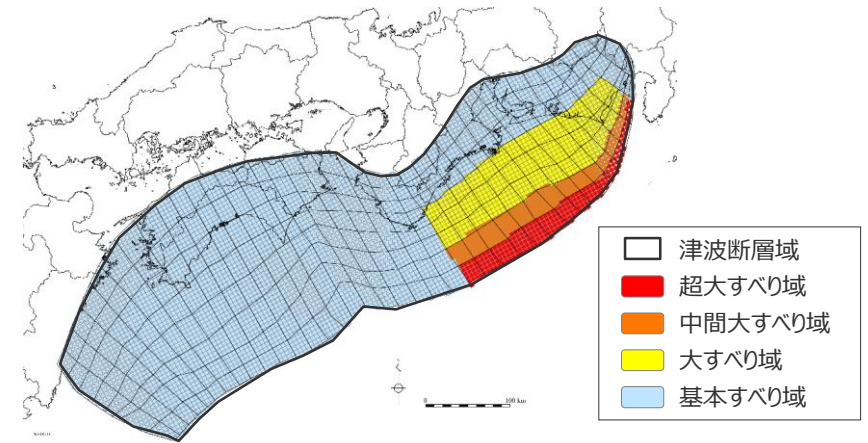
		西 ← → 東																																							
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
陸側 ⇄ 海溝軸 ⇄	深度40km↓																																								
	30km↓	1	12.2	12.2	11.8	11.8	11.5	11.5	10.4	10.1	9.8	9.6	9.6	9.2	9.0	9.0	8.8	8.8	8.8	8.5	8.5	8.5	8.2	8.2	8.1	8.1	7.8	8.4	7.4	7.4	6.3	6.3	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.4	4.4	3.2	3.2
	20km↓	2	12.2	12.2	11.8	11.8	11.5	11.5	10.4	10.1	10.1	9.8	9.6	9.6	9.2	9.0	8.8	8.8	8.8	8.5	8.5	8.5	8.2	8.2	8.1	8.1	7.8	8.4	8.4	7.4	7.4	6.3	6.3	6.3	5.0	5.0	5.0	4.4	4.4	3.2	
		3	12.2	12.2	11.8	11.8	11.5	11.5	10.4	10.4	10.1	9.8	9.8	9.6	9.2	9.2	9.0	9.0	8.8	8.8	8.5	8.5	8.5	8.2	8.2	8.1	7.8	7.8	8.4	8.4	7.4	7.4	6.3	6.3	6.3	5.0	5.0	4.4	4.4	3.2	
	10km↓	4	12.2	12.2	11.8	11.8	11.5	11.5	10.4	10.4	10.1	10.1	9.8	9.6	9.6	9.2	9.0	9.0	8.8	8.8	8.8	8.5	8.5	8.2	15.3	15.1	15.1	14.6	17.6	15.6	15.6	13.7	11.6	11.6	11.6	11.6	9.2	9.2	4.4	3.2	
		5	12.2	12.2	11.8	11.8	11.5	11.5	11.5	10.4	10.4	10.1	9.8	9.8	9.6	9.6	9.2	9.0	9.0	8.8	8.8	8.8	8.5	8.5	8.5	15.3	15.1	15.1	14.6	14.6	17.6	15.6	15.6	13.7	13.7	11.6	11.6	9.2	9.2	4.4	4.4
	0km↓	6	12.2	12.2	11.8	11.8	11.5	11.5	11.5	10.4	10.4	10.1	10.1	9.8	9.6	9.6	9.2	9.0	9.0	9.0	8.8	8.8	8.5	8.5	8.5	22.9	22.9	22.6	22.6	21.9	21.9	26.3	26.3	23.4	23.4	20.6	20.6	17.5	13.8	4.4	4.4
		7	12.2	12.2	11.8	11.8	11.5	11.5	11.5	10.4	10.4	10.1	10.1	10.1	9.8	9.6	9.2	9.2	9.0	9.0	9.0	8.8	8.8	8.5	8.5	31.6	30.6	30.6	30.2	29.1	29.1	35.1	35.1	35.1	31.1	31.1	27.4	23.3	18.4	4.4	4.4

- すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
- 駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10km の位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす（内閣府(2012)）とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル③の設定 断層パラメータ

日本海溝の津波評価手法モデル③の断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	6.8×10^{22}
	Mw	9.2
	平均応力降下量 (MPa)*	3.0
	平均すべり量 (m)	11.4
	最大すべり量 (m)	35.1
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	4.5×10^{22}
	平均すべり量 (m)	10.0
	最大すべり量 (m)	17.6
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	2.3×10^{22}
	平均すべり量 (m)	15.9
	最大すべり量 (m)	35.1



日本海溝の津波評価手法モデル③

主部断層：深さ10km以深の断層
浅部断層：深さ10km以浅の断層

*スケーリング則の対象とした平均応力降下量

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル③の設定 (超大すべり域・大すべり域のすべり量)

- 日本海溝の津波評価手法モデル③は、南海トラフにおけるフィリピン海プレートの沈み込み速度を考慮して設定しており、すべり量の設定は小断層ごとに異なっている。
- 津波評価に影響の大きい日本海溝の津波評価手法モデル③の超大すべり域、大すべり域のすべり量について、平均値および最大値を算出した結果は以下のとおり。
超大すべり域の平均すべり量は、約31.0mとなっている。

日本海溝の津波評価手法モデル③のすべり量

項目	算定値	
超大すべり域	平均	31.0m
	最大	35.1m
大すべり域	平均	17.0m
	最大	26.3m
平均すべり量	11.4m	

- 超大すべり域、大すべり域の平均すべり量の算定方法
遠州灘沖の各小断層のすべり量と面積から重みを考慮して算出。
なお、津波励起に寄与しない陸域の小断層のすべり量は含めない。
 $D_{ave} = \sum(D_i \cdot S_i) \div \sum S_i$
 D_i : 各小断層のすべり量、 S_i : 各小断層の面積
- 陸域の小断層については、灰色の文字で記載。

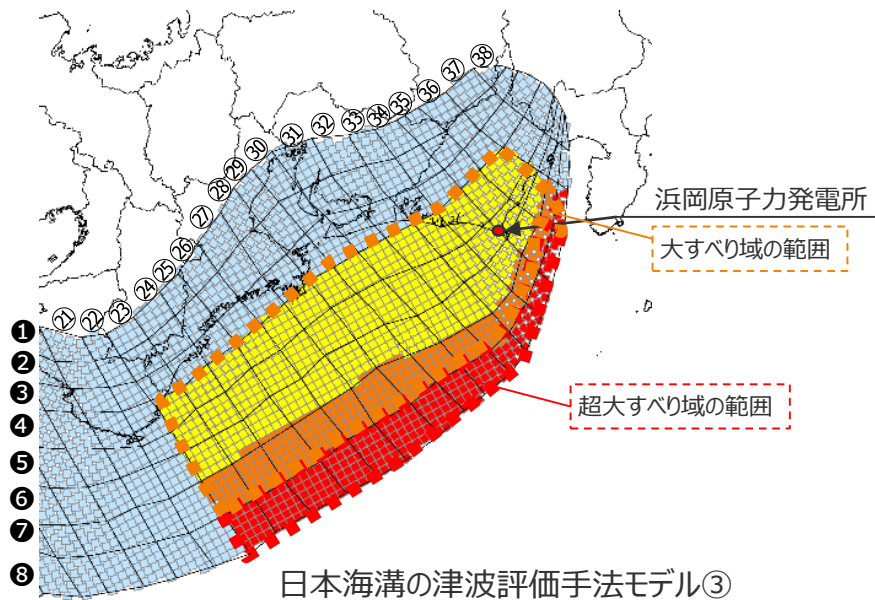
 超大すべり域
 大すべり域
 (中間大すべり域を含む)

日本海溝の津波評価手法モデル③の大すべり域周辺のすべり量(m)

		遠州灘														駿河湾			
深度40km↓		21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	8.2	8.2	8.1	8.1	7.8	8.4	7.4	7.4	6.3	6.3	5.0	5.0	5.0	5.0	4.4	4.4	3.2	3.2
	2	8.2	8.2	8.1	8.1	7.8	8.4	8.4	7.4	7.4	6.3	6.3	6.3	5.0	5.0	5.0	4.4	4.4	3.2
20km↓	3	8.5	8.2	8.2	8.1	7.8	7.8	8.4	8.4	7.4	7.4	6.3	6.3	6.3	5.0	5.0	4.4	4.4	3.2
	4	8.5	8.2	15.3	15.1	15.1	14.6	17.6	15.6	15.6	13.7	11.6	11.6	11.6	11.6	9.2	9.2	4.4	3.2
10km↓	5	8.5	8.5	15.3	15.1	15.1	14.6	14.6	17.6	15.6	15.6	13.7	13.7	11.6	11.6	9.2	9.2	4.4	4.4
	6	8.5	8.5	15.3	15.3	15.1	15.1	14.6	17.6	17.6	15.6	15.6	13.7	13.7	11.6	11.6	9.2	4.4	4.4
0km↓	7	8.8	8.5	22.9	22.9	22.6	22.6	21.9	21.9	26.3	26.3	23.4	23.4	20.6	20.6	17.5	13.8	4.4	4.4
	8	8.8	8.5	31.6	30.6	30.6	30.2	29.1	29.1	35.1	35.1	35.1	31.1	31.1	27.4	23.3	18.4	4.4	4.4

日本海溝の津波評価手法モデル③の大すべり域周辺の小断層の面積(km²)

		遠州灘														駿河湾			
深度40km↓		21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	360	257	311	337	283	359	434	383	459	457	583	432	408	307	361	287	319	107
	2	359	258	415	391	416	416	439	462	407	330	431	432	409	361	337	287	340	237
20km↓	3	360	284	313	339	472	288	417	462	458	507	508	433	359	360	285	260	339	236
	4	514	492	363	362	360	409	434	484	331	381	355	482	406	485	411	468	429	331
10km↓	5	312	336	359	409	382	431	431	482	483	507	556	404	354	381	231	286	134	116
	6	463	409	432	406	405	404	479	430	455	378	378	428	404	254	308	157	108	87
0km↓	7	454	554	579	578	679	578	528	653	503	378	378	354	280	307	284	236	136	86
	8	552	602	527	627	527	652	552	727	477	453	378	253	279	229	205	208	134	56

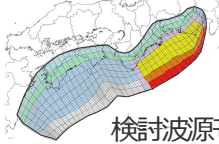
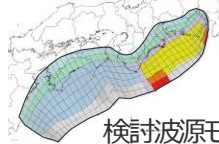
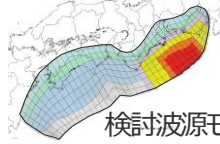

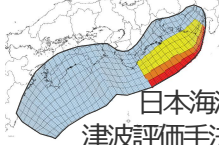
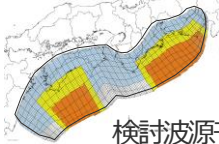
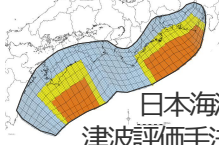


6-7 日本海溝の手法による妥当性確認

日本海溝の津波評価手法モデルと浅部の破壊形態

■ 日本海溝の津波評価手法モデル①～③および検討波源モデルCの「断層破壊がプレート境界面浅部に伝播する場合」と「超大すべり域の深さを広域モデルと同じとした場合」の検討は、検討波源モデルの津波評価結果等から、他のモデルによる検討で代表できると評価した。

各波源モデルと浅部の破壊形態

		浅部の破壊形態		
		断層破壊がプレート境界面浅部に伝播する場合	断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播する場合	超大すべり域の深さを広域モデルと同じとした場合
特性化方法 (特性化したすべり量と面積割合の設定方法)	敷地周辺の津波に着目したモデル	 検討波源モデルA	 検討波源モデルB	 検討波源モデルD
		 日本海溝の津波評価手法モデル②	左記のモデルで代表 (※1)	上記のモデルで代表 (※2)
		 日本海溝の津波評価手法モデル③	左記のモデルで代表 (※1)	上記のモデルで代表 (※2)
	南海トラフ広域の津波に着目したモデル	 検討波源モデルC	左記のモデルで代表 (※1)	/
		 日本海溝の津波評価手法モデル①	左記のモデルで代表 (※1)	

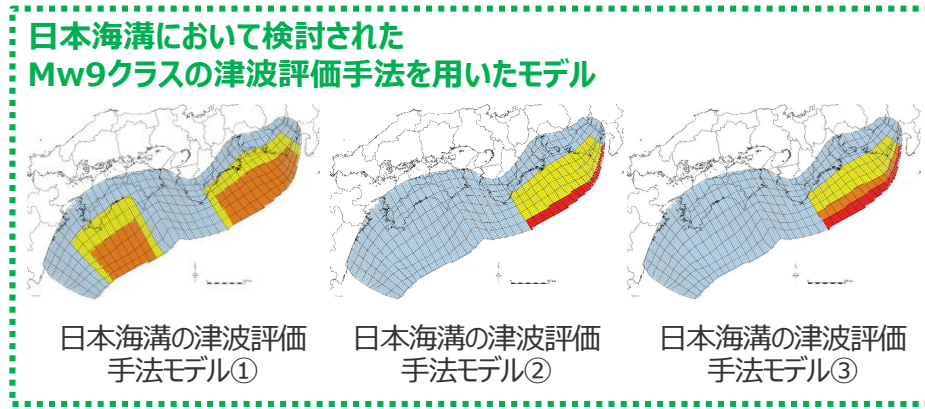
※1 「断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播する場合」の検討は、「断層破壊がプレート境界面浅部に伝播する場合」である検討波源モデルAの津波評価結果が「断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播する場合」である検討波源モデルBの津波評価結果を上回ることから、「断層破壊がプレート境界面浅部に伝播する場合」の検討で代表できると評価した。
 ※2 「日本海溝の津波評価手法モデル②、③」の検討は、検討波源モデルAの津波評価結果が「日本海溝の津波評価手法モデル②、③」の津波評価結果を上回ることから、超大すべり域の深さを広域モデルと同じとした場合の検討は、この検討波源モデルAをもとに超大すべり域の深さを広域モデルと同じとした検討波源モデルDの検討で代表できると評価した。

日本海溝の津波評価手法モデルの大すべり域の位置に関するパラメータスタディ

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認

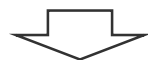
(補足) 日本海溝の津波評価手法モデルの大すべり域の位置に関するパラメータスタディ (検討方針)

- 日本海溝において検討された「日本海溝の津波評価手法モデル」は、日本海溝の海底地形、構造、地震学的な特徴が考慮された日本海溝のMw9クラスの地震の波源設定方法によるモデルであるため、その波源設定方法を南海トラフの検討波源モデルに直接取り込むことはできないが、日本海溝の津波評価手法によるモデルの影響確認として、日本海溝の津波評価手法モデルの概略パラメータスタディ（大すべり域の位置の不確かさ考慮）を実施し、検討波源モデルによる評価結果と比較することにより、すべり量分布等の波源設定の違いによる津波評価への影響を確認した。
- なお、当該検討では比較のため、日本海溝の津波評価手法モデルの動的パラメータの条件は、検討波源モデルの概略パラメータスタディの条件と同じ、ライズタイム150s、同時破壊として検討した。また参考として、日本海溝モデルの概略パラメータスタディの結果、敷地への影響の大きい大すべり域の位置について、ライズタイム60s・同時破壊とした検討も実施した。



概略パラメータスタディ
(大すべり域の位置の
不確かさ考慮)

- ・ 日本海溝の津波評価手法に基づき、敷地に近い東海地域の大すべり域の位置を東西へ約10kmずつ移動させた影響検討を実施。
- ・ 動的パラメータの条件は、検討波源モデルによる検討の条件と同じ、ライズタイム150s・同時破壊として検討。
(参考として、日本海溝モデルの概略パラメータスタディの結果、敷地への影響の大きい大すべり域の位置について、ライズタイム60s・同時破壊とした検討も実施)



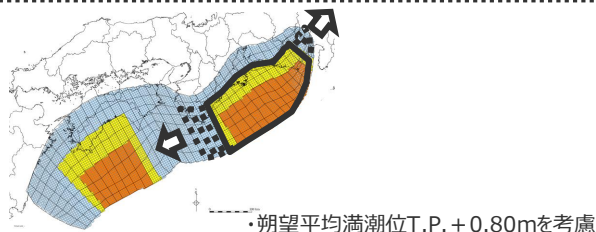
検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果と比較

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認

(補足) 日本海溝の津波評価手法モデルの大すべり域の位置に関するパラメータスタディ (日本海溝の津波評価手法モデル①：ライズタイム150s・同時破壊の条件)

■ 大すべり域の位置の影響検討の結果、水位上昇側では大すべり域を東へ60km移動したモデル、水位下降側では大すべり域を東へ60km移動したモデルの影響が大きい。

水位上昇側

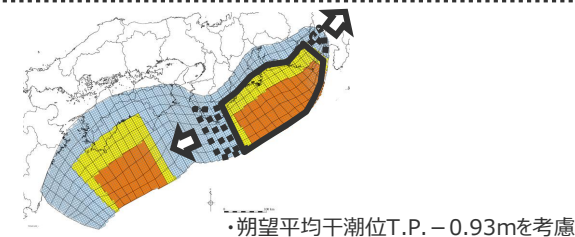


大すべり域の位置	最大上昇水位(T.P. m)				
	敷地前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
E3.0(東へ60km)*	14.2 (14.16)	5.7 (5.70)	8.0 (7.98)	8.3	10.2 (10.18)
E2.5(東へ50km)	14.2 (14.15)	5.7 (5.69)	8.0 (7.97)	8.2	10.2 (10.17)
E2.0(東へ40km)	14.2 (14.14)	5.7 (5.67)	8.0 (7.96)	8.2	10.2 (10.16)
E1.5(東へ30km)	14.2 (14.12)	5.7 (5.67)	8.0 (7.95)	8.2	10.2 (10.15)
E1.0(東へ20km)	14.1	5.7 (5.67)	8.0 (7.95)	8.2	10.2 (10.14)
E0.5(東へ10km)	14.1	5.7 (5.66)	8.0 (7.94)	8.2	10.2 (10.11)
0 (基準位置)	13.8	5.7 (5.65)	7.9	8.1	10.1
W0.5(西へ10km)	13.1	5.6	7.7	7.8	9.6
W1.0(西へ20km)	12.7	5.1	7.1	7.3	9.1
W1.5(西へ30km)	11.1	4.4	6.4	6.4	8.2
W2.0(西へ40km)	10.6	4.1	6.4	6.3	7.5
W2.5(西へ50km)	10.6	3.9	6.3	6.2	7.8
W3.0(西へ60km)	9.8	4.1	6.3	6.1	7.8
W3.5(西へ70km)	11.6	4.5	6.4	6.3	8.2
W4.0(西へ80km)	13.8	4.7	6.6	6.5	8.2

■ : 日本海溝の津波評価手法モデル①のうち、最大上昇水位が最も大きいケース

・小数点第一位までの津波評価結果から、津波影響を代表する(その他のケースによる津波影響を包絡する)ケースを選定した。
・小数点第一位までの津波評価結果からでは、ケースを絞り込めない場合には、さらに小さい桁数まで比較し選定した。

水位下降側



大すべり域の位置	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
E3.0(東へ60km)*	9.5 (9.47)	9.6 (9.60)
E2.5(東へ50km)	9.5 (9.44)	9.6 (9.60)
E2.0(東へ40km)	9.1	9.2
E1.5(東へ30km)	8.1	8.1
E1.0(東へ20km)	7.1	7.1
E0.5(東へ10km)	7.1	7.0
0 (基準位置)	6.9	6.8
W0.5(西へ10km)	7.0	6.9
W1.0(西へ20km)	8.9	9.1
W1.5(西へ30km)	8.3	8.5
W2.0(西へ40km)	8.2	8.3
W2.5(西へ50km)	7.7	7.8
W3.0(西へ60km)	7.6	7.6
W3.5(西へ70km)	7.6	7.6
W4.0(西へ80km)	8.0	8.0

■ : 日本海溝の津波評価手法モデル①のうち、水位低下時間が最も長いケース

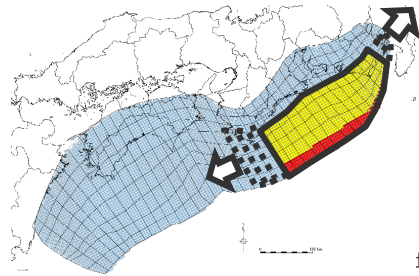
* 超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認

(補足) 日本海溝の津波評価手法モデルの大すべり域の位置に関するパラメータスタディ (日本海溝の津波評価手法モデル②：ライズタイム150s・同時破壊の条件)

■ 大すべり域の位置の影響検討の結果、水位上昇側では大すべり域を東へ40km移動したモデル、水位下降側では大すべり域を西へ10km移動したモデルの影響が大きい。

水位上昇側



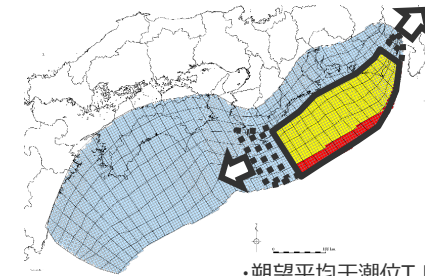
均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

大すべり域の位置	最大上昇水位(T.P. m)				
	敷地前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
E2.0(東へ40km)*	10.1 (10.03)	4.4 (4.37)	6.3 (6.28)	6.2 (6.20)	8.2 (8.14)
E1.5(東へ30km)	10.1 (10.02)	4.4 (4.37)	6.3 (6.27)	6.2 (6.19)	8.2 (8.14)
E1.0(東へ20km)	10.1 (10.01)	4.4 (4.36)	6.3 (6.27)	6.2 (6.19)	8.2 (8.13)
E0.5(東へ10km)	10.0	4.4 (4.36)	6.3 (6.26)	6.2 (6.19)	8.2 (8.13)
0 (基準位置)	10.0	4.4 (4.36)	6.3 (6.26)	6.2 (6.19)	8.2 (8.13)
W0.5(西へ10km)	10.0	4.4 (4.36)	6.3 (6.26)	6.2 (6.18)	8.2 (8.12)
W1.0(西へ20km)	9.6	4.4 (4.34)	6.3 (6.22)	6.2 (6.16)	8.1
W1.5(西へ30km)	9.0	4.3	6.1	6.1	7.5
W2.0(西へ40km)	8.1	3.8	5.2	5.2	6.4
W2.5(西へ50km)	7.6	3.6	5.0	4.9	5.5
W3.0(西へ60km)	6.6	3.5	4.4	4.3	5.0
W3.5(西へ70km)	6.6	3.7	4.4	4.4	5.2
W4.0(西へ80km)	6.2	4.0	4.6	4.6	5.0

■ : 日本海溝の津波評価手法モデル②のうち、最大上昇水位が最も大きいケース

・小数点第一位までの津波評価結果から、津波影響を代表する(その他のケースによる津波影響を包絡する)ケースを選定した。
・小数点第一位までの津波評価結果からでは、ケースを絞り込めない場合には、さらに小さい桁数まで比較し選定した。

水位下降側



・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮

大すべり域の位置	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
E2.0(東へ40km)*	4.2	4.2
E1.5(東へ30km)	4.2	4.2
E1.0(東へ20km)	4.2	4.2
E0.5(東へ10km)	4.3	4.2
0 (基準位置)	4.3	4.3
W0.5(西へ10km)	4.6	4.6
W1.0(西へ20km)	4.4	4.4
W1.5(西へ30km)	4.2	4.1
W2.0(西へ40km)	4.1	4.0
W2.5(西へ50km)	3.8	3.8
W3.0(西へ60km)	3.7	3.7
W3.5(西へ70km)	3.2	3.1
W4.0(西へ80km)	2.9	2.9

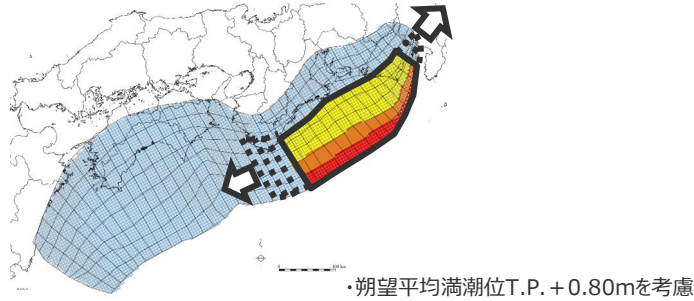
■ : 日本海溝の津波評価手法モデル②のうち、水位低下時間が最も長いケース

* 超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 (補足) 日本海溝の津波評価手法モデルの大すべり域の位置に関するパラメータスタディ (日本海溝の津波評価手法モデル③：ライズタイム150s・同時破壊の条件)

■ 大すべり域の位置の影響検討の結果、水位上昇側では大すべり域を東へ40km移動したモデル、水位下降側では大すべり域を西へ10km移動したモデルの影響が大きい。

水位上昇側

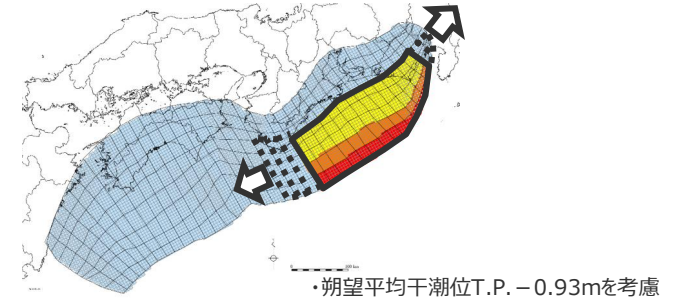


大すべり域の位置	最大上昇水位(T.P. m)				
	敷地前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
E2.0(東へ40km)*	16.4 (16.40)	4.4 (4.35)	6.9 (6.82)	7.5 (7.45)	9.4 (9.39)
E1.5(東へ30km)	16.4 (16.39)	4.4 (4.34)	6.9 (6.82)	7.5 (7.44)	9.4 (9.39)
E1.0(東へ20km)	16.4 (16.38)	4.4 (4.34)	6.9 (6.81)	7.5 (7.44)	9.4 (9.38)
E0.5(東へ10km)	16.4 (16.37)	4.4 (4.33)	6.9 (6.81)	7.5 (7.43)	9.4 (9.38)
0 (基準位置)	16.4 (16.36)	4.4 (4.33)	6.9 (6.81)	7.5 (7.43)	9.4 (9.38)
W0.5(西へ10km)	16.4 (16.34)	4.4 (4.33)	6.8	7.5 (7.43)	9.4 (9.38)
W1.0(西へ20km)	15.9	4.4 (4.31)	6.8	7.4	9.4 (9.33)
W1.5(西へ30km)	14.4	4.3	6.7	7.2	9.2
W2.0(西へ40km)	12.8	3.9	6.2	6.5	8.5
W2.5(西へ50km)	10.4	3.6	5.6	5.6	7.0
W3.0(西へ60km)	7.9	3.6	4.8	4.8	5.9
W3.5(西へ70km)	7.4	3.7	4.5	4.5	5.7
W4.0(西へ80km)	6.9	4.0	4.9	4.9	5.5

■ : 日本海溝の津波評価手法モデル③のうち、最大上昇水位が最も大きいケース

・小数点第一位までの津波評価結果から、津波影響を代表する(その他のケースによる津波影響を包絡する)ケースを選定した。
・小数点第一位までの津波評価結果からでは、ケースを絞り込めない場合には、さらに小さい桁数まで比較し選定した。

水位下降側



大すべり域の位置	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
E2.0(東へ40km)*	4.0	4.0
E1.5(東へ30km)	4.0	4.0
E1.0(東へ20km)	4.0	4.0
E0.5(東へ10km)	4.0	4.0
0 (基準位置)	4.1	4.1
W0.5(西へ10km)	4.5	4.5
W1.0(西へ20km)	4.3	4.3
W1.5(西へ30km)	4.0	4.0
W2.0(西へ40km)	4.0	3.9
W2.5(西へ50km)	3.6	3.6
W3.0(西へ60km)	3.5	3.5
W3.5(西へ70km)	3.0	3.1
W4.0(西へ80km)	2.7	2.7

■ : 日本海溝の津波評価手法モデル③のうち、水位低下時間が最も長いケース

*超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース

- 日本海溝の津波評価手法を用いたモデルの津波評価結果は、検討波源モデルの概略パラメータスタディの津波評価結果を下回り、検討波源モデルの津波評価結果がより保守的な津波評価となっていることを確認した。

検討波源モデル (ライズタイム150s・同時破壊の条件)

モデル名	最大上昇水位(T.P. m)					備考
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
検討波源モデルA (基準断層モデル1-1) (断層破壊がプレート境界面浅部に伝播するモデル)	19.7	4.7	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域1箇所：東へ40km ライズタイム150s、同時破壊
検討波源モデルD (基準断層モデル3-2) (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	16.5	6.2	8.7	9.3	11.3	東海地域の大すべり域1箇所：東へ60km ライズタイム150s、同時破壊



日本海溝の津波評価手法を用いたモデルの津波評価結果は、検討波源モデルの概略パラメータスタディの津波評価結果を下回り、検討波源モデルの津波評価結果は、より保守的な津波評価となっていることを確認。

日本海溝の津波評価手法モデル (ライズタイム150s・同時破壊の条件)

モデル名	最大上昇水位(T.P. m)					備考
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
日本海溝の津波評価手法モデル①	14.2	5.7	8.0	8.3	10.2	大すべり域：東へ60km ライズタイム150s、同時破壊
日本海溝の津波評価手法モデル②	10.1	4.4	6.3	6.2	8.2	大すべり域：東へ40km ライズタイム150s、同時破壊
日本海溝の津波評価手法モデル③	16.4	4.4	6.9	7.5	9.4	大すべり域：東へ40km ライズタイム150s、同時破壊

(参考) 日本海溝の津波評価手法モデル (ライズタイム60s・同時破壊の条件)

モデル名	最大上昇水位(T.P. m)					備考
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
日本海溝の津波評価手法モデル① (ライズタイム60s)	18.6	5.8	8.2	8.6	10.5	大すべり域：東へ60km ライズタイム60s、同時破壊
日本海溝の津波評価手法モデル② (ライズタイム60s)	14.4	4.5	6.5	6.6	8.2	大すべり域：東へ40km ライズタイム60s、同時破壊
日本海溝の津波評価手法モデル③ (ライズタイム60s)	19.4	4.5	7.0	7.7	9.7	大すべり域：東へ40km ライズタイム60s、同時破壊

・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認

(補足) 日本海溝の津波評価手法モデルの大すべり域の位置に関するパラメータスタディ (津波評価結果の比較 (水位下降側))

- 日本海溝の津波評価手法を用いたモデルの津波評価結果は、検討波源モデルの概略パラメータスタディの津波評価結果を下回り、検討波源モデルの津波評価結果がより保守的な津波評価となっていることを確認した。

検討波源モデル (ライズタイム150s・同時破壊の条件)

モデル名	最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
	3号取水塔	4号取水塔	
検討波源モデルA (基準断層モデル2-1) (断層破壊がプレート境界面浅部に伝播するモデル)	海底面 (12.6min)	海底面 (12.5min)	東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離130km ライズタイム150s、同時破壊



日本海溝の津波評価手法を用いたモデルの津波評価結果は、検討波源モデルの概略パラメータスタディの津波評価結果を下回り、検討波源モデルの津波評価結果は、より保守的な津波評価となっていることを確認。

日本海溝の津波評価手法モデル (ライズタイム150s・同時破壊の条件)

モデル名	最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
	3号取水塔	4号取水塔	
日本海溝の津波評価手法モデル①	海底面 (9.5min)	海底面 (9.6min)	大すべり域：東へ60km ライズタイム150s、同時破壊
日本海溝の津波評価手法モデル②	海底面 (4.6min)	海底面 (4.6min)	大すべり域：西へ10km ライズタイム150s、同時破壊
日本海溝の津波評価手法モデル③	海底面 (4.5min)	海底面 (4.5min)	大すべり域：西へ10km ライズタイム150s、同時破壊

(参考) 日本海溝の津波評価手法モデル (ライズタイム60s・同時破壊の条件)

モデル名	最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
	3号取水塔	4号取水塔	
日本海溝の津波評価手法モデル① (ライズタイム60s)	海底面 (11.0min)	海底面 (10.7min)	大すべり域：東へ60km ライズタイム60s、同時破壊
日本海溝の津波評価手法モデル② (ライズタイム60s)	海底面 (4.3min)	海底面 (4.3min)	大すべり域：西へ10km ライズタイム60s、同時破壊
日本海溝の津波評価手法モデル③ (ライズタイム60s)	海底面 (4.2min)	海底面 (4.3min)	大すべり域：西へ10km ライズタイム60s、同時破壊

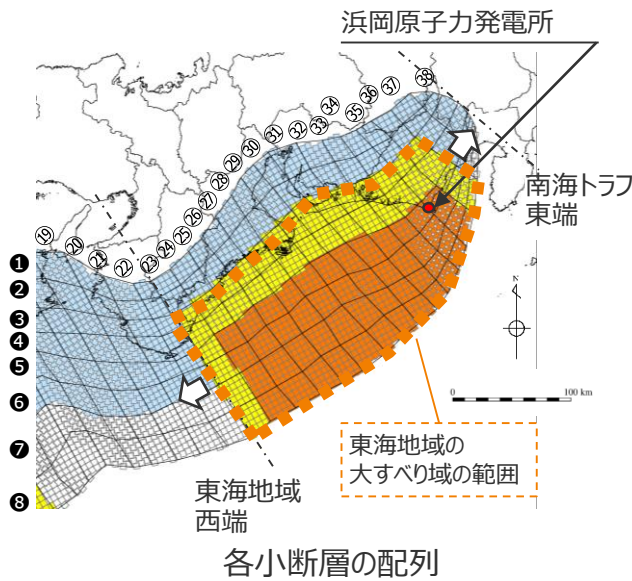
- ・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮
- ・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している (水深1m未満である) ことを示す。

余 白

日本海溝の津波評価手法モデル①～③のパラメータスタディモデル

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル①のパラメータスタディモデルの設定 (大すべり域の位置および面積)

- 日本海溝の津波評価手法に基づき、敷地に近い東海地域の大すべり域の位置を東西へ約10kmずつ移動させた影響検討を実施し、敷地への影響の大きい位置を設定した。
- 検討した大すべり域の位置および面積は以下のとおり。
なお、小断層サイズとの関係により、大すべり域の面積は主部断層の全面積の厳密に40%とはならず、ケースにより若干異なる。
- 影響検討の結果、設定したパラメータスタディモデルを次頁以降に示す。
(なお、影響検討の詳細は、後述の「日本海溝の津波評価手法モデル①～③のための影響検討」を参照)



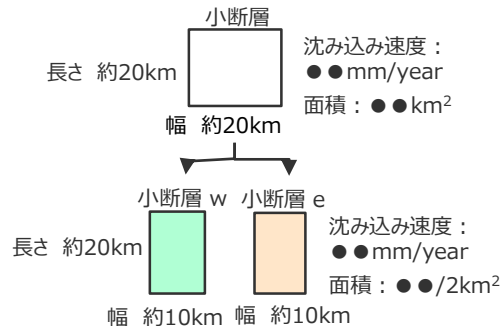
各ケースの大すべり域の設定

大すべり域 の位置	大すべり域の設定																																						面積 (km ²)	面積比※ (%)	
	設定した小断層の東西の範囲 (列は左図参照)																																								
	5	6	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38										
	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w	w				
東へ60km																																						42,713	38.9		
東へ50km																																						43,483	39.6		
東へ40km																																						44,332	40.4		
東へ30km																																						44,739	40.8		
東へ20km																																						45,078	41.1		
東へ10km																																						45,314	41.3		
基準位置																																						45,533	41.5		
西へ10km																																						45,706	41.7		
西へ20km																																							45,884	41.8	
西へ30km																																							46,115	42.0	
西へ40km																																							46,298	42.2	
西へ50km																																							45,583	41.5	
西へ60km																																							44,818	40.8	
西へ70km																																								44,933	41.0
西へ80km																																								45,125	41.1

※面積比は津波断層域(144,379km²)に対する各ケースの大すべり域の面積の比を示す。

■ : 大すべり域を設定した東海地域の小断層
■ : 大すべり域を設定した南海地域の小断層

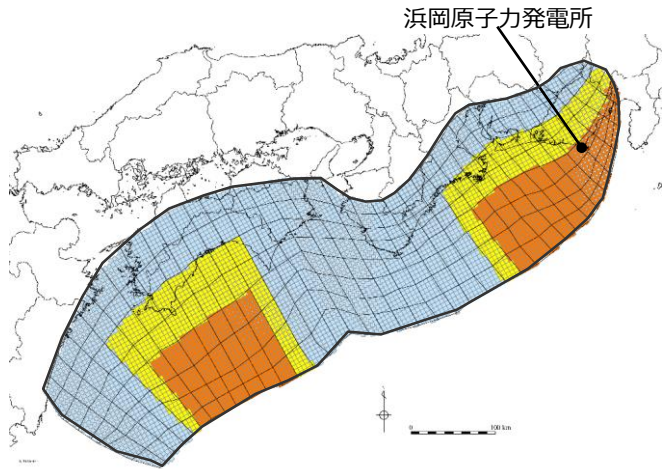
- 各小断層を東西方向に分割し、各小断層にすべり込み速度、面積を配分する。



各小断層の分割方法

6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル①のパラメータスタディモデルの設定 (大すべり域の位置を東へ60kmとしたケースのすべり量分布の設定)

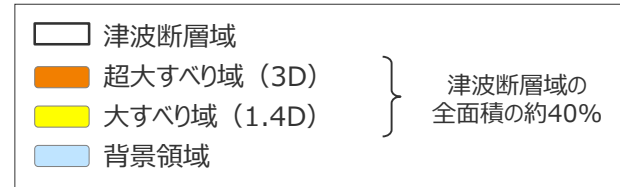
■ 日本海溝の津波評価手法モデル①の大すべり域位置を東へ60kmとしたケースの各小断層のすべり量分布は以下のとおり。



すべり量

最大すべり量 (m) [※]	平均すべり量 (m)
36.7	13.0

※東海地域の最大すべり量を記載



・D : 平均すべり量

日本海溝の津波評価手法モデル①の
大すべり域位置を東へ60kmとしたケース

小断層のすべり量分布 (m)

		西 ← 南海地域											東海地域 → 東																													
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38			
陸側 ⇄ 海溝軸 ⇄	深度40km↓	1	5.2	5.2	5.0	5.0	4.9	4.9	4.5	4.3	4.2	4.1	4.1	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8	3.8	3.6	3.6	3.6	3.5	3.5	3.5	3.5	3.4	3.6	3.2	3.2	2.7	2.7	2.1	2.1	2.1	2.1	1.9	1.9	1.4	1.4		
	30km↓	2	5.2	5.2	5.0	5.0	4.9	4.9	4.5	4.3	4.3	4.2	4.1	4.1	4.0	3.9	3.8	3.8	3.8	3.6	3.6	3.6	3.5	3.5	3.5	3.5	3.4	3.6	3.6	3.2	3.2	2.7	2.7	2.1	2.1	2.1	2.1	1.9	1.9	1.4	1.4	
	20km↓	3	5.2	5.2	5.0	5.0	20.8	20.8	18.9	18.9	18.3	17.8	17.8	17.4	16.8	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8	3.6	3.6	3.6	3.5	3.5	3.5	3.4	14.2	15.2	15.2	13.4	13.4	11.4	11.4	11.4	9.0	9.0	8.0	8.0	5.8	5.8	
		4	5.2	5.2	5.0	5.0	20.8	20.8	18.9	18.9	18.3	18.3	17.8	17.4	17.4	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8	3.8	3.6	3.6	3.5	3.5	3.5	3.5	14.2	17.1	15.2	15.2	13.4	11.4	11.4	11.4	11.4	9.0	9.0	8.0	8.0	5.8	5.8
	10km↓	5	5.2	5.2	5.0	5.0	20.8	44.6	44.6	40.5	40.5	39.2	38.2	38.2	17.4	4.1	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8	3.8	3.6	3.6	3.5	3.5	3.5	14.2	30.5	36.7	32.6	32.6	28.7	28.7	24.4	24.4	19.3	19.3	17.2	17.2	17.2	17.2
		6	5.2	5.2	5.0	5.0	20.8	44.6	44.6	40.5	40.5	39.2	39.2	38.2	17.4	4.1	4.0	3.9	3.9	3.9	3.8	3.8	3.6	3.6	3.5	3.5	3.5	14.7	30.5	36.7	36.7	32.6	32.6	28.7	28.7	24.4	24.4	19.3	17.2	17.2	17.2	
	0km↓	7	5.2	5.2	5.0	5.0	20.8	44.6	44.6	40.5	40.5	40.5	39.2	39.2	17.8	4.1	4.0	4.0	3.9	3.9	3.9	3.8	3.8	3.6	3.5	3.5	3.5	14.7	30.5	30.5	36.7	36.7	32.6	32.6	28.7	28.7	24.4	19.3	17.2	17.2	17.2	17.2
		8	5.2	5.2	5.0	5.0	21.4	44.6	44.6	44.6	40.5	40.5	39.2	39.2	17.8	4.1	4.0	4.0	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8	3.6	3.6	3.5	3.5	14.7	30.5	30.5	36.7	36.7	36.7	32.6	32.6	28.7	24.4	19.3	17.2	17.2	17.2	17.2

- すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
- 駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10km の位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす（内閣府(2012)）とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

日本海溝の津波評価手法モデル①のパラメータスタディモデルの設定 (大すべり域の位置を東へ60kmとしたケースのすべり量分布の断層パラメータ)

断層パラメータ

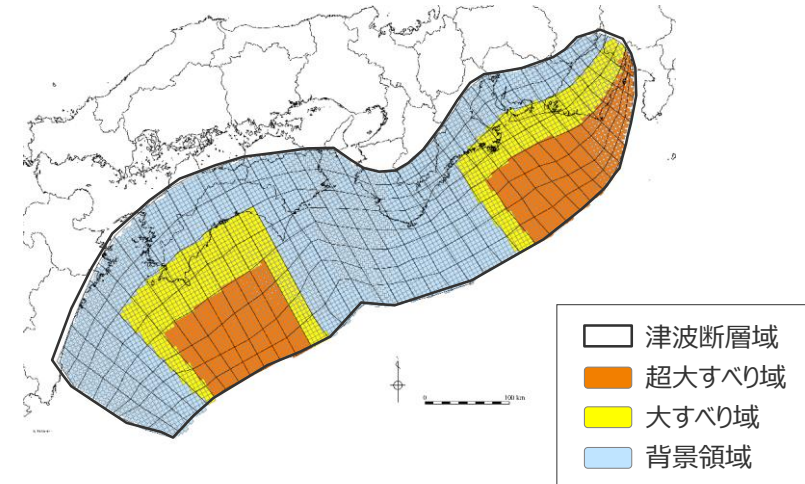
項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	7.7×10^{22}
	Mw	9.2
	平均応力降下量 (MPa) ^{※1}	3.1
	平均すべり量 (m)	13.0
	最大すべり量 (m) ^{※2}	36.7
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	5.2×10^{22}
	平均すべり量 (m)	11.6
	最大すべり量 (m) ^{※2}	36.7
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	2.5×10^{22}
	平均すべり量 (m)	17.7
	最大すべり量 (m) ^{※2}	36.7

※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量

※2 東海地域の最大すべり量を記載

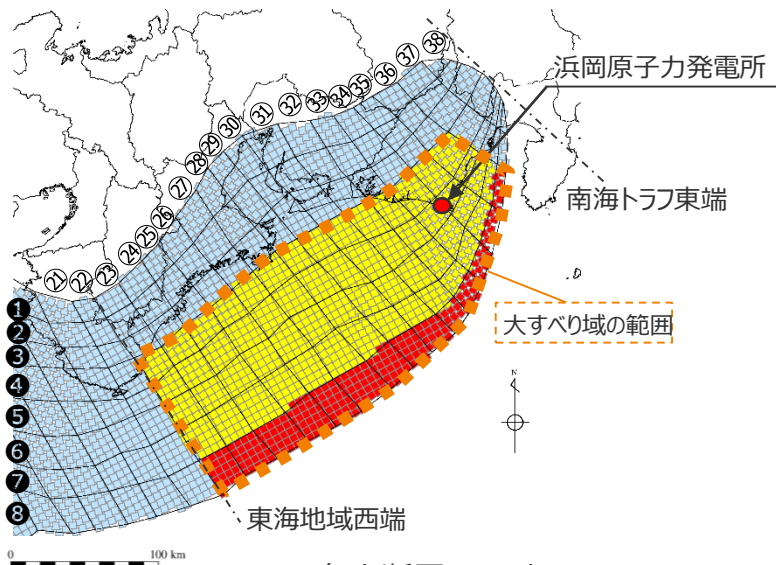
主部断層：深さ10km以深の断層

浅部断層：深さ10km以浅の断層

日本海溝の津波評価手法モデル①の
大すべり域位置を東へ40kmとしたケース

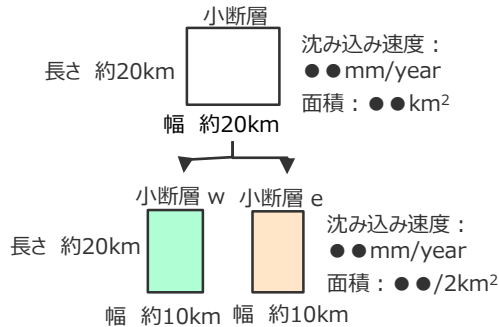
6-7 日本海溝の手法による妥当性確認 日本海溝の津波評価手法モデル②、③のパラメータスタディモデルの設定 (大すべり域の位置および面積)

- 日本海溝の津波評価手法に基づき、敷地に近い東海地域の大すべり域の位置を東西へ約10kmずつ移動させた影響検討を実施し、敷地への影響の大きい位置を設定した。
- 検討した大すべり域の位置および面積は以下のとおり。
なお、小断層サイズとの関係により、大すべり域の面積は厳密に津波断層域の全面積の20%とはならず、ケースにより若干異なる。
- 影響検討の結果、設定したパラメータスタディモデルを次頁以降に示す。
(なお、影響検討の詳細は、後述の「日本海溝の津波評価手法モデル①～③のための影響検討」を参照)



各小断層の配列

■ 各小断層を東西方向に分割し、各小断層にすべり込み速度、面積を配分する。



各小断層の分割方法

各ケースの大すべり域の設定

大すべり域の位置	大すべり域の設定																		面積 (km ²)	面積比 [※] (%)									
	設定した小断層の東西の範囲(列は左図参照)																												
	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37			38								
東へ40km																											26,130	18.1	
東へ30km																												27,056	18.7
東へ20km																												27,836	19.3
東へ10km																												28,542	19.8
基準位置																												29,154	20.2
西へ10km																												29,697	20.6
西へ20km																												30,193	20.9
西へ30km																												30,696	21.3
西へ40km																												31,049	21.5
西へ50km																												30,258	21.0
西へ60km																												29,393	20.4
西へ70km																												29,707	20.6
西へ80km																												30,045	20.8

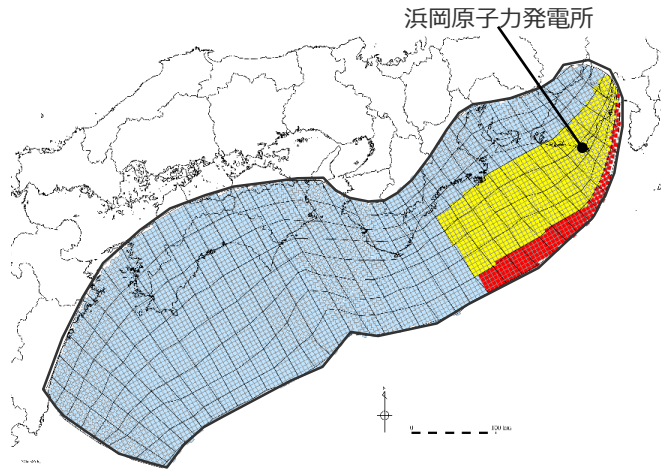
※面積比は津波断層域(144,379km²)に対する各ケースの大すべり域の面積の比を示す。

黄色いセル : 大すべり域を設定した小断層

余 白

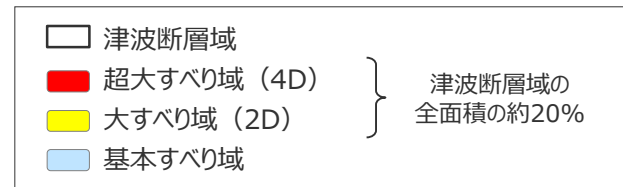
日本海溝の津波評価手法モデル②のパラメータスタディモデルの設定 (大すべり域の位置を東へ40kmとしたケースのすべり量分布の設定)

■ 日本海溝の津波評価手法モデル②の大すべり域の位置を東へ40kmとしたケースの各小断層のすべり量分布は以下のとおり。



すべり量

最大すべり量 (m)	平均すべり量 (m)
36.5	11.4



・D：基本すべり量

日本海溝の津波評価手法モデル②の
大すべり域の位置を東へ40kmとしたケース

		小断層のすべり量分布 (m)																																							
		西 ←																			→ 東																				
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
陸側 ⇄	深度40km↓	1	13.0	13.0	12.5	12.5	12.2	12.2	11.1	10.7	10.4	10.2	10.2	9.9	9.6	9.6	9.3	9.3	9.3	9.1	9.1	9.1	8.8	8.8	8.6	8.6	8.3	8.9	7.9	7.9	6.7	6.7	5.3	5.3	5.3	5.3	4.7	4.7	3.4	3.4	
	海溝軸 ⇄	20km↓	2	13.0	13.0	12.5	12.5	12.2	12.2	11.1	10.7	10.7	10.4	10.2	10.2	9.9	9.6	9.3	9.3	9.3	9.1	9.1	9.1	8.8	8.8	8.6	8.6	8.3	8.9	8.9	7.9	7.9	6.7	6.7	6.7	5.3	5.3	5.3	4.7	4.7	3.4
⇄		10km↓	3	13.0	13.0	12.5	12.5	12.2	12.2	11.1	11.1	10.7	10.4	10.4	10.2	9.9	9.9	9.6	9.6	9.3	9.3	9.1	9.1	9.1	8.8	8.8	8.6	8.3	8.3	8.9	8.9	7.9	7.9	6.7	6.7	6.7	5.3	5.3	4.7	4.7	3.4
	⇄	0km↓	4	13.0	13.0	12.5	12.5	12.2	12.2	11.1	11.1	10.7	10.7	10.4	10.2	10.2	9.9	9.6	9.6	9.3	9.3	9.3	9.1	9.1	8.8	8.8	8.6	15.7	15.1	18.2	16.2	16.2	14.3	12.1	12.1	12.1	12.1	9.6	9.6	8.6	6.2
⇄		30km↓	5	13.0	13.0	12.5	12.5	12.2	12.2	12.2	11.1	11.1	10.7	10.4	10.4	10.2	10.2	9.9	9.6	9.6	9.3	9.3	9.3	9.1	9.1	8.8	8.6	15.7	15.1	15.1	18.2	16.2	16.2	14.3	14.3	12.1	12.1	9.6	9.6	8.6	8.6
	⇄	20km↓	6	13.0	13.0	12.5	12.5	12.2	12.2	12.2	11.1	11.1	10.7	10.7	10.4	10.2	10.2	9.9	9.6	9.6	9.6	9.3	9.3	9.1	9.1	8.8	8.8	15.7	15.7	15.1	15.1	18.2	18.2	16.2	16.2	14.3	14.3	12.1	12.1	9.6	8.6
⇄		10km↓	7	13.0	13.0	12.5	12.5	12.2	12.2	12.2	11.1	11.1	11.1	10.7	10.7	10.4	10.2	9.9	9.9	9.6	9.6	9.6	9.3	9.3	9.1	8.8	8.8	15.7	15.7	15.1	15.1	18.2	18.2	16.2	16.2	14.3	14.3	12.1	9.6	8.6	8.6
	⇄	0km↓	8	13.0	13.0	12.5	12.5	12.5	12.2	12.2	12.2	11.1	11.1	10.7	10.7	10.4	10.2	9.9	9.9	9.9	9.6	9.6	9.3	9.3	9.1	8.8	31.7	31.3	30.3	30.3	36.5	36.5	36.5	32.3	32.3	28.5	24.2	19.1	17.1	17.1	

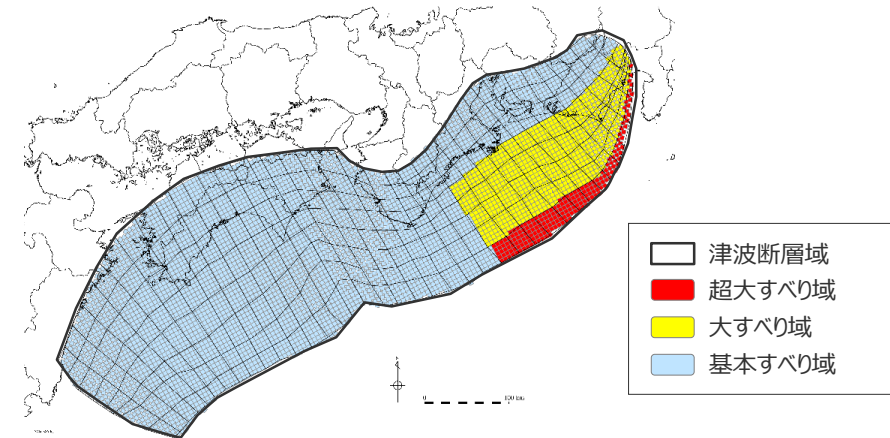
- すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
- 駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10kmの位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす（内閣府(2012)）とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

日本海溝の津波評価手法モデル②のパラメータスタディモデルの設定 (大すべり域の位置を東へ40kmとしたケースの断層パラメータ)

断層パラメータ

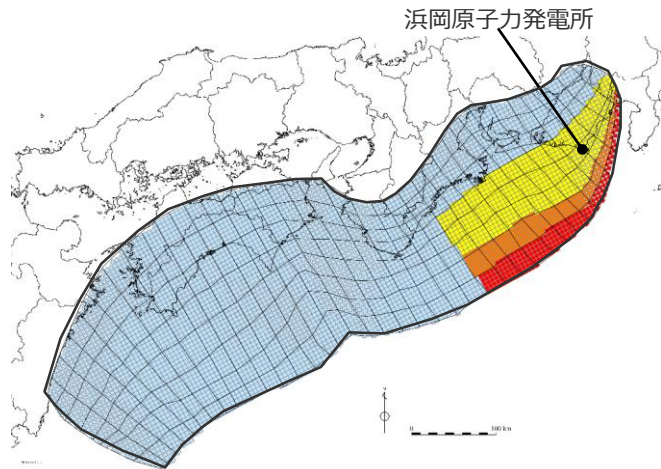
項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	6.8×10^{22}
	Mw	9.2
	平均応力降下量 (MPa)*	3.0
	平均すべり量 (m)	11.4
	最大すべり量 (m)	36.5
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	4.6×10^{22}
	平均すべり量 (m)	10.3
	最大すべり量 (m)	18.2
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	2.1×10^{22}
	平均すべり量 (m)	15.0
	最大すべり量 (m)	36.5

*スケーリング則の対象とした平均応力降下量

日本海溝の津波評価手法モデル②の
大すべり域の位置を東へ40kmとしたケース主部断層：深さ10km以深の断層
浅部断層：深さ10km以浅の断層

日本海溝の津波評価手法モデル③のパラメータスタディモデルの設定 (大すべり域の位置を東へ40kmとしたケースのすべり量分布の設定)

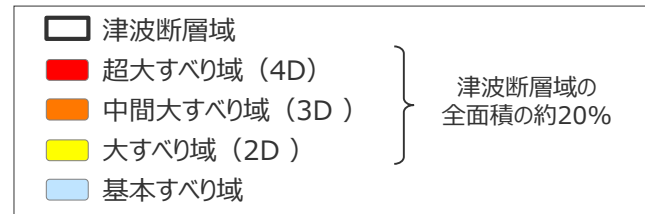
■ 日本海溝の津波評価手法モデル③の大すべり域の位置を東へ40kmとしたケースの各小断層のすべり量分布は以下のとおり。



日本海溝の津波評価手法モデル③の
大すべり域の位置を東へ40kmとしたケース

すべり量

最大すべり量 (m)	平均すべり量 (m)
35.1	11.4



・D : 基本すべり量

		小断層のすべり量分布 (m)																																						
		西 ←																			→ 東																			
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	
陸側 ⇄	深度40km↓	1	12.7	12.7	12.3	12.3	12.0	12.0	10.9	10.5	10.3	10.0	10.0	9.7	9.4	9.4	9.2	9.2	9.2	8.9	8.9	8.9	8.6	8.6	8.5	8.5	8.2	8.8	7.7	7.7	6.5	6.5	5.2	5.2	5.2	5.2	4.6	4.6	3.4	3.4
	海溝軸 ⇄	20km↓	2	12.7	12.7	12.3	12.3	12.0	12.0	10.9	10.5	10.5	10.3	10.0	10.0	9.7	9.4	9.2	9.2	9.2	8.9	8.9	8.9	8.6	8.6	8.5	8.5	8.2	8.8	8.8	7.7	7.7	6.5	6.5	6.5	5.2	5.2	5.2	4.6	4.6
⇄		10km↓	3	12.7	12.7	12.3	12.3	12.0	12.0	10.9	10.9	10.5	10.3	10.3	10.0	9.7	9.7	9.4	9.4	9.2	9.2	8.9	8.9	8.9	8.6	8.6	8.5	8.2	8.2	8.8	8.8	7.7	7.7	6.5	6.5	6.5	5.2	5.2	4.6	4.6
	⇄	0km↓	4	12.7	12.7	12.3	12.3	12.0	12.0	10.9	10.9	10.5	10.5	10.3	10.0	10.0	9.7	9.4	9.4	9.2	9.2	8.9	8.9	8.6	8.6	8.5	15.1	14.6	17.6	15.6	15.6	13.7	11.6	11.6	11.6	11.6	9.2	9.2	8.2	6.0
⇄		30km↓	5	12.7	12.7	12.3	12.3	12.0	12.0	10.9	10.9	10.5	10.3	10.3	10.0	10.0	9.7	9.4	9.4	9.2	9.2	8.9	8.9	8.6	8.6	8.5	15.1	14.6	14.6	17.6	15.6	15.6	13.7	13.7	11.6	11.6	9.2	9.2	8.2	8.2
	⇄	20km↓	6	12.7	12.7	12.3	12.3	12.0	12.0	10.9	10.9	10.5	10.5	10.3	10.0	10.0	9.7	9.4	9.4	9.4	9.2	9.2	8.9	8.9	8.6	8.6	22.6	22.6	21.9	21.9	26.3	26.3	23.4	23.4	20.6	20.6	17.5	13.8	12.4	12.4
⇄		10km↓	7	12.7	12.7	12.3	12.3	12.0	12.0	10.9	10.9	10.5	10.5	10.3	10.0	9.7	9.7	9.4	9.4	9.4	9.2	9.2	8.9	8.6	8.6	30.6	30.2	29.1	29.1	35.1	35.1	35.1	31.1	31.1	27.4	23.3	18.4	16.5	16.5	
	⇄	0km↓	8	12.7	12.7	12.3	12.3	12.0	12.0	10.9	10.9	10.5	10.5	10.3	10.0	9.7	9.7	9.7	9.4	9.4	9.2	9.2	8.9	8.9	8.6	30.6	30.2	29.1	29.1	35.1	35.1	35.1	31.1	31.1	27.4	23.3	18.4	16.5	16.5	

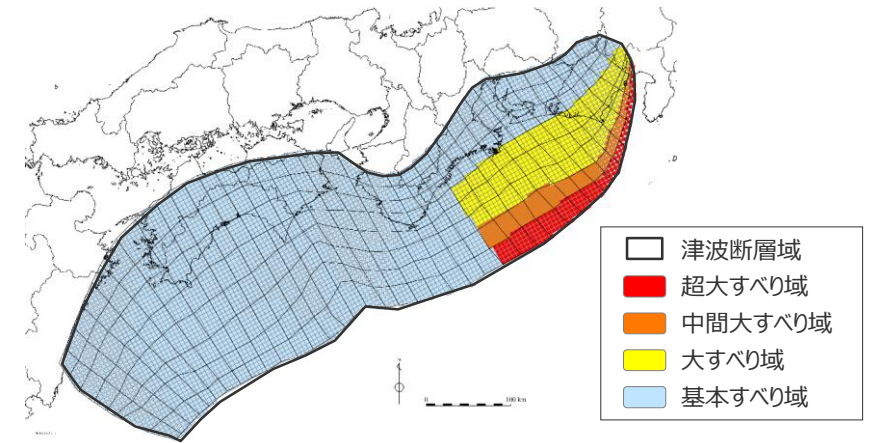
- すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
- 駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10km の位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす (内閣府(2012)) とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

日本海溝の津波評価手法モデル③のパラメータスタディモデルの設定 (大すべり域の位置を東へ40kmとしたケースの断層パラメータ)

断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	6.8×10^{22}
	Mw	9.2
	平均応力降下量 (MPa)*	3.0
	平均すべり量 (m)	11.4
	最大すべり量 (m)	35.1
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	4.5×10^{22}
	平均すべり量 (m)	10.0
	最大すべり量 (m)	17.6
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	2.3×10^{22}
	平均すべり量 (m)	15.9
	最大すべり量 (m)	35.1

*スケーリング則の対象とした平均応力降下量

日本海溝の津波評価手法モデル③の
大すべり域の位置を東へ40kmとしたケース主部断層：深さ10km以深の断層
浅部断層：深さ10km以浅の断層

6 検討波源モデルの津波評価の詳細

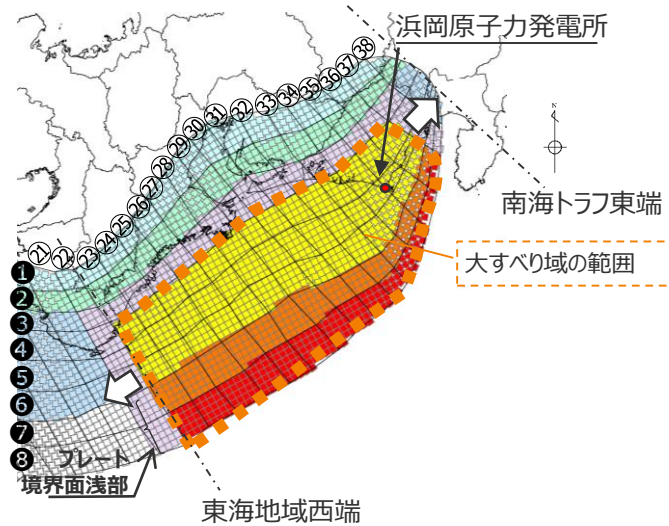
6-8 パラメータスタディモデルの設定

検討波源モデルAおよび検討波源モデルB

- ここでは、大すべり域を東西に約10kmずつ独立に移動させたときに敷地への影響が最も大きいケースについてのみ示す。
- その他のケースについては、第717回机上配布資料に示す。

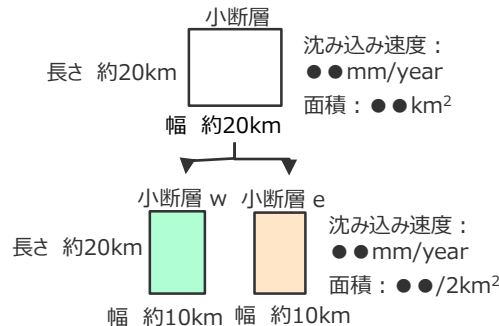
6-8 パラメータスタディモデルの設定 検討波源モデルA,Bのパラメータスタディモデルの設定 大すべり域の位置および面積（大すべり域が1箇所のケース）

- 検討波源モデルA,Bのパラメータスタディモデルの大すべり域は、津波断層域の全面積の約20%とし、検討波源モデルA,Bの大すべり域の位置を基準位置として、東西に約10kmずつ移動させて設定した。
- 設定したパラメータスタディモデルの大すべり域の位置および面積は以下のとおり。
なお、小断層サイズとの関係により、大すべり域の面積は津波断層域の全面積の厳密に20%とはならず、ケースにより若干異なる。



検討波源モデルの各小断層の配列

- 各小断層を東西方向に分割し、各小断層にすべり込み速度、面積を配分する。

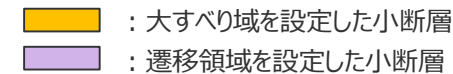


各小断層の分割方法

各ケースの大すべり域の設定

ケース名	位置	大すべり域の設定																	面積 (km ²)	面積比※ (%)		
		設定した小断層の東西の範囲(列は左図参照)																				
		20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36			37	38
		w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w			e	w
E2.0	東へ40km																				26,130	18.1
E1.5	東へ30km																				27,056	18.7
E1.0	東へ20km																				27,836	19.3
E0.5	東へ10km																				28,542	19.8
0	基準位置																				29,154	20.2
W0.5	西へ10km																				29,697	20.6
W1.0	西へ20km																				30,193	20.9
W1.5	西へ30km																				30,696	21.3
W2.0	西へ40km																				31,049	21.5
W2.5	西へ50km																				30,258	21.0
W3.0	西へ60km																				29,393	20.4

※面積比は津波断層域(144,379km²)に対する各ケースの大すべり域の面積の比を示す。



検討波源モデルA,Bのパラメータスタディモデルの設定

検討波源モデルAのすべり量分布の設定 (大すべり域が1箇所のケース)

■ 大すべり域の位置を20kmずつ移動させたケースのすべり量設定方法の基本的な流れは、6-1 検討波源モデルのパラメータ(6) すべり分布の設定(検討波源モデルA(プレート境界面浅部))のSTEP1~STEP4と同様に沈み込み速度に基づき各小断層の平均すべり量 D_i を算出した上で各小断層のすべり量を設定する。大すべり域、超大すべり域、遷移領域のすべり量設定の詳細は以下のとおり。

E2(東へ40km) ケース

○ 各小断層の平均すべり量 D_i に対し背景領域のすべり量 $D_b = a \cdot D_i$ を $a=1.14$ で設定。

各小断層の平均すべり量 D_i (m)

主部断層

深度		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
40km																																									
30km	1	13.45	13.45	13.00	13.00	12.66	12.66	11.48	11.11	10.83	10.59	10.59	10.21	9.96	9.96	9.69	9.69	9.69	9.38	9.38	9.38	9.07	9.07	8.96	8.96	8.65	9.25	8.15	8.15	6.92	6.92	5.47	5.47	5.47	5.47	4.89	4.89	3.54	3.54		
	2	13.45	13.45	13.00	13.00	12.66	12.66	11.48	11.11	11.11	10.83	10.59	10.59	10.21	9.96	9.69	9.69	9.69	9.38	9.38	9.38	9.07	9.07	8.96	8.96	8.65	9.25	9.25	8.15	8.15	6.92	6.92	6.92	5.47	5.47	5.47	4.89	4.89	3.54		
20km	3	13.45	13.45	13.00	13.00	12.66	12.66	11.48	11.48	11.11	10.83	10.83	10.59	10.21	10.21	9.96	9.96	9.69	9.69	9.38	9.38	9.38	9.07	9.07	8.96	8.65	8.65	9.25	9.25	8.15	8.15	6.92	6.92	6.92	5.47	5.47	4.89	4.89	3.54		
	4	13.45	13.45	13.00	13.00	12.66	12.66	11.48	11.48	11.11	11.11	10.83	10.59	10.59	10.21	9.96	9.96	9.69	9.69	9.69	9.38	9.38	9.07	9.07	8.96	8.96	8.65	10.42	9.25	9.25	8.15	6.92	6.92	6.92	5.47	5.47	4.89	4.89	3.54		
10km	5	13.45	13.45	13.00	13.00	12.66	12.66	12.66	11.48	11.48	11.11	10.83	10.59	10.59	10.21	9.96	9.96	9.69	9.69	9.69	9.38	9.38	9.07	9.07	8.96	8.96	8.65	10.42	9.25	9.25	8.15	8.15	6.92	6.92	6.92	5.47	5.47	4.89	4.89		
	6	13.45	13.45	13.00	13.00	12.66	12.66	12.66	11.48	11.48	11.11	11.11	10.83	10.59	10.59	10.21	9.96	9.96	9.69	9.69	9.69	9.38	9.38	9.07	9.07	8.96	8.96	8.65	10.42	10.42	9.25	9.25	8.15	8.15	6.92	6.92	5.47	4.89	4.89		
0km	7	13.45	13.45	13.00	13.00	12.66	12.66	12.66	11.48	11.48	11.48	11.11	11.11	10.83	10.59	10.21	10.21	9.96	9.96	9.96	9.69	9.69	9.38	9.07	9.07	8.96	8.96	8.65	8.65	10.42	10.42	9.25	9.25	8.15	8.15	6.92	5.47	4.89	4.89		
	8	13.45	13.45	13.00	13.00	13.00	12.66	12.66	12.66	11.48	11.48	11.11	11.11	10.83	10.59	10.21	10.21	10.21	9.96	9.96	9.69	9.69	9.38	9.38	9.07	9.07	8.96	8.65	8.65	10.42	10.42	9.25	9.25	8.15	6.92	5.47	4.89	4.89			

最も深い背景領域 $1/4 \times D_b = 0.25a \cdot D_i$

深い背景領域 $1/2 \times D_b = 0.5a \cdot D_i$

背景領域 $D_b = a \cdot D_i$

各小断層のすべり量 D (m)

深度		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38			
40km																																										
30km	1	3.8	3.8	3.7	3.7	3.6	3.6	3.3	3.2	3.1	3.0	3.0	2.9	2.8	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.6	2.3	2.3	2.0	2.0	1.6	1.6	1.6	1.6	1.4	1.4	1.0	1.0				
	2	7.6	7.6	7.4	7.4	7.2	7.2	6.5	6.3	6.3	6.2	6.0	6.0	5.8	5.7	5.5	5.5	5.5	5.3	5.3	5.3	5.2	5.2	5.1	5.1	4.9	5.3	4.6	4.6	3.9	3.9	3.1	3.1	3.1	2.8	2.8	2.0	2.0				
20km	3	15.3	15.3	14.8	14.8	14.4	14.4	13.1	13.1	12.6	12.3	12.3	12.0	11.6	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.7	10.3	10.3	11.5	11.1	11.1	11.9	11.9	10.5	10.5	8.9	8.9	8.9	7.0	7.0	6.3	6.3	4.6			
	4	15.3	15.3	14.8	14.8	14.4	14.4	14.4	13.1	13.1	12.6	12.3	12.3	12.0	12.0	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.3	10.3	14.1	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	9.8	7.1		
10km	5	15.3	15.3	14.8	14.8	14.4	14.4	14.4	13.1	13.1	12.6	12.3	12.3	12.0	12.0	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.3	10.3	14.1	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	13.8	10.9	9.8	9.8			
	6	15.3	15.3	14.8	14.8	14.4	14.4	14.4	13.1	13.1	12.6	12.6	12.3	12.0	12.0	11.6	11.3	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.3	14.1	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	13.8	10.9	9.8	9.8			
0km	7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.1	26.9	26.9	25.9	25.9	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.7	16.4	14.7	14.7				
	8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.1	36.3	35.8	34.6	34.6	41.7	41.7	37.0	37.0	32.6	27.7	21.9	19.6	19.6					

遷移領域 $(2D_i + D_b) / 2$

遷移領域の小断層と隣合う大すべり域の小断層と背景領域の小断層の平均とする。また、隣合う小断層は可能な限り同じ沈み込み速度の小断層から選定する。

→ 遷移領域のすべり量設定において参照する小断層の位置関係を示す

大すべり域、超大すべり域、遷移領域のすべり量 D (m)の設定方法

深度		8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38									
40km																																									
30km	1	3.2	3.1	3.0	3.0	2.9	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.6	2.3	2.3	2.0	2.0	1.6	1.6	1.6	1.6	1.4	1.4	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0		
	2	6.3	6.3	6.2	6.0	6.0	5.8	5.7	5.5	5.5	5.5	5.5	5.3	5.3	5.2	5.2	5.1	5.1	4.9	5.3	5.3	4.6	4.6	3.9	3.9	3.1	3.1	3.1	2.8	2.8	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0		
20km	3	13.1	12.6	12.3	12.3	12.0	11.6	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.7	10.3	10.3	11.5	11.1	11.1	11.9	11.9	10.5	10.5	8.9	8.9	8.9	7.0	7.0	6.3	6.3	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6		
	4	13.1	12.6	12.6	12.3	12.0	12.0	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.3	10.3	14.1	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8		
10km	5	13.1	13.1	12.6	12.3	12.3	12.0	12.0	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.3	14.1	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8		
	6	13.1	13.1	12.6	12.6	12.3	12.0	12.0	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.3	14.1	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	
0km	7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.1	26.9	26.9	25.9	25.9	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.7	16.4	14.7	14.7	14.7	14.7	14.7	14.7	14.7	14.7	14.7			
	8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.1	36.3	35.8	34.6	34.6	41.7	41.7	37.0	37.0	32.6	27.7	21.9	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6		

超大すべり域 $4D_i$

超大すべり域と大すべり域の遷移領域 $3D_i$

大すべり域 $2D_i$

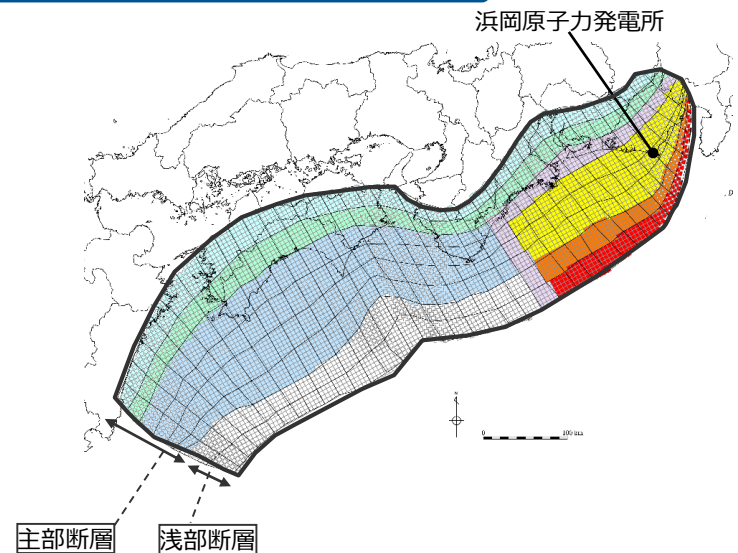
6-8 パラメータスタディモデルの設定

検討波源モデルA,Bのパラメータスタディモデルの設定

検討波源モデルAのすべり量分布の設定 (大すべり域が1箇所のケース)

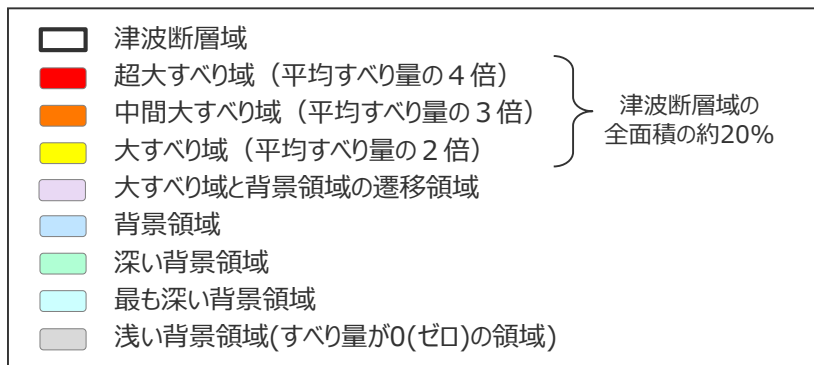
■ 検討波源モデルA (断層破壊がプレート境界面浅部に伝播するモデル) について、大すべり域の位置を20kmずつ移動したケースの各小断層のすべり量分布は以下のとおり。

E2 (東へ40km) ケース



すべり量

最大すべり量(m)	平均すべり量(m)
41.7	11.8



検討波源モデルA
(断層破壊がプレート境界面浅部に伝播するモデル)

西 ←

小断層のすべり量分布 (m)

⇒ 東

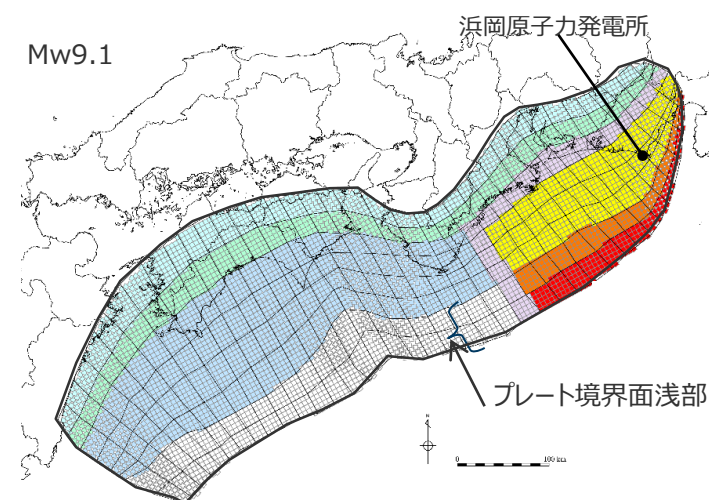
深度40km↓		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	3.8	3.8	3.7	3.7	3.6	3.6	3.3	3.2	3.1	3.0	3.0	2.9	2.8	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.6	2.3	2.3	2.0	2.0	1.6	1.6	1.6	1.6	1.4	1.4	1.0	1.0	
20km↓	2	7.6	7.6	7.4	7.4	7.2	7.2	6.5	6.3	6.3	6.2	6.0	6.0	5.8	5.7	5.5	5.5	5.5	5.3	5.3	5.3	5.2	5.2	5.1	5.1	4.9	5.3	5.3	4.6	4.6	3.9	3.9	3.9	3.1	3.1	2.8	2.8	2.0	
	3	15.3	15.3	14.8	14.8	14.4	14.4	13.1	13.1	12.6	12.3	12.3	12.0	11.6	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.7	10.3	10.3	11.5	11.1	11.1	11.9	11.9	10.5	10.5	8.9	8.9	8.9	7.0	7.0	6.3	6.3	4.6
10km↓	4	15.3	15.3	14.8	14.8	14.4	14.4	13.1	13.1	12.6	12.6	12.3	12.0	12.0	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	11.0	10.7	10.7	10.3	10.3	14.1	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	9.8	7.1
	5	15.3	15.3	14.8	14.8	14.4	14.4	14.4	13.1	13.1	12.6	12.6	12.3	12.0	12.0	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	11.0	10.7	10.7	10.3	14.1	17.9	17.3	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	9.8
0km↓	6	15.3	15.3	14.8	14.8	14.4	14.4	14.4	13.1	13.1	12.6	12.6	12.3	12.0	12.0	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	11.0	10.7	10.7	10.3	14.1	17.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	9.8	9.8
	7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.1	26.9	26.9	25.9	25.9	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.7	16.4	14.7	14.7
	8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.1	36.3	35.8	34.6	34.6	41.7	41.7	41.7	37.0	37.0	32.6	27.7	21.9	19.6	19.6	

・すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
 ・駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10kmの位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす(内閣府(2012))とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

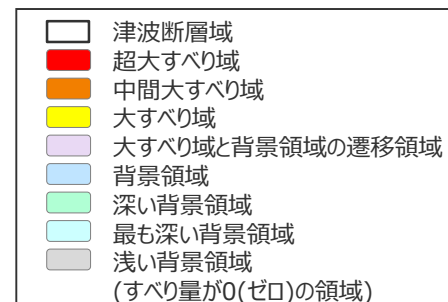
断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	5.9×10^{22}
	Mw	9.1
	平均応力低下量 (MPa) ※1	3.0
	平均すべり量 (m) ※2	11.8
	最大すべり量 (m)	41.7
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	4.5×10^{22}
	平均すべり量 (m)	10.0
	最大すべり量 (m)	20.8
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	1.4×10^{22}
	平均すべり量 (m) ※3	28.9
	最大すべり量 (m)	41.7

※1 スケーリング則の対象とした平均応力低下量

※2 すべり量が0mでない領域の断層面積(121,438km²)に基づき算出※3 すべり量が0mでない領域の断層面積(11,714km²)に基づき算出

検討波源モデルA (プレート境界面浅部)
(大すべり域の位置を東へ40kmとしたケース)



主部断層：深さ10km以深の断層

浅部断層：深さ10km以浅の断層

余 白

検討波源モデルA,Bのパラメータスタディモデルの設定

検討波源モデルB-1のすべり量分布の設定 (大すべり域が1箇所のケース)

■ 大すべり域の位置を20kmずつ移動させたケースのすべり量設定方法の基本的な流れは、6-1 検討波源モデルのパラメータ (6) すべり分布の設定 (検討波源モデルA (プレート境界面浅部)) のSTEP1~STEP4と同様に沈み込み速度に基づき各小断層の平均すべり量 D_i を算出した上で各小断層のすべり量を設定する。大すべり域、超大すべり域、遷移領域のすべり量設定の詳細は以下のとおり。

W1.0 (西へ20km) ケース

○ 各小断層の平均すべり量 D_i に対し背景領域のすべり量 $D_b = a \cdot D_i$ を $a=1.10$ で設定。

各小断層の平均すべり量 D_i (m)

 主部断層

深度	40km	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
30km	1	13.45	13.45	13.00	13.00	12.66	12.66	11.48	11.11	10.83	10.59	10.59	10.21	9.96	9.96	9.69	9.69	9.69	9.38	9.38	9.38	9.07	9.07	8.96	8.96	8.65	8.65	9.25	8.15	8.15	6.92	6.92	5.47	5.47	5.47	5.47	4.89	4.89	3.54	3.54	
	2	13.45	13.45	13.00	13.00	12.66	12.66	11.48	11.11	10.83	10.59	10.59	10.21	9.96	9.69	9.69	9.69	9.38	9.38	9.38	9.07	9.07	8.96	8.96	8.65	8.65	9.25	9.25	8.15	8.15	6.92	6.92	6.92	6.92	5.47	5.47	5.47	4.89	4.89	3.54	3.54
20km	3	13.45	13.45	13.00	13.00	12.66	12.66	11.48	11.48	11.11	10.83	10.83	10.59	10.21	10.21	9.96	9.96	9.69	9.69	9.38	9.38	9.38	9.07	9.07	8.96	8.65	8.65	9.25	9.25	8.15	8.15	6.92	6.92	6.92	5.47	5.47	4.89	4.89	3.54	3.54	
	4	13.45	13.45	13.00	13.00	12.66	12.66	11.48	11.48	11.11	10.83	10.59	10.59	10.21	9.96	9.96	9.69	9.69	9.69	9.38	9.38	9.07	9.07	8.96	8.96	8.65	10.42	9.25	9.25	8.15	6.92	6.92	6.92	5.47	5.47	4.89	4.89	3.54	3.54		
10km	5	13.45	13.45	13.00	13.00	12.66	12.66	12.66	11.48	11.48	11.11	10.83	10.59	10.59	10.21	9.96	9.69	9.69	9.69	9.38	9.38	9.07	9.07	8.96	8.96	8.65	8.65	10.42	9.25	9.25	8.15	8.15	6.92	6.92	5.47	5.47	4.89	4.89	3.54	3.54	
	6	13.45	13.45	13.00	13.00	12.66	12.66	12.66	11.48	11.48	11.11	10.83	10.59	10.59	10.21	9.96	9.96	9.69	9.69	9.69	9.38	9.38	9.07	9.07	8.96	8.96	8.65	10.42	10.42	9.25	9.25	8.15	8.15	6.92	6.92	5.47	5.47	4.89	4.89	3.54	3.54
0km	7	13.45	13.45	13.00	13.00	12.66	12.66	12.66	11.48	11.48	11.11	10.83	10.59	10.21	10.21	9.96	9.96	9.69	9.69	9.69	9.38	9.07	9.07	8.96	8.96	8.65	8.65	10.42	10.42	9.25	9.25	8.15	8.15	6.92	5.47	5.47	4.89	4.89	3.54	3.54	
	8	13.45	13.45	13.00	13.00	13.00	12.66	12.66	12.66	11.48	11.48	11.11	10.83	10.59	10.21	10.21	10.21	9.96	9.96	9.69	9.69	9.38	9.07	9.07	8.96	8.65	8.65	10.42	10.42	9.25	9.25	8.15	8.15	6.92	5.47	5.47	4.89	4.89	3.54	3.54	

最も深い背景領域 : $1/4 \times D_b = 0.25a \cdot D_i$

深い背景領域 : $1/2 \times D_b = 0.5a \cdot D_i$

背景領域 : $D_b = a \cdot D_i$

各小断層のすべり量 D (m)

深度	40km	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38			
30km	1	3.7	3.7	3.6	3.6	3.5	3.5	3.2	3.1	3.0	2.9	2.9	2.8	2.7	2.7	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.5	2.4	2.6	2.2	2.2	1.9	1.9	1.5	1.5	1.5	1.5	1.4	1.4	1.0	1.0			
	2	7.4	7.4	7.2	7.2	7.0	7.0	6.3	6.1	6.0	5.9	5.9	5.6	5.5	5.4	5.4	5.4	5.2	5.2	5.2	5.0	5.0	4.9	4.9	4.8	5.1	5.1	4.5	4.5	3.8	3.8	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	2.7	2.7	2.0	2.0		
20km	3	14.8	14.8	14.4	14.4	14.0	14.0	12.7	12.7	12.3	12.0	12.0	11.7	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.4	10.4	9.7	11.6	11.6	11.4	11.0	11.0	11.8	11.8	10.4	8.8	8.8	8.8	8.8	7.0	7.0	4.1	5.4	3.9	3.9		
	4	14.8	14.8	14.4	14.4	14.0	14.0	12.7	12.7	12.3	12.3	12.0	11.7	11.7	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.4	10.4	14.3	18.1	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	8.2	5.4	3.9	3.9		
10km	5	14.8	14.8	14.4	14.4	14.0	14.0	12.7	12.7	12.3	12.3	12.0	11.7	11.7	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.4	10.4	14.7	18.8	18.1	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	8.9	5.4	3.9			
	6	14.8	14.8	14.4	14.4	14.0	14.0	12.7	12.7	12.3	12.3	12.0	11.7	11.7	11.3	11.0	11.0	11.0	10.7	10.7	10.4	14.7	18.8	18.1	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	8.9	5.4	3.9			
0km	7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.7	28.1	27.2	27.2	26.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	20.7	8.9	0.0	0.0	0.0	0.0		
	8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.7	37.5	37.5	36.3	36.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.9	0.0	0.0	0.0

大すべり域、超大すべり域、遷移領域のすべり量 D (m)の設定方法

深度	40km	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38								
30km	1	3.1	3.0	2.9	2.9	2.8	2.7	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.5	2.4	2.6	2.2	2.2	2.2	1.9	1.9	1.5	1.5	1.5	1.5	1.4	1.4	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0		
	2	6.1	6.1	6.0	5.9	5.9	5.6	5.5	5.4	5.4	5.4	5.2	5.2	5.2	5.0	5.0	4.9	4.9	4.8	5.1	5.1	4.5	4.5	3.8	3.8	3.0	3.0	3.0	3.0	2.7	2.7	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	
20km	3	12.7	12.3	12.0	12.0	11.7	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.4	10.4	9.7	11.6	11.6	11.4	11.0	11.0	11.8	11.8	10.4	10.4	8.8	8.8	8.8	8.8	7.0	7.0	4.1	5.4	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9
	4	12.7	12.3	12.3	12.0	11.7	11.7	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.7	10.4	14.3	18.1	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	8.9	5.4	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9
10km	5	12.7	12.7	12.3	12.0	12.0	11.7	11.7	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.7	14.7	18.8	18.1	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	8.9	5.4	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9
	6	12.7	12.7	12.3	12.3	12.0	11.7	11.7	11.3	11.0	11.0	11.0	10.7	10.7	14.7	18.8	18.1	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	8.9	5.4	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9
0km	7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.7	28.1	27.2	27.2	26.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	20.7	8.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.7	37.5	37.5	36.3	36.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.9	0.0	0.0	0.0

遷移領域 : $(2D_i + D_b) / 2$

遷移領域の小断層と隣り合う大すべり域の小断層と背景領域の小断層の平均とする。また、隣り合う小断層は可能な限り同じ沈み込み速度の小断層から選定する。

→ 遷移領域のすべり量設定において参照する小断層の位置関係を示す

大すべり域 : $2D_i$

超大すべり域 : $4D_i$

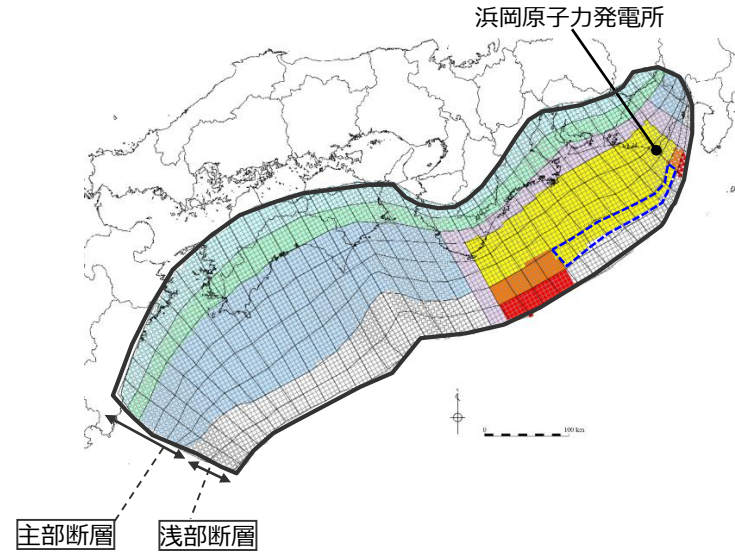
超大すべり域と大すべり域の遷移領域 : $3D_i$

分枝断層

6-8 パラメータスタディモデルの設定 検討波源モデルA,Bのパラメータスタディモデルの設定 検討波源モデルB-1のすべり量分布の設定 (大すべり域が1箇所のケース)

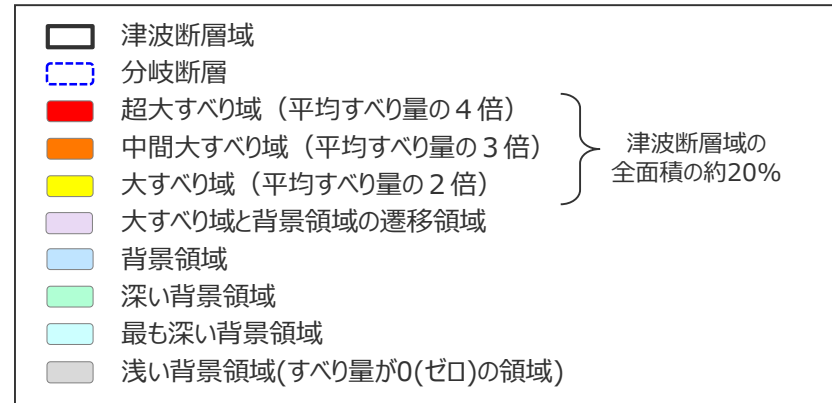
■検討波源モデルB-1 (プレート境界面浅部・東海断層系) について、大すべり域の位置を10kmずつ移動したケースの各小断層のすべり量分布は以下のとおり。

W1.0 (西へ20km) ケース



すべり量

最大すべり量(m)	平均すべり量(m)
37.5	11.1



西 ←

小断層のすべり量分布 (m)

⇒ 東

深度40km↓		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	
30km↓	1	3.7	3.7	3.6	3.6	3.5	3.5	3.2	3.1	3.0	2.9	2.9	2.8	2.7	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.5	2.4	2.6	2.2	2.2	1.9	1.9	1.5	1.5	1.5	1.5	1.4	1.4	1.0	1.0		
20km↓	2	7.4	7.4	7.2	7.2	7.0	7.0	6.3	6.1	6.1	6.0	5.9	5.9	5.6	5.5	5.4	5.4	5.4	5.2	5.2	5.2	5.0	5.0	4.9	4.9	4.8	5.1	5.1	4.5	4.5	3.8	3.8	3.8	3.0	3.0	3.0	2.7	2.7	2.0	
	3	14.8	14.8	14.4	14.4	14.0	14.0	12.7	12.7	12.3	12.0	12.0	11.7	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.4	10.4	9.7	11.6	11.6	11.4	11.0	11.0	11.8	11.8	10.4	10.4	8.8	8.8	8.8	7.0	7.0	4.1	5.4	3.9	
10km↓	4	14.8	14.8	14.4	14.4	14.0	14.0	12.7	12.7	12.3	12.3	12.0	11.7	11.7	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.7	10.4	14.3	18.1	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	8.2	5.4	3.9
	5	14.8	14.8	14.4	14.4	14.0	14.0	14.0	12.7	12.7	12.3	12.0	12.0	11.7	11.7	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.7	14.7	18.8	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	8.9	5.4	5.4	
0km↓	6	14.8	14.8	14.4	14.4	14.0	14.0	14.0	12.7	12.7	12.3	12.3	12.0	11.7	11.7	11.3	11.0	11.0	11.0	10.7	10.7	14.7	18.8	18.1	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	8.9	5.4	5.4	
	7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.7	28.1	27.2	27.2	26.9	17.9	17.3	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	20.7	8.9	0.0	0.0	
8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.7	37.5	37.5	36.3	36.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	27.7	8.9	0.0	0.0

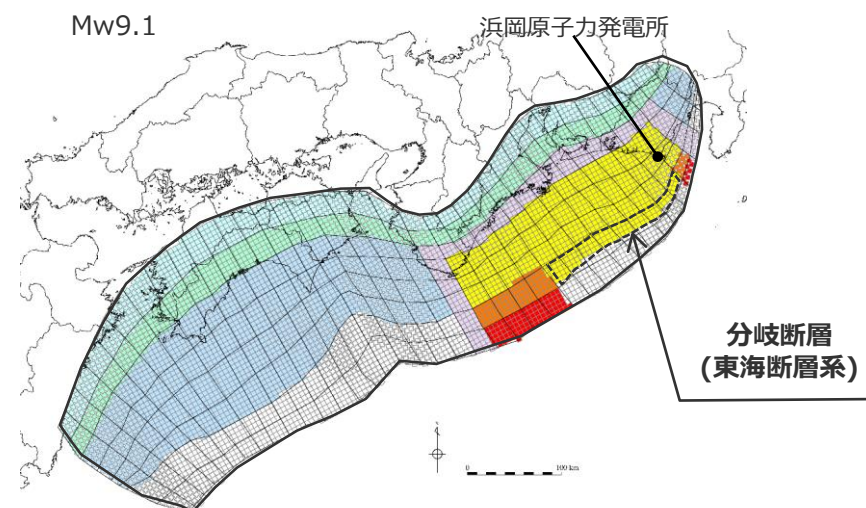
・すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
 ・駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10km の位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす (内閣府(2012)) とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

分岐断層

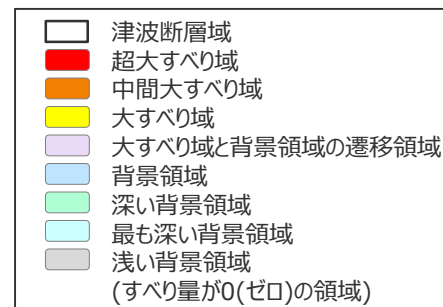
断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	5.5×10^{22}
	Mw	9.1
	平均応力降下量 (MPa) ※1	3.0
	平均すべり量 (m) ※2	11.1
	最大すべり量 (m)	37.5
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	4.5×10^{22}
	平均すべり量 (m)	10.0
	最大すべり量 (m)	20.8
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	9.8×10^{21}
	平均すべり量 (m) ※3	24.3
	最大すべり量 (m)	37.5

※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量

※2 すべり量が0mでない領域の断層面積(119,584km²)に基づき算出※3 すべり量が0mでない領域の断層面積(9,856km²)に基づき算出

検討波源モデルB-1 (プレート境界面浅部・東海断層系)
(大すべり域の位置を西へ20kmとしたケース)



主部断層: 深さ10km以深の断層

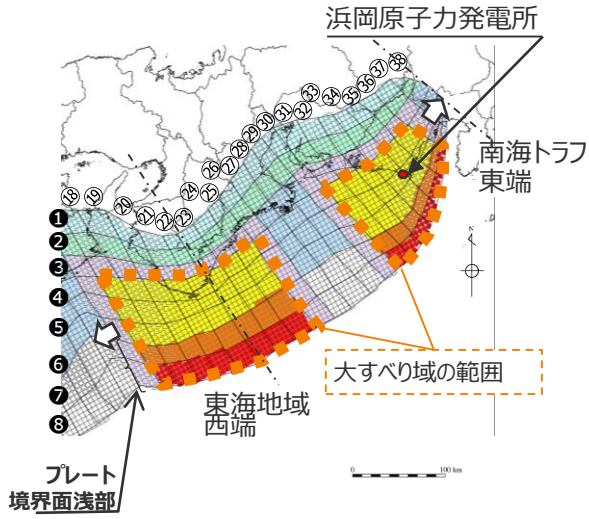
浅部断層: 深さ10km以浅の断層

余 白

6-8 パラメータスタディモデルの設定 検討波源モデルA,Bのパラメータスタディモデルの設定

大すべり域の位置および面積（大すべり域が2箇所のケース：大すべり域の位置を東西に約20kmずつ独立に移動）

- 大すべり域が2箇所のケースでは、2箇所の大すべり域を独立に移動させて検討を行う必要がありケース数が多くなることから、まず、2箇所の大すべり域を東西に約20kmずつ独立に移動させて網羅的に検討して敷地への影響の大きいケースを抽出し、次に、そのケースを中心として2箇所の大すべり域をさらに詳細に東西に約10kmずつ独立に移動させて検討する手順でパラメータスタディを行った。
- 設定したパラメータスタディモデルの大すべり域の位置および面積は以下のとおり。
なお、小断層サイズとの関係により、大すべり域の面積は津波断層域の全面積の厳密に20%とはならず、ケースにより若干異なる。



検討波源モデルの各小断層の配列

大すべり域を東西に約20kmずつ独立に移動させた場合の各ケースの大すべり域の設定

敷地に近い大すべり域の位置	東西の大すべり域間の距離 (km)	大すべり域の設定																																						面積 (km ²)	面積比※ (%)
		設定した小断層の東西の範囲 (列は左図参照)																																							
		8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38									
E2.0 (東へ40km)	20																																				27,101	18.8			
	40																																				27,148	18.8			
	60																																				26,746	18.5			
	80																																				26,820	18.6			
	100																																				26,815	18.6			
	120																																					26,764	18.5		
E1.0 (東へ20km)	140																																				27,050	18.7			
	160																																				27,504	19.1			
	20																																				28,394	19.7			
	40																																				27,992	19.4			
	60																																				28,065	19.4			
	80																																				28,060	19.4			
0 (基準位置)	100																																				28,010	19.4			
	120																																				28,295	19.6			
	140																																				28,750	19.9			
	160																																				29,372	20.3			
	20																																				29,096	20.2			
	40																																				29,170	20.2			
W1.0 (西へ20km)	60																																				29,165	20.2			
	80																																				29,115	20.2			
	100																																				29,400	20.4			
	120																																				29,855	20.7			
	140																																				31,248	21.6			
	160																																				30,477	21.1			
W2.0 (西へ40km)	20																																				29,912	20.7			
	40																																				29,907	20.7			
	60																																				29,857	20.7			
	80																																				30,142	20.9			
	100																																				30,597	21.2			
	120																																				31,219	21.6			
W3.0 (西へ60km)	140																																				31,990	22.2			
	160																																				32,633	22.6			
	20																																				30,715	21.3			
	40																																				30,665	21.2			
	60																																				30,951	21.4			
	80																																				31,405	21.8			
W3.0 (西へ60km)	100																																				32,028	22.2			
	120																																				32,799	22.7			
	140																																				33,442	23.2			
	160																																				33,812	23.4			
	20																																				31,786	22.0			
	40																																				32,072	22.2			

■ : 内閣府の最大クラスモデルケース⑧と同じ大すべり域の位置のケース

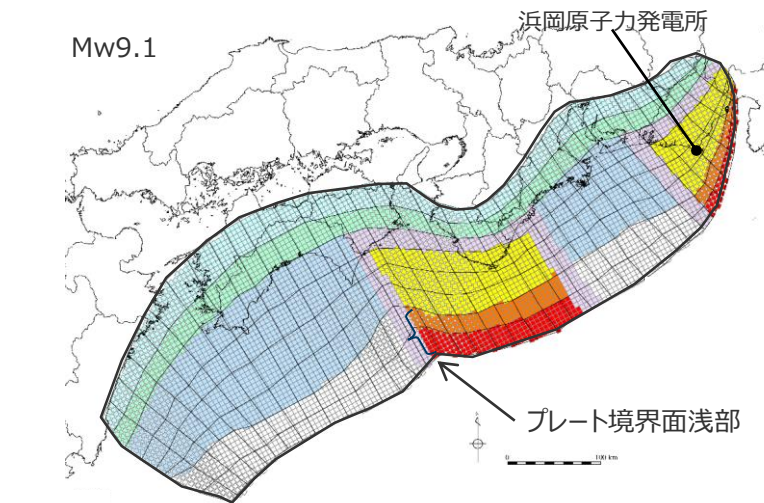
■ : 大すべり域を設定した小断層
■ : 遷移領域を設定した小断層

※面積比は津波断層域(144,379km²)に対する各ケースの大すべり域の面積の比を示す。

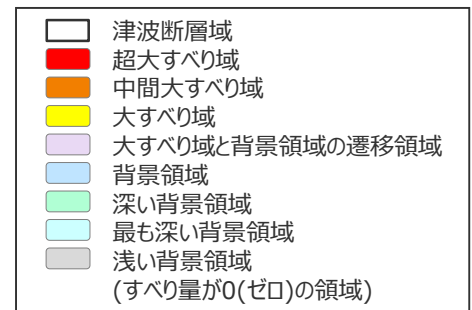
6-8 パラメータスタディモデルの設定 検討波源モデルA,Bのパラメータスタディモデルの設定 検討波源モデルAの断層パラメータ (大すべり域が2箇所の場合)

断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	6.1×10^{22}
	Mw	9.1
	平均応力降下量 (MPa) ※1	3.0
	平均すべり量 (m) ※2	12.0
	最大すべり量 (m)	40.8
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	4.5×10^{22}
	平均すべり量 (m)	9.9
	最大すべり量 (m)	19.9
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	1.6×10^{22}
	平均すべり量 (m) ※3	27.8
	最大すべり量 (m)	40.8



検討波源モデルA (プレート境界面浅部)
(敷地に近い大すべり域の位置を東へ40km、大すべり域間の距離を130kmとしたケース)



主部断層：深さ10km以深の断層
浅部断層：深さ10km以浅の断層

※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量
※2 すべり量が0mでない領域の断層面積(123,601km²)に基づき算出
※3 すべり量が0mでない領域の断層面積(13,877km²)に基づき算出

余 白

検討波源モデルA,Bのパラメータスタディモデルの設定

検討波源モデルB-1のすべり量分布の設定 (大すべり域が2箇所のケース)

■ 大すべり域の位置を20kmずつ移動、大すべり域間の距離を20kmずつ変更したケースのすべり量設定方法の基本的な流れは、6-1 検討波源モデルのパラメータ (6) すべり分布の設定 (検討波源モデルA (プレート境界面浅部)) のSTEP1~STEP4と同様に沈み込み速度に基づき各小断層の平均すべり量 D_i を算出した上で各小断層のすべり量を設定する。大すべり域、超大すべり域、遷移領域のすべり量設定の詳細は以下のとおり。

E2.0 (東へ40km) -G6.0 (大すべり域間120km) ケース

○ 各小断層の平均すべり量 D_i に対し背景領域のすべり量 $D_b = a \cdot D_i$ を $a=1.11$ で設定。

各小断層の平均すべり量 D_i (m)

深度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
40km	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
20km	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
10km	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38			
0km	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38						

最も深い背景領域 : $1/4 \times D_b = 0.25a \cdot D_i$

深い背景領域 : $1/2 \times D_b = 0.5a \cdot D_i$

背景領域 : $D_b = a \cdot D_i$

分岐断層

各小断層のすべり量 D (m)

深度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
40km	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
20km	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
10km	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38			
0km	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38						

遷移領域 : $(2D_i + D_b) / 2$

遷移領域の小断層と隣合う大すべり域の小断層と背景領域の小断層の平均とする。また、隣合う小断層は可能な限り同じ沈み込み速度の小断層から選定する。

→ 遷移領域のすべり量設定において参照する小断層の位置関係を示す

大すべり域、超大すべり域、遷移領域のすべり量 D (m)の設定方法

深度	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38							
40km	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
20km	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
10km	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38			
0km	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38						

大すべり域 : $2D_i$

超大すべり域と大すべり域の遷移領域 : $3D_i$

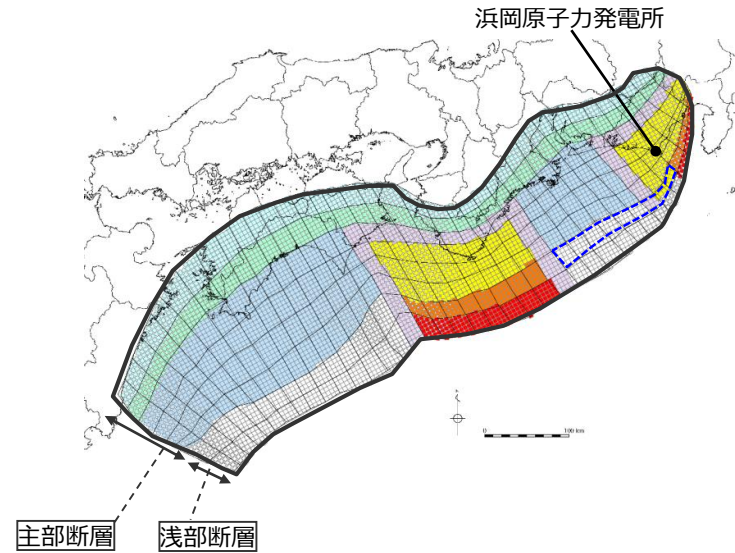
超大すべり域 : $4D_i$

分岐断層

6-8 パラメータスタディモデルの設定 検討波源モデルA,Bのパラメータスタディモデルの設定 検討波源モデルB-1のすべり量分布の設定 (大すべり域が2箇所の場合)

■断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播するケースのうち、検討波源モデルB（プレート境界面浅部・東海断層系）について、大すべり域の位置を20kmずつ移動、大すべり域間の距離を20kmずつ変更したケースの各小断層のすべり分布は以下のとおり。

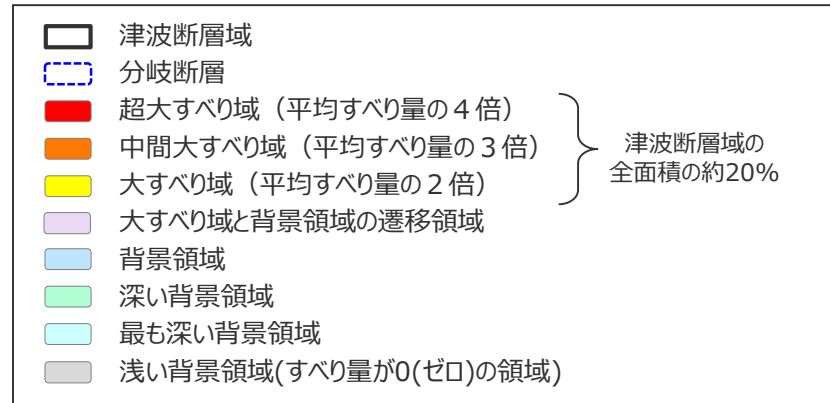
E2.0 (東へ40km) -G6.0 (大すべり域間120km) ケース



検討波源モデル B-1
(プレート境界面浅部・東海断層系)

すべり量

最大すべり量(m)	平均すべり量(m)
40.8	11.8



西 ←

小断層のすべり量分布 (m)

⇒ 東

深度40kmL	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30kmL	1	3.7	3.7	3.6	3.6	3.5	3.5	3.2	3.1	3.0	2.9	2.9	2.8	2.8	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.5	2.4	2.6	2.3	2.3	1.9	1.9	1.5	1.5	1.5	1.5	1.4	1.4	1.0	1.0
20kmL	2	7.5	7.5	7.2	7.2	7.0	7.0	6.4	6.2	6.0	5.9	5.9	5.7	5.5	5.4	5.4	5.4	5.2	5.2	5.2	5.0	5.0	5.0	5.0	4.8	5.1	5.1	4.5	4.5	3.8	3.8	3.0	3.0	3.0	2.7	2.7	2.0	
	3	14.9	14.9	14.4	14.4	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.0	11.8	11.3	11.3	11.1	10.4	12.4	12.4	12.0	12.0	12.0	11.6	11.6	11.4	7.2	9.6	10.3	10.3	9.1	9.1	7.7	8.8	8.8	7.0	7.0	6.3	6.3	4.5
10kmL	4	14.9	14.9	14.4	14.4	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.4	12.0	11.8	11.3	11.1	15.2	19.4	19.4	19.4	18.8	18.8	18.1	18.1	17.9	13.8	9.6	11.6	10.3	10.3	9.1	7.7	10.8	13.8	13.8	10.9	10.9	9.8	7.1
	5	14.9	14.9	14.4	14.4	14.1	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.0	12.0	11.8	11.3	15.6	19.9	19.4	19.4	19.4	18.8	18.8	18.1	17.9	13.8	9.6	9.6	11.6	10.3	10.3	9.1	11.4	13.8	13.8	10.9	10.9	9.8	9.8
0kmL	6	14.9	14.9	14.4	14.4	14.1	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.4	12.0	11.8	11.3	15.6	19.9	19.9	19.4	19.4	18.8	18.8	18.1	18.1	14.0	10.0	9.6	11.6	11.6	10.3	10.3	13.3	16.3	16.3	13.8	10.9	9.8	9.8
	7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	15.6	29.9	29.9	29.9	29.1	29.1	28.1	27.2	27.2	14.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.3	16.3	16.3	20.7	16.4	14.7	14.7
	8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	15.6	40.8	39.8	39.8	38.8	38.8	37.5	37.5	36.3	14.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	27.7	21.9	19.6	19.6

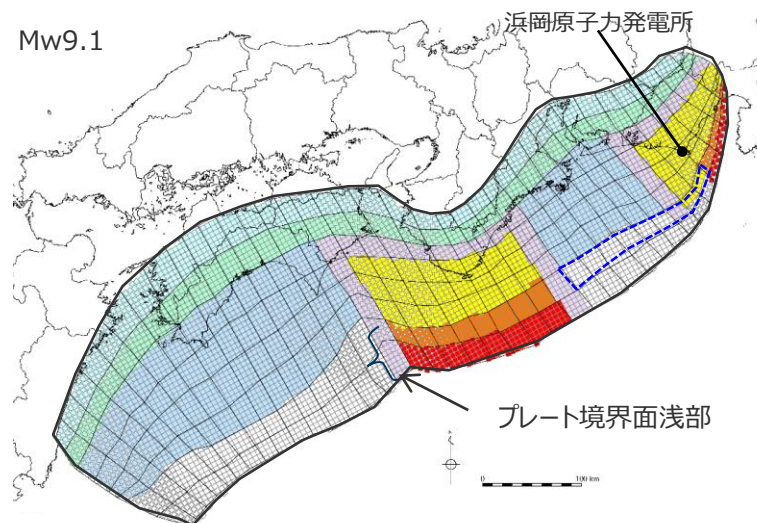
分岐断層

・すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。(東西方向はさらにwとeの2つに分割)
 ・駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10kmの位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす(内閣府(2012))とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

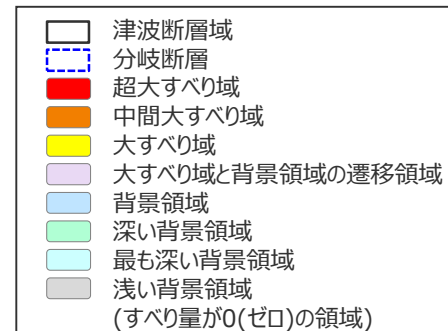
断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	5.9×10^{22}
	Mw	9.1
	平均応力降下量 (MPa) ※1	3.0
	平均すべり量 (m) ※2	11.8
	最大すべり量 (m)	40.8
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	4.5×10^{22}
	平均すべり量 (m)	10.0
	最大すべり量 (m)	19.9
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	1.4×10^{22}
	平均すべり量 (m) ※3	27.5
	最大すべり量 (m)	40.8

※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量

※2 すべり量が0mでない領域の断層面積(122,494km²)に基づき算出※3 すべり量が0mでない領域の断層面積(12,769km²)に基づき算出

検討波源モデルモデル B-1 (プレート境界面浅部・東海断層系)
(敷地に近い大すべり域の位置を東へ40km、大すべり域間の距離を120kmとしたケース)



主部断層：深さ10km以深の断層

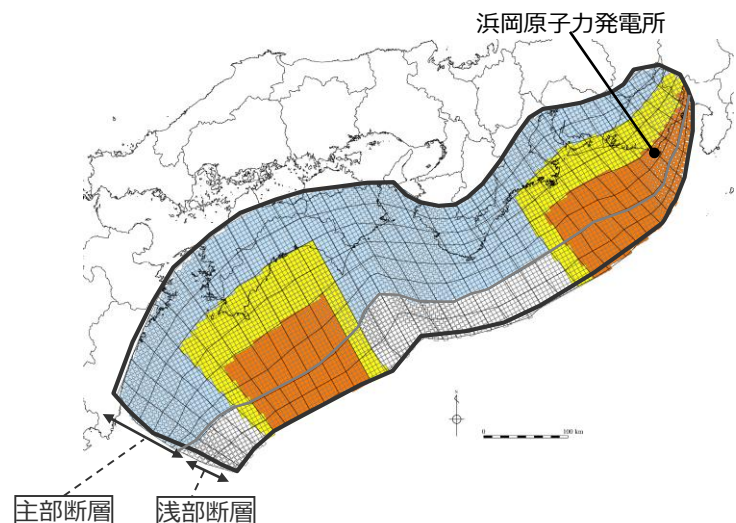
浅部断層：深さ10km以浅の断層

検討波源モデルC

・ここでは、大すべり域を東西に約10kmずつ独立に移動させたときに敷地への影響が最も大きいケース（水位上昇側）についてのみ示し、その他のケースについては、データ集および第981回机上配布資料に示す。

6-8 パラメータスタディモデルの設定 検討波源モデルCのパラメータスタディモデルの設定 検討波源モデルCのすべり量分布の設定（大すべり域が2箇所のケース）

■ 検討波源モデルCの大すべり域の位置を東へ60kmとしたケースの各小断層のすべり量分布は以下のとおり。

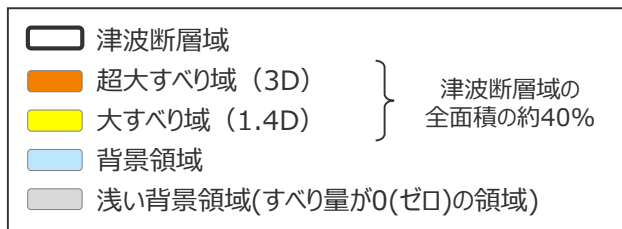


検討波源モデルC
の大すべり域の位置を東へ60kmとしたケース

すべり量

最大すべり量 (m) [※]	平均すべり量 (m)
31.3	12.2

※東海地域の最大すべり量を記載



・D：平均すべり量

小断層のすべり量分布 (m)

		南海地域											東海地域																												
		西 ←											→ 東																												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
陸側 ⇄	深度40km↓	1	4.7	4.7	4.5	4.5	4.4	4.4	4.0	3.9	3.8	3.7	3.7	3.6	3.5	3.4	3.4	3.4	3.3	3.3	3.3	3.2	3.2	3.1	3.1	3.0	3.2	2.8	2.8	2.4	2.4	1.9	1.9	1.9	1.9	1.7	1.7	1.2	1.2		
	20km↓	2	4.7	4.7	4.5	4.5	4.4	4.4	4.0	3.9	3.9	3.8	3.7	3.7	3.6	3.5	3.4	3.4	3.4	3.3	3.3	3.3	3.2	3.2	3.1	3.1	3.0	3.2	3.2	2.8	2.8	2.4	2.4	1.9	1.9	1.9	1.9	1.7	1.7	1.2	1.2
海溝軸 ⇄	10km↓	3	4.7	4.7	4.5	4.5	17.7	17.7	16.1	16.1	15.6	15.2	14.8	14.3	3.6	3.5	3.5	3.4	3.4	3.3	3.3	3.3	3.2	3.2	3.1	3.1	3.0	12.1	12.9	12.9	11.4	11.4	9.7	9.7	9.7	7.7	7.7	6.8	6.8	5.0	5.0
	0km↓	4	4.7	4.7	4.5	4.5	17.7	17.7	16.1	16.1	15.6	15.6	15.2	14.8	14.8	3.6	3.5	3.5	3.4	3.4	3.4	3.3	3.3	3.2	3.2	3.1	3.1	12.1	14.6	12.9	12.9	11.4	9.7	9.7	9.7	7.7	7.7	6.8	6.8	5.0	5.0
⇄	10km↓	5	4.7	4.7	4.5	4.5	17.7	38.0	38.0	34.4	34.4	33.3	32.5	32.5	14.8	3.7	3.6	3.5	3.5	3.4	3.4	3.4	3.3	3.3	3.2	3.1	3.1	12.1	25.9	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.7	20.7	16.4	16.4	14.7	14.7	
	0km↓	6	4.7	4.7	4.5	4.5	17.7	38.0	38.0	34.4	34.4	33.3	33.3	32.5	14.8	3.7	3.6	3.5	3.5	3.4	3.4	3.4	3.3	3.3	3.2	3.2	3.1	12.5	25.9	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.7	20.7	16.4	14.7	14.7	
⇄	10km↓	7	0.0	0.0	0.0	0.0	17.7	38.0	38.0	34.4	34.4	34.4	33.3	33.3	15.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	12.5	25.9	25.9	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.7	16.4	14.7	14.7	
	0km↓	8	0.0	0.0	0.0	0.0	18.2	38.0	38.0	38.0	34.4	34.4	33.3	33.3	15.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	12.5	25.9	25.9	31.3	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	20.7	16.4	14.7	14.7	

・すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
 ・駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10km の位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす（内閣府(2012)）とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

検討波源モデルCの断層パラメータ（大すべり域が2箇所の場合）

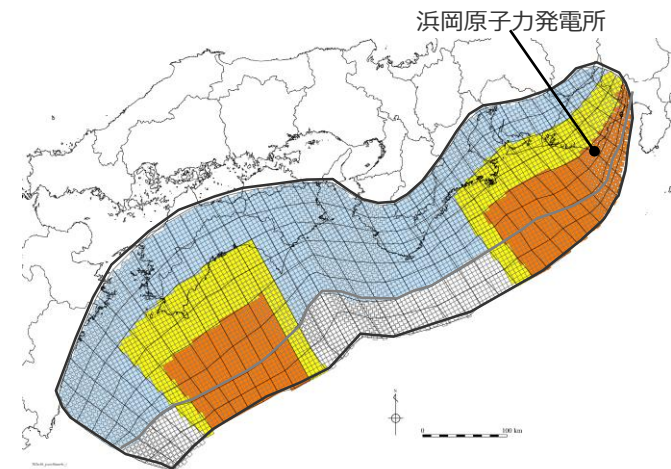
断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	6.4×10^{22}
	Mw	9.1
	平均応力低下量 (MPa) ※1	3.0
	平均すべり量 (m) ※2	12.2
	最大すべり量 (m) ※3	31.3
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	4.5×10^{22}
	平均すべり量 (m)	9.9
	最大すべり量 (m) ※3	31.3
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	1.9×10^{22}
	平均すべり量 (m) ※4	27.0
	最大すべり量 (m) ※3	31.3

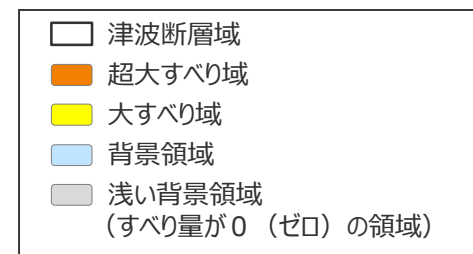
※1 スケーリング則の対象とした平均応力低下量

※2 すべり量が0(ゼロ)でない領域の断層面積(126,822km²)に基づき算出

※3 東海地域の最大すべり量を記載

※4 すべり量が0(ゼロ)でない領域の断層面積(17,098km²)に基づき算出

検討波源モデルCの大すべり域の位置を東へ60kmとしたケース



主部断層：深さ10km以深の断層

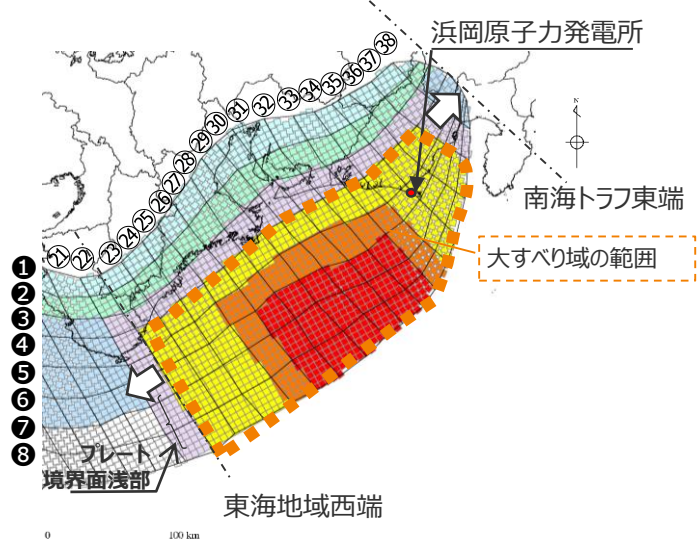
浅部断層：深さ10km以浅の断層

検討波源モデルD

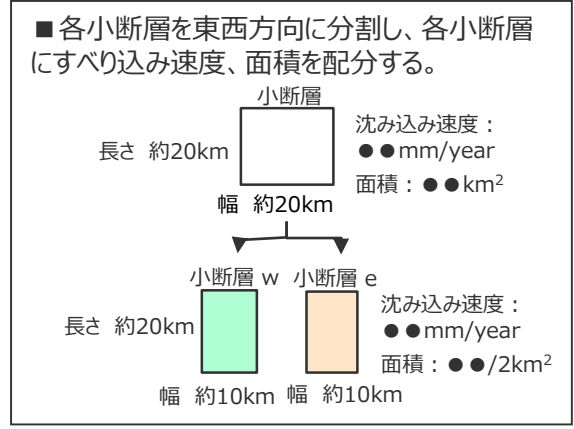
- ここでは、大すべり域を東西に約10kmずつ独立に移動させたときに敷地への影響が最も大きいケース（基準断層モデル）についてのみ示し、その他のケースについては、データ集に示す。

6-8 パラメータスタディモデルの設定 検討波源モデルDのパラメータスタディモデルの設定 大すべり域の位置および面積（大すべり域が1箇所のケース）

- 検討波源モデルDのパラメータスタディモデルの大すべり域は、津波断層域の全面積の約20%とし、検討波源モデルDの大すべり域の位置を基準位置として、東西に約10kmずつ移動させて設定した。
- 設定したパラメータスタディモデルの大すべり域の位置および面積は以下のとおり。
なお、小断層サイズとの関係により、大すべり域の面積は津波断層域の全面積の厳密に20%とはならず、ケースにより若干異なる。



検討波源モデルの各小断層の配列



各小断層の分割方法

各ケースの大すべり域の設定

大すべり域の位置	大すべり域の設定																		面積 (km ²)	面積比※ (%)	
	設定した小断層の東西の範囲（列は左図参照）																				
	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37			38
	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w		
東へ100km																				26,130	18.1
東へ90km																				26,130	18.1
東へ80km																				26,130	18.1
東へ70km																				26,130	18.1
東へ60km																				26,130	18.1
東へ50km																				26,130	18.1
東へ40km																				26,130	18.1
東へ30km																				27,056	18.7
東へ20km																				27,836	19.3
東へ10km																				28,542	19.8
基準位置																				29,154	20.2
西へ10km																				29,697	20.6
西へ20km																				30,193	20.9
西へ30km																				30,696	21.3
西へ40km																				31,049	21.5
西へ50km																				30,258	21.0
西へ60km																				29,393	20.4

※面積比は津波断層域(144,379km²)に対する各ケースの大すべり域（中間大すべり域、超大すべり域を含む）の面積の比を示す。

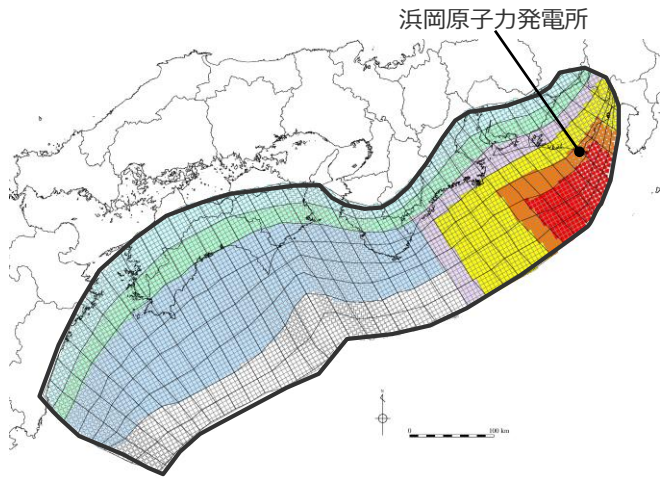
- （黄色）：大すべり域を設定した小断層
- （オレンジ）：中間大すべり域を設定した小断層
- （赤）：超大すべり域を設定した小断層
- （紫）：遷移領域を設定した小断層

6-8 パラメータスタディモデルの設定

検討波源モデルDのパラメータスタディモデルの設定

検討波源モデルDのすべり量分布の設定 (大すべり域が1箇所のケース)

■ 検討波源モデルDの大すべり域の位置を東へ60kmとしたケースの各小断層のすべり量分布は以下のとおり。



検討波源モデルDの大すべり域の位置を東へ60kmとしたケースのすべり量

最大すべり量(m)	平均すべり量(m)
41.7	11.3

津波断層域	} 津波断層域の 全面積の約20%
超大すべり域 (平均すべり量の4倍)	
中間大すべり域 (平均すべり量の3倍)	
大すべり域 (平均すべり量の2倍)	
大すべり域と背景領域の遷移領域	
背景領域	
深い背景領域	
最も深い背景領域	
浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)	

検討波源モデルDの大すべり域の位置を東へ60kmとしたケース

検討波源モデルDの大すべり域の位置を東へ60kmとしたケースの小断層のすべり量分布 (m)

		西 ←																																					⇒ 東																																			
陸側⇄海溝軸側	深度40km↓		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38																																		
	30km↓	1	3.5	3.5	3.4	3.4	3.3	3.3	3.0	2.9	2.8	2.8	2.8	2.7	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.4	2.4	2.4	2.4	2.3	2.3	2.3	2.3	2.4	2.1	2.1	1.8	1.8	1.4	1.4	1.4	1.4	1.3	1.3	0.9	0.9																																		
	20km↓	2	7.0	7.0	6.8	6.8	6.6	6.6	6.0	5.8	5.8	5.6	5.5	5.5	5.3	5.2	5.1	5.1	5.1	4.9	4.9	4.9	4.7	4.7	4.7	4.7	4.5	4.8	4.8	4.3	4.3	3.6	3.6	3.6	2.9	2.9	2.9	2.6	2.6	1.8																																		
		3	14.0	14.0	13.6	13.6	13.2	13.2	12.0	12.0	11.6	11.3	11.3	11.1	10.7	10.7	10.4	10.4	10.1	10.1	9.8	9.8	9.8	9.5	9.5	11.3	10.9	10.9	11.7	11.7	10.3	10.3	8.7	8.7	8.7	6.9	6.9	6.2	6.2	4.5																																		
	10km↓	4	14.0	14.0	13.6	13.6	13.2	13.2	12.0	12.0	11.6	11.6	11.3	11.1	11.1	10.7	10.4	10.4	10.1	10.1	10.1	9.8	9.8	9.5	9.5	13.7	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	9.8	7.1																																		
		5	14.0	14.0	13.6	13.6	13.2	13.2	12.0	12.0	11.6	11.6	11.3	11.1	11.1	10.7	10.4	10.4	10.1	10.1	10.1	9.8	9.8	9.5	9.5	13.7	17.9	17.3	17.3	20.8	27.7	27.7	24.4	24.4	20.7	20.7	16.4	16.4	9.8	9.8																																		
	0km↓	6	14.0	14.0	13.6	13.6	13.2	13.2	12.0	12.0	11.6	11.6	11.3	11.1	11.1	10.7	10.4	10.4	10.1	10.1	10.1	9.8	9.8	9.5	9.5	13.7	17.9	17.9	17.3	20.8	31.3	37.0	37.0	32.6	32.6	27.7	27.7	16.4	9.8	9.8																																		
		7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.7	17.9	17.9	17.3	17.3	31.3	41.7	37.0	37.0	32.6	32.6	27.7	16.4	9.8	9.8																																		
8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.7	18.1	17.9	17.3	17.3	31.3	41.7	41.7	37.0	37.0	32.6	27.7	16.4	9.8	9.8																																			

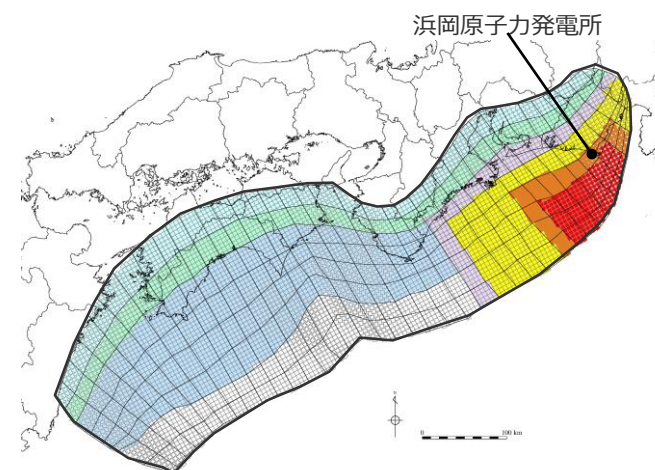
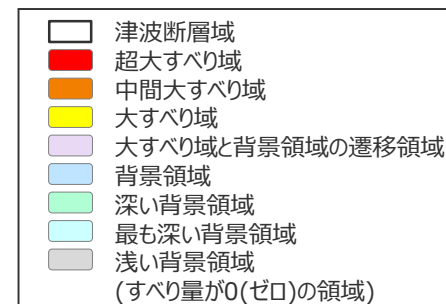
・すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
 ・駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10km の位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす(内閣府(2012))とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

検討波源モデルD

の大すべり域の位置を東へ60kmとしたケースの断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	5.6×10^{22}
	Mw	9.1
	平均応力降下量 ※1(MPa)	3.0
	平均すべり量 ※2(m)	11.3
	最大すべり量 (m)	41.7
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	4.5×10^{22}
	平均すべり量 (m)	9.9
	最大すべり量 (m)	37.0
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	1.2×10^{22}
	平均すべり量 ※3 (m)	24.1
	最大すべり量 (m)	41.7

※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量(主部断層の面積と地震モーメントより算出)

※2 すべり量が0m(ゼロ)でない領域の断層面積(121,438km²)に基づき算出※3 すべり量が0m(ゼロ)でない領域の断層面積(11,714km²)に基づき算出検討波源モデルD
の大すべり域の位置を東へ60kmとしたケース

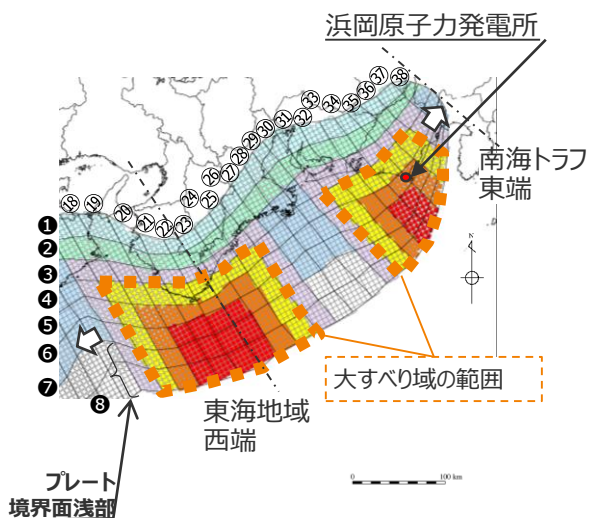
主部断層：深さ10km以深の断層

浅部断層：深さ10km以浅の断層

検討波源モデルDのパラメータスタディモデルの設定

大すべり域の位置および面積（大すべり域が2箇所の場合：大すべり域の位置を東西に10kmずつ独立に移動）

- 大すべり域が2箇所の場合では、2箇所の大すべり域を独立に移動させて検討を行う必要があることから、まず、2箇所の大すべり域を東西に約20kmずつ独立に移動させて網羅的に検討して敷地への影響の大きいケースを抽出し、次に、そのケースを中心として2箇所の大すべり域をさらに詳細に東西に約10kmずつ独立に移動させて検討する手順でパラメータスタディを行った。
- 設定したパラメータスタディモデルの大すべり域の位置および面積は以下のとおり。
なお、小断層サイズとの関係により、大すべり域の面積は津波断層域の全面積の厳密に20%とはならず、ケースにより若干異なる。



各ケースの大すべり域の設定（水位上昇側）

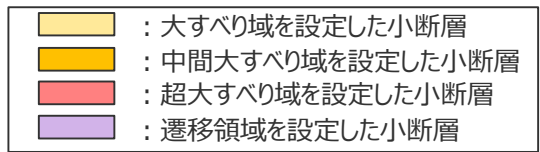
敷地に近い大すべり域の位置	東西の大すべり域間の距離 (km)	大すべり域の設定																																						面積 (km ²)	面積比 ^{※2} (%)
		設定した小断層の東西の範囲（列は左図参照）																																							
		8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38									
W2.5 (西へ50km)	40	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	w	e	31,407	21.8		
	50																																						31,598	21.9	
	60																																						31,738	22.0	
	70																																						32,053	22.2	
	80																																							32,364	22.4
W3.0 (西へ60km)	30																																						31,880	22.1	
	40																																						32,072	22.2	
	50																																						32,211	22.3	
	60 ^{※1}																																						32,526	22.5	
	70																																						32,838	22.7	

各ケースの大すべり域の設定（水位下降側）

敷地に近い大すべり域の位置	東西の大すべり域間の距離 (km)	大すべり域の設定																																						面積 (km ²)	面積比 ^{※2} (%)
		設定した小断層の東西の範囲（列は左図参照）																																							
		8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38									
E0.5 (東へ10km)	120																																						29,009	20.1	
	130																																						29,324	20.3	
	140																																						29,636	20.5	
基準位置	110																																						29,540	20.5	
	120 ^{※1}																																						29,855	20.7	
W0.5 (西へ10km)	130																																						30,166	20.9	
	100																																						29,871	20.7	
	110																																						30,186	20.9	
	120																																						30,498	21.1	

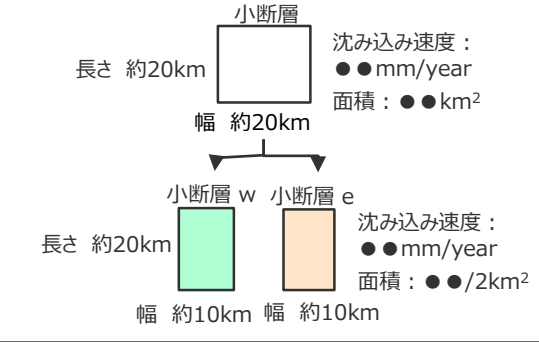
※1：大すべり域を東西に約20kmずつ移動させたときに敷地への影響が最も大きいケース

※2：面積比は津波断層域(144,379km²)に対する各ケースの大すべり域（中間大すべり域、超大すべり域を含む）の面積の比を示す。



検討波源モデルの各小断層の配列

- 各小断層を東西方向に分割し、各小断層にすべり込み速度、面積を配分する。

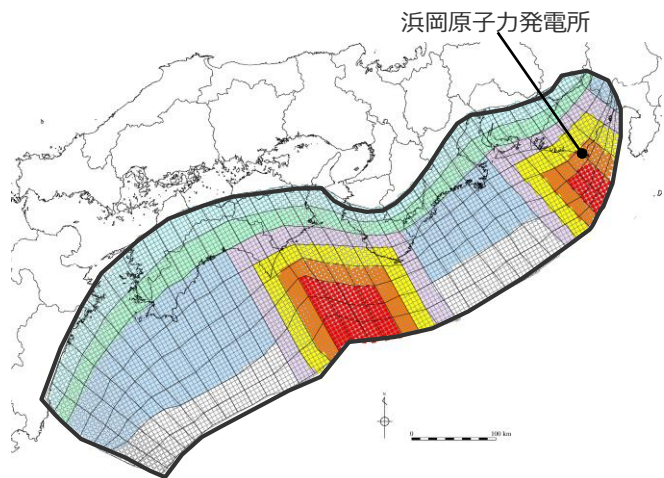


各小断層の分割方法

検討波源モデルDのパラメータスタディモデルの設定

検討波源モデルDのすべり量分布の設定 (大すべり域が2箇所の場合)

■「検討波源モデルD」の敷地に近い大すべり域の位置を基準位置、大すべり域間の距離を140kmとしたケースの各小断層のすべり量分布は以下のとおり。



すべり量

最大すべり量(m)	平均すべり量(m)
40.8	12.0

検討波源モデルDの敷地に近い大すべり域の位置を基準位置、大すべり域間の距離を140kmとしたケース

津波断層域	} 津波断層域の 全面積の約20%
超大すべり域 (平均すべり量の4倍)	
中間大すべり域 (平均すべり量の3倍)	
大すべり域 (平均すべり量の2倍)	
大すべり域と背景領域の遷移領域	
背景領域	
深い背景領域	
最も深い背景領域	
浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)	

小断層のすべり量分布 (m)

		西 ←														⇒ 東																								
陸側 ⇄ 海溝軸側	深度40km↓	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	
		30km↓	1	3.0	3.0	2.9	2.9	2.8	2.8	2.6	2.5	2.4	2.4	2.4	2.3	2.2	2.2	2.2	2.2	2.1	2.1	2.1	2.0	2.0	2.0	2.0	1.9	2.1	1.8	1.8	1.6	1.6	1.2	1.2	1.2	1.2	1.1	1.1	0.8	0.8
	20km↓	2	6.0	6.0	5.8	5.8	5.7	5.7	5.2	5.0	4.9	4.8	4.8	4.6	4.5	4.4	4.4	4.4	4.2	4.2	4.2	4.1	4.1	4.0	4.0	3.9	4.2	4.2	3.7	3.7	3.1	3.1	3.1	2.5	2.5	2.5	2.2	2.2	1.6	
		3	12.1	12.1	11.7	11.7	11.4	11.4	10.3	10.3	10.0	9.7	9.7	9.5	12.5	12.5	12.2	12.2	11.9	11.9	11.5	11.5	11.5	8.8	8.2	8.0	7.8	7.8	8.3	8.3	7.3	7.4	8.5	8.5	8.5	6.7	6.7	4.6	4.6	3.2
	10km↓	4	12.1	12.1	11.7	11.7	11.4	11.4	10.3	10.3	10.0	10.0	9.7	9.5	15.0	20.4	19.9	19.9	19.4	19.4	19.4	18.8	18.8	13.5	8.2	8.0	8.0	7.8	9.4	8.3	8.3	11.1	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.1	3.2
		5	12.1	12.1	11.7	11.7	11.4	11.4	11.4	10.3	10.3	10.0	9.7	9.7	15.5	21.2	30.6	29.9	29.9	29.1	29.1	29.1	18.8	13.5	8.2	8.0	8.0	7.8	7.8	9.4	8.3	12.3	16.3	24.4	20.7	20.7	16.4	10.9	7.7	4.4
	0km↓	6	12.1	12.1	11.7	11.7	11.4	11.4	11.4	10.3	10.3	10.0	10.0	9.7	15.5	21.2	30.6	39.8	39.8	39.8	38.8	29.1	18.8	13.5	8.2	8.2	8.0	8.0	7.8	9.4	9.4	13.9	18.5	24.4	32.6	27.7	20.7	10.9	7.7	4.4
		7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	15.5	21.2	30.6	40.8	39.8	39.8	39.8	29.1	19.4	13.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.9	18.5	27.7	32.6	32.6	20.7	10.9	7.7	4.4	
	8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	15.5	21.2	30.6	40.8	40.8	39.8	39.8	29.1	19.4	13.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.9	20.8	27.7	37.0	32.6	20.7	10.9	7.7	4.4		

・すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
 ・駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10kmの位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす (内閣府(2012)) とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

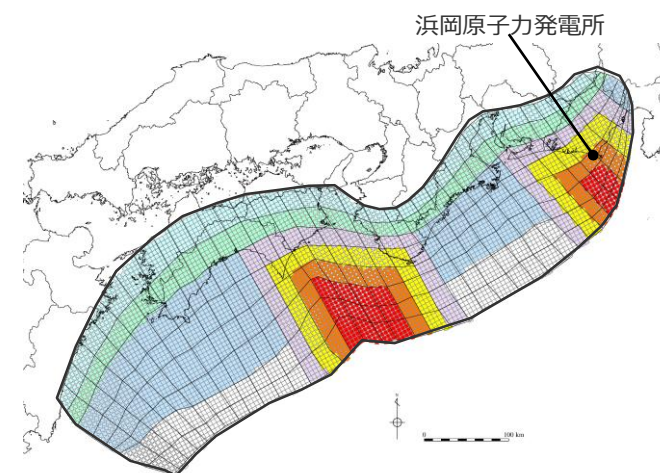
断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	6.2×10^{22}
	Mw	9.1
	平均応力降下量 ※1(MPa)	3.0
	平均すべり量 ※2(m)	12.0
	最大すべり量 (m)	40.8
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
	主部断層	面積 (km ²)
地震モーメント (Nm)		4.5×10^{22}
平均すべり量 (m)		9.9
最大すべり量 (m)		39.8
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	1.7×10^{22}
	平均すべり量 ※3 (m)	26.3
	最大すべり量 (m)	40.8

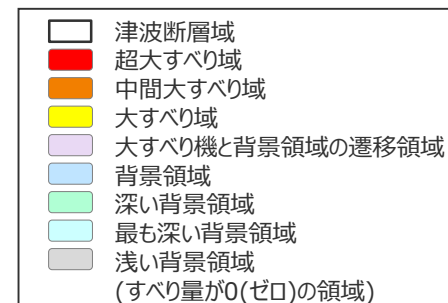
※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量(主部断層の面積と地震モーメントより算出)

※2 すべり量が0m(ゼロ)でない領域の断層面積(125,660km²)に基づき算出

※3 すべり量が0m(ゼロ)でない領域の断層面積(15,936km²)に基づき算出



検討波源モデルDの敷地に近い大すべり域の位置を基準位置、
大すべり域間の距離を140kmとしたケース



主部断層：深さ10km以深の断層

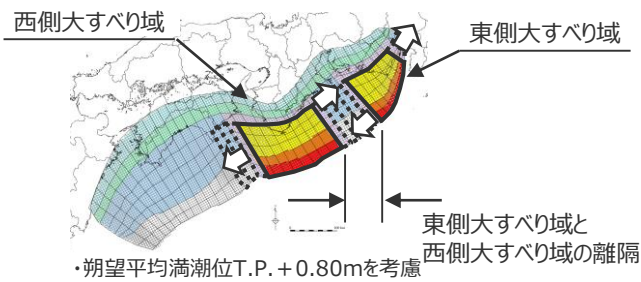
浅部断層：深さ10km以浅の断層

6-8 パラメータスタディモデルの設定

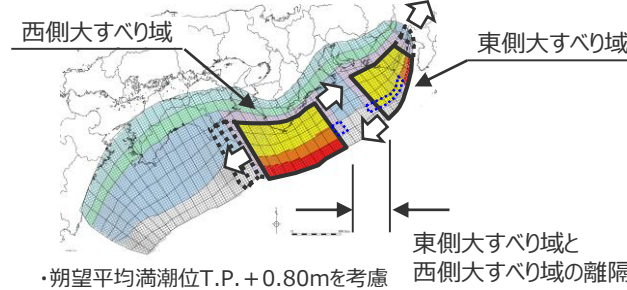
検討波源モデルA,B,Dのパラメータスタディモデルの設定

大すべり域が2つのケースの水位低下時間と大すべり域の位置の関係

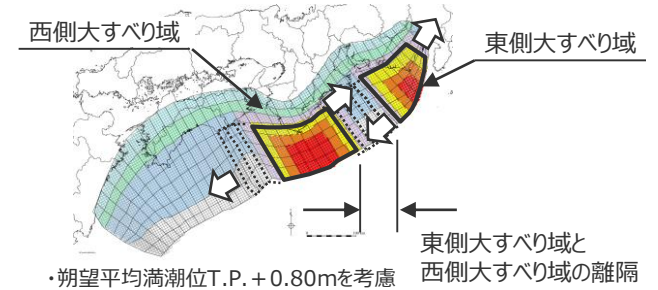
■ 大すべり域が2つのケースの水位低下時間と大すべり域の位置の関係は以下のとおり。



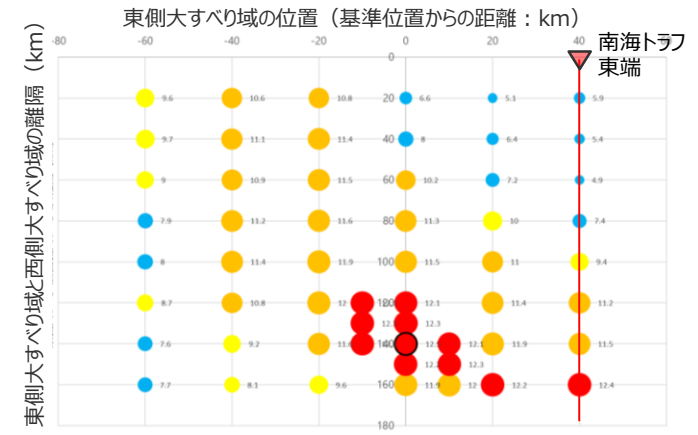
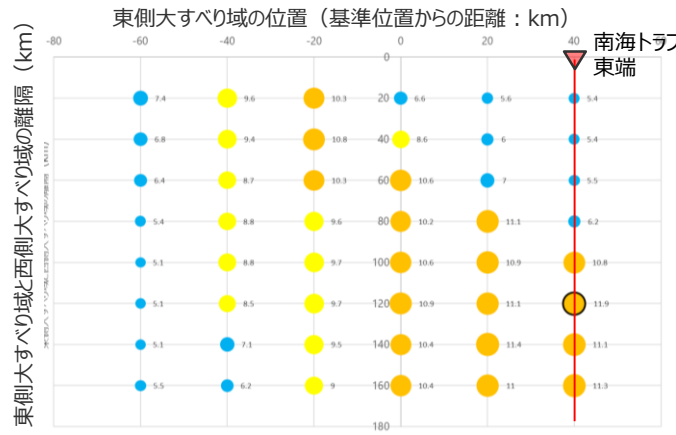
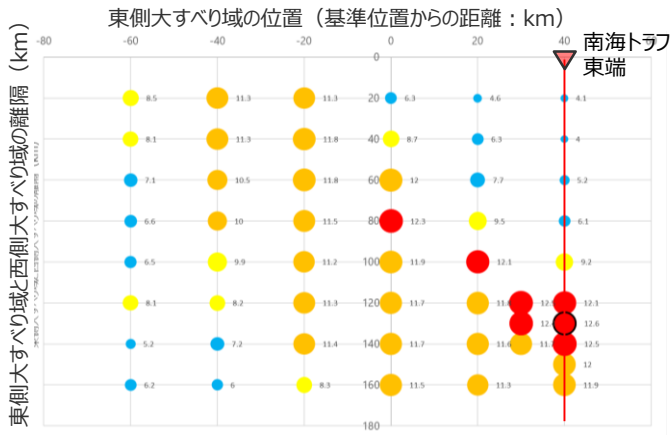
検討波源モデルA 大すべり域2つのケース



検討波源モデルB 大すべり域2つのケース



検討波源モデルD 大すべり域2つのケース



大すべり域の位置と水位低下時間の関係

6 検討波源モデルの津波評価の詳細

6-9 敷地に影響の大きいケースの選定基準

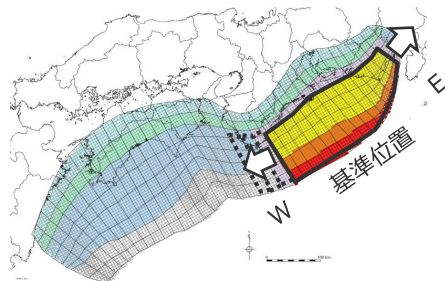
6-9 敷地に影響の大きいケースの選定基準 選定基準の明確化

■ 敷地に影響の大きいケースの選定基準についてより定量的な選定基準とすることとし、小数点第一位まで同じ津波高のケースが複数ある場合には、さらに小さい桁数まで比較し選定することとした。

【検討波源モデルAの概略パラメータスタディの結果（第662回審査会合）を例示】

前回（第662回審査会合）の選定基準

・小数点第一位まで同じ津波高のケースが複数ある場合には、大すべり域の位置が敷地に近いケースを選定。



大すべり域の位置	敷地前面最大上昇水位 (T.P. m)
E2.0(東へ40km)	17.6
E1.5(東へ30km)	17.6
E1.0(東へ20km)	17.6
E0.5(東へ10km)	17.6
0 (基準位置)	17.7
W0.5(西へ10km)	17.7
W1.0(西へ20km)	17.7
W1.5(西へ30km)	16.5
W2.0(西へ40km)	14.8
W2.5(西へ50km)	11.9
W3.0(西へ60km)	8.6

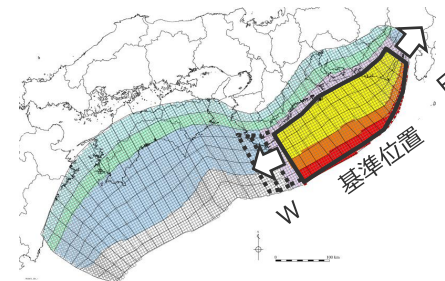
・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮
・同じ値がある場合、大すべり域の位置が敷地に近いケースを選定

⇒選定
(詳細パラメータ
スタディへ)



今回の選定基準

・小数点第一位まで同じ津波高のケースが複数ある場合には、さらに小さい桁数まで比較し選定。



大すべり域の位置	敷地前面最大上昇水位 (T.P. m)
E2.0(東へ40km)	17.6
E1.5(東へ30km)	17.6
E1.0(東へ20km)	17.6
E0.5(東へ10km)	17.6
0 (基準位置)	17.65
W0.5(西へ10km)	17.67
W1.0(西へ20km)	17.66
W1.5(西へ30km)	16.5
W2.0(西へ40km)	14.8
W2.5(西へ50km)	11.9
W3.0(西へ60km)	8.6

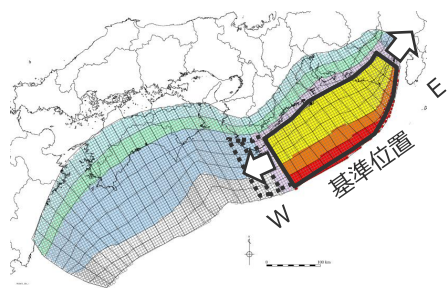
・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

⇒選定
(詳細パラメータ
スタディへ)

6-9 敷地に影響の大きいケースの選定基準 選定基準の明確化に伴う影響の確認

- 検討波源モデルAの概略パラメータスタディ結果について、小数点第一位まで同じ津波高であった3ケースの津波評価結果について最大上昇水位分布、水位の時間変化を示す。
- 3ケースの最大上昇水位分布、水位の時間変化はほぼ同じであり、これらの選定ケースの違いが津波評価結果に与える影響は小さいことを確認した。

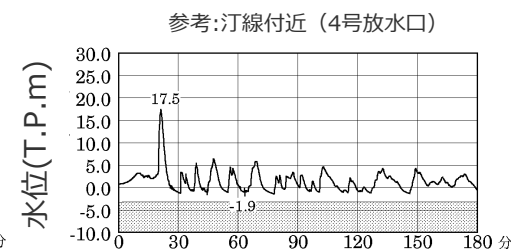
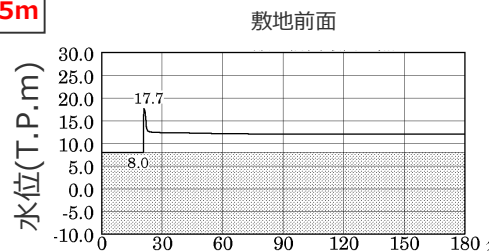
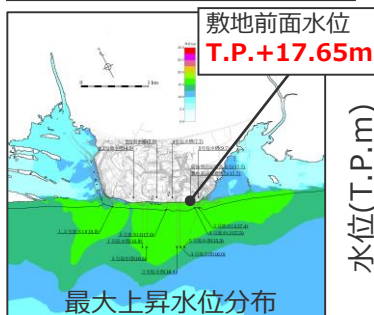
【検討波源モデルAの概略パラメータスタディの結果
(第662回審査会合) を例示】



大すべり域の位置	敷地前面最大上昇水位 (T.P. m)
E2.0(東へ40km)	17.6
E1.5(東へ30km)	17.6
E1.0(東へ20km)	17.6
E0.5(東へ10km)	17.6
0 (基準位置)	17.65
W0.5(西へ10km)	17.67
W1.0(西へ20km)	17.66
W1.5(西へ30km)	16.5
W2.0(西へ40km)	14.8
W2.5(西へ50km)	11.9
W3.0(西へ60km)	8.6

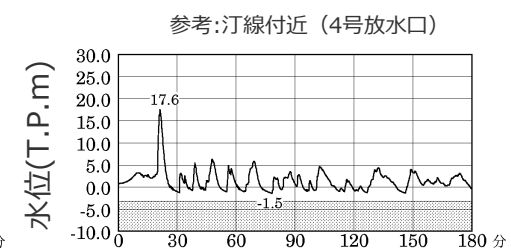
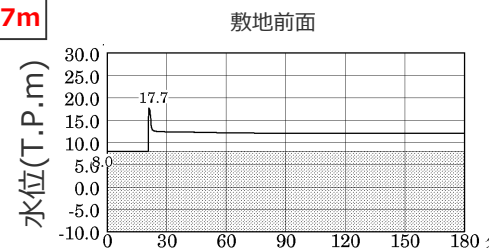
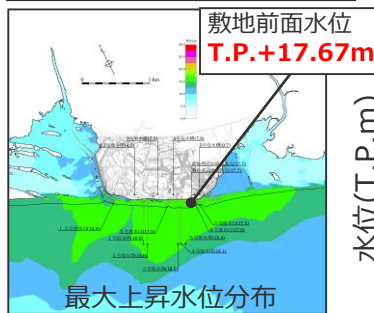
⇒選定

0 (基準位置)



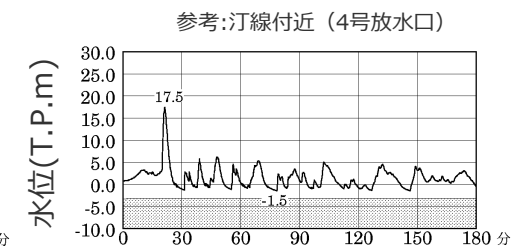
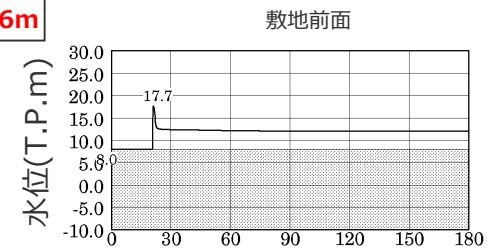
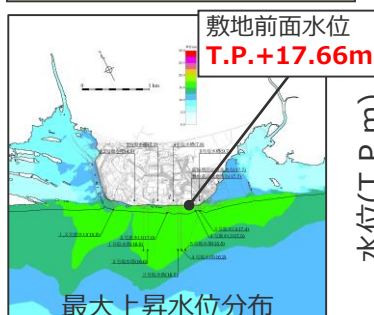
水位の時刻歴波形

W0.5 (西へ10km)



水位の時刻歴波形

W1.0 (西へ20km)



水位の時刻歴波形

・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮

・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮 ・網掛け部の上端は当該地点の標高

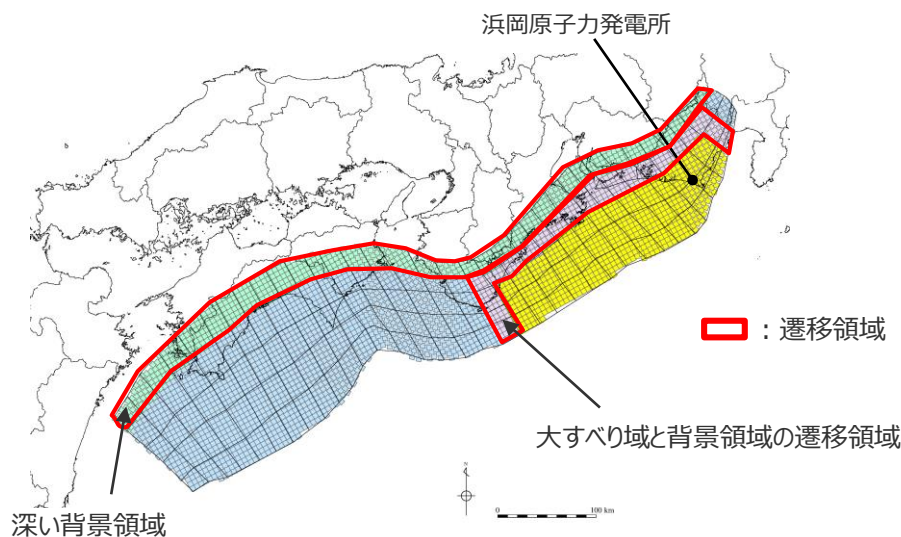
6 検討波源モデルの津波評価の詳細

6-10 遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認

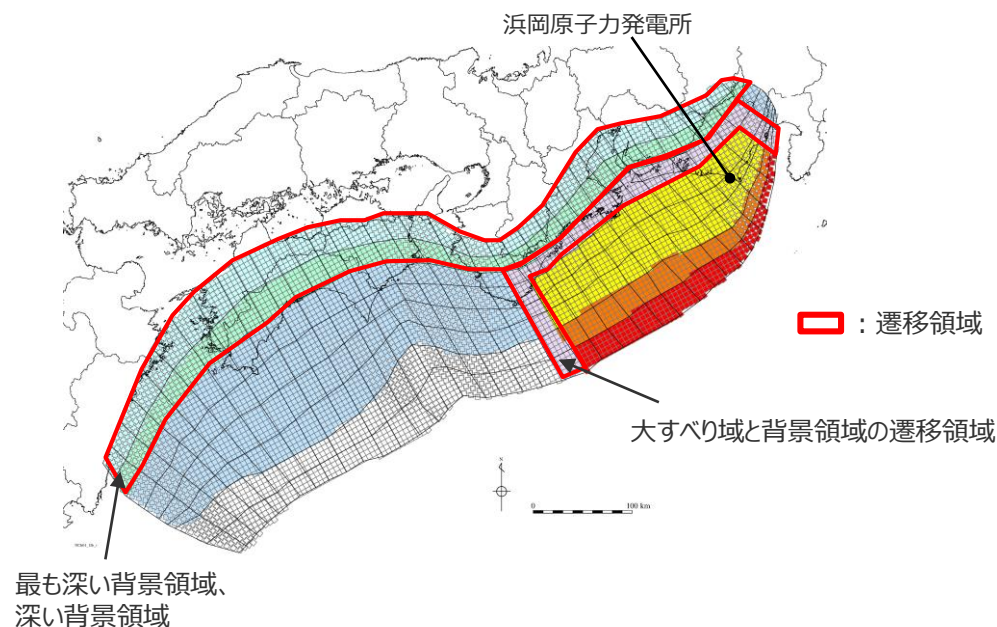
遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認

(遷移領域を設定した考え方)

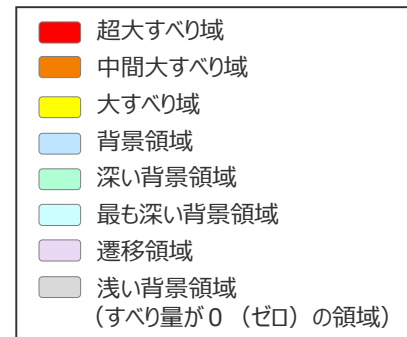
- 津波波源としての特性を主要なパラメータで表す特性化波源モデルでは、実際には連続的に変化する断層のすべり量分布を、不連続に変化するすべり量分布に特性化するのが一般的である。
- 特性化に伴う平面的なすべり量分布の不連続は、津波の数値シミュレーションの安定性に影響を与える可能性があることから、遠州灘沿岸域の痕跡再現モデルおよび検討波源モデルAでは、遷移領域として、隣り合う領域の境界部に中間的なすべり量を持つ領域を設定し、段階的なすべり量分布となるように配慮した。
- 遷移領域は、大すべり域と背景領域の境界部（大すべり域と背景領域の遷移領域）、および、背景領域と断層下端との境界部（深い背景領域、最も深い背景領域）に設定した。



遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル



検討波源モデルA



6-10 遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認

遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認

(検討波源モデルAと日本海溝の津波評価手法によるモデルとの比較)

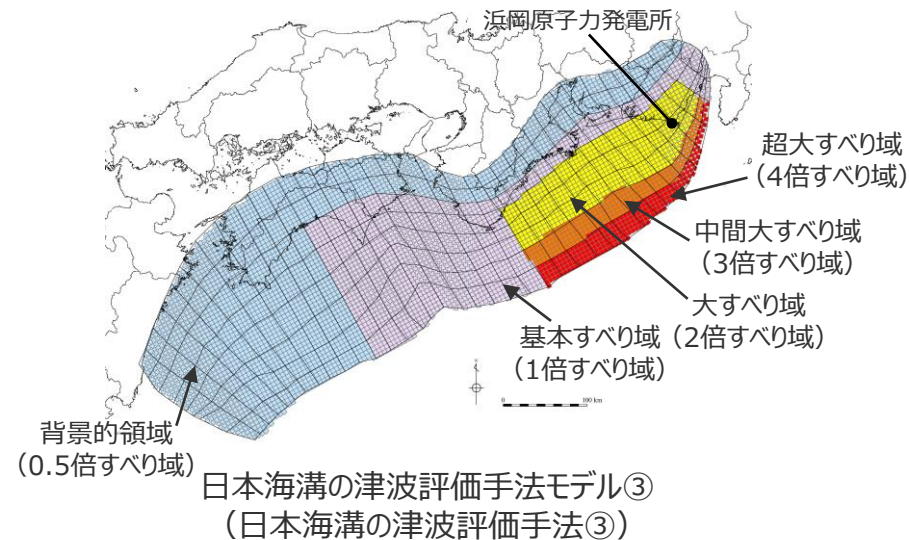
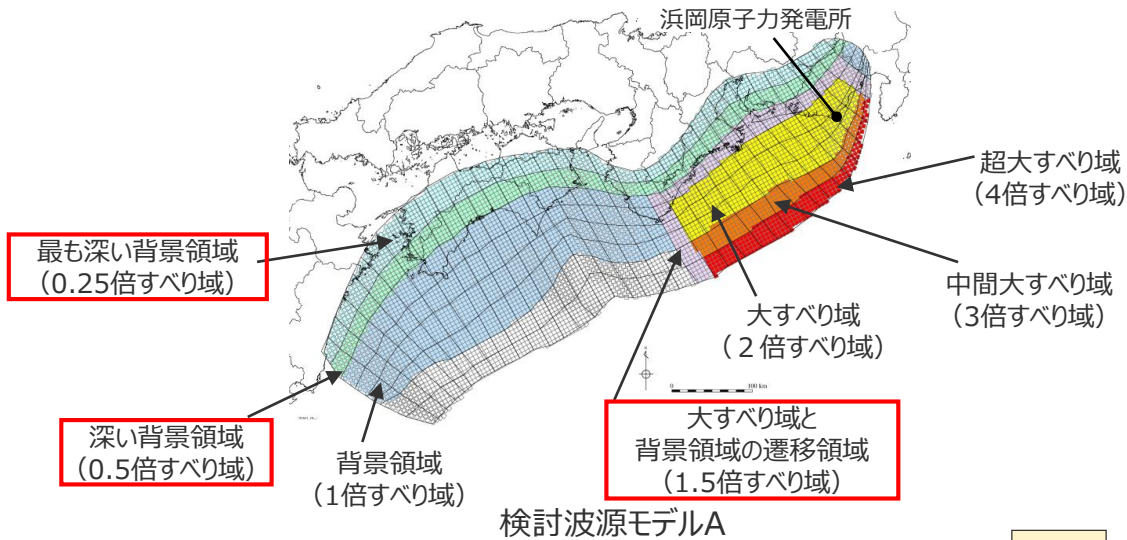
- 日本海溝の津波評価手法では、遷移領域は設定されていないものの、検討波源モデルAと同様に、段階的なすべり量分布が設定されている。
- 検討波源モデルAでは、他の特性化波源モデルと比べると、より丁寧に、すべり量分布の不連続が段階的なものとなるよう配慮している。

検討波源モデルAのすべり量と面積の関係

領域	すべり量 (平均すべり量 に対する倍率)	累積面積 (%) (津波断層域の全面積 に対する割合)
超大すべり域	4倍	5%
中間大すべり域	3倍	10%
大すべり域	2倍	20%
大すべり域と背景領域の遷移領域	1.5倍	25%
背景領域	1倍	70%
深い背景領域	0.5倍	85%
最も深い背景領域	0.25倍	100%

日本海溝の津波評価手法モデル③のすべり量と面積の関係

領域	すべり量 (基本すべり量 に対する倍率)	累積面積 (%) (津波断層域の全面積 に対する割合)
超大すべり域	4倍	5%
中間大すべり域	3倍	10%
大すべり域	2倍	20%
—	—	20%
基本すべり域	1倍	50%
背景的領域	0.5倍	100%
—	—	100%

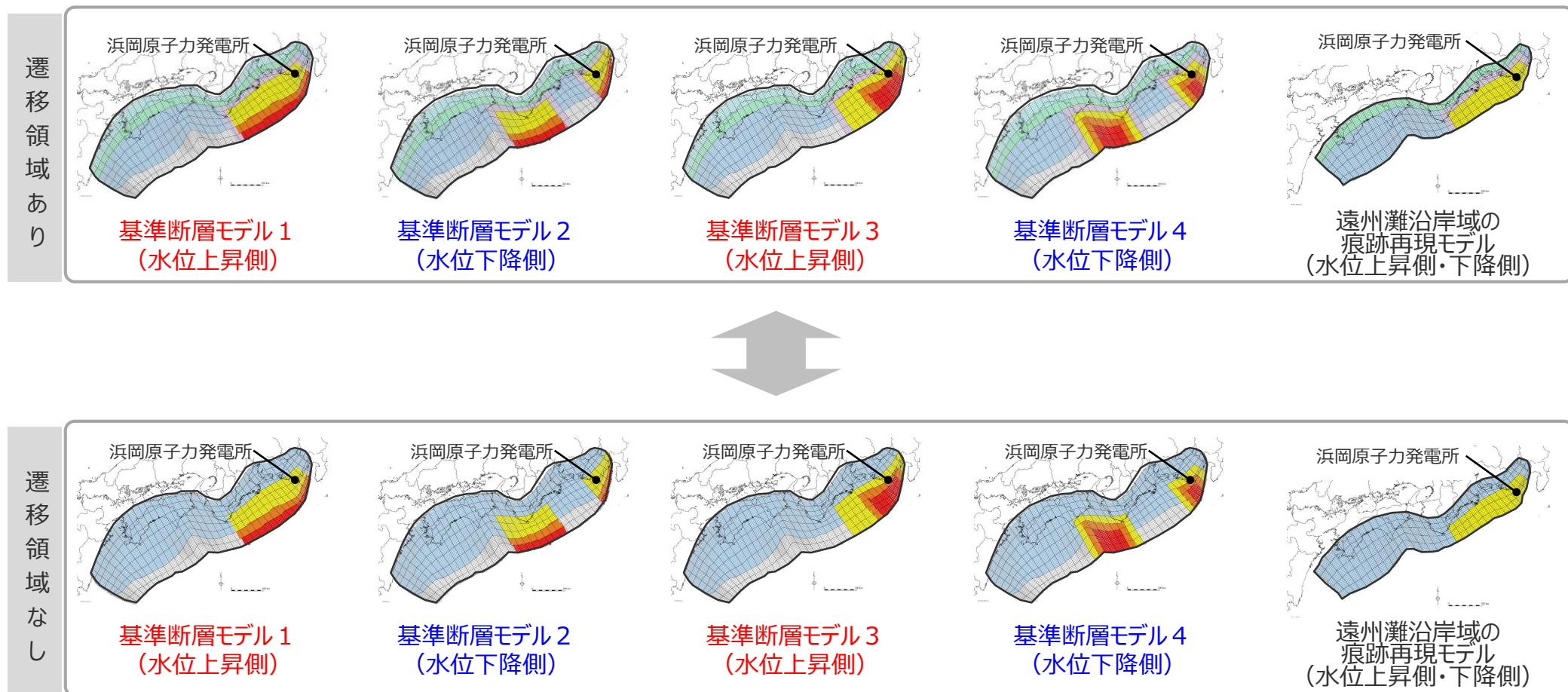


- 痕跡再現モデルおよび検討波源モデルにおける遷移領域は、特性化に伴うすべり量分布の平面的な不連続を段階的なものとし、津波の数値シミュレーションの安定性に影響を与えないよう配慮したものであり、日本海溝の津波評価手法でも同様に段階的なすべり量分布が設定されている。これらのことから、遷移領域を設定して段階的なすべり量分布を設定する考え方は妥当であると評価した。

遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認

(数値シミュレーションによる影響確認)

- 遷移領域の有無が津波評価結果に与える影響を確認するため、検討波源モデルの概略パラメータスタディの結果選定した基準断層モデル1～4、および遠州灘沿岸域の痕跡再現モデルについて、それぞれ遷移領域のない波源モデルを設定して、数値シミュレーションを実施した。
- 遷移領域なしの波源モデル設定においては、遷移領域としていた小断層には背景領域のすべり量を設定し、その他のすべり量分布は遷移領域ありの波源モデルと同じとした。



・各波源モデルの詳細設定は補足説明資料6-6章参照

6-10 遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認

遷移領域の無い波源モデルの設定：基準断層モデル1 (Vr=2.0km/s条件で選定したケース)

(断層パラメータ設定)

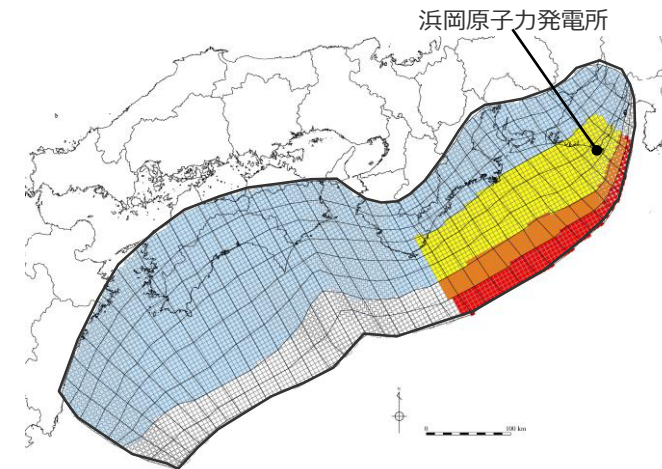
断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	7.1×10 ²²
	Mw	9.2
	平均応力降下量 ※1(MPa)	3.0
	平均すべり量 ※2(m)	14.2
	最大すべり量 (m)	41.7
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10 ¹⁰
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	5.5×10 ²²
	平均すべり量 (m)	12.2
	最大すべり量 (m)	20.8
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	1.7×10 ²²
	平均すべり量※3 (m)	31.6
	最大すべり量 (m)	41.7

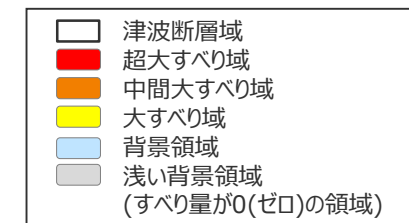
※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量

※2 すべり量が0m(ゼロ)でない領域の断層面積(122,501km²)に基づき算出

※3 すべり量が0m(ゼロ)でない領域の断層面積(12,777km²)に基づき算出



基準断層モデル1 (遷移領域なし)



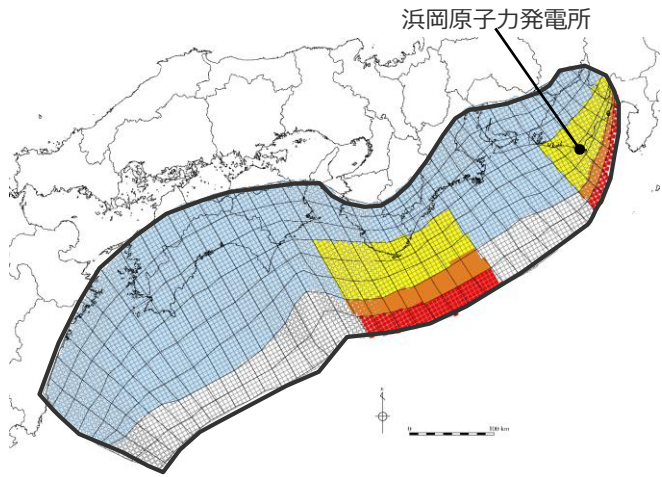
主部断層：深さ10km以深の断層

浅部断層：深さ10km以浅の断層

6-10 遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認

遷移領域の無い波源モデルの設定：基準断層モデル2 (Vr=2.0km/s条件で選定したケース) (すべり量分布の設定)

■「基準断層モデル2 (Vr=2.0km/s条件で選定したケース) (遷移領域なし)」の各小断層のすべり量分布は以下のとおり。



基準断層モデル2 (遷移領域なし) のすべり量

最大すべり量(m)	平均すべり量(m)
39.8	13.8

	津波断層域	} 津波断層域の 全面積の約20%
	超大すべり域 (平均すべり量の4倍)	
	中間大すべり域 (平均すべり量の3倍)	
	大すべり域 (平均すべり量の2倍)	
	背景領域	
	浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)	

基準断層モデル2 (遷移領域なし)

基準断層モデル2 (遷移領域なし) の小断層のすべり量分布 (m)

		西 ←																	→ 東																						
陸側 ⇄ 海溝軸側 ⇄	深度40km↓	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
		30km↓	1	14.9	14.9	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.4	12.0	11.8	11.8	11.3	11.1	10.8	10.8	10.8	10.4	10.4	10.4	10.1	10.1	10.0	10.0	9.6	10.3	9.1	9.1	7.7	7.7	6.1	6.1	6.1	6.1	5.4	5.4	3.9	3.9	
	20km↓	2	14.9	14.9	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.4	12.0	11.8	11.8	11.3	11.1	10.8	10.8	10.8	10.4	10.4	10.4	10.1	10.1	10.0	10.0	9.6	10.3	10.3	9.1	9.1	7.7	7.7	6.1	6.1	6.1	6.1	5.4	5.4	3.9		
		3	14.9	14.9	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.0	12.0	11.8	11.3	11.3	11.1	11.1	10.8	10.8	10.4	10.4	10.4	10.1	10.1	10.0	9.6	9.6	10.3	10.3	9.1	9.1	7.7	7.7	6.1	6.1	5.4	5.4	3.9		
	10km↓	4	14.9	14.9	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.4	12.0	11.8	11.8	11.3	11.1	11.1	10.8	19.4	19.4	18.8	18.8	18.1	18.1	17.9	17.9	9.6	11.6	10.3	10.3	9.1	7.7	7.7	13.8	13.8	10.9	10.9	9.8	7.1	
		5	14.9	14.9	14.5	14.5	14.1	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.4	12.0	11.8	11.8	11.3	11.1	11.1	10.8	19.4	19.4	19.4	18.8	18.8	18.1	18.1	17.9	17.9	9.6	9.6	11.6	10.3	10.3	9.1	9.1	13.8	13.8	10.9	10.9	9.8
	0km↓	6	14.9	14.9	14.5	14.5	14.1	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.4	12.0	11.8	11.8	11.3	11.1	11.1	19.9	19.4	19.4	18.8	18.8	18.1	18.1	17.9	10.0	9.6	11.6	11.6	10.3	10.3	9.1	9.1	16.3	13.8	13.8	10.9	9.8	9.8
		7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	29.9	29.9	29.1	29.1	28.1	27.2	27.2	26.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	24.4	24.4	20.7	16.4	14.7	14.7
	8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	39.8	39.8	38.8	38.8	37.5	37.5	36.3	36.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	37.0	32.6	27.7	21.9	19.6	19.6	

・すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
 ・駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10kmの位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす(内閣府(2012))とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

6-10 遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認 遷移領域の無い波源モデルの設定：基準断層モデル2（ $V_r=2.0\text{km/s}$ 条件で選定したケース） （断層パラメータ設定）

断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	6.8×10^{22}
	Mw	9.2
	平均応力降下量 ※1(MPa)	3.0
	平均すべり量 ※2(m)	13.8
	最大すべり量 (m)	39.8
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	5.5×10^{22}
	平均すべり量 (m)	12.1
	最大すべり量 (m)	19.9
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	1.4×10^{22}
	平均すべり量 ※3 (m)	31.2
	最大すべり量 (m)	39.8

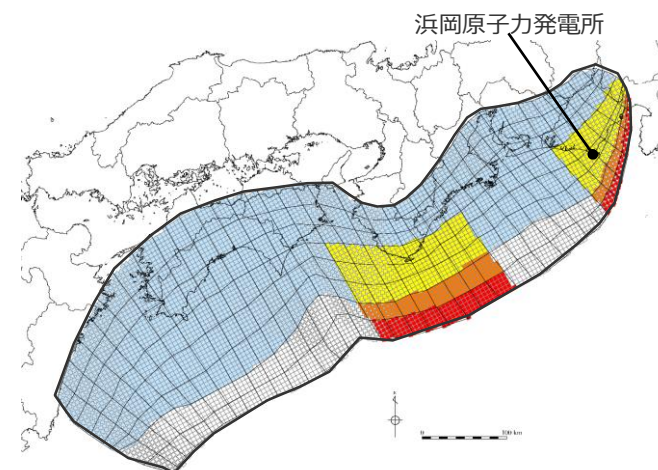
※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量

※2 すべり量が0m(ゼロ)でない領域の断層面積(120,560km²)に基づき算出

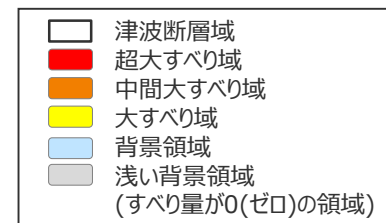
※3 すべり量が0m(ゼロ)でない領域の断層面積(10,836km²)に基づき算出

主部断層：深さ10km以深の断層

浅部断層：深さ10km以浅の断層



基準断層モデル2（遷移領域なし）

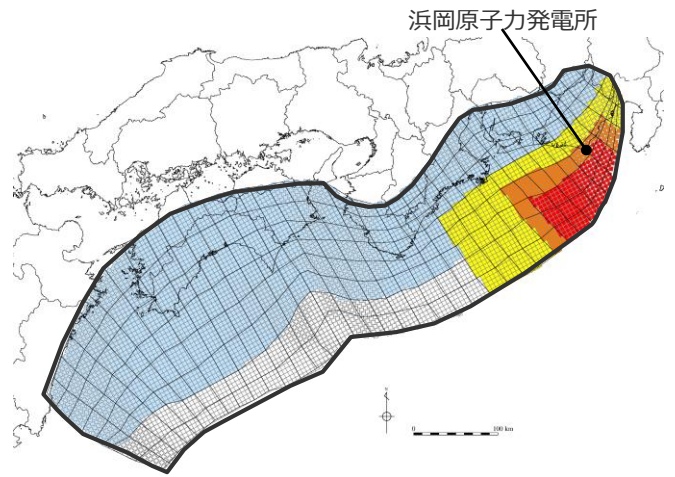


6-10 遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認

遷移領域の無い波源モデルの設定：基準断層モデル3 (Vr=2.0km/s条件で選定したケース)

(すべり量分布の設定)

■「基準断層モデル3 (Vr=2.0km/s条件で選定したケース) (遷移領域なし)」の各小断層のすべり量分布は以下のとおり。



基準断層モデル3 (遷移領域なし) のすべり量

最大すべり量(m)	平均すべり量(m)
41.7	13.2

津波断層域	} 津波断層域の 全面積の約20%
超大すべり域 (平均すべり量の4倍)	
中間大すべり域 (平均すべり量の3倍)	
大すべり域 (平均すべり量の2倍)	
背景領域	
浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)	

基準断層モデル3 (遷移領域なし)

基準断層モデル3 (遷移領域なし) の小断層のすべり量分布 (m)

		西 ←																																				→ 東																																			
陸側⇄海溝軸側	深度40km↓		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38																																	
	30km↓	1	14.0	14.0	13.6	13.6	13.2	13.2	12.0	11.6	11.3	11.1	10.7	10.4	10.4	10.1	10.1	10.1	9.8	9.8	9.8	9.5	9.5	9.3	9.3	9.0	9.6	8.5	8.5	7.2	7.2	5.7	5.7	5.7	5.7	5.1	5.1	3.7	3.7																																		
	20km↓	2	14.0	14.0	13.6	13.6	13.2	13.2	12.0	11.6	11.6	11.3	11.1	10.7	10.4	10.1	10.1	10.1	9.8	9.8	9.8	9.5	9.5	9.3	9.3	9.0	9.6	9.6	8.5	8.5	7.2	7.2	5.7	5.7	5.7	5.7	5.1	5.1	3.7																																		
		3	14.0	14.0	13.6	13.6	13.2	13.2	12.0	12.0	11.6	11.3	11.3	11.1	10.7	10.7	10.4	10.4	10.1	10.1	10.1	9.8	9.8	9.8	9.5	9.5	9.3	9.0	9.0	9.6	9.6	8.5	8.5	7.2	7.2	5.7	5.7	5.1	5.1	3.7																																	
	10km↓	4	14.0	14.0	13.6	13.6	13.2	13.2	12.0	12.0	11.6	11.6	11.3	11.1	11.1	10.7	10.4	10.4	10.1	10.1	10.1	9.8	9.8	9.5	9.5	9.3	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	9.8	7.1																																	
		5	14.0	14.0	13.6	13.6	13.2	13.2	13.2	12.0	12.0	11.6	11.3	11.3	11.1	11.1	10.7	10.4	10.4	10.1	10.1	10.1	9.8	9.8	9.5	9.3	17.9	17.3	17.3	20.8	27.7	27.7	24.4	24.4	20.7	20.7	16.4	16.4	9.8	9.8																																	
	0km↓	6	14.0	14.0	13.6	13.6	13.2	13.2	13.2	12.0	12.0	11.6	11.6	11.3	11.1	11.1	10.7	10.4	10.4	10.1	10.1	10.1	9.8	9.8	9.5	9.5	17.9	17.9	17.3	20.8	31.3	37.0	37.0	32.6	32.6	27.7	27.7	16.4	9.8	9.8																																	
		7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	17.9	17.9	17.3	17.3	31.3	41.7	37.0	37.0	32.6	32.6	27.7	16.4	9.8	9.8																																	
8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.1	17.9	17.3	17.3	31.3	41.7	41.7	37.0	37.0	32.6	27.7	16.4	9.8	9.8																																		

・すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
 ・駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10km の位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす (内閣府(2012)) とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

6-10 遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認

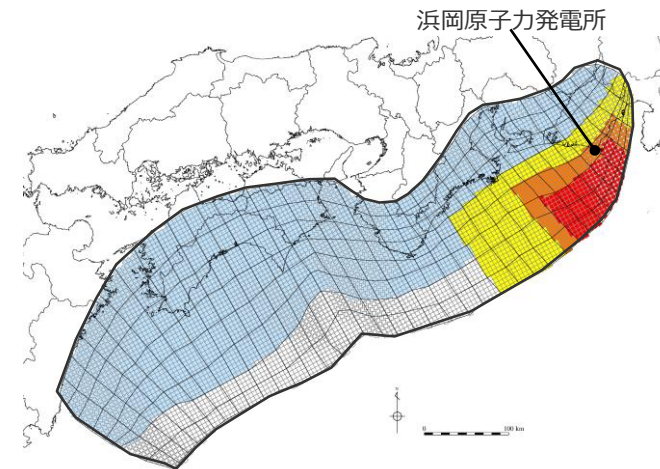
遷移領域の無い波源モデルの設定：基準断層モデル3 (Vr=2.0km/s条件で選定したケース)

(断層パラメータ設定)

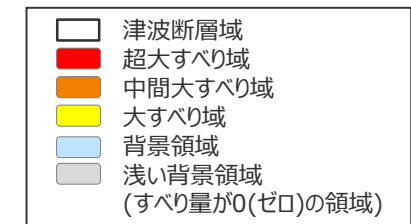
断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	6.5×10 ²²
	Mw	9.1
	平均応力降下量 ※1(MPa)	3.0
	平均すべり量 ※2(m)	13.2
	最大すべり量 (m)	41.7
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10 ¹⁰
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	5.4×10 ²²
	平均すべり量 (m)	12.1
	最大すべり量 (m)	37.0
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	1.1×10 ²²
	平均すべり量※3 (m)	25.3
	最大すべり量 (m)	41.7

※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量
 ※2 すべり量が0m(ゼロ)でない領域の断層面積(120,233km²)に基づき算出
 ※3 すべり量が0m(ゼロ)でない領域の断層面積(10,508km²)に基づき算出



基準断層モデル3 (遷移領域なし)

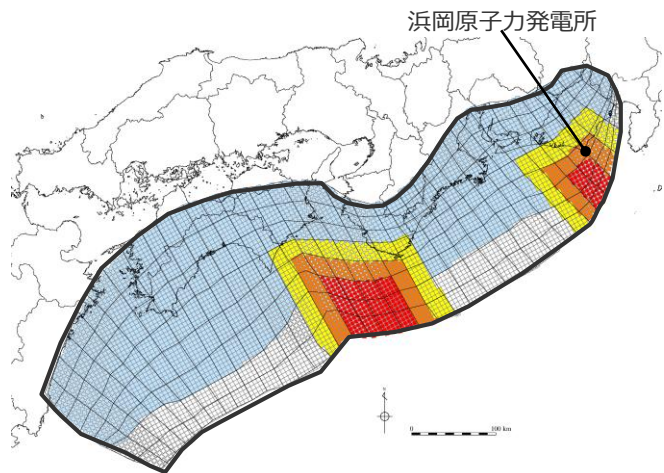


主部断層：深さ10km以深の断層
 浅部断層：深さ10km以浅の断層

6-10 遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認

遷移領域の無い波源モデルの設定：基準断層モデル4 (Vr=2.0km/s条件で選定したケース) (すべり量分布設定)

■「基準断層モデル4 (Vr=2.0km/s条件で選定したケース) (遷移領域なし)」の各小断層のすべり量分布は以下のとおり。



基準断層モデル4 (遷移領域なし) のすべり量

最大すべり量(m)	平均すべり量(m)
40.8	13.3

	津波断層域	} 津波断層域の 全面積の約20%
	超大すべり域 (平均すべり量の4倍)	
	中間大すべり域 (平均すべり量の3倍)	
	大すべり域 (平均すべり量の2倍)	
	背景領域	
	浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)	

基準断層モデル4 (遷移領域なし)

基準断層モデル4 (遷移領域なし) の小断層のすべり量分布 (m)

		西 ←																		→ 東																					
陸側 ⇄ 海溝軸側 ⇄	深度40km↓	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
		30km↓	1	12.4	12.4	11.9	11.9	11.6	11.6	10.5	10.2	9.9	9.7	9.7	9.4	9.1	9.1	8.9	8.9	8.9	8.6	8.6	8.6	8.3	8.3	8.2	8.2	7.9	8.5	7.5	7.5	7.5	6.4	6.4	5.0	5.0	5.0	5.0	4.5	4.5	3.3
	20km↓	2	12.4	12.4	11.9	11.9	11.6	11.6	10.5	10.2	10.2	9.9	9.7	9.4	9.1	9.1	8.9	8.9	8.9	8.6	8.6	8.6	8.3	8.3	8.2	8.2	7.9	8.5	8.5	7.5	7.5	6.4	6.4	6.4	5.0	5.0	5.0	4.5	4.5	3.3	
		3	12.4	12.4	11.9	11.9	11.6	11.6	10.5	10.5	10.2	9.9	9.9	9.7	9.4	9.4	9.1	9.1	8.9	8.9	8.6	8.6	8.6	8.3	8.3	8.2	7.9	7.9	8.5	8.5	7.5	7.5	6.4	6.4	6.4	5.0	5.0	4.5	4.5	3.3	
	10km↓	4	12.4	12.4	11.9	11.9	11.6	11.6	10.5	10.5	10.2	10.2	9.9	9.7	9.7	9.4	19.9	19.9	19.4	19.4	19.4	18.8	18.8	18.1	8.3	8.2	8.2	7.9	9.6	8.5	8.5	7.5	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	4.5	3.3	
		5	12.4	12.4	11.9	11.9	11.6	11.6	11.6	10.5	10.5	10.2	9.9	9.9	9.7	9.7	20.4	29.9	29.9	29.1	29.1	29.1	28.1	18.8	8.3	8.2	8.2	7.9	7.9	9.6	8.5	8.5	16.3	24.4	20.7	20.7	16.4	10.9	4.5	4.5	
	0km↓	6	12.4	12.4	11.9	11.9	11.6	11.6	10.5	10.5	10.2	10.2	9.9	9.7	9.7	20.4	29.9	39.8	39.8	38.8	38.8	28.1	18.8	8.3	8.3	8.2	8.2	7.9	9.6	9.6	8.5	18.5	24.4	32.6	27.7	20.7	10.9	4.5	4.5		
		7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.4	30.6	39.8	39.8	39.8	38.8	29.1	18.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.5	27.7	32.6	32.6	20.7	10.9	0.0	0.0		
	8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.4	30.6	40.8	39.8	39.8	38.8	29.1	18.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.8	27.7	37.0	32.6	20.7	10.9	0.0	0.0			

・すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
 ・駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10kmの位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす (内閣府(2012)) とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

6-10 遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認 遷移領域の無い波源モデルの設定：基準断層モデル4（ $V_r=2.0\text{km/s}$ 条件で選定したケース） （断層パラメータ設定）

断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	6.6×10^{22}
	Mw	9.1
	平均応力降下量 ※1(MPa)	3.0
	平均すべり量 ※2(m)	13.3
	最大すべり量 (m)	40.8
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
	主部断層	面積 (km ²)
地震モーメント (Nm)		5.2×10^{22}
平均すべり量 (m)		11.6
最大すべり量 (m)		39.8
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	1.4×10^{22}
	平均すべり量 ※3 (m)	29.2
	最大すべり量 (m)	40.8

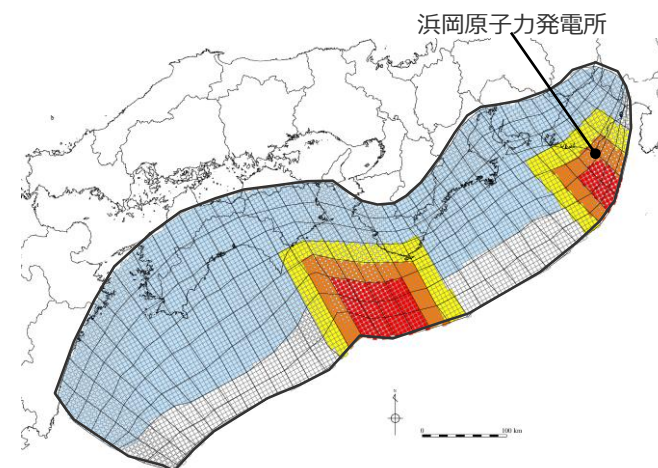
※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量

※2 すべり量が0m(ゼロ)でない領域の断層面積(121,734km²)に基づき算出

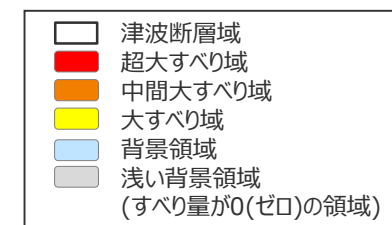
※3 すべり量が0m(ゼロ)でない領域の断層面積(12,009km²)に基づき算出

主部断層：深さ10km以深の断層

浅部断層：深さ10km以浅の断層

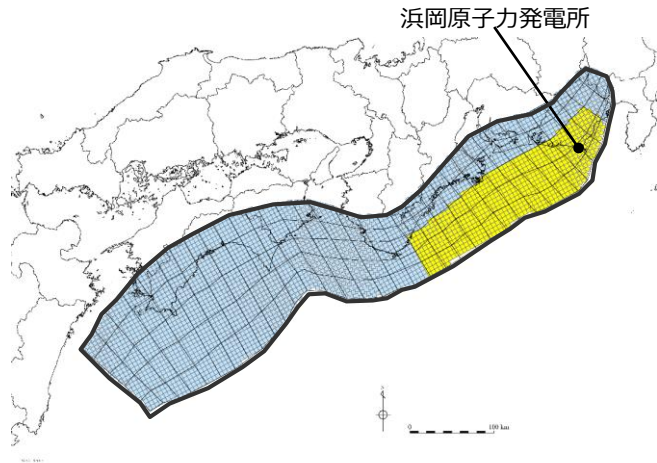


基準断層モデル4（遷移領域なし）



6-10 遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認 遷移領域の無い波源モデルの設定：遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル (すべり量分布の設定)

■「遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル（遷移領域なし）」の各小断層のすべり量分布は以下のとおり。



遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル（遷移領域なし）のすべり量

断層モデル	面積 (km ²)	M ₀ (Nm)	M _w	Δσ (MPa)	最大すべり量(m)	平均すべり量(m)
遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル (遷移領域なし)	82,604	1.8×10 ²²	8.8	1.8	10.4	5.2

- 津波断層域
- 大すべり域（平均すべり量の2倍）：津波断層域の全面積の約20%
- 背景領域

遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル（遷移領域なし）

遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル（遷移領域なし）のすべり量分布 (m)

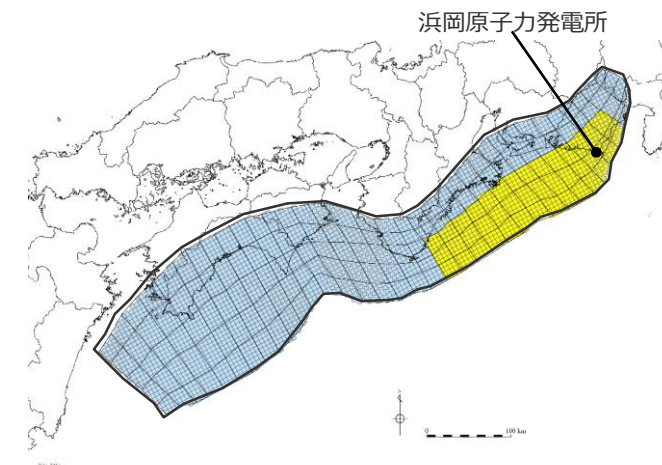
		西 ← → 東																																							
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
陸側⇄ 海溝軸	深度40km↓	1																																							
	30km↓	2				5.8	5.6	5.6	5.1	4.9	4.9	4.8	4.7	4.7	4.5	4.4	4.3	4.3	4.3	4.2	4.2	4.2	4.0	4.0	4.0	4.0	3.8	4.1	4.1	3.6	3.6	3.1	3.1	3.1	2.4	2.4	2.4	2.2	2.2	1.6	
		3				5.8	5.6	5.6	5.1	5.1	4.9	4.8	4.8	4.7	4.5	4.5	4.4	4.4	4.3	4.3	4.2	4.2	4.2	4.0	4.0	4.0	3.8	3.8	4.1	4.1	3.6	3.6	3.1	3.1	3.1	2.4	2.4	2.2	2.2	1.6	
	20km↓	4				5.8	5.6	5.6	5.1	5.1	4.9	4.9	4.8	4.7	4.7	4.5	4.4	4.4	4.3	4.3	4.3	4.2	4.2	4.0	9.1	9.0	9.0	8.6	10.4	9.2	9.2	8.1	6.9	6.9	6.9	6.9	5.5	5.5	2.2	1.6	
		5				5.8	5.6	5.6	5.6	5.1	5.1	4.9	4.8	4.8	4.7	4.7	4.5	4.4	4.4	4.3	4.3	4.3	4.2	4.2	9.1	9.0	9.0	8.6	8.6	10.4	9.2	9.2	8.1	8.1	6.9	6.9	5.5	5.5	2.2	2.2	
	10km↓	6				5.8	5.6	5.6	5.6	5.1	5.1	4.9	4.9	4.8	4.7	4.7	4.5	4.4	4.4	4.4	4.3	4.3	4.2	4.2	9.1	9.1	9.0	9.0	8.6	10.4	10.4	9.2	9.2	8.1	8.1	6.9	6.9	5.5	2.2	2.2	
		7																																							
	0km↓	8																																							

・すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。

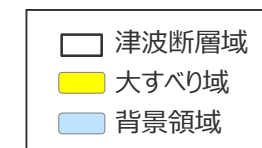
6-10 遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認 遷移領域の無い波源モデルの設定：遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル (断層パラメータ設定)

断層パラメータ

項目	設定値
面積 (km ²)	82,604
地震モーメント (Nm)	1.8×10^{22}
Mw	8.8
平均応力降下量 (MPa)	1.8
平均すべり量 (m)	5.2
最大すべり量 (m)	10.4
剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
破壊伝播速度 (km/s)	2.0
ライズタイム (s)	60



遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル（遷移領域なし）



6-10 遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認

遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認

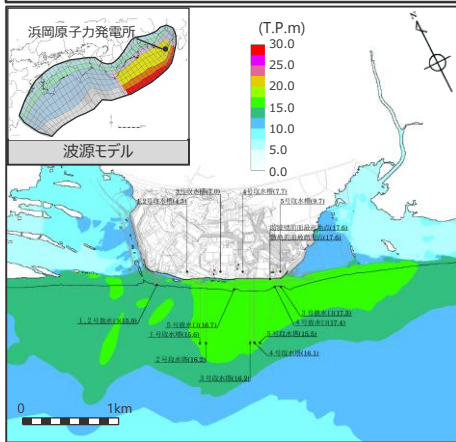
(数値シミュレーションによる影響確認結果：基準断層モデル1、2)

■ 基準断層モデル1、2 (Vr=2.0km/s条件で選定したケース) について、遷移領域がある波源モデルと遷移領域がない波源モデルの津波評価結果を比較した結果、遷移領域の有無が津波評価結果に与える影響は小さいことを確認した。

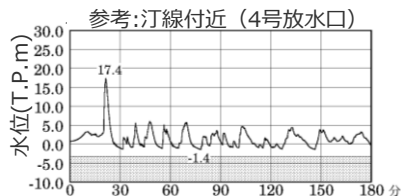
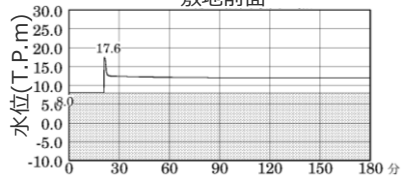
水位上昇側

基準断層モデル1 (Vr=2.0km/s条件で選定したケース)

遷移領域あり

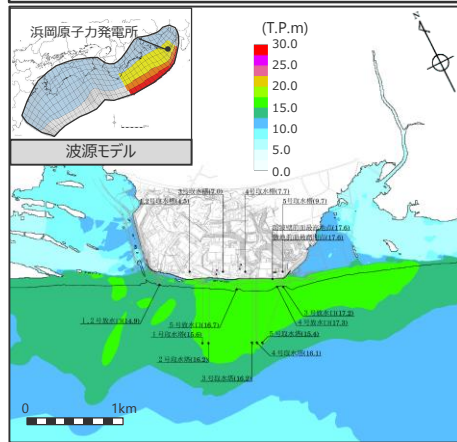


最大上昇水位分布
敷地前面

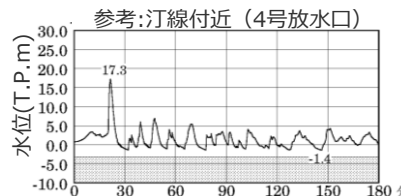
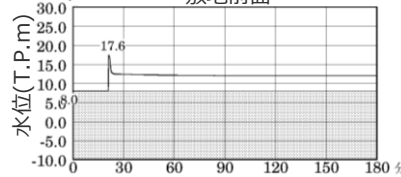


水位の時刻歴波形・期望平均満潮位
T.P.+0.80mを考慮

遷移領域なし



最大上昇水位分布
敷地前面



水位の時刻歴波形・期望平均満潮位
T.P.+0.80mを考慮

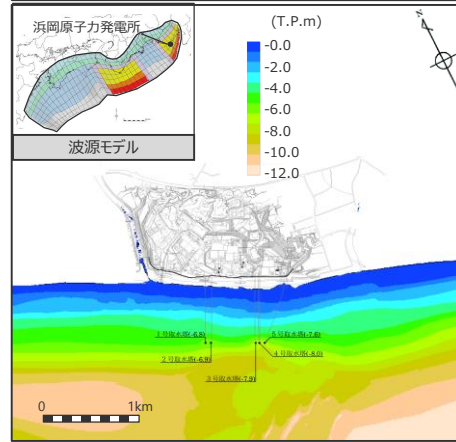
最大上昇水位(T.P.m)				
敷地前面	1・2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
17.6	4.5	7.0	7.7	9.7

最大上昇水位(T.P.m)				
敷地前面	1・2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
17.6	4.5	7.0	7.7	9.7

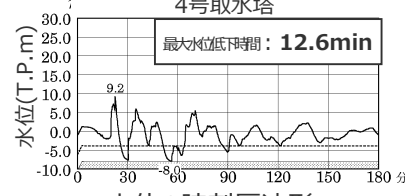
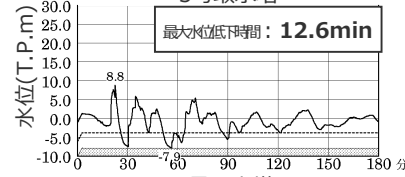
水位下降側

基準断層モデル2 (Vr=2.0km/s条件で選定したケース)

遷移領域あり



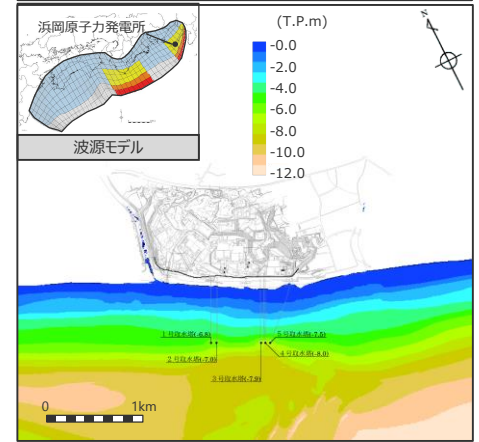
最大下降水位分布
3号取水塔



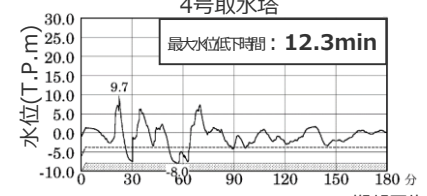
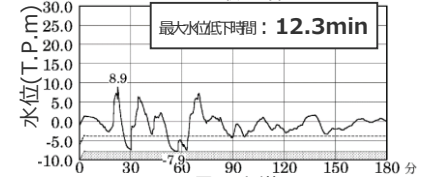
水位の時刻歴波形・期望平均干潮位
T.P.-0.93mを考慮

最大下降水位(T.P.m)(水位低下時間)	
3号取水塔	4号取水塔
海底面 (12.6min)	海底面 (12.6min)

遷移領域なし



最大下降水位分布
3号取水塔



水位の時刻歴波形・期望平均干潮位
T.P.-0.93mを考慮

最大下降水位(T.P.m)(水位低下時間)	
3号取水塔	4号取水塔
海底面 (12.3min)	海底面 (12.3min)

・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している(水深1m未満である)ことを示す。

6-10 遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認

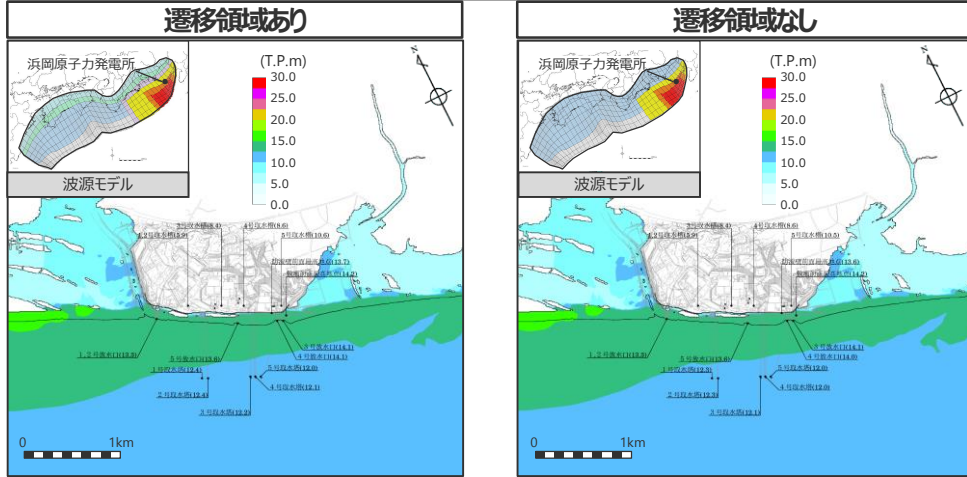
遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認

(数値シミュレーションによる影響確認結果：基準断層モデル3、4)

■ 基準断層モデル3、4 (Vr=2.0km/s条件で選定したケース) について、遷移領域がある波源モデルと遷移領域がない波源モデルの津波評価結果を比較した結果、遷移領域の有無が津波評価結果に与える影響は小さいことを確認した。

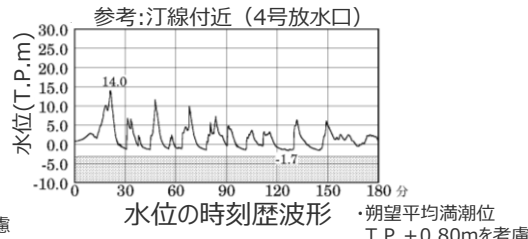
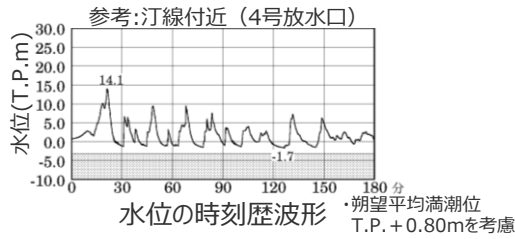
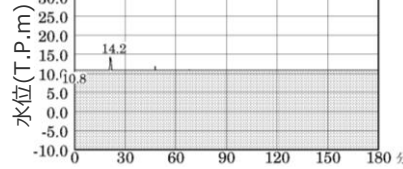
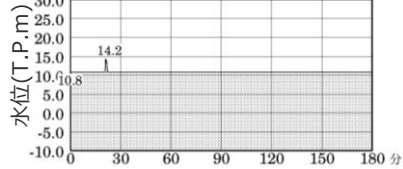
水位上昇側

基準断層モデル3 (Vr=2.0km/s条件で選定したケース)



最大上昇水位分布
敷地前面

最大上昇水位分布
敷地前面



最大上昇水位(T.P.m)

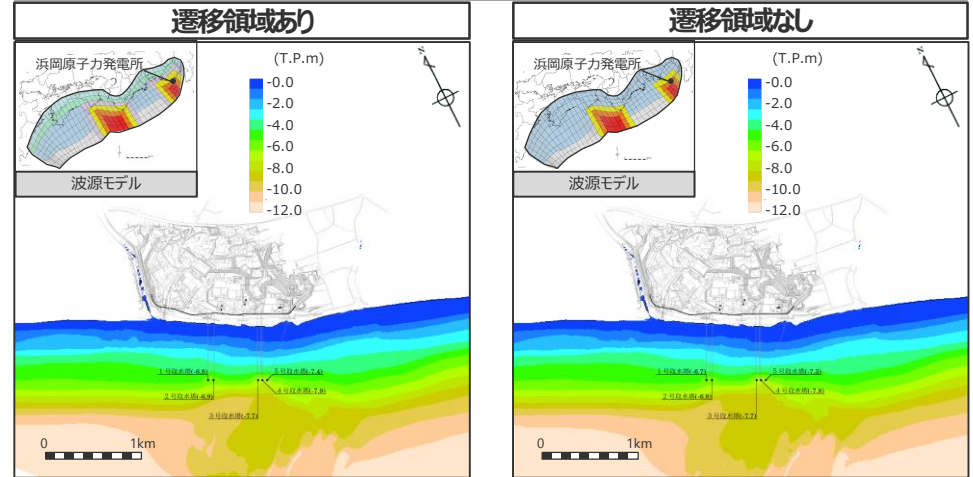
最大上昇水位(T.P.m)

敷地前面	1・2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
14.2	5.9	8.4	8.6	10.6

敷地前面	1・2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
14.2	5.9	8.4	8.6	10.5

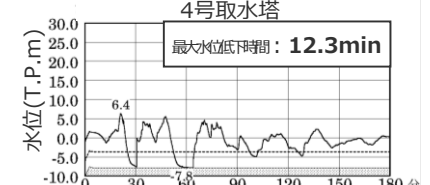
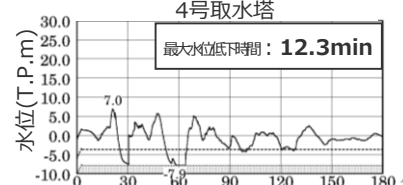
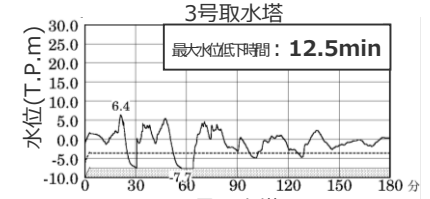
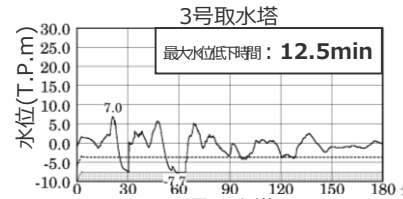
水位下降側

基準断層モデル4 (Vr=2.0km/s条件で選定したケース)



最大下降水位分布

最大下降水位分布



水位の時刻歴波形
・朔望平均干潮位 T.P. - 0.93mを考慮

水位の時刻歴波形
・朔望平均干潮位 T.P. - 0.93mを考慮

最大下降水位(T.P. m)(水位低下時間)

最大下降水位(T.P. m)(水位低下時間)

3号取水塔	4号取水塔
海底面 (12.5min)	海底面 (12.3min)

3号取水塔	4号取水塔
海底面 (12.5min)	海底面 (12.3min)

・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している（水深1m未満である）ことを示す。

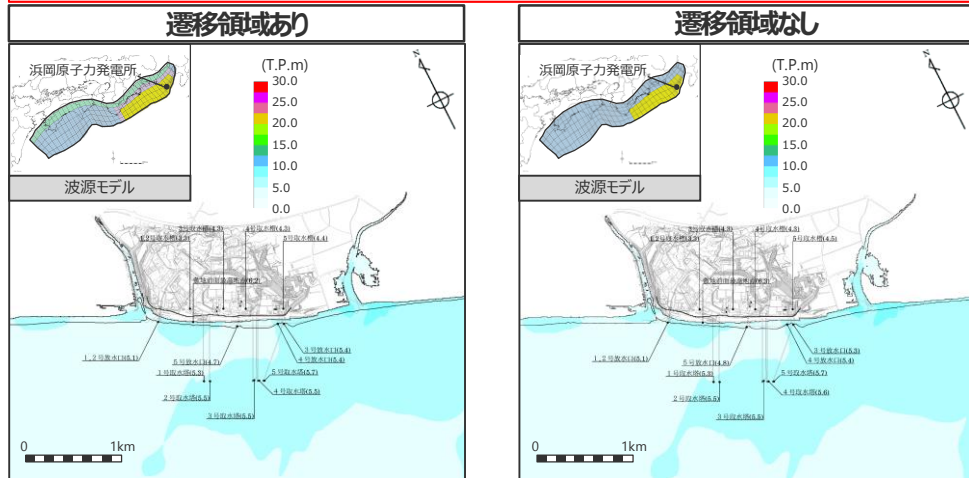
6-10 遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認

遷移領域の有無が津波評価に与える影響の確認

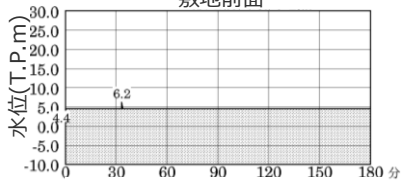
(数値シミュレーションによる影響確認結果：遠州灘沿岸の痕跡再現モデル)

■ 遠州灘沿岸の痕跡再現モデルについて、遷移領域がある波源モデルと遷移領域がない波源モデルの津波評価結果を比較した結果、遷移領域の有無が津波評価結果に与える影響は小さいことを確認した。

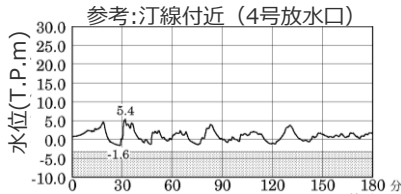
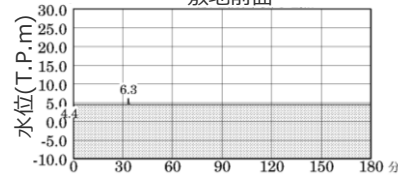
水位上昇側



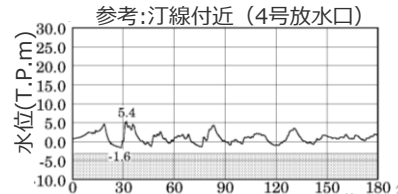
最大上昇水位分布
敷地前面



最大上昇水位分布
敷地前面



水位の時刻歴波形
参考：汀線付近 (4号放水口)
・朔望平均満潮位
T.P. +0.80mを考慮

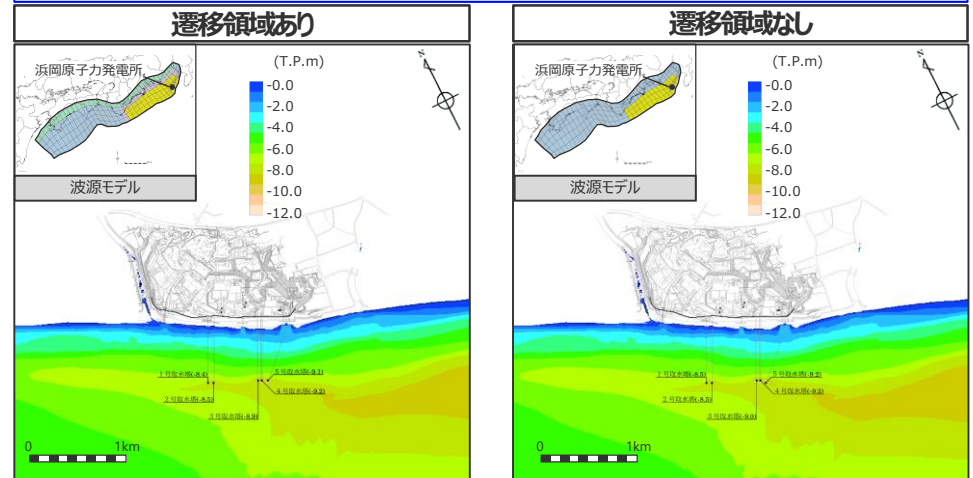


水位の時刻歴波形
参考：汀線付近 (4号放水口)
・朔望平均満潮位
T.P. +0.80mを考慮

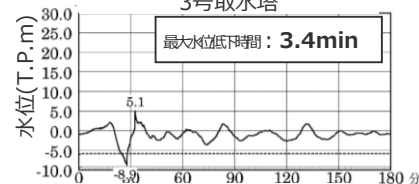
最大上昇水位(T.P.m)				
敷地前面	1・2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
6.2	3.3	4.3	4.3	4.4

最大上昇水位(T.P.m)				
敷地前面	1・2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
6.3	3.3	4.3	4.3	4.5

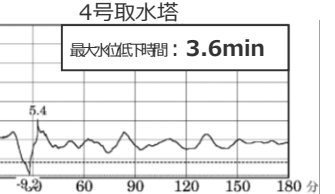
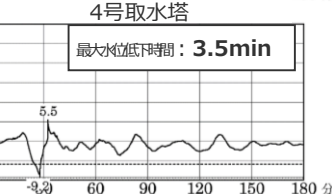
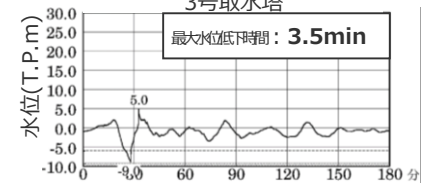
水位下降側



最大下降水位分布
3号取水塔



最大下降水位分布
3号取水塔



水位の時刻歴波形
参考：朔望平均干潮位
T.P. -0.93mを考慮

水位の時刻歴波形
参考：朔望平均干潮位
T.P. -0.93mを考慮

最大下降水位(T.P. m)(水位低下時間)	
3号取水塔	4号取水塔
海底面 (3.4min)	海底面 (3.5min)

最大下降水位(T.P. m)(水位低下時間)	
3号取水塔	4号取水塔
海底面 (3.5min)	海底面 (3.6min)

・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している（水深1m未満である）ことを示す。

余 白

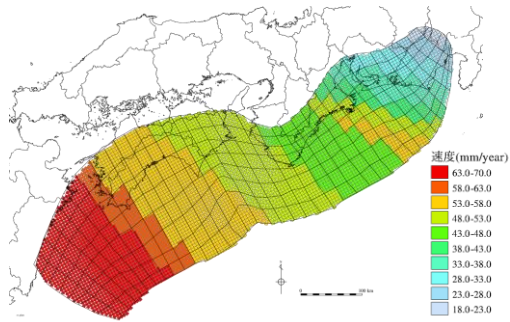
7 痕跡再現モデルの波源モデルの詳細

7-1 痕跡再現モデルのパラメータ

本章では遠州灘沿岸域の痕跡再現モデルおよび南海トラフ広域の痕跡再現モデルの代表ケースのみ例示し、その他のケースについては第981回審査会合机上配布資料に示す。

7-1 痕跡再現モデルのパラメータ 遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル（プレートの沈み込み速度を考慮したモデル）の設定 すべり量分布の設定

- プレートの沈み込み速度を考慮したモデルのすべり量分布の設定については、各小断層のすべり量をフィリピン海プレートの沈み込み速度に比例するよう設定し、大すべり域には平均すべり量の2倍のすべり量を設定した。
- プレートの沈み込み速度を考慮したモデルのすべり量分布の設定の詳細は以下のとおり。



(Loveless and Meade(2010)を基に作成)

各小断層の沈み込速度分布

【主部断層のすべり量の設定】

まず、各小断層の平均すべり量 D_i は、フィリピン海プレートの沈み込み速度に比例し、かつ各小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が主部断層のスケーリング則から求められる地震モーメント M_0 になるように設定。

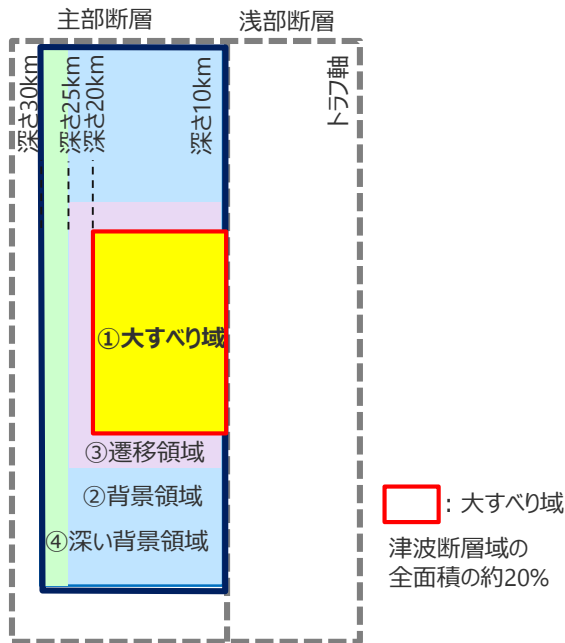
$$M_0 = \sum M_{0i} = \sum \mu D_i S_i \rightarrow \text{小断層毎のすべり量はプレートの沈み込み速度に比例するよう設定。}$$

次に、各小断層の平均すべり量 D_i に対して、以下の関係を与えて各小断層のすべり量を設定。

- ① 大すべり域 ■ : $2D_i$
- ② 背景領域 ■ : 主部断層（領域①～④）の小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が、 M_0 となるすべり量 D_b を設定
- ③ ①と②④の遷移領域 ■ : ②側 $(2D_i + D_b) / 2$ 、④側 $(2D_i + 1/2 \times D_b) / 2$
- ④ 深い背景領域 ■ : $1/2 \times D_b$

D_i : 各小断層の平均すべり量 D_b : 各背景領域のすべり量(= aD_i , a は定数) S_i : 各小断層の面積
 M_0 : スケーリング則から算定される主部断層の地震モーメント M_{0i} : 各小断層の地震モーメント

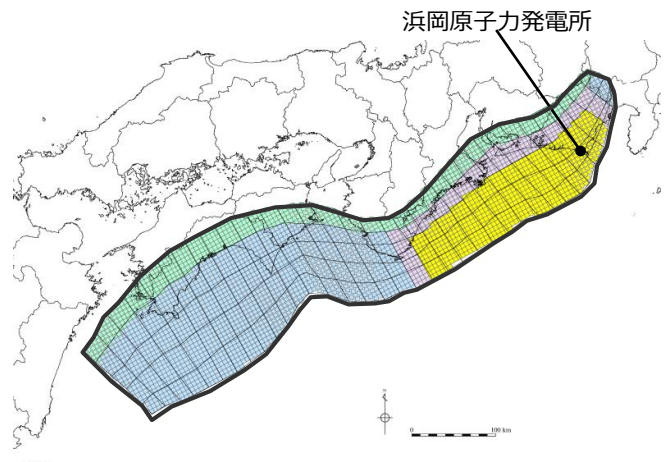
- ・今回実施した5ケース（応力降下量1.5MPa、1.6MPa、1.7MPa、1.8MPa、1.9MPa）とも、同様の考え方ですべり量設定を行っている。
- ・詳細な設定方法は、データ集に示す。



プレートの沈み込み速度を考慮したモデルのすべり量分布概念図

7-1 痕跡再現モデルのパラメータ 遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル（プレートの沈み込み速度を考慮したモデル）の設定 すべり量分布の設定（平均応力降下量：1.5MPa）

■「プレートの沈み込み速度を考慮したモデル」の各小断層のすべり量分布は以下のとおり。



プレートの沈み込み速度を考慮したモデル
(平均応力降下量：1.5MPa)

プレートの沈み込み速度を考慮したモデル（平均応力降下量：1.5MPa）のすべり量

断層モデル	面積 (km ²)	M ₀ (Nm)	Mw	Δσ (MPa)	最大すべり量(m)	平均すべり量(m)
プレートの沈み込み速度を考慮したモデル (平均応力降下量：1.5MPa)	82,604	1.5×10 ²²	8.7	1.5	9.3	4.4

- 津波断層域
- 大すべり域（平均すべり量の2倍）：津波断層域の全面積の約20%
- 大すべり域と背景領域の遷移領域：両者の中間のすべり量
- 背景領域
- 深い背景領域：背景領域の1/2のすべり量

プレートの沈み込み速度を考慮したモデル（平均応力降下量：1.5MPa）の小断層のすべり量分布（m）

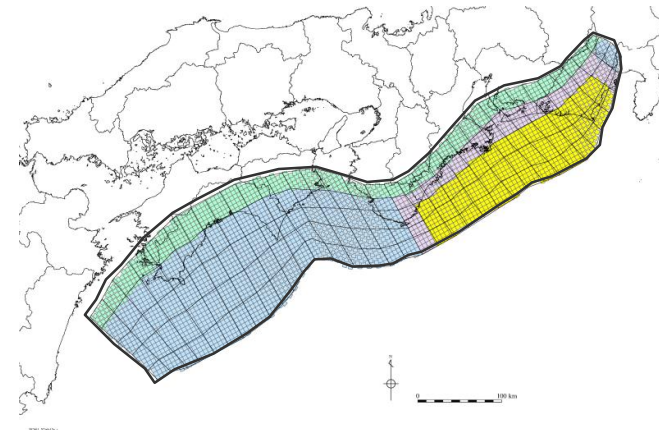
		西 ←																																				→ 東				
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38			
陸側⇄ 海溝軸 ⇄	深度40km↓																																									
	30km↓	1																																								
	20km↓	2				2.6	2.5	2.5	2.3	2.2	2.2	2.1	2.1	2.1	2.0	2.0	1.9	1.9	1.9	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.7	1.8	1.8	1.6	1.6	1.4	1.4	1.4	1.1	1.1	1.1	1.0	1.0	0.7			
		3				5.1	5.0	5.0	4.5	4.5	4.4	4.3	4.3	4.2	4.0	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8	3.7	3.7	3.7	4.9	4.9	4.9	4.7	4.7	5.0	5.0	4.4	4.4	3.8	3.8	3.8	3.0	3.0	2.9	2.9	1.4		
	10km↓	4				5.1	5.0	5.0	4.5	4.5	4.4	4.4	4.3	4.2	4.2	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8	3.8	3.7	3.7	5.9	8.1	8.0	8.0	7.7	9.3	8.2	8.2	7.2	6.1	6.1	6.1	6.1	4.9	4.9	3.1	1.4		
		5				5.1	5.0	5.0	5.0	4.5	4.5	4.4	4.3	4.3	4.2	4.2	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8	3.8	3.7	5.9	8.1	8.0	8.0	7.7	7.7	9.3	8.2	8.2	7.2	7.2	6.1	6.1	4.9	4.9	3.4	1.9		
	0km↓	6				5.1	5.0	5.0	5.0	4.5	4.5	4.4	4.4	4.3	4.2	4.2	4.0	3.9	3.9	3.9	3.8	3.8	3.7	5.9	8.1	8.1	8.0	8.0	7.7	9.3	9.3	8.2	8.2	7.2	7.2	6.1	6.1	4.9	3.4	1.9		
		7																																								
	8																																									

・すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。

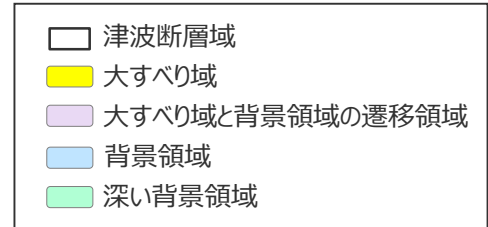
7-1 痕跡再現モデルのパラメータ 遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル（プレートの沈み込み速度を考慮したモデル）の設定 すべり量分布の設定（平均応力降下量：1.5MPa）

断層パラメータ

項目	設定値
面積 (km ²)	82,604
地震モーメント (Nm)	1.5×10^{22}
Mw	8.7
平均応力降下量 (MPa)	1.5
平均すべり量 (m)	4.4
最大すべり量 (m)	9.3
剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
破壊伝播速度 (km/s)	2.0
ライズタイム (s)	60



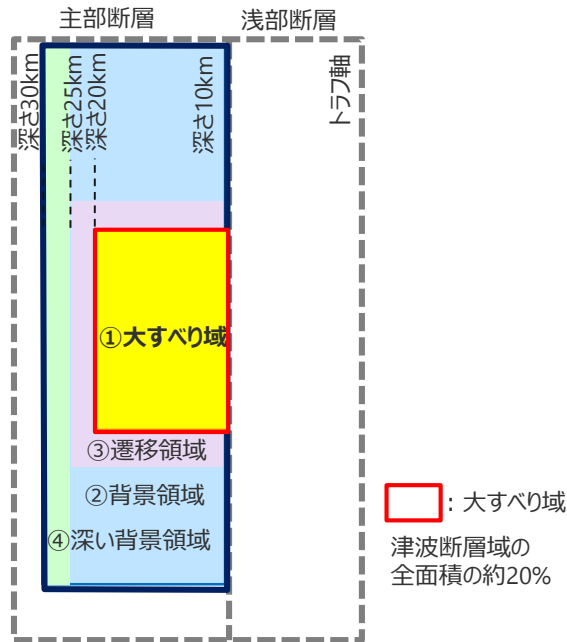
プレートの沈み込み速度を考慮したモデル
（平均応力降下量：1.5MPa）



余 白

7-1 痕跡再現モデルのパラメータ 遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル（プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル）の設定 すべり量分布の設定

- プレートの沈み込み速度を考慮しないモデルのすべり量分布の設定については、各小断層のすべり量をフィリピン海プレートの沈み込み速度を考慮せず設定し、大すべり域には平均すべり量の2倍のすべり量を設定した。
- プレートの沈み込み速度を考慮しないモデルのすべり量分布の設定の詳細は以下のとおり。



プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル
のすべり量分布概念図

【主部断層のすべり量の設定】

まず、各小断層の平均すべり量 D_i を以下の領域ごとに設定し、各小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が主部断層のスケーリング則から求められる地震モーメント M_0 になるように設定。

$$M_0 = \sum M_{0i} = \sum \mu D_i S_i \rightarrow \text{小断層毎のすべり量は以下の領域ごとに設定。}$$

次に、各小断層の平均すべり量 D_i に対して、以下の関係を与えて各小断層のすべり量を設定。

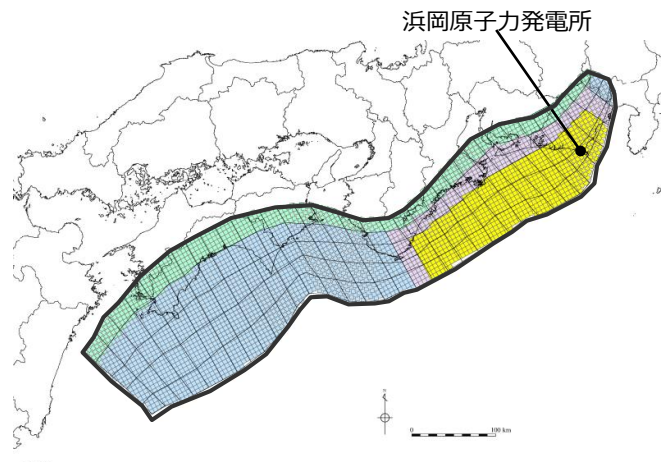
- ① 大すべり域 ■ : $2D_i$
- ② 背景領域 ■ : 主部断層（領域①～④）の小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が、 M_0 となるすべり量 D_b を設定
- ③ ①と②④の遷移領域 ■ : ②側 $(2D_i + D_b) / 2$ 、④側 $(2D_i + 1/2 \times D_b) / 2$
- ④ 深い背景領域 ■ : $1/2 \times D_b$

D_i : 各小断層の平均すべり量 D_b : 各背景領域のすべり量(= aD_i , a は定数) S_i : 各小断層の面積
 M_0 : スケーリング則から算定される主部断層の地震モーメント M_{0i} : 各小断層の地震モーメント

- ・今回実施した5ケース（応力降下量1.5MPa、1.6MPa、1.7MPa、1.8MPa、1.9MPa）とも、同様の考え方ですべり量設定を行っている。
- ・詳細な設定方法は、データ集に示す。

7-1 痕跡再現モデルのパラメータ 遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル（プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル）の設定 すべり量分布の設定（平均応力降下量：1.5MPa）

■プレートの沈み込み速度を考慮しないモデルの各小断層のすべり量分布は以下のとおり。



プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル（平均応力降下量：1.5MPa）のすべり量

断層モデル	面積 (km ²)	M ₀ (Nm)	M _w	Δσ (MPa)	最大すべり量(m)	平均すべり量(m)
プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル (平均応力降下量：1.5MPa)	82,604	1.5×10 ²²	8.7	1.5	8.6	4.4

プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル
(平均応力降下量：1.5MPa)

- 津波断層域
- 大すべり域（平均すべり量の2倍）：津波断層域の全面積の約20%
- 大すべり域と背景領域の遷移領域：両者の中間のすべり量
- 背景領域
- 深い背景領域：背景領域の1/2のすべり量

プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル（平均応力降下量：1.5MPa）の小断層のすべり量分布（m）

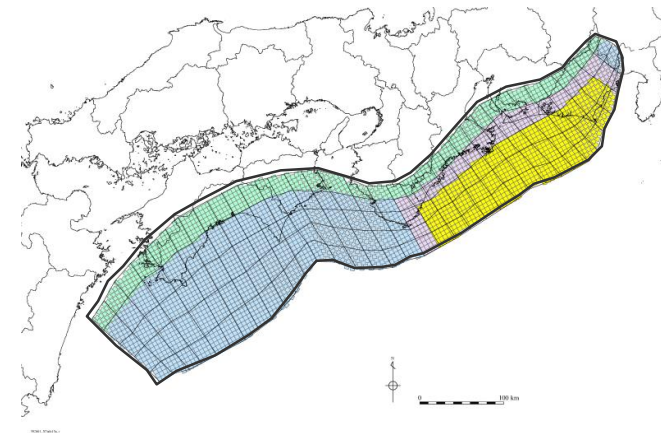
		西 ← 38 → 東																																										
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38					
陸側⇄ 海溝軸	深度40km↓																																											
	30km↓	1																																										
	20km↓	2				1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8		
		3				3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	
	10km↓	4				3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	
		5				3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6
	0km↓	6				3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6
		7																																										
8																																												

・すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。

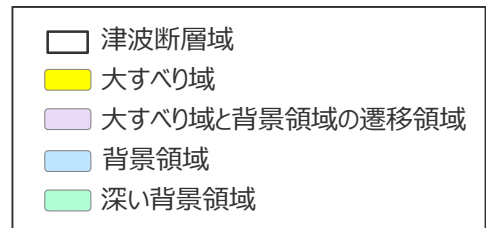
7-1 痕跡再現モデルのパラメータ 遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル（プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル）の設定 すべり量分布の設定（平均応力降下量：1.5MPa）

断層パラメータ

項目	設定値
面積 (km ²)	82,604
地震モーメント (Nm)	1.5×10^{22}
Mw	8.7
平均応力降下量 (MPa)	1.5
平均すべり量 (m)	4.4
最大すべり量 (m)	8.6
剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
破壊伝播速度 (km/s)	2.0
ライズタイム (s)	60



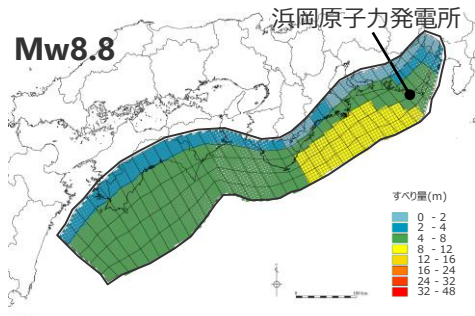
プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル
（平均応力降下量：1.5MPa）



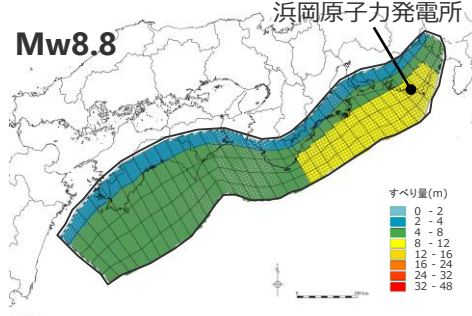
7-1 痕跡再現モデルのパラメータ 遠州灘沿岸域の痕跡再現モデルの設定

宝永地震を対象としたプレートの沈み込み速度を考慮したモデルと考慮しないモデルとの比較結果

■「プレートの沈み込み速度を考慮したモデル」と「プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル」の解析結果について、遠州灘沿岸域における宝永地震の津波痕跡の再現性を確認した結果、「プレートの沈み込み速度を考慮したモデル」の方が再現性が良好であることを確認した。



プレートの沈み込み速度を
考慮したモデル
($\Delta\sigma = 1.7\text{MPa}$ の例)

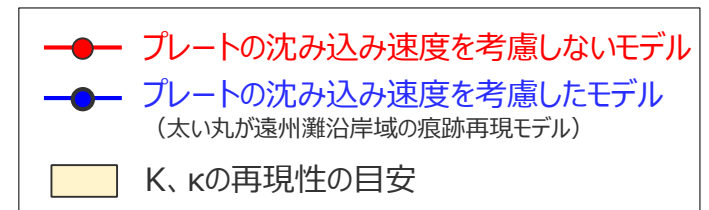
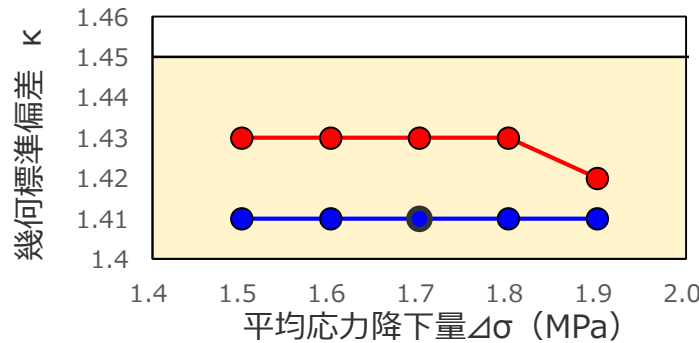
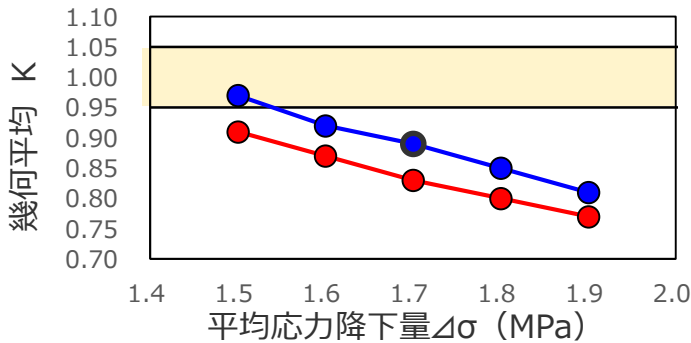


プレートの沈み込み速度を
考慮しないモデル
($\Delta\sigma = 1.7\text{MPa}$ の例)

解析結果の遠州灘沿岸域の痕跡再現性指標 (K, κ)

項目		プレートの沈み込み速度を考慮したモデル	プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル
すべり量分布		沈み込み速度を考慮して設定	沈み込み速度を考慮せず設定
平均応力降下量	1.5MPa	K=0.97, κ =1.41	K=0.91, κ =1.43
	1.6MPa	K=0.92, κ =1.41	K=0.87, κ =1.43
	1.7MPa	K=0.89, κ =1.41 (遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル)	K=0.83, κ =1.43
	1.8MPa	K=0.85, κ =1.41	K=0.80, κ =1.43
	1.9MPa	K=0.81, κ =1.41	K=0.77, κ =1.42

- ・相田の指標Kと κ は、痕跡が比較的多い宝永地震の痕跡のみを対象として算定
- ・土木学会(2016)による再現性の目安： $0.95 < K < 1.05$ 、 $\kappa < 1.45$

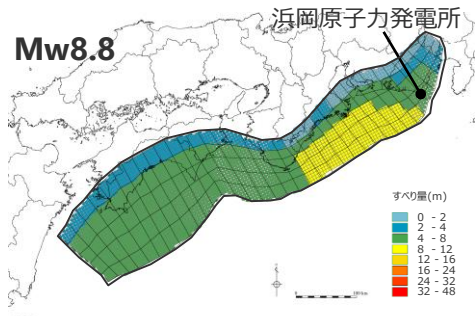


痕跡再現性指標の分布

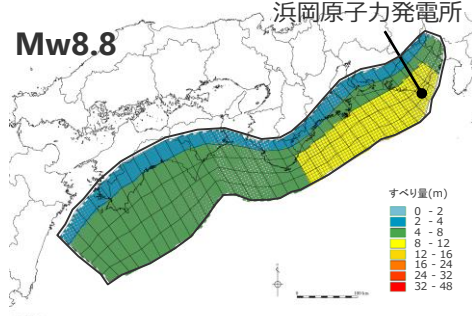
7-1 痕跡再現モデルのパラメータ 遠州灘沿岸域の痕跡再現モデルの設定

安政東海地震を対象としたプレートの沈み込み速度を考慮したモデルと考慮しないモデルとの比較結果

■「プレートの沈み込み速度を考慮したモデル」と「プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル」の解析結果について、遠州灘沿岸域における安政東海地震の津波痕跡の再現性を確認した結果、「プレートの沈み込み速度を考慮したモデル」の方が再現性が良好であることを確認した。



プレートの沈み込み速度を考慮したモデル
($\Delta\sigma = 1.7\text{MPa}$ の例)

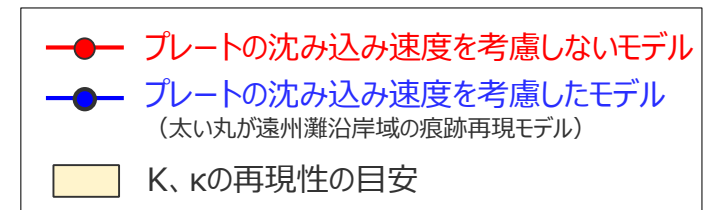
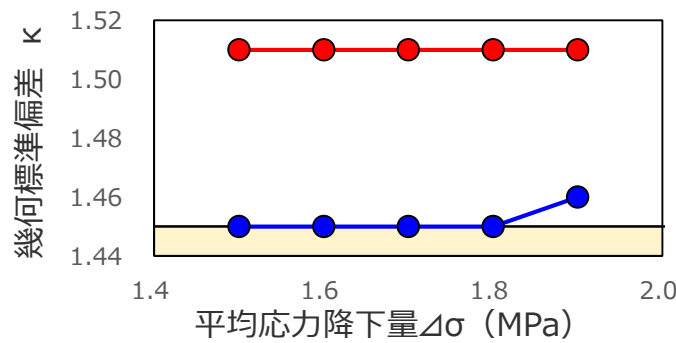
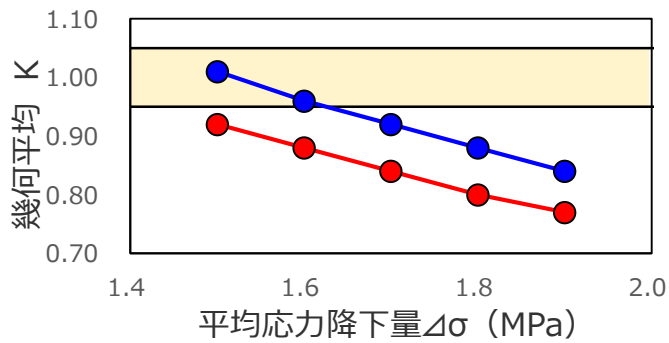


プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル
($\Delta\sigma = 1.7\text{MPa}$ の例)

解析結果の遠州灘沿岸域の痕跡再現性指標 (K, κ)

項目		プレートの沈み込み速度を考慮したモデル	プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル
すべり量分布		沈み込み速度を考慮して設定	沈み込み速度を考慮せず設定
平均応力降下量	1.5MPa	K=1.01, κ =1.45	K=0.92, κ =1.51
	1.6MPa	K=0.96, κ =1.45	K=0.88, κ =1.51
	1.7MPa	K=0.92, κ =1.45 (遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル)	K=0.84, κ =1.51
	1.8MPa	K=0.88, κ =1.45	K=0.80, κ =1.51
	1.9MPa	K=0.84, κ =1.46	K=0.77, κ =1.51

・相田の指標Kと κ は、痕跡が比較的多い安政東海地震の痕跡のみを対象として算定
・土木学会(2016)による再現性の目安： $0.95 < K < 1.05$ 、 $\kappa < 1.45$

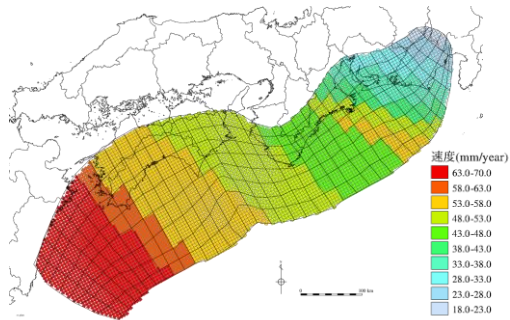


痕跡再現性指標の分布

余 白

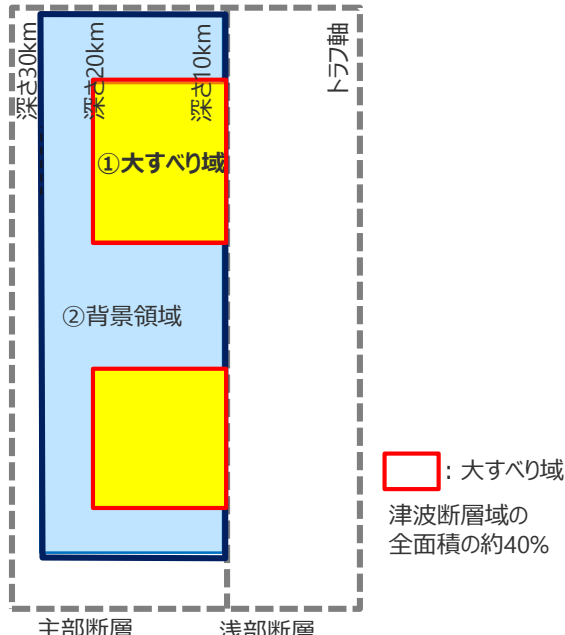
7-1 痕跡再現モデルのパラメータ 南海トラフ広域の痕跡再現モデル（プレートの沈み込み速度を考慮したモデル）の設定 すべり量分布の設定

- プレートの沈み込み速度を考慮したモデルのすべり量分布の設定については、各小断層のすべり量をフィリピン海プレートの沈み込み速度に比例するよう設定し、大すべり域には平均すべり量の2倍のすべり量を設定した。
- プレートの沈み込み速度を考慮したモデルのすべり量分布の設定の詳細は以下のとおり。



(Loveless and Meade(2010)を基に作成)

各小断層の沈み込速度分布



プレート沈み込み速度を考慮したモデルのすべり量分布概念図

【主部断層のすべり量の設定】

まず、各小断層の平均すべり量 D_i を領域ごとに設定し、各小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が主部断層のスケーリング則から求められる地震モーメント M_0 になるように設定。

$$M_0 = \sum M_{0i} = \sum \mu D_i S_i \rightarrow \text{小断層毎のすべり量はプレートの沈み込み速度に比例するよう設定。}$$

次に、各小断層の平均すべり量 D_i に対して、以下の関係を与えて各小断層のすべり量を設定。

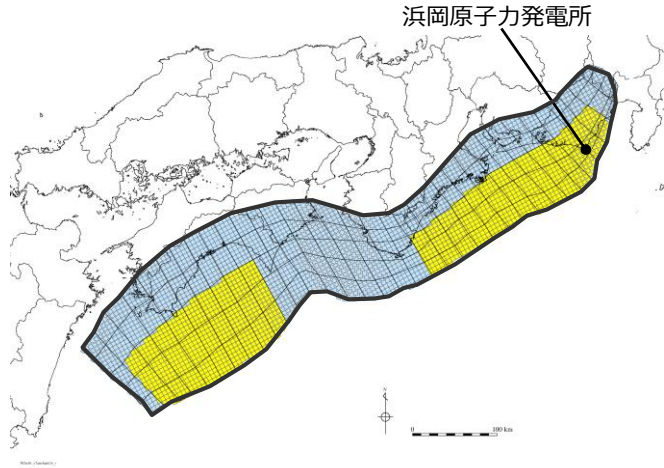
- ① 大すべり域 : $2D_i$
- ② 背景領域 : 主部断層（領域①～②）の小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が、 M_0 となるすべり量 D_b を設定

D_i : 各小断層の平均すべり量 D_b : 各背景領域のすべり量(= aD_i , a は定数) S_i : 各小断層の面積
 M_0 : スケーリング則から算定される主部断層の地震モーメント M_{0i} : 各小断層の地震モーメント

- ・今回実施した5ケース（応力降下量1.5MPa、1.6MPa、1.7MPa、1.8MPa、1.9MPa）とも、同様の考え方ですべり量設定を行っている。
- ・詳細な設定方法は、データ集に示す。

7-1 痕跡再現モデルのパラメータ 南海トラフ広域の痕跡再現モデル（プレートの沈み込み速度を考慮したモデル）の設定 すべり量分布の設定（平均応力降下量：1.5MPa）

■「南海トラフ広域の痕跡再現モデル」の各小断層のすべり量分布は以下のとおり。



南海トラフ広域の痕跡再現モデル
（平均応力降下量：1.5MPa）

南海トラフ広域の痕跡再現モデル（平均応力降下量：1.5MPa）のすべり量

断層モデル	面積 (km ²)	M ₀ (Nm)	Mw	Δσ (MPa)	最大 すべり量(m)	平均 すべり量(m)
南海トラフ広域の痕跡再現モデル （平均応力降下量：1.5MPa）	82,604	1.5×10 ²²	8.7	1.5	11.2	4.4

- 津波断層域
- 大すべり域（平均すべり量の2倍）：津波断層域の全面積の約40%
- 背景領域

南海トラフ広域の痕跡再現モデル（平均応力降下量：1.5MPa）の小断層のすべり量分布（m）

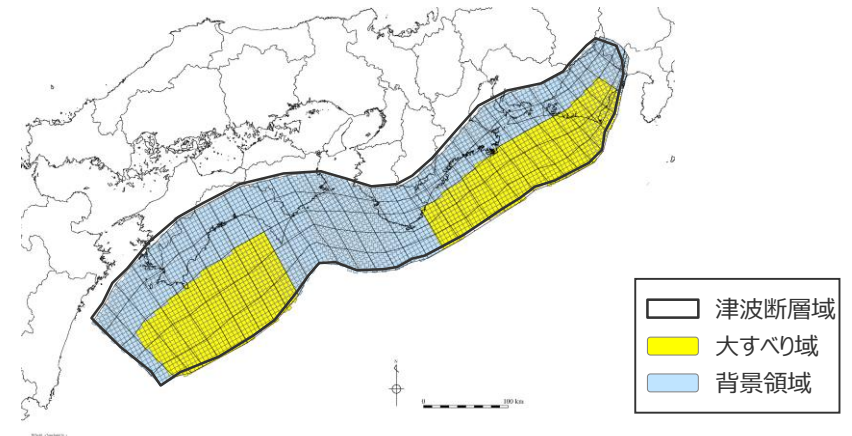
		西 ←																																				→ 東		
深度40km↓		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	
陸側⇕ 海溝軸 ⇓	30km↓	1																																						
	20km↓	2				1.9	1.8	1.8	1.7	1.6	1.6	1.6	1.5	1.5	1.5	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.2	1.2	1.0	1.0	1.0	0.8	0.8	0.8	0.7	0.7	0.5	
		3				1.9	1.8	1.8	1.7	1.7	1.6	1.6	1.6	1.5	1.5	1.5	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.2	1.2	1.0	1.0	1.0	0.8	0.8	0.8	0.7	0.7	0.5	
	10km↓	4				1.9	11.2	11.2	10.2	10.2	9.9	9.9	9.6	9.4	9.4	1.5	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.3	8.1	8.0	8.0	7.7	9.3	8.2	8.2	7.2	6.1	6.1	6.1	6.1	4.9	4.9	0.7	0.5
		5				1.9	11.2	11.2	11.2	10.2	10.2	9.9	9.6	9.6	9.4	1.5	1.5	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	8.1	8.0	8.0	7.7	7.7	9.3	8.2	8.2	7.2	7.2	6.1	6.1	4.9	4.9	0.7	0.7
	0km↓	6				1.9	11.2	11.2	11.2	10.2	10.2	9.9	9.9	9.6	9.4	1.5	1.5	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	8.1	8.1	8.0	8.0	7.7	9.3	9.3	8.2	8.2	7.2	7.2	6.1	6.1	4.9	0.7	0.7	
		7																																						
		8																																						

・すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。

7-1 痕跡再現モデルのパラメータ 南海トラフ広域の痕跡再現モデル（プレートの沈み込み速度を考慮したモデル）の設定 すべり量分布の設定（平均応力降下量：1.5MPa）

断層パラメータ

項目		設定値
全体	面積 (km ²)	82,604
	地震モーメント (Nm)	1.5×10^{22}
	Mw	8.7
	平均応力降下量 (MPa)	1.5
	平均すべり量 (m)	4.4
	最大すべり量 (m)	11.2
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	60

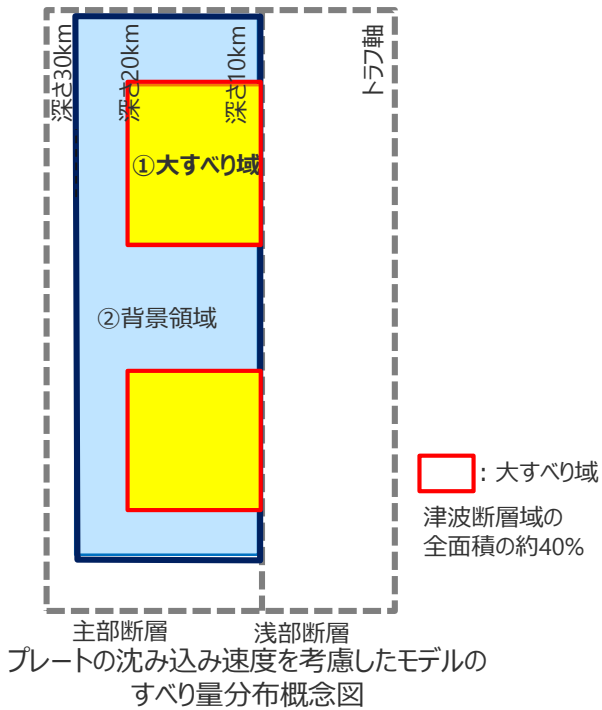


南海トラフ広域の痕跡再現モデル
（平均応力降下量：1.5MPa）

余 白

7-1 痕跡再現モデルのパラメータ 南海トラフ広域の痕跡再現モデル(プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル)の設定 すべり量分布の設定

- プレートの沈み込み速度を考慮しないモデルのすべり量分布の設定については、各小断層のすべり量をフィリピン海プレートの沈み込み速度を考慮せず設定し、大すべり域には平均すべり量の2倍のすべり量を設定した。
- プレートの沈み込み速度を考慮しないモデルのすべり量分布の設定の詳細は以下のとおり。



【主部断層のすべり量の設定】

まず、各小断層の平均すべり量 D_i を領域ごとに設定し、各小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が主部断層のスケーリング則から求められる地震モーメント M_0 になるように設定。

$$M_0 = \sum M_{0i} = \sum \mu D_i S_i \rightarrow \text{小断層毎のすべり量は以下の領域ごとに設定。}$$

次に、各小断層の平均すべり量 D_i に対して、以下の関係を与えて各小断層のすべり量を設定。

- ① 大すべり域 : $2D_i$
- ② 背景領域 : 主部断層 (領域①～②) の小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が、 M_0 となるすべり量 D_b を設定

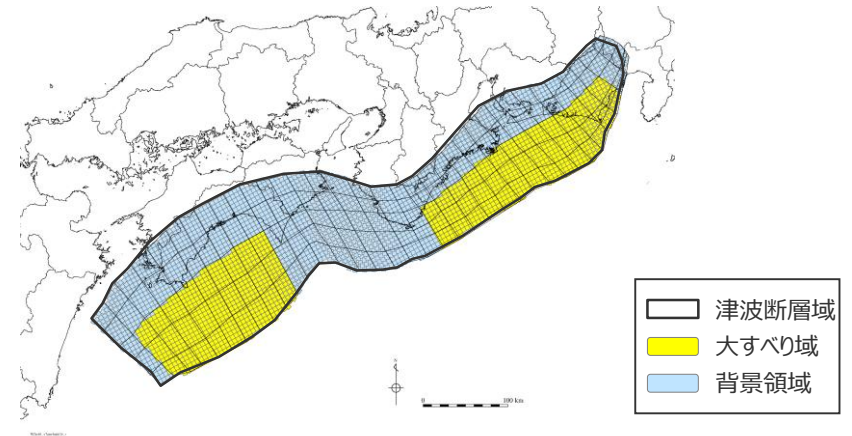
D_i : 各小断層の平均すべり量 D_b : 各背景領域のすべり量(= aD_i , a は定数) S_i : 各小断層の面積
 M_0 : スケーリング則から算定される主部断層の地震モーメント M_{0i} : 各小断層の地震モーメント

- ・今回実施した5ケース (応力降下量1.5MPa、1.6MPa、1.7MPa、1.8MPa、1.9MPa) とも、同様の考え方ですべり量設定を行っている。
- ・詳細な設定方法は、データ集に示す。

7-1 痕跡再現モデルのパラメータ 南海トラフ広域の痕跡再現モデル(プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル)の設定 すべり量分布の設定 (平均応力降下量 : 1.5MPa)

断層パラメータ

項目		設定値
全体	面積 (km ²)	82,604
	地震モーメント (Nm)	1.5×10^{22}
	Mw	8.7
	平均応力降下量 (MPa)	1.5
	平均すべり量 (m)	4.4
	最大すべり量 (m)	8.6
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	60



南海トラフ広域の痕跡再現モデル
(平均応力降下量 : 1.5MPa)

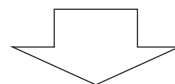
7 痕跡再現モデルの波源モデルの詳細

7-2 敷地のイベント堆積物の堆積標高に関する検討

検討概要

○第1020回審査会合（2021年12月17日）コメント

- 敷地の津波堆積物の堆積当時の地形を想定した津波の数値シミュレーションを行い、谷地形によって津波が増幅して遡上することを解析的に示すこと。



○検討概要

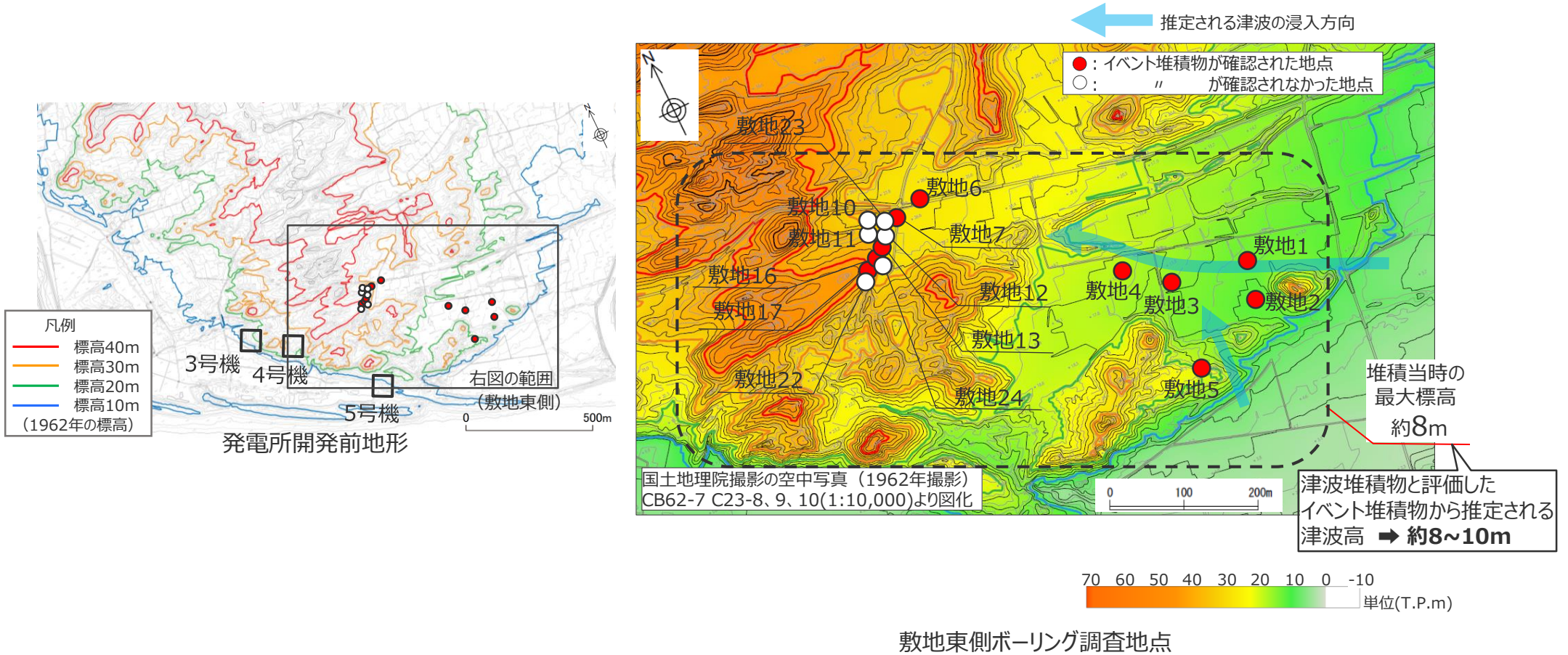
- 当時の精確な地形を推定することは困難ではあるものの、発電所開発前の地形とボーリング調査データから堆積当時の地形を想定して実施した津波の数値シミュレーションの結果、谷地形によって津波高が増幅して遡上することを示し、谷地形のやや高い標高に津波堆積物があったとしても既往津波と同程度の津波で説明できることを解析的に確認した。

7-2 敷地のイベント堆積物の堆積標高に関する検討 敷地の津波堆積物の標高

- 津波堆積物に関する現地調査において、津波起因の可能性が否定できないことから保守的に津波堆積物と評価した約6千年前のイベント堆積物※のうち、敷地東側のイベント堆積物の標高の方が高く、堆積当時の約6千年前の海面高度は現在の海面よりも約5m高かったことを考慮すると、堆積当時の最大標高は約8m。
- 津波堆積物と評価したイベント堆積物から推定される津波高は、東北沖地震等による津波の最大遡上高と津波堆積物の分布標高の差が約0~2mであることを踏まえ、約8~10mと評価している。

※イベント堆積物はコア観察により、津波起因の可能性が否定できないと評価した堆積物であって、高潮や洪水、土石流など津波以外の要因も考えられる。

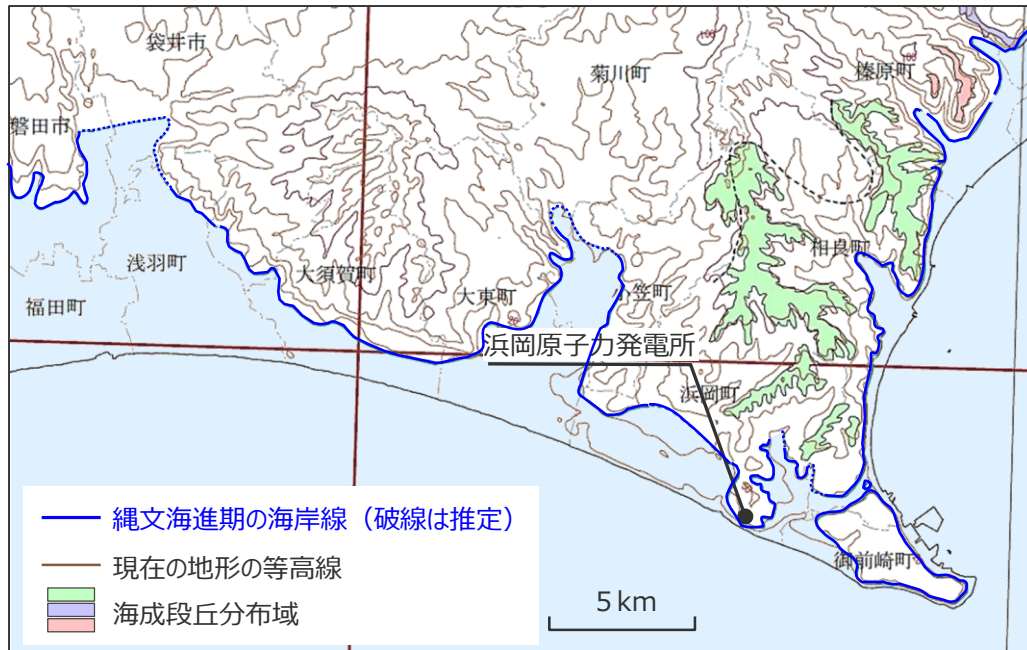
・津波堆積物調査の詳細は「歴史記録及び津波堆積物に基づく調査について」を参照



7-2 敷地のイベント堆積物の堆積標高に関する検討

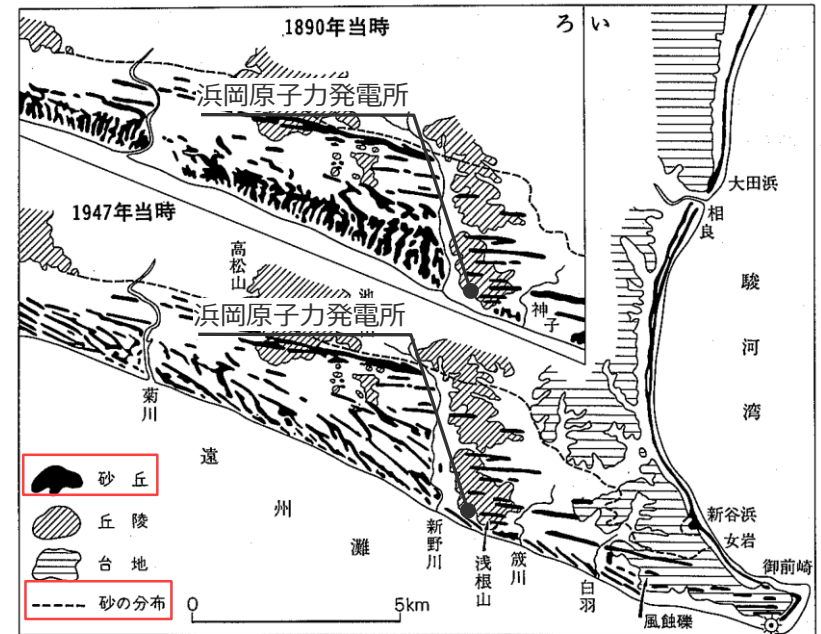
イベント堆積物の堆積当時の敷地周辺地形

- 「日本の海成段丘アトラス」(小池・町田(2001))によると、縄文海進期(約6千年前)の御前崎周辺の海岸線は、現在よりも陸側へ数km程度前進していたとされており、発電所地点は海に張り出した岬に位置していたとされている。
 - 杉山ほか(1988)によると、御前崎付近の地形は、縄文海進期(約6千年前)以降に形成された膨大な量の風成砂により覆われており、その層厚は場所によって異なっているとされる。
- ➔ イベント堆積物の堆積当時の約6千年前の敷地周辺地形は、現在と大きく異なっており、精確に推定することは困難と考えられる。



(小池・町田(2001)を基に作成)

御前崎周辺の縄文海進期の海岸線



(杉山ほか(1988)を基に作成)

第51図 御前崎付近の砂丘分布及び砂丘形態の変遷 栗林(1956b)による

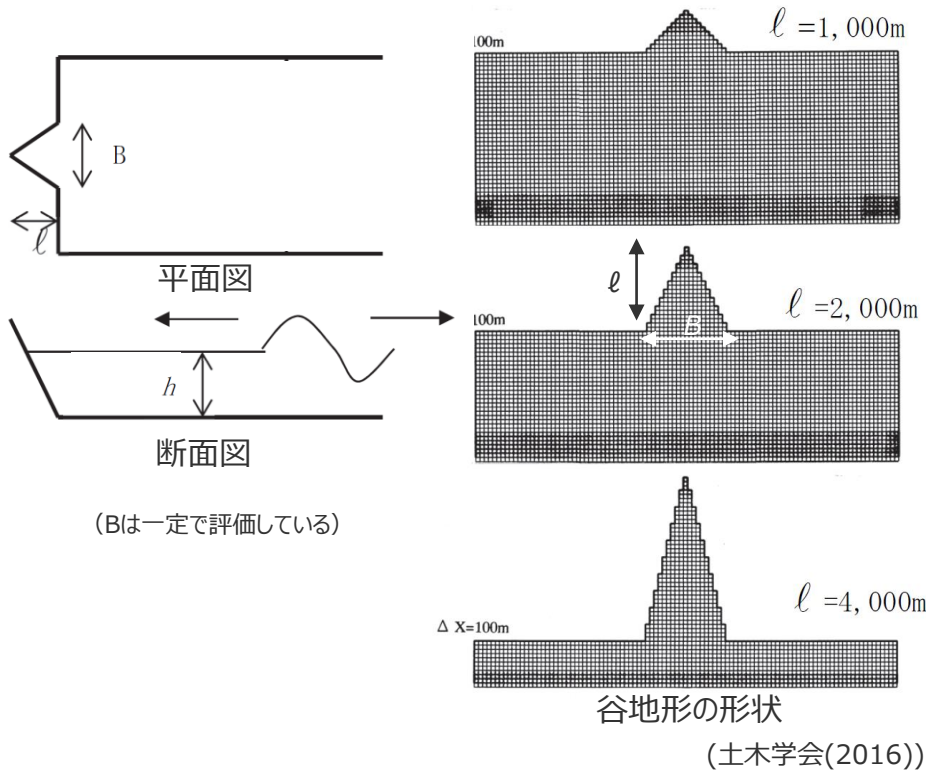
7-2 敷地のイベント堆積物の堆積標高に関する検討

土木学会(2016)の評価手法に基づく津波増幅効果の検討

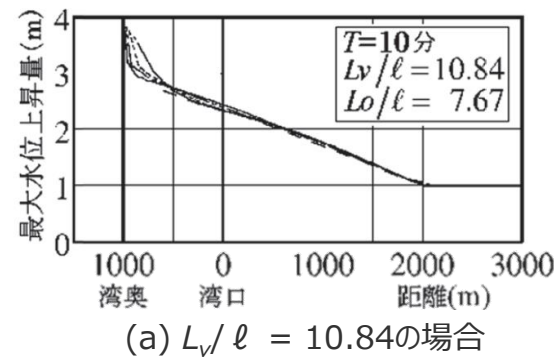
(土木学会(2016)の谷地形による津波増幅効果の評価手法)

- イベント堆積物※の堆積当時（約6千年前）の地形を精確に推定することは困難と考えられるが、山谷の大きな位置関係は、基盤が反映されたものであり当時から変わっていないと考えて、発電所開発前の地形とボーリング調査データを用いて、谷地形による津波増幅効果を土木学会(2016)の評価手法に基づき検討した。
- 土木学会(2016)によると、谷地形の湾の奥行、入射波の周期等を変えて津波の数値計算を実施した結果、湾の形状および入射波長に関わらず、湾内平均波長 L_v と湾の奥行 l の比 (L_v/l) が同一の場合、谷地形による津波増幅効果はほぼ同一となるとされ、 L_v/l と谷地形による津波増幅効果の関係を示している。

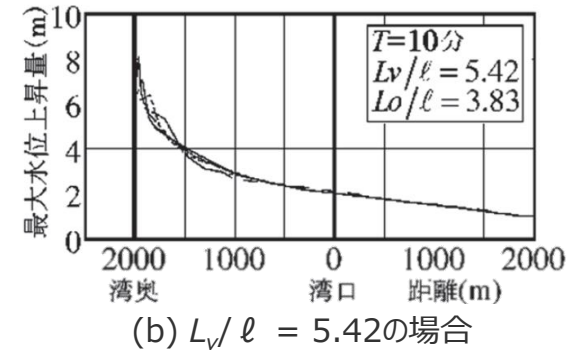
※イベント堆積物はコア観察により、津波起因の可能性が否定できないと評価した堆積物であって、高潮や洪水、土石流など津波以外の要因も考えられる。



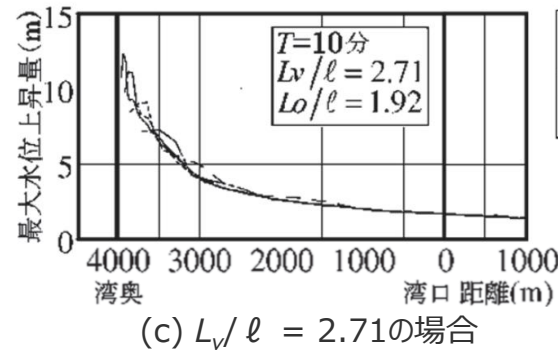
数値計算に用いた谷地形のモデル



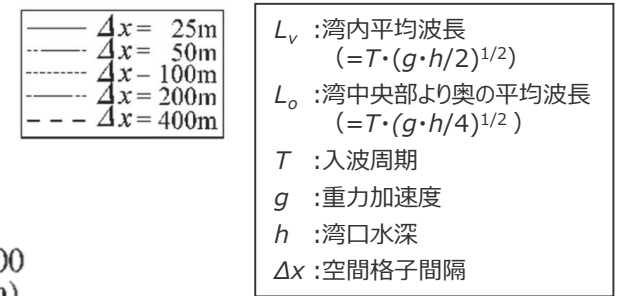
(a) $L_v/l = 10.84$ の場合



(b) $L_v/l = 5.42$ の場合



(c) $L_v/l = 2.71$ の場合



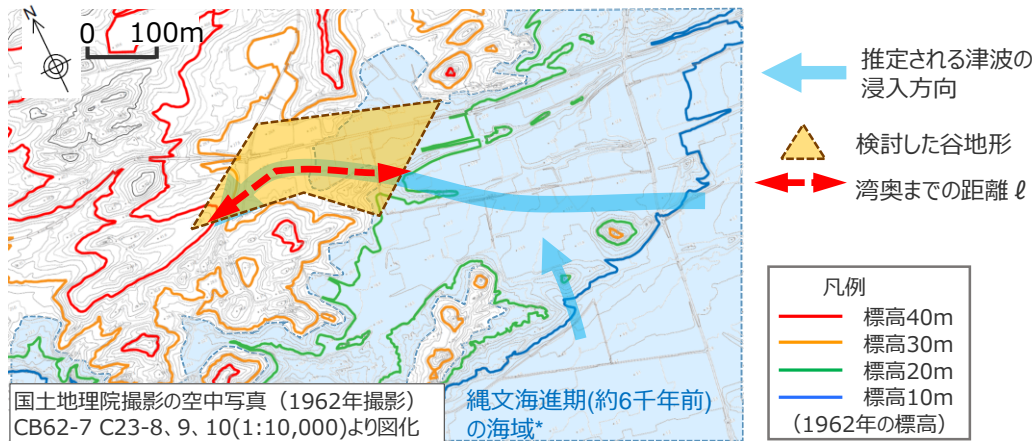
L_v : 湾内平均波長
($=T \cdot (g \cdot h/2)^{1/2}$)
 L_o : 湾中央部より奥の平均波長
($=T \cdot (g \cdot h/4)^{1/2}$)
 T : 入波周期
 g : 重力加速度
 h : 湾口水深
 Δx : 空間格子間隔

(土木学会(2016))

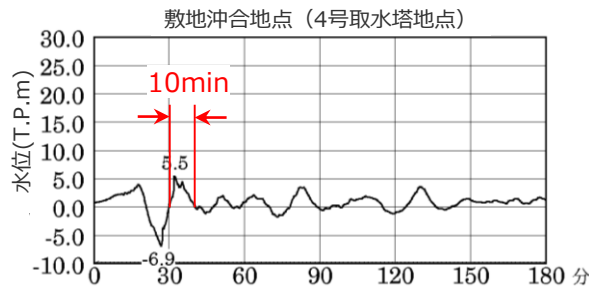
湾口～湾奥縦断沿いの最大水位上昇量分布の比較

7-2 敷地のイベント堆積物の堆積標高に関する検討 土木学会(2016)の評価手法に基づく津波増幅効果の検討 (敷地東側の谷地形における評価結果)

■ 土木学会(2016)に基づき谷地形による津波増幅効果を検討した結果、敷地東側の谷地形によって、津波高は2倍程度まで増幅することを確認した。



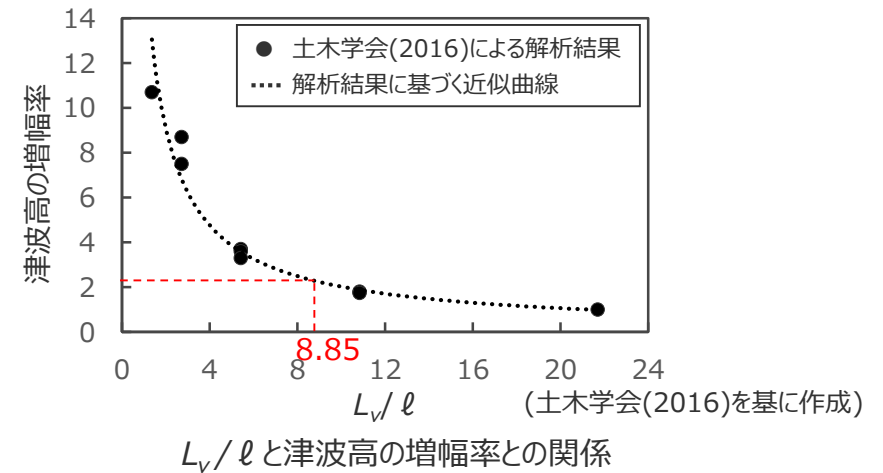
*ボーリング縦断面図上で推定した津波堆積当時の海岸線位置に基づき、記載。
ボーリング平面図 (発電所開発前地形)



遠州灘沿岸域の痕跡再現モデルの沖合水位の時刻歴波形
(現在の地形による解析結果)

土木学会(2016)に基づく谷地形による津波増幅効果の評価

項目	数値	設定方法
湾の奥行 ℓ (m)	300	湾口部～イベント堆積物が確認されている位置までの距離
入波周期 T (s)	1,200	痕跡再現モデルの沖合の水位の時間変化に基づく (最大波の片周期10min×2)
重力加速度 g (m/s ²)	9.8	-
湾口水深 h (m)	1	湾口付近 (「敷地4」地点) の堆積当時の水深 (=海面高さ5m - 津波堆積物の堆積標高4m)
湾内平均波長 L_v (m)	2,656	($=T \cdot (g \cdot h / 2)^{1/2}$)
L_v / ℓ	8.85	-
津波高の増幅率	2倍程度	下図より、 $L_v / \ell = 8.85$ の場合の増幅率



7-2 敷地のイベント堆積物の堆積標高に関する検討 数値シミュレーションに基づく津波増幅効果の検討 (検討方針)

- イベント堆積物※の堆積当時（約6千年前）の地形を精確に推定することは困難であるが、山谷の大きな位置関係は、基盤が反映されたものであり当時から大きく変わらないと考えて、発電所開発前の地形とボーリング調査データから一定の仮定に基づき堆積当時（約6千年前）の地形を想定し、数値シミュレーションに基づき谷地形による津波増幅効果を検討した。
- 堆積当時の地形モデルは、国土地理院撮影の空中写真（1962年撮影）に基づく発電所開発前地形をベースとして、津波堆積物調査ボーリングに基づく堆積当時～現在までの堆積層の厚さ、および、当時の海水準を考慮し、設定した。
- 波源モデルには、遠州灘沿岸域の痕跡再現モデルを用いることとし、地形モデル以外の計算条件は「2 痕跡再現モデルの検討」と同様とした。

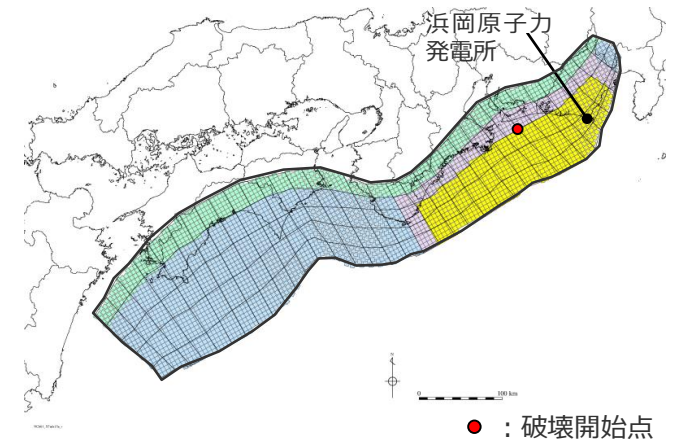
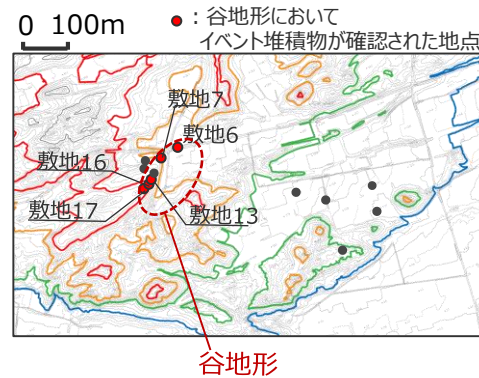
※イベント堆積物はコア観察により、津波起因の可能性が否定できないと評価した堆積物であって、高潮や洪水、土石流など津波以外の要因も考えられる。

○谷地形周辺の当時～現在までの堆積層の厚さ (開発前地形および津波堆積物調査ボーリングに基づく)

ボーリング地点No.	発電所開発前の標高 (T.P.m)	イベント堆積物の下端標高※ (T.P.m)	堆積層の厚さ (m)
6	27.0	7.5	19.5
7	27.8	11.5	16.3
13	32.8	12.5	20.3
16	33.9	12.4	21.5
17	40.7	12.3	28.4

※「歴史記録及び津波堆積物に関する調査について」の津波堆積物調査結果に基づく

平均約20m



遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル

○堆積当時（約6千年前）の海面高度 (杉山ほか(1988)に基づく)

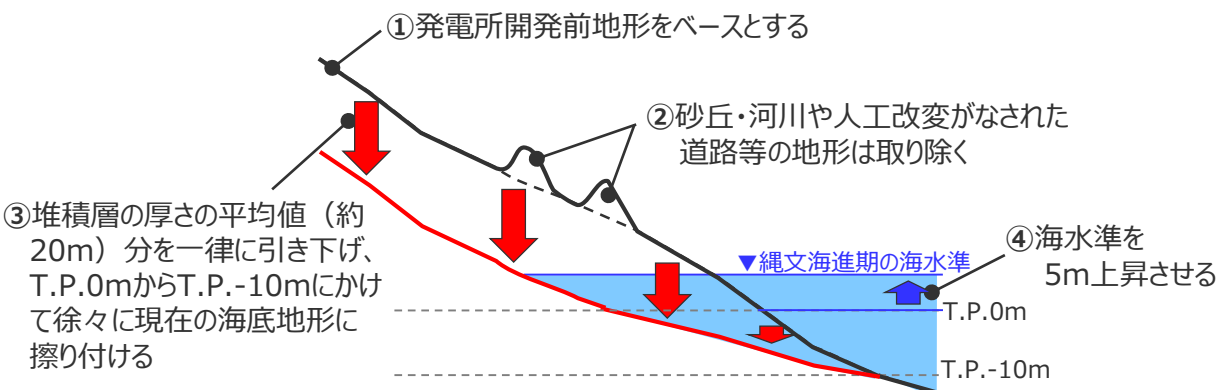
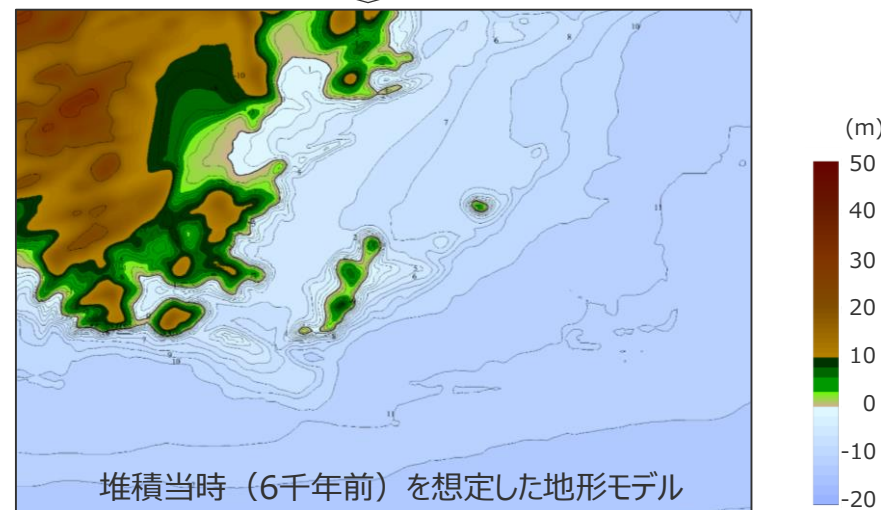
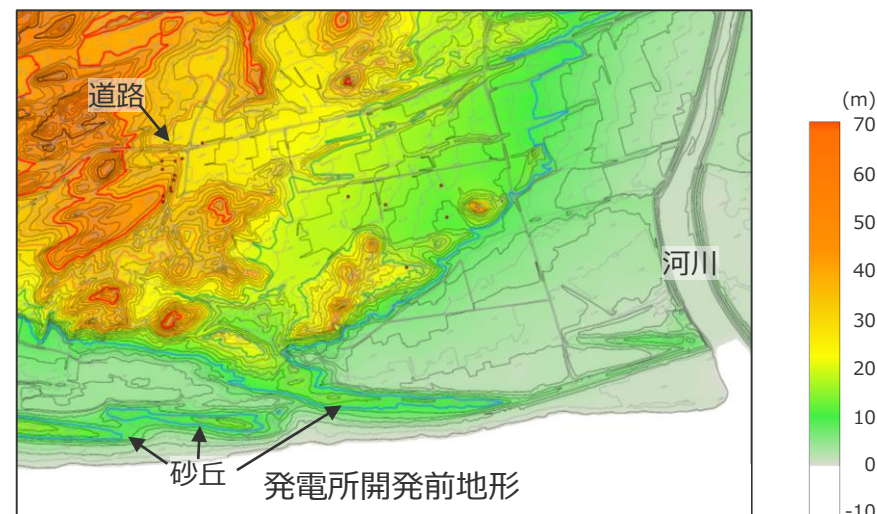
: 現標高から+5m程度

7-2 敷地のイベント堆積物の堆積標高に関する検討 数値シミュレーションに基づく津波増幅効果の検討 (地形モデルの設定)

■ 堆積当時（約6千年前）の地形モデルは、以下の方法により、一定の仮定に基づいて設定した。

堆積当時（約6千年前）の地形モデルの設定

- ① 発電所開発前地形をベースとする。
- ② 発電所開発前地形に確認される砂丘・河川や人工改変がなされた道路等の地形は、イベント堆積物堆積当時に存在しなかったと考えられることから、地形モデルから取り除く。
- ③ 地形モデルの標高について、谷地形周辺のボーリングに基づく堆積当時（約6千年前）～現在までの堆積層の厚さの平均値（約20m）分を、一律引き下げる。
ただし、現地形のT.P.-約10m（取水塔付近相当）の海底は露岩していることから、T.P.0mからT.P.-10mにかけて標高の引き下げ幅を徐々に小さくし、T.P.-10mで現在の海底地形に擦り付ける。
- ④ 初期水位について、杉山ほか(1988)による縄文海進期の海水準に基づき約5m上昇させる。



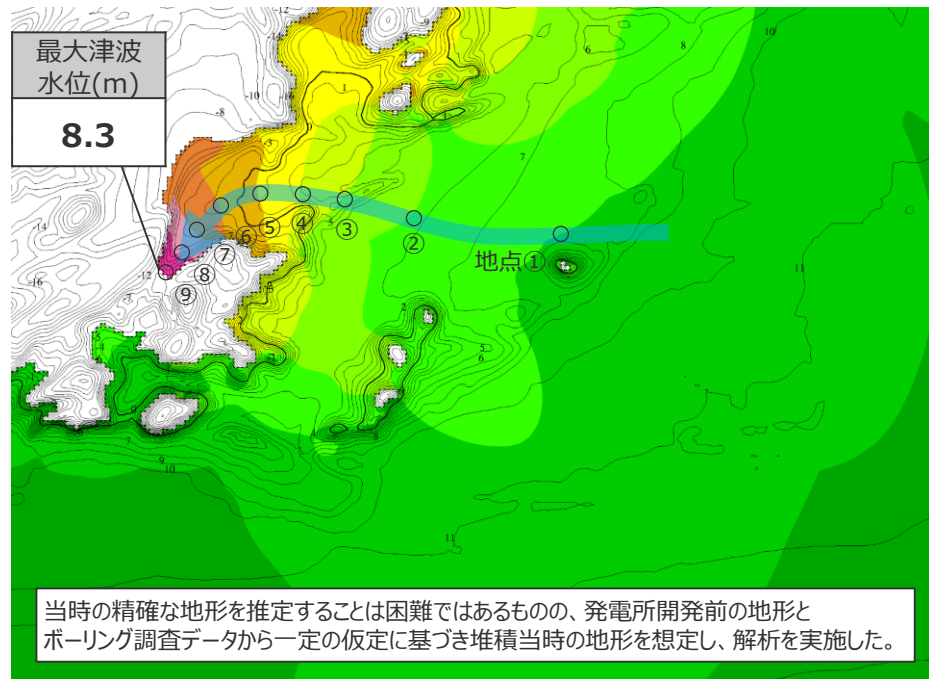
堆積当時（6千年前）地形モデルの設定イメージ

堆積当時（6千年前）を想定した地形モデル

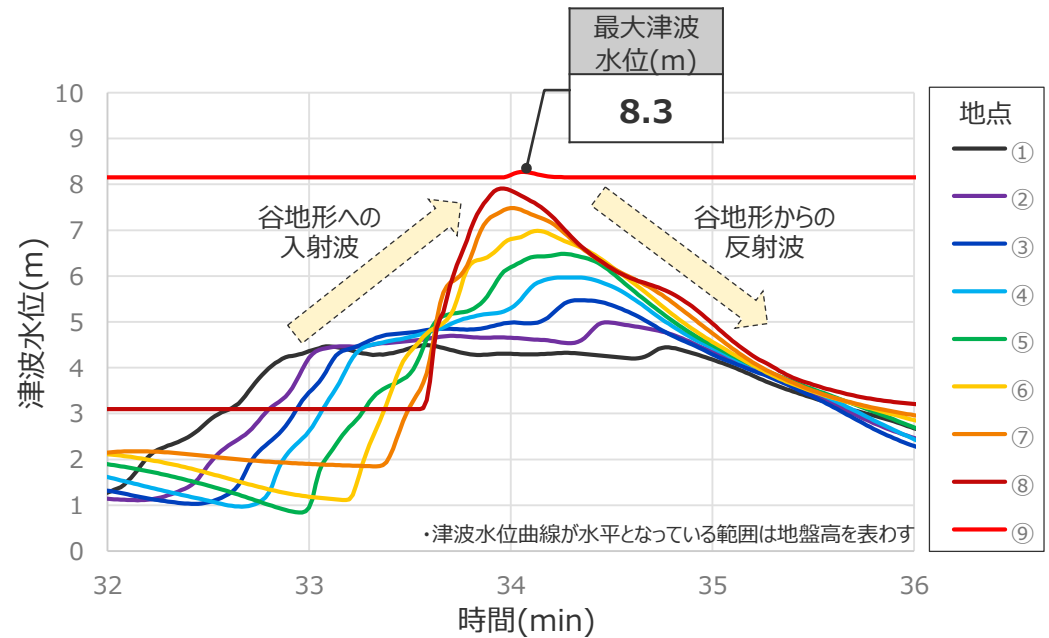
7-2 敷地のイベント堆積物の堆積標高に関する検討 数値シミュレーションに基づく津波増幅効果の検討 (堆積当時の地形を想定した津波の数値シミュレーション結果)

- 津波起因の可能性が否定できないことから保守的に津波堆積物と評価したイベント堆積物※について、堆積当時（約6千年前）の地形を想定した津波の数値シミュレーション結果は、以下のとおり。
- 津波の最大上昇水位分布および時刻歴波形より、谷地形によって津波高が増幅することを確認した。
- また、谷地形における最大津波水位（8.3m）は、谷地形による反射波等の影響の小さい地点①、②の津波水位（4～5m）に対して、2倍程度となっている。

※イベント堆積物はコア観察により、津波起因の可能性が否定できないと評価した堆積物であって、高潮や洪水、土石流など津波以外の要因も考えられる。



最大津波水位



谷地形周辺（地点①～⑨）の津波水位の時間変化

堆積当時（約6千年前）の地形を想定した津波の数値シミュレーション結果



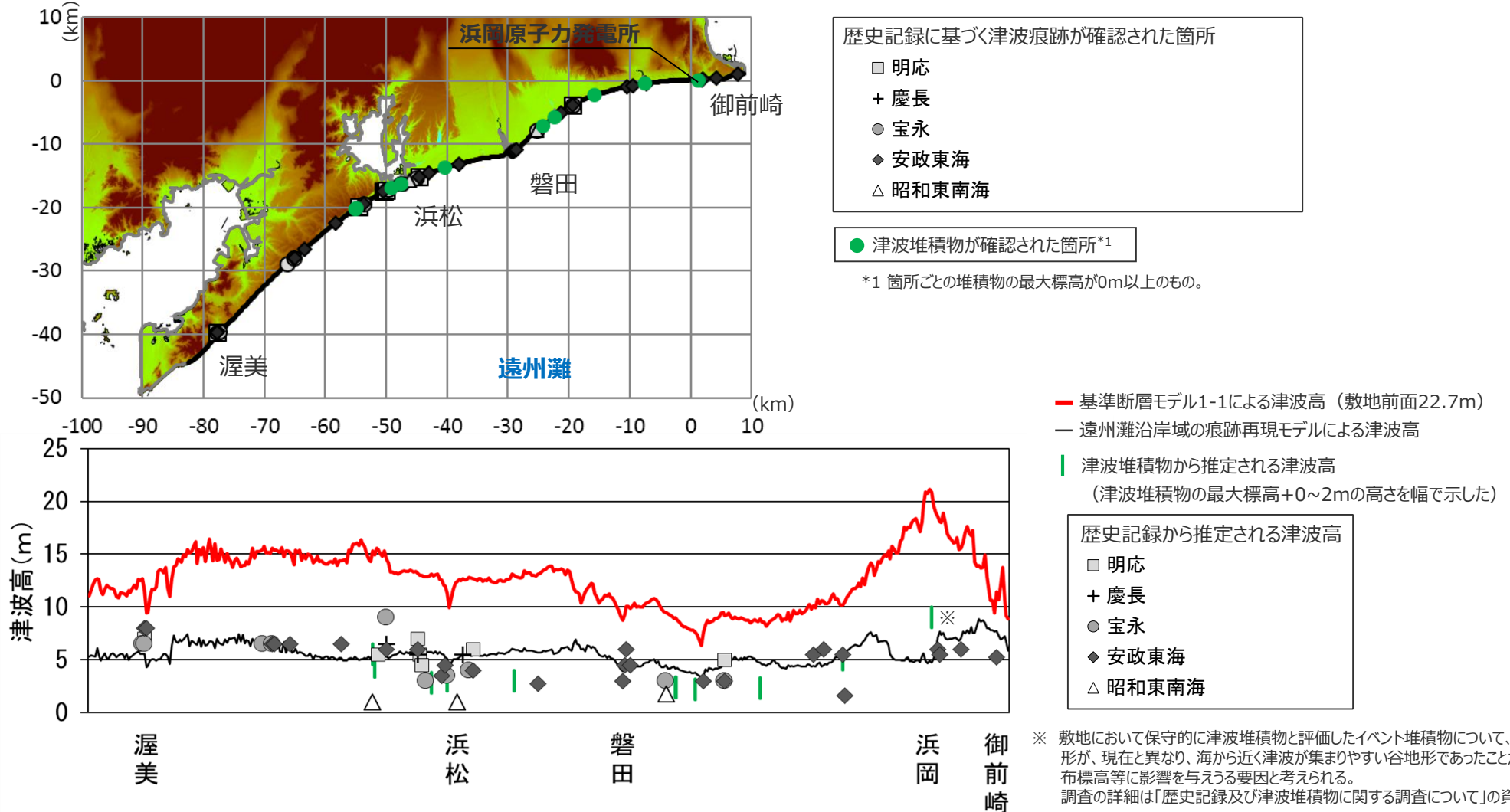
- 土木学会(2016)に基づき谷地形による津波増幅効果を検討した結果、敷地東側の谷地形によって、津波高は2倍程度まで増幅することを確認した。
- また、当時の正確な地形を推定することは困難ではあるものの、発電所開発前の地形とボーリング調査データから堆積当時の地形を想定して実施した津波の数値シミュレーションの結果、谷地形のやや高い標高に津波堆積物があったとしても既往津波と同程度の津波で説明できることを解析的に確認した。

7-2 敷地のイベント堆積物の堆積標高に関する検討

(参考) プレート間地震の津波評価結果との比較

- 歴史記録および津波堆積物から推定される遠州灘沿岸域の津波高は、概ね5～10m。
- プレート間地震の津波評価において、最も敷地への影響が大きいと評価した基準断層モデル1-1による津波高は、歴史記録及び津波堆積物から推定される津波高(概ね5～10m)を、遠州灘沿岸域の全域において2～3倍程度上回っている。

・津波評価結果との比較は、基準津波の確定後に改めて実施し、基準津波による津波高が歴史記録および津波堆積物から推定される津波高を超えていることを確認する。



プレート間地震の津波による海岸線の津波高と、歴史記録及び津波堆積物から推定される津波高との比較

参考文献

- 相田勇（1981）「東海道沖におこった歴史津波の数値実験」『地震研究所彙報』Vol.56, pp.367-390。
- 相田勇（1985）「東海地震津波の挙動－その数値実験－」『月刊地球』Vol.7, No.4, pp.204-215。
- 愛知県（2014）『平成23年度～25年度 愛知県東海地震・東南海地震・南海地震等被害予測調査結果』愛知県防災会議地震部会, 平成26年5月。
- 阿部勝征（1989）「地震と津波のマグニチュードに基づく津波高の予測」『地震研究所彙報』Vol.64, pp.51-69。
- 阿部朋弥, 白井正明（2013）「愛知県渥美半島の沿岸低地で見出された江戸時代の津波起源と推定されたイベント堆積物」『第四紀研究』Vol.52, No.2, pp.33-42。
- 荒井晃作, 岡村行信, 池原研, 芦寿一郎, 徐垣, 木下正高(2006)「浜松沖前弧斜面上部に発達する活断層とテクトニクス」『地質学雑誌』第112巻, 第12号, pp.749-759。
- 荒井晃作, 下田玄, 池原研（2013）「沖縄海域の海洋地質調査－海底鉱物資源開発に利用できる国土の基盤情報の整備－」『シンセオロジー』Vol.6, No.3, pp.162-169。
- 飯田汲事（1981a）「宝永4年10月4日（1707年10月28日）の宝永地震の津波被害」『愛知県被害津波史』愛知県防災会議地震部会, pp.36-49。
- 飯田汲事（1981b）「嘉永7年（安政元年）11月4日（1854年12月23日）の安政地震の津波被害」『愛知県被害津波史』愛知県防災会議地震部会, pp.50-78。
- 飯田汲事（1985a）「愛知県及び隣接県被害津波史」『東海地方地震・津波災害誌』飯田汲事教授論文選集発行会, pp.669-790。
- 飯田汲事（1985b）「歴史地震の研究（4）：慶長9年12月16日（1605年2月3日）の地震及び津波災害について」『愛知工業大学研究報告. B, 専門関係論文集』Vol.16, pp.159-164。
- 飯田汲事（1985c）「昭和19年12月7日東南海地震の震害と震度分布」『東海地方地震・津波災害誌』飯田汲事教授論文選集発行会, pp.449-570。
- 池谷仙之, 和田秀樹, 阿久津浩, 高橋実（1990）「浜名湖の起源と地史的変遷（湖沼の成因と環境・地質）」『地質学論集』第36号, pp.129-150。
- 石原藤次郎, 本間仁（1965）『応用水理学Ⅱ』丸善, 1965年3月。
- 岩崎峯夫, 永井紀彦, 清水勝義, 安立重昭（2006）「検潮井戸の周波数応答特性計測システムの開発」『海岸工学論文集』第53巻, pp.1416-1420。
- 岩瀬浩之, 原信彦, 田中聡, 都司嘉宣, 今井健太郎, 行谷佑一, 今村文彦（2011）「高知県土佐清水市内における1707年宝永地震の津波痕跡に関する現地調査報告」『津波工学研究報告』第28号, pp.105-116。
- 上田誠也（1989）『プレート・テクトニクス』岩波書店, 1989年9月。
- 内田主税（2002）「遠州灘沿岸, 静岡県大須賀町付近における沖積層中のイベント堆積物と古地形環境」『日本地理学会発表要旨集』第61号, 135p。
- 蝦名裕一, 今井健太郎, 大林涼子, 柄本邦明, 都司嘉宣（2020）「古絵図に基づく安政東海地震の浜名湖周辺における津波浸水域の分析」『歴史地震』第35号, pp.187-206。
- 愛媛県（2013）『津波浸水想定について（解説）』愛媛県, 平成25年6月10日。
- 大分県（2014）『津波浸水想定について（解説）』大分県, 2014年3月27日。
- 大阪府（2013）『津波浸水想定について（解説）』大阪府, 平成25年8月20日。
- 岡村眞, 松岡裕美, 佃栄吉, 都司嘉宣（2000）「沿岸湖沼堆積物による過去一万年間の地殻変動と歴史津波モニタリング」『月刊地球／号外』Vol.28, pp.162-168。
- 岡村眞, 松岡裕美, 古野北斗（2009）「浜名湖湖底堆積物に記録された2つの地震イベント」『日本地球惑星科学連合2009年大会予稿集』T225-P004。
- 岡村眞・松岡裕美（2012）「津波堆積物からわかる南海地震の繰り返し」『科学』Vol.82, No.2, pp.182-191。
- 岡村行信（2012）「西暦869年貞観津波の復元と東北地方太平洋沖地震の教訓－古地震研究の重要性和研究成果の社会への周知の課題－」『シンセオロジー』Vol.5, No.4, pp.234-242。
- 岡山県（2013）『津波浸水想定について（解説）』岡山県, 平成25年3月22日。
- 奥村与志弘・後藤浩之（2013）「海溝型地震の分岐断層破壊シナリオで発生する津波の特徴に関する一考察」『土木学会論文集A1（構造・地震工学）』Vol.69, No.4, pp.I_750-I-757。
- 小原一成（2009）「フィリピン海プレート沈み込みに伴う西南日本のスロー地震群の発見」『地震』第2輯, 第61巻, pp.S315-S327。

参考文献

- 小原研究室Website, (<http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/people/obara/>)
- 海上保安庁『海洋台帳』深海版 (<http://www.kaiyoudaichou.go.jp/KaiyowebGIS/>)。
- 香川県 (2013) 『香川県地震・津波被害想定第一次公表報告書』香川県, 平成25年3月31日。
- 垣見俊弘, 松田時彦, 相田勇, 衣笠善博 (2003) 「日本列島と周辺海域の地震地体構造区分」『地震』第2輯, 第55巻, pp.389-406。
- 鹿児島県 (2014) 『津波浸水想定について (解説)』鹿児島県, 平成26年9月24日。
- 鹿島薫, 米倉伸之, 池田安隆, 熊木洋太, 宮崎隆, 長澤良太 (1983) 「御前崎周辺地域の完新世海水準変化」『日本第四紀学会講演要旨集』No. 13, pp. 126-127。
- 鹿島薫, 長澤良太, 宮崎隆 (1985) 「静岡県菊川平野における完新世の海水準変動に関する資料」『第四紀研究』Vol. 24, pp. 45-50。
- 活断層研究会 (1991) 『新編 日本の活断層 分布図と資料』東京大学出版会, 1991年3月。
- 加藤勝秀, 森勇人, 佐藤嘉則, 松山昌史 (2020) 「津波波源モデルにおけるすべり量とライズタイムとの関係に関する検討」『土木学会論文集B2 (海岸工学)』Vol.76, No. 2, pp.I_355-I_360。
- 神奈川県 (2015) 『参考資料 津波浸水想定について (解説)』神奈川県, 平成27年6月22日。
- 金森博雄 (1991) 『地震の物理』岩波地球科学選書, 1991年9月。
- 金田義行 (2013) 「地質調査業が躍動するステージ 地震分野」『地質と調査 (平成25年10月1日発行)』2013第3号 (通巻137号), pp.15-22。
- 河田恵昭, 奥村与志弘, 越村俊一 (2006) 「津波の発生に及ぼす断層破壊の動的特性の影響」『海岸工学論文集』第53号, pp.291-295。
- 気象庁 (1945) 『昭和十九年十二月七日東南海大地震調査概報』中央気象台。
- 気象庁 (1973) 「1972年12月4日八丈島東方沖地震について」『地震予知連絡会会報』第9巻, 3-4, pp.46-50。
- 気象庁 (2004) 『2004年9月5日23時57分頃の東海道沖の地震について (第2報)』平成16年9月6日。
- 気象庁 (2009) 『平成21年8月11日の駿河湾の地震で発表した津波注意報について』
(<http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/tsunamihiyoka/20090811suruga-wan/index.html>)。
- 気象庁 (2010) 『2010年2月27日15時34分頃にチリ中部沿岸で発生した地震について (第3報)』平成22年2月28日。
- 気象庁潮汐観測資料『潮汐累計原簿』(1956~1986年), 『潮汐観測』(1987~1996年), 『潮汐観測 (CD版)』(1997~2001年), 『潮汐概況』(2002~2017年) (<https://www.data.jma.go.jp/gmd/kaiyou/db/tide/gaikyo/nenindex.php>)。
- 北村晃寿, 小林小夏 (2014) 「静岡平野・伊豆半島南部の中・後期完新世の古津波と古地震の地質学的記録」『地学雑誌』第123巻, 第6号, pp.813-834。
- 北村晃寿, 川手繁人 (2015) 「静岡県南伊豆・吉佐美の海岸低地における津波堆積物の有無の調査」『静岡大学地球科学研究報告』第42号, pp.15-23。
- 北村晃寿, 鈴木孝和, 小林小夏 (2015) 「静岡県焼津平野における津波堆積物の調査」『静岡大学地球科学研究報告』第42号, pp.1-14。
- 北村晃寿, 三井雄太, 石橋秀巳, 森英樹 (2018) 「伊豆半島南東部静岡県河津町の海岸低地における津波堆積物調査」『静岡大学地球科学研究報告』第45号, pp.1-16。
- 木村学・木下正高 (2009) 『付加体と巨大地震発生帯 南海地震の解明に向けて』東京大学出版会, 2009年08月26日。
- 熊谷博之 (1999) 「浜名湖周辺での東海沖の大地震に伴う津波堆積物の調査」『地学雑誌』第108巻, 第4号, pp.424-432。
- 熊本県 (2013) 『津波浸水想定について (解説)』熊本県, 2013年3月29日。
- 小池一之, 町田洋 (2001) 『日本の海成段丘アトラス』東京大学出版会, 2001年6月。
- 高知県 (2012) 『参考資料津波浸水想定について (解説)』高知県, 2012年12月10日。
- 国土交通省 (2019) 『津波浸水想定の設定の手引き Ver.2.10』国土交通省水管理・国土保全局海岸室, 国土技術政策総合研究所河川研究部海岸研究室, 2019年4月, 75p。

参考文献

- 国土地理院・海上保安庁（2011）『東北地方太平洋沖地震の陸域及び海域の地殻変動と滑り分布モデル』（<http://www.gsi.go.jp/cais/topic110520-index.html>）。
- 国土画像情報（電子国土web）。
- 国土地理院『2万5千分の1地形図』『5万の分の1地形図』。
- 国土地理院駿潮の概要HP(http://www.gsi.go.jp/kanshi/tide_presen.html)。
- 小谷美佐，今村文彦，首藤伸夫（1998）「GISを利用した津波遡上計算と被害推定法」『海岸工学論文集』第45巻，pp.356-360。
- 後藤和久・島袋綾野（2012）「学際的研究が解き明かす1771年明和大津波」『科学』Vol.82，No.2，pp.208-214。
- 後藤和久（2012）「津波石研究の課題と展望Ⅱ—2009年以降の研究を中心に津波石研究の意義を再考する—」『堆積学研究』第71巻，pp.129-139。
- 後藤和彦（2013）「1911年に喜界島近海で発生した巨大地震の震源位置の再評価」『地震』第2輯，第65巻，pp.231-242。
- 小西健二（1965）「琉球列島（南西諸島）の構造区分」『地質学雑誌』第71巻，第840号，pp.437-457。
- 小松原純子，藤原治，高田圭太，澤井祐紀，Than Tin Aung，鎌滝孝信（2006）「沿岸低地堆積物に記録された歴史時代の津波と高潮：南海トラフ沿岸の例」『活断層・古地震研究報告』第6号，pp.107-122。
- 小松原純子，岡村行信，澤井祐紀，穴倉正展，吉見雅行，竿本英貴（2007）「紀伊半島沿岸の津波堆積物調査」『活断層・古地震研究報告』地震調査総合センター，Vol.7，pp.219-230。
- 小松原純子，藤原治，高田圭太，澤井祐紀，Than Tin Aung，鎌滝孝信（2009）「東海道白須賀宿付近の堆積物に記録された歴史時代の津波と高潮」『歴史地震』第24号，169p。
- 小山順二，都筑基博，蓬田清（2012）「斜め衝突帯の巨大地震（1）相模トラフ」『北海道大学地球物理学研究報告』No.75，pp.161-174。
- 近藤武司，森本徹，藤本典子，殿最浩司，志方建仁（2012）「港湾での津波による土砂移動計算の再現性評価」『土木学会論文集B2（海岸工学）』Vol.68，No.2，pp.I_396-I_400。
- 佐賀県（2016）『津波浸水想定について（解説）』佐賀県，2016年4月12日。
- 佐竹健治（2012）「第197回地震予知連絡会 重点検討課題「世界の巨大地震・津波」概要」『地震予知連絡会会報』第89巻，12-6，pp.414-416。
- 佐竹健治（2013）「第197回地震予知連絡会 重点検討課題「世界の巨大地震・津波」概要」『地震予知連絡会会報』第89巻，12-6，pp.414-416。
- 佐藤善輝，藤原治，小野映介（2016）「浜松平野西部における完新世後期の浜堤列の地形発達過程」『第四紀研究』第55巻，第1号，pp.17-35。
- 砂防フロンティア整備推進機構（2001）『土砂災害防止に関する基礎調査の手引き』平成13年4月1日。
- 産業技術総合研究所『活断層データベース』（https://gbank.gsj.jp/activefault/index_gmap.html）。
- 産業技術総合研究所『津波堆積物データベース』（https://gbank.gsj.jp/tsunami_deposit_db/）。
- 穴倉正展，澤井祐紀，行谷佑一，岡村行信（2010）「平安の人々が見た巨大大津波を再現する—西暦869年貞観津波—」『AFERC ニュース』No.16，pp.1-10。
- 穴倉正展，前杵英明，越後智雄，行谷佑一，永井亜沙香（2011）「潮岬周辺の津波石と隆起痕跡から推定される南海トラフの連動型地震履歴」『日本地球惑星科学連合2011年大会予稿集』SSS035-13。
- 穴倉正展（2011）「津波堆積物からみた869年貞観地震と2011年東北地方太平洋沖地震について」『日本地震学会ニュースレター』Vol.23，No.3，pp.20-25。
- 穴倉正展，藤原治，澤井祐紀，行谷佑一，谷川晃一郎（2012）「海溝型地震履歴解明の研究」『地質調査総合センター速報 No.59，平成23年度沿岸域の地質・活断層調査研究報告』pp.43-58。
- 穴倉正展（2013a）「地形・地質記録から見た南海トラフの巨大地震・津波（南海地域の例）」『GSJ地質ニュース』Vol.2，No.7，pp.201-204。
- 穴倉正展，前杵英明，越後智雄，小俣雅志，郡谷順英，渋谷典幸（2013）「南海トラフ沿いの和歌山県串本町で検出された完新世イベント堆積物」『日本地球惑星科学連合2013年大会予稿集』SSS31-35。

参考文献

- 宍倉正展（2016）「古地震からみた南海トラフ巨大地震の多様性と規模」『南海トラフ巨大地震の予測に向けた観測と研究』講演会資料，9p。
- 地震調査委員会（2004a）『日向灘および南西諸島海溝周辺の地震活動の長期評価』平成16年2月27日。
- 地震調査委員会（2009a）「九州・沖縄地方の地震活動の特徴」『日本の地震活動－被害地震から見た地域別の特徴－』平成21年3月。
- 地震調査委員会（2009b）「関東地方の地震活動の特徴」『日本の地震活動－被害地震から見た地域別の特徴』平成21年3月。
- 地震調査委員会（2011）『三陸沖から房総沖にかけての地震活動の長期評価（第二版）について』平成23年11月25日。
- 地震調査委員会（2012）「三陸沖から房総沖にかけての地震活動の長期評価（第二版）について」平成24年2月9日。
- 地震調査委員会（2013）『南海トラフの地震活動の長期評価（第二版）について』平成25年5月24日。
- 地震調査委員会（2014）『相模トラフ沿いの地震活動の長期評価（第二版）』平成26年4月25日。
- 地震調査委員会（2015）『身延断層の長期評価』平成27年4月24日。
- 地震調査委員会（2017a）『波源断層を特性化した津波の予測手法（津波レシピ）』地震調査研究推進本部地震調査委員会，平成29年1月。
- 地震調査委員会（2018）『千島海溝沿いの地震活動の長期評価（第三版）』平成29年12月19日，平成30年3月30日訂正。
- 地震調査委員会（2019）『日本海溝沿いの地震活動の長期評価』平成31年2月26日。
- 地震調査委員会（2020）『南海トラフ沿いで発生する大地震の確率論的津波評価』地震調査研究推進本部地震調査委員会，令和2年（2020年）1月。
- 地震調査研究推進本部（2014）『地震がわかる！』平成26年2月。
- 静岡県（1986）『安政東海地震津波被害調査報告書（特に伊豆半島東海岸について）』静岡県地震対策課。
- 静岡県（2015）『静岡県第4次地震被害想定調査（第一次報告）』平成25年6月，『静岡県第4次地震被害想定（第二次報告）報告書』平成25年11月，『相模トラフ沿いで発生する地震の地震動・津波浸水想定～内閣府「首都直下地震モデル検討会」の震源断層モデルによる検討～報告書』平成27年1月，『駿河トラフ・南海トラフ沿いで発生するレベル1地震の津波の想定報告書』平成27年6月。
- Cisternas, Marco, Brian Atwater, 鎌滝孝信, 澤井祐樹, 宍倉正展（2006）「1960年チリ地震震源域で繰り返し生じた過去の巨大地震」『歴史地震』第21号，pp.87-91。
- JAMSTEC（2007）「伊豆・小笠原海域における地殻生成に関する新しい発見～我が国の大陸棚延伸に関する科学的根拠～」（https://www.jamstec.go.jp/j/about/press_release/20071101/），『プレスリリース（2007年11月1日）』独立行政法人海洋研究開発機構。
- 首藤伸夫（1988）『日本海中部地震津波の発生・増幅機構と破壊力』文部省科学研究費自然災害特別研究研究成果自然災害科学総合研究班No.A-63-1，昭和63年9月。
- 首藤伸夫，今村文彦，越村俊一，佐竹健治，松富英夫（2007）『津波の辞典』朝倉書店，2007年11月。
- 杉野英治，呉長江，是永眞理子，根本信，岩淵洋子，蛭沢勝三（2013）「原子力サイトにおける2011東北地震津波の検証」『日本地震工学会論文集』第13巻，第2号，pp.2-21。
- 杉野英治，岩淵洋子，橋本紀彦，松末和之，蛭沢勝三，亀田弘行，今村文彦（2014）「プレート間地震による津波の特性化波源モデルの提案」『日本地震工学会論文集』第14巻，第5号，pp.1-18。
- 杉山雄一，寒川旭，下川浩一，水野清秀（1988）『地域地質研究報告 5万分の1地質図幅 御前崎地域の地質』地質調査所。
- 鈴木康弘（2010）「東海～四国沖の陸棚外縁活撓曲の再発見」『科学』Vol.80, No.8, pp.779-781。
- 瀬野徹三（2005）「世界のプレート運動」『地学雑誌』第114巻，第3号，pp.350-366。
- 瀬野徹三（2013）「南海トラフ三連動型地震・M9はあり得るか？」『GSJ地質ニュース』Vol. 2, No. 7, pp.212-214。
- 全国治水砂防協会（1984）『砂防設計公式集 マニュアル 数表』1984年10月。
- 高田圭太，佐竹健治，寒川旭，下川浩一，熊谷博之，後藤健一，原口強（2002）「静岡県西部湖西市における遠州灘沿岸低地の津波堆積物調査（速報）」『活断層・古地震研究報告』第2号，pp. 235-243。

参考文献

- 高橋智幸, 首藤伸夫, 今村文彦, 浅井大輔 (1999) 「掃流砂層・浮遊砂層間の交換砂量を考慮した津波移動床モデルの開発」『海岸工学論文集』第46巻, pp.606-610。
- 高橋成実, 野徹雄, 海宝由佳, 小平秀一, 金田義行, 仲田洋文 (2010) 「想定東海地震震源周辺域における沈み込み帯地殻構造」『Blue Earth '10』 (<http://www.jamstec.go.jp/maritec/j/blueearth/2010/program/BE10-03.pdf>) 。
- 武村雅之 (1998) 「日本列島における地殻内地震のスケーリング則 - 地震断層の影響および地震被害との関連 - 」『地震』第2輯, 第51巻, pp.211-228。
- 谷岡勇市郎, 平田賢治, 日野亮太, 金沢敏彦 (2004) 「津波波形から推定した詳細な2003年十勝沖地震のすべり量分布」『地震』第2輯, 第57号, pp.75-81。
- 谷川晃一郎, 穴倉正展, 藤原治, 行谷佑一, 松本弾 (2017) 「高知県四万十町興津における津波堆積物調査 (予報)」『活断層・古津波研究報告』地質調査総合センター, No.17, pp.31-38。
- 玉田崇, 田村保, 高橋智幸, 佐々木元 (2009) 「河川での津波防災検討における津波移動床モデルの適用性に関する研究」『土木学会論文集B2 (海岸工学)』Vol.B2-65, No.1, pp.301-305。
- 中央防災会議 (2001) 『東海地震に関する専門調査会報告』平成13年12月18日, 『東海地震に関する専門調査会報告』東海地震に関する専門調査会第11回, 平成13年12月11日。
- 中央防災会議 (2003) 『東南海、南海地震に関する報告』東南海、南海地震等に関する専門調査会, 平成15年12月16日。
- 中央防災会議 (2011) 『東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会報告』東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会, 平成23年9月28日。
- チリ中部地震津波合同調査グループ (2012) 「2010年チリ中部地震津波に関する日本での現地調査の報告」『津波工学研究報告』第29号, pp.37-54。
- 都司嘉宣, 上田和枝, 荒井賢一 (1994) 「須崎市を襲った歴史津波」『歴史地震』第10号, pp.95-115。
- 都司嘉宣, 岡村眞, 松岡裕美, 村上嘉謙 (1998) 「浜名湖の湖底堆積物中の津波痕跡調査」『歴史地震』第14巻, pp.101-113。
- 都司嘉宣, 岡村眞, 松岡裕美, 後藤智子, 韓世燮 (2002) 「三重県尾鷲市大池, および紀伊長島町諏訪池の湖底堆積層中の歴史・先史津波痕跡について」『月刊地球』第24巻, 第10号, pp.743-747。
- 都司嘉宣, 岡村眞, 松岡裕美, 行谷佑一 (2003) 「高知県須崎市桐間池の湖底堆積層中の津波痕跡」『地球惑星科学関連学会2003年合同大会予稿集』J078-006。
- 都司嘉宣 (2006) 「小笠原諸島の津波史」『歴史地震』第21号, pp.65-79。
- 都司嘉宣, 大年邦雄, 中野晋, 西村裕一, 藤間功司, 今村文彦, 柿沼太郎, 中村有吾, 今井健太郎, 後藤和久, 行谷佑一, 鈴木進吾, 城下英行, 松崎義孝 (2010) 「2010年チリ中部地震による日本での津波被害に関する広域現地調査」『土木学会論文集B2 (海岸工学)』Vol.66, No.1, pp.1346-1350。
- 都司嘉宣 (2012) 「第二章 古文書から読む大地震・大津波の記憶」『千年に一度の大地震・大津波に備える～古文書・伝承に読む先人の教え～』しずおか文化新書10。
- 土隆一 (2001) 「静岡県地質図」『静岡県の地形と地質 - 静岡県地質図20万分の1 (2001年改訂版) 説明書 - 』内外地図。
- 津波痕跡データベース (<http://tsunami-db.irides.tohoku.ac.jp/tsunami/toppage.php>) 東北大学災害科学国際研究所。
- 鉄道総合技術研究所 (2007) 『鉄道構造物等設計標準・同解説 土構造物〔平成25年改編〕』平成19年1月, 丸善出版。
- 東京都防災会議 (2013) 『南海トラフ巨大地震等による東京の被害想定報告書』東京都, 平成25年5月
- 徳島県 (2012) 『参考資料 津波浸水想定について (解説)』徳島県, 2012年10月31日。
- 徳山英一, 本座栄一, 木村政昭, 倉本真一, 芦寿一郎, 岡村行信, 荒戸裕之, 伊藤康人, 徐垣, 日野亮太, 野原壯, 阿部寛信, 坂井眞一, 向山建二郎 (2001) 「日本周辺海域の中新世最末期以降の構造発達史付図 日本周辺海域の第四紀地質構造図」『海洋調査技術』第13巻, 第1号, 海洋調査技術学会。
- 土木学会 (2011) 『津波特定テーマ委員会第3回 報告会資料』2011.9.14。
- 土木学会 (2016) 『原子力発電所の津波評価技術2016』土木学会原子力土木委員会津波評価小委員会, 平成28年9月。

参考文献

- 内閣府（2012）『南海トラフの巨大地震モデル検討会（中間とりまとめ）』南海トラフの巨大地震モデル検討会，平成23年12月27日。『南海トラフの巨大地震による震度分布・津波高について（第一次報告）』南海トラフの巨大地震モデル検討会，平成24年3月31日。『南海トラフの巨大地震モデル検討会（第二次報告）津波断層モデル編－津波断層モデルと津波高・浸水域等について－』南海トラフの巨大地震モデル検討会，平成24年8月29日。
- 内閣府（2012b）『平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震の津波断層モデルについて』第12回南海トラフの巨大地震モデル検討会参考資料1，平成24年3月1日。
- 内閣府（2013）『首都直下のM7クラスの地震及び相模トラフ沿いのM8クラスの地震等の震源断層モデルと震度分布・津波高等に関する報告書』首都直下地震モデル検討会，平成25年12月。
- 内閣府（2015）『南海トラフ沿いの巨大地震による長周期地震動に関する報告』南海トラフの巨大地震モデル検討会・首都直下地震モデル検討会，平成27年12月17日。
- 内閣府（2018）『日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震モデル検討会』第11回議事概要，平成30年2月16日。
- 内閣府（2020）『日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震モデルの検討について（概要報告）』日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震モデル検討会，令和2年4月21日。
- 長崎県（2016）『津波浸水想定について（解説：第2版）』長崎県，平成28年10月31日。
- 長澤良太，宮崎隆，鹿島薫，青木哲哉，大庭正八（1983）「静岡県菊川低地の完新統－完新世高位海水準の一資料－」『日本第四紀学会講演要旨集』，No. 13，pp. 128-129。
- 長宗留男（1987）「九州-琉球列島における稍深発地震とテクトニクス」『地震』第2輯，第40巻，pp.417-423。
- 中村衛（2010）「南西諸島の沈み込みに伴い巨大地震が発生するのか？－海底地殻変動観測からの検証」『科学研究費補助金研究成果報告書』平成22年6月。
- 中村衛（2012a）「南西諸島の地震活動と巨大津波発生可能性」『科学』Vol.82，No.2，pp.201-207。
- 中村衛（2012b）「1771年八重山地震津波」『地震予知連絡会会報』第87巻，12-3，pp.497-500。
- 七山太，加賀新，木下博久，横山芳春，佐竹健治，中田高，杉山雄一，佃栄吉（2002）「紀淡海峡，友ヶ島において発見された南海地震津波の痕跡」『月刊海洋号外』第28号，pp.123-131。
- 行谷佑一・都司嘉宣（2005）「宝永（1707）・安政東海（1854）地震津波の三重県における詳細津波浸水高分布」『歴史地震』第20号，pp.33-56。
- 行谷佑一，前杵英明，宍倉正展，越後智雄，永井亜沙香（2011）「和歌山県串本町橋杭岩周辺の漂礫分布の形成要因」『日本地球惑星科学連合2011年大会予稿集』，SSS035-12。
- 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト（2014）『南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト平成25年度 成果報告書』文部科学省研究開発局，独立行政法人海洋研究開発機構，平成26年5月。
- 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト（2015）『南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト平成26年度 成果報告書』文部科学省研究開発局，独立行政法人海洋研究開発機構，平成27年5月。
- 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト（2016）『南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト平成27年度 成果報告書』文部科学省研究開発局，国立研究開発法人海洋研究開発機構，平成28年5月。
- 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト（2017）『南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト平成28年度 成果報告書』文部科学省研究開発局，国立研究開発法人海洋研究開発機構，平成29年5月。
- 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト（2018）『南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト平成29年度 成果報告書』文部科学省研究開発局，国立研究開発法人海洋研究開発機構，平成30年5月。
- 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト（2019）『南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト平成30年度 成果報告書』文部科学省研究開発局，国立研究開発法人海洋研究開発機構，令和元年5月。

参考文献

- 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト（2020）『南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト令和元年度 成果報告書』文部科学省研究開発局，国立研究開発法人海洋研究開発機構，令和2年5月。
- 西仲秀人，熊谷博之，奥田 隆，鳥居龍晴，高野雅夫，中村俊夫（1996）「浜名湖周辺の津波堆積物から探る過去の東海沖地震」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』，Vol.VII，pp.193-203。
- 西村卓也（2013）「測地データから推定された環太平洋地域のプレート間カップリング」『地震予知連絡会会報』第89巻，12-15，pp.453-456。
- 日本海洋データセンター「潮汐データ」（http://jdoss1.jodc.go.jp/vpage/tide_j.html）。
- 萩原尊禮（1989）『続古地震-実像と虚像』東京大学出版会。
- 萩原尊禮（1995）『古地震探究－海洋地震へのアプローチ』東京大学出版会。
- 長谷川昭（2015）「2011年東北沖地震の震源域で何が起きたか？－東北沖地震の発生機構－」『地震ジャーナル』第60号，pp.2-15。
- 羽鳥徳太郎（1975）「明応7年・慶長9年の房総および東海南海道大津波の波源」『地震研究所彙報』Vol.50，pp.171-185。
- 羽鳥徳太郎（1976）「三陸沖津波の波源位置と伝播の様相」『地震研究所彙報』Vol.51，pp.197-207。
- 羽鳥徳太郎（1977）「静岡県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査」『静岡県地震対策基礎調査報告書－第2次調査・津波第1報－』静岡県地震対策課，pp.14-38。
- 羽鳥徳太郎（1978a）「高知・徳島における慶長・宝永・安政南海道津波の記念碑－1946年南海道津波の挙動との比較－」『地震研究所彙報』Vol.53，pp.423-445。
- 羽鳥徳太郎（1978b）「三重県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査」『地震研究所彙報』Vol.53，pp.1191-1225。
- 羽鳥徳太郎（1980a）「宝永・安政津波の現地調査による波高の検討」『月刊海洋科学』Vol.12，No.7，pp.495-503。
- 羽鳥徳太郎（1980b）「大阪府・和歌山県沿岸における宝永・安政南海道津波の調査」『地震研究所彙報』Vol.55，pp.505-535。
- 羽鳥徳太郎（1982）「高知県南西部の宝永・安政南海道津波の調査－久礼・入野・土佐清水の津波の高さ」『地震研究所彙報』Vol.56，pp.547-570。
- 羽鳥徳太郎（1984）「関東・伊豆東部沿岸における宝永・安政東海津波の挙動」『地震研究所彙報』Vol.59，pp.501-518。
- 羽鳥徳太郎（1985a）「東海地方の歴史津波」『月刊地球』Vol.7，No.4，pp.182-191。
- 羽鳥徳太郎（1985b）「小笠原父島における津波の挙動」『地震研究所彙報』Vol.60，pp.97-104。
- 羽鳥徳太郎（1986）「九州東部沿岸における歴史津波の現地調査－1662年寛文・1769年明和日向灘および1707年宝永・1854年安政南海道津波－」『地震研究所彙報』Vol.60，pp.439-459。
- 羽鳥徳太郎（1988）「瀬戸内海・豊後水道沿岸における宝永（1707）・安政（1854）・昭和（1946）南海道津波の挙動」『歴史地震』第4号，pp.37-46。
- 羽鳥徳太郎（1991）「鎌倉における明応（1498）・元禄（1703）・大正（1923）津波の浸水域」『歴史地震』第7号，pp.1-10。
- 羽鳥徳太郎（2005）「伊勢湾岸市街地における安政東海津波（1854）の浸水状況」『歴史地震』第20号，pp.57-64。
- 羽鳥徳太郎（2006）「東京湾・浦賀水道沿岸の元禄関東（1703），安政東海（1854）津波とその他の津波の遡上状況」『歴史地震』第21号，pp.37-45。
- 原口強，鳥居和樹，山崎秀雄，関口秀雄（2008）「和歌山県田辺湾で発見された昭和南海地震津波堆積物」『北淡活断層シンポジウム2008講演要旨集』pp.41-42。
- 兵庫県（2014）『南海トラフ巨大地震の津波浸水想定について（解説）』兵庫県，平成26年2月19日。
- 平川一臣（2013）『津波堆積物が示す南海トラフの津波履歴，津波挙動（海食急崖，斜面からの証拠）伊良湖水道・菅島，志摩半島，紀伊長島，熊野，潮岬・串本』南海トラフの巨大地震モデル検討会（第35回）及び首都直下地震モデル検討会（第17回）合同会議 参考資料2 平川委員提供資料，平成25年3月19日。
- 廣内大助，佐藤善輝，松多信尚，堀和明，清水龍来，遠藤悠，西川由香，安江健一，顔一勤（2014）「静岡県太田川低地の堤間湿地における完新世後期の堆積環境変化」『愛知工業大学地域防災研究センター年次報告書』Vol.10，pp.43-46。
- 広島県（2013）『津波浸水想定について（解説）』広島県，平成25年5月2日。
- 福岡県（2016）『津波浸水想定について（解説）』福岡県，2016年2月18日。

参考文献

- 藤田尚毅, 稲垣和男, 藤井直樹, 高尾誠, 金戸俊道 (2010) 「津波による海底地形変化評価モデルの現地適用性に関する研究」『海洋開発論文集』Vol.26, pp.213-218。
- 藤野滋弘 (2013) 「インド洋における過去の巨大地震・津波」『地震予知連絡会会報』第89巻, 12-10, pp.429-431。
- 藤原治, 小野映介, 佐竹健治, 澤井祐紀, 海津正倫, 矢田俊文, 阿部恒平, 池田哲哉, 岡村行信, 佐藤善輝, Than Tin Aung, 内田淳一 (2007) 「静岡県掛川市南部の横須賀湊跡に見られる1707年宝永地震の痕跡」『活断層・古地震研究報告』No.7, pp. 157-171。
- 藤原治 (2008) 「静岡県中部沿岸での1707年宝永地震による地殻変動の調査」『活断層研究センターニュース』第80号, pp.1-5。
- 藤原治, 小野映介, 矢田俊文, 海津正倫, 鎌滝孝信, 内田淳一 (2008) 「完新世後半における太田川低地南西部の環境変化と津波堆積物」『活断層・古地震研究報告』No.8, pp.187-202。
- 藤原治, 小野映介, 矢田俊文, 海津正倫, 岡村行信, 佐竹健治, 佐藤善輝, 澤井祐紀, Than Tin Aung (2009) 「歴史と地層記録から確認された1707年宝永地震による遠州灘沿岸の隆起」『月刊地球』Vol.31, No.4, pp.203-210。
- 藤原治, 町田洋, 塩地潤一 (2010) 「大分県横尾貝塚に見られるアカホヤ噴火に伴う津波堆積物」『第四紀研究』Vol.49, No.1, pp. 23-33。
- 藤原治, 青島晃, 佐藤善輝, 北村晃寿, 小野映介, 谷川晃一郎 (2012) 「静岡県磐田市の太田川低地で見られる歴史津波堆積物」『日本第四紀学会講演要旨集』第42巻, pp.46-47。
- 藤原治・佐藤善輝 (2012) 「静岡県浜松市西部高塚池跡における津波堆積物調査(予察)」『日本地震学会講演予稿集2012年度秋季大会』P2-40。
- 藤原治 (2013) 「地形・地質記録から見た南海トラフの巨大地震・津波(東海地域の例)」『GSJ地質ニュース』Vol.2, No.7, pp.197-200。
- 藤原治, 佐藤善輝, 小野映介, 海津正倫 (2013) 「陸上掘削試料による津波堆積物の解析―浜名湖東岸六間川低地にみられる3400年前の津波堆積物を例にして―」『地学雑誌』第122巻, 第2号, pp. 308-322。
- 藤原治・澤井祐紀 (2014) 「静岡県沿岸の古地震・津波堆積物調査」『巨大地震による複合的地質災害に関する調査・研究報告書』産業技術総合研究所地質調査総合センター, Vol.66, pp.39-48。
- 藤原治, 北村晃寿, 佐藤善輝, 青島晃, 小野映介, 小林小夏, 小倉一輝, 谷川晃一郎 (2015) 「静岡県西部の太田川低地で見られる弥生時代中・後期の相対的海水準上昇」『第四紀研究』第54巻, 第1号, pp.11-20。
- 松岡裕美・岡村眞 (2012) 「津波堆積物から見た南海トラフ沿いの巨大地震履歴」『地震予知連絡会会報』第87巻, 12-2, pp.495-496。
- 松多信尚, 佐藤善輝, 坂本絵梨, 廣内大助, 堀和明, 川上賢太, 米原和哉 (2016) 「海岸平野の発達過程に基づく南海トラフ巨大地震時の地殻変動のパターンの解明」『第15回学術研究助成(2015年度)』国土地理協会。
- 松本弾 (2017) 「三重県津市の海岸低地における津波堆積物掘削調査」『活断層・古地震研究報告』地質調査総合センター, 第17号, pp.15-30。
- 三重県 (2015) 『津波浸水想定について(解説)』三重県, 平成27年3月31日。
- 三上貴仁, 柴山知也, 武若聡, Miguel ESTEBAN, 大平幸一郎, Rafael ARANGUIZ, Mauricio VILLAGRAN, Alvaro AYALA (2011) 「2010年チリ沖地震津波災害の現地調査」『土木学会論文集B3(海洋開発)』Vol.67, No.2, pp.I_529-I_534。
- 宮崎県 (2013) 『宮崎県地震・津波及び被害の想定について』宮崎県, 平成25年10月。
- 村上仁士, 島田富美男, 伊藤禎彦, 山本尚明, 石塚淳一 (1996) 「四国における歴史津波(1605慶長・1707宝永・1854安政)の津波高の再検討」『自然災害科学』Vol.15-1, pp.39-52。
- 森下祐・高橋智幸 (2014) 「2011年東北地方太平洋沖地震津波来襲時の気仙沼湾を対象とした津波移動床モデルの再現性向上」『土木学会論文集B2(海岸工学)』Vol.70, No.2, pp.I_491-I_495。
- 文部科学省 (2010) 「津波堆積物調査にもとづく地震発生履歴に関する研究」『宮城県沖地震における重点的調査観測総括成果報告書』, pp.152-185。

参考文献

- 文部科学省・海洋研究開発機構（2013）「東海・東南海・南海地震の連動性評価のための調査観測・研究」『東海・東南海・南海地震の連動性評価研究プロジェクト』（平成20～24年度）成果報告書。
- 文部科学省・防災科学技術研究所（2013）「3.1 長周期地震動を予測する手法の高度化の検討等」『長周期地震動予測地図作成等支援事業 平成24年度 成果報告書』平成25年3月，pp.5-32。
- 矢沼隆，都司嘉宣，今井健太郎，行谷佑一，今村文彦（2011）「静岡県下における1707年宝永地震津波の痕跡調査」『津波工学研究報告』第28号，pp.93-103。
- 山口県（2013）『津波浸水想定（瀬戸内海沿岸）について(解説)』山口県，平成25年12月24日。
- 湯浅真人（1991）「伊豆・小笠原弧の地学現象に見られる南北対立はなぜ生じたか」『地学雑誌』第100巻，第4号，pp.458-463。
- 横瀬久芳，佐藤創，藤本悠太，Maria Hannah T. MIRABUENO，小林哲夫，秋元和實，吉村浩，森井康宏，山脇信博，石井輝秋，本座栄一（2010）「トカラ列島における中期更新世の酸性海底火山活動」『地学雑誌』第119巻，第1号，pp.46-68。
- 蓬田清（2013）「M10 地震の発生条件：2011 年東北沖地震の新しい知見から」『北海道大学地球物理学研究報告』No.76，pp.111-128。
- 東海・東南海・南海地震の連動性評価研究プロジェクト（2009）「サブプロジェクト1の研究成果の活用および地域研究会の開催」『連動性を考慮した地震動・津波予測及び地震・津波被害予測研究 平成20年度報告書』。
- 和歌山県（2013）『「南海トラフの巨大地震」及び「東海・東南海・南海3連動地震」による津波浸水想定について』和歌山県，平成25年。
- 渡辺偉夫（1998）『日本被害津波総覧（第2版）』東京大学出版会。

参考文献

- Abe, Tomoya, Kazuhisa Goto, Daisuke Sugawara (2012), "Relationship between the maximum extent of tsunami sand and the inundation limit of the 2011 Tohoku-oki tsunami on the Sendai Plain, Japan", *Sedimentary Geology*, Vol.282, pp.142-150.
- Adriano, Bruno, Erick Mas, Shunichi Koshimura, Yushiro Fujii, Hideaki Yanagisawa, Miguel Estrada(2016), "Revisiting the 2001 Peruvian Earthquake and Tsunami Impact Along Camana Beach and the Coastline Using Numerical Modeling and Satellite Imaging", *Tsunamis and Earthquakes in Coastal Environments*, Coastal Research Library 14, Chapter1, pp.1-16.
- Araki, Eiichiro, Demian M. Saffer, Achim J. Kopf, Laura M. Wallace, Toshinori Kimura, Yuya Machida, Satoshi Ide, Earl Davis(2017), "Recurring and triggered slow-slip events near the trench at the Nankai Trough subduction megathrust", *Science*, Vol.356, pp.1157-1160.
- Araoka, Daisuke, Yusuke Yokoyama, Atsushi Suzuki, Kazuhisa Goto, Kunimasa Miyagi, Keitaro Miyazawa, Hiroyuki Matsuzaki, and Hodaka Kawahata(2013), "Tsunami recurrence revealed by Porites coral boulders in the southern Ryukyu Islands, Japan", *Geology*, Vol.41, pp.919-922.
- Baba, Toshitaka, Yuichiro Tanioka, Phil R. Cummins, Koichi Uhira(2002), "The slip distribution of the 1946 Nankai earthquake estimated from tsunami inversion using a new plate model", *Physics of the Earth and Planetary Interiors*, Vol.132, pp.59-73.
- Baba, Toshitaka, Phil R. Cummins, Takane Hori, Yoshiyuki Kaneda(2006), "High precision slip distribution of the 1944 Tonankai earthquake inferred from tsunami waveforms: Possible slip on a splay fault", *Tectonophysics*, Vol.426, Issues1–2, pp.119-134.
- Baba, Toshitaka, Phil R. Cummins, Hong Kie Thio, Hiroaki Tsushima(2009), "Validation and Joint Inversion of Teleseismic Waveforms for Earthquake Source Models Using Deep Ocean Bottom Pressure Records: A Case Study of the 2006 Kuril Megathrust Earthquake", *Pure and Applied Geophysics*, Vol.166, pp.55-76.
- Bilek, S. L. and T. Lay(2002), "Tsunami earthquakes possibly widespread manifestations of frictional conditional stability", *Geophysical Research Letters*, Vol.29, No.14, pp.18-1-18-4.
- Bilek, Susan L.(2010), "The role of subduction erosion on seismicity", *Geology*, Vol.38, No.5, pp.479–480.
- Cerjan, Charles, Dan Kosloff, Ronnie Kosloff, Moshe Reshef (1985), "A nonreflecting boundary condition for discrete acoustic and elastic wave equations", *Geophysics*, Vol.50, No.4, pp.705-708.
- Chester, Frederick M., Christie Rowe, Kohtaro Ujiie, James Kirkpatrick, Christine Regalla, Francesca Remitti, J. Casey Moore, Virginia Toy, Monica Wolfson-Schwehr, Santanu Bose, Jun Kameda, James J. Mori, Emily E. Brodsky, Nobuhisa Eguchi, Sean Toczko(2013), "Structure and Composition of the Plate-Boundary Slip Zone for the 2011 Tohoku-Oki Earthquake", *Science*, Vol.342, pp.1208-1211.
- Clift, Peter and Paola Vannucchi(2004), "Controls on tectonic accretion versus erosion in subduction zones: Implications for the origin and recycling of the continental crust", *Reviews of Geophysics*, Vol.42, Issue2, pp.1-31.
- Contreras-Reyes, Eduardo, Daniel Carrizo(2011), "Control of high oceanic features and subduction channel on earthquake ruptures along the Chile–Peru subduction zone", *Physics of the Earth and Planetary Interiors*, Vol.186, pp.49-58.

参考文献

- DeMets, Charles, Richard G. Gordon, Donald F. Argus, Seth Stein(1994), "Effect of recent revisions to the geomagnetic reversal time scale on estimates of current plate motions", *Geophysical Research Letters*, Vol.2, Issue 20, pp.2191-2194.
- Diehl, T., F. Waldhauser, J. R. Cochran, K. A. Kamesh Raju, L. Seeber, D. Schaff, E. R. Engdahl(2013), "Back-arc extension in the Andaman Sea: Tectonic and magmatic processes imaged by high-precision teleseismic double-difference earthquake relocation", *Journal of Geophysical Research: Solid Earth*, Vol.118, Issue5, pp.2206-2224.
- Fuentes, Mauricio, Sebastian Riquelme, Gavin Hayes, Miguel Medina, Diego Melgar, Gbriel Vargas, Jose Gonzalez, Angelo Villalobos(2016), "A Study of the 2015 Mw 8.3 Illapel Earthquake and Tsunami: Numerical and Analytical Approaches", *Pure and Applied Geophysics*, Vol.173, pp.1847-1858.
- Fujii, Yushiro and Kenji Satake(2007), "Tsunami Source of the 2004 Sumatra–Andaman Earthquake Inferred from Tide Gauge and Satellite Data", *Bulletin of the Seismological Society of America*, Vol. 97, No. 1A, pp. S192–S207.
- Fujii, Yushiro and Kenji Satake(2008a), "Tsunami Sources of the November 2006 and January 2007 Great Kuril Earthquakes", *Bulletin of the Seismological Society of America*, Vol.98, No.3, pp.1559-1571.
- Fujii, Yushiro and Kenji Satake(2008b), "Tsunami waveform inversion of the 2007 Bengkulu, southern Sumatra, earthquake", *Earth Planets Space*, Vol.60, pp.993-998.
- Fujii, Yushiro and Kenji Satake(2012), "Slip Distribution and Seismic Moment of the 2010 and 1960 Chilean Earthquakes Inferred from Tsunami Waveforms and Coastal Geodetic Data", *Pure and Applied Geophysics*, published online.
- Fujiwara, Osamu, Kazuomi Hirakawa, Toshiaki Irizuki, Shiro Hasegawa, Yoshitaka Hase, Jun-ichi Uchida, Kohei Abe (2010), "Millennium-scale recurrent uplift inferred from beach deposits bordering the eastern Nankai Trough, Omaezaki area, central Japan", *Island Arc*, Vol.19, pp.374-388.
- Fujiwara, Osamu, Eisuke Ono, Toshifumi Yata, Masatomo Umitsu, Yoshiki Sato, Vanessa M.A. Heyvaert(2013), "Assessing the impact of 1498 Meio earthquake and tsunami along the Enshu-nada coast, central Japan using coastal geology", *Quaternary International*, Vol.308-309, pp.4-12.
- Fujiwara, Osamu, Akira Aoshima, Toshiaki Irizuki, Eisuke Ono, Stephen P. Obrochta, Yoshikazu Sampei, Yoshiki Sato, Ayumi Takahashi(2020), "Tsunami deposits refine great earthquake rupture extent and recurrence over the past 1300 years along the Nankai and Tokai fault segments of the Nankai Trough, Japan", *Quaternary Science Reviews*, Vol.227, Article105999, pp.1-19.
- Fulton, P. M., E. E. Brodsky, Y. Kano, J. Mori, F. Chester, T. Ishikawa, R. N. Harris, W. Lin, N. Eguchi, S. Toczko(2013), "Low Coseismic Friction on the Tohoku-Oki Fault Determined from Temperature Measurements", *Science*, Vol.342, pp.1214-1217.
- Furumura, Takashi, Kentaro Imai, and Takuto Maeda(2011), " A revised tsunami source model for the 1707 Hiei earthquake and simulation of tsunami inundation of Ryujin Lake, Kyushu, Japan", *Journal of Geophysical Research*, Vol. 116, B02308, pp.1-17.

参考文献

- Garrett, Ed, Osamu Fujiwara, Philip Garrett, Vanessa M.A. Heyvaert, Masanobu Shishikura, Yusuke Yokoyama, Aurélie Hubert-Ferrari, Helmut Brückner, Atsunori Nakamura, Marc De Batist(2016), " A systematic review of geological evidence for Holocene earthquakes and tsunamis along the Nankai-Suruga Trough, Japan", *Earth Science Reviews*, vol.159, pp.337-357.
- Geller, Robert J.(1976), " Scaling relations for earthquake source parameters and magnitudes", *Bulletin of the Seismological Society of America*, Vol.66, pp.1501-1523.
- Goda, Katsuichiro, Paul Martin Mai, Tomohiro Yasuda, Nobuhito Mori(2014), "Sensitivity of tsunami wave profiles and inundation simulations to earthquake slip and fault geometry for the 2011 Tohoku earthquake", *Earth, Planets and Space*, Vol.66, No.105, pp.1-20.
- Goldfinger, Chris, C. Hans Nelson, Ann E. Morey, Joel E. Johnson, Jason R. Patton, Eugene Karabanov, Julia Gutiérrez-Pastor, Andrew T. Eriksson, Eulàlia Gràcia, Gita Dunhill, Randolph J. Enkin, Audrey Dallimore, Tracy Vallier(2012), "Turbidite Event History—Methods and Implications for Holocene Paleoseismicity of the Cascadia Subduction Zone", *Professional Paper 1661-F*, U.S. Department of the Interior and U.S. Geological Survey.
- Goto, Kazuhisa, Toshio Kawana, Fumihiko Imamura(2010), "Historical and geological evidence of boulders deposited by tsunamis, southern Ryukyu Islands, Japan", *Earth-Science Reviews*, Vol.102, pp.77-99.
- Goto, Kazuhisa, Kunimasa Miyagi, Fumihiko Imamura(2013), "Localized tsunamigenic earthquakes inferred from preferential distribution of coastal boulders on the Ryukyu Islands, Japan", *Geology*, Vol.41, pp.1139-1142.
- Goto, Kazuhisa, Kohei Hashimoto, Daisuke Sugawara, Hideaki Yanagisawa, Tomoya Abe (2014), "Spatial thickness variability of the 2011 Tohoku-oki tsunami deposits along the coastline of Sendai Bay", *Marine Geology*, Vol.358, pp.38-48.
- Gusman, A. R., Y. Tanioka, T. Kobayashi, H. Latief, W. Pandoe(2010), "Slip distribution of the 2007 Bengkulu earthquake inferred from tsunami waveforms and InSAR data", *Journal of Geophysical Research*, Vol.115, B12316, pp.1-14.
- Gusman, Aditya Riadi, Satoko Murotani, Kenji Satake, Mohammad Heidarzadeh, Endra Gunawan, Shingo Watada, Bernd Schurr(2015), "Fault slip distribution of the 2014 Iquique, Chile, earthquake estimated from ocean-wide tsunami waveforms and GPS data", *Geophysical Research Letters*, Vol.42, Issue4, pp.1053-1060.
- Hamada, Yohei, Arito Sakaguchi, Wataru Tanikawa, Asuka Yamaguchi, Jun Kameda, Gaku Kimura(2015), "Estimation of slip rate and fault displacement during shallow earthquake rupture in the Nankai subduction zone", *Earth, Planets and Space*, Vol.67, Article39, pp.1-12.
- Hammack, Joseph L.(1973), "A note on tsunamis: their generation and propagation in an ocean of uniform depth", *Journal of Fluid Mechanics*, Vol.60, Issue.4, pp.769-799.
- Hashimoto, Chihiro, Eiichi Fukuyama, Toshiko Terakawa, Takeshi Sagiya, Kengo Nakajima, Toshinori Sato and Mitsuhiro Matsu'ura(2010)," Development of a Predictive Simulation System for Crustal Activities in and around Japan - VIII", *Annual Report of the Earth Simulator Center* April 2010 - March 2011, Chapter1, pp.89-93.

参考文献

- Hebert, Helene, Dominique Reymond, Yann Krien, Julien Vergoz, Francois Schindele, Jean Roger, Anne Loevenbruck(2009), "The 15 August 2007 Peru Earthquake and Tsunami: Influence of the Source Characteristics on the Tsunami Heights", Pure and Applied Geophysics, Vol.166, pp.211-232.
- Heuret, Arnaud, Serge Lallemand, Francesca Funiciello, Claudia Piromallo, Claudio Faccenna(2011), "Physical characteristics of subduction interface type seismogenic zones revisited", Geochemistry Geophysics Geosystems, Vol.12, No.1, pp.1-26.
- Hirata, Kenji, Kenji Satake, Yuichiro Tanioka, Tsurane Kuragano, Yohei Hasegawa, Yutaka Hayashi, Nobuo Hamada(2006), "The 2004 Indian Ocean tsunami: Tsunami source model from satellite altimetry", Earth Planets Space, Vol.58, pp.195-201.
- Hirose, Fuyuki, Junichi Nakajima, Akira Hasegawa(2008), "Three-dimensional seismic velocity structure and configuration of the Philippine Sea slab in southwestern Japan estimated by double-difference tomography", Journal of Geophysical Research Solid Earth, Vol.113, Issue B09315, pp.1-26.
- Ichinose, Gene, Paul Somerville, Hong Kie Thio, Robert Graves, Dan O'Connell(2007), "Rupture process of the 1964 Prince William Sound, Alaska, earthquake from the combined inversion of seismic, tsunami, and geodetic data", Journal of Geophysical Research, Vol.112, No.B07306, pp.1-21.
- Ide, S., K. Shiomi, K. Mochizuki, T. Toneyawa, and G. Kimura(2010), "Split Philippine Sea plate beneath Japan", Geophysical Research Letters, Vol.37, L21304.
- Ishihara, Kenji and Mitsutoshi Yoshimine(1992), "EVALUATION OF SETTLEMENTS IN SAND DEPOSITS FOLLOWING LIQUEFACTION DURING EARTHQUAKES", SOILS AND FOUNDATIONS, Japanese Society of Soil Mechanics and Foundation Engineering, Vol.32, No.1, pp.173-188.
- Ito, Yoshihiro and Kazushige Obara(2006b), "Very low frequency earthquakes within accretionary prisms are very low stress-drop earthquakes", Geophysical Research Letters, Vol.33, Issue9, No.L09302, pp.1-4.
- Jimenez, Cesar, Nabilt Moggiano, Erick Mas, Bruno Adriano, Yushiro Fujii, Shunichi Koshimura(2014), "Tsunami Waveform Inversion of the 2007 Peru (Mw8.1) Earthquake", Journal of Disaster Research, Vol.9, No.6, pp.954-960.
- Johnson, Jean M. and Kenji Satake(1996), "The 1964 Prince William Sound earthquake: Joint inversion of tsunami and geodetic data", Journal of Geophysical Research, Vol.101, No.B1, pp.523-532.
- Johnson, Jean M. and Kenji Satake(1999), "Asperity Distribution of the 1952 Great Kamchatka Earthquake and its Relation to Future Earthquake Potential in Kamchatka", Pure and Applied Geophysics, Vol.154, pp.541-553.
- Kajiura, Kinjiro(1963), "The Leading Wave of a Tsunami", 地震研究所彙報, Vol.41, pp.535-571.
- Kajiura, Kinjiro(1970), "Tsunami Source, Energy and the Directivity of Wave Radiation", Bulletin of the Earthquake Research Institute, Vol.48, pp.835-869.
- Kanamori, Hiroo and Don L. Anderson(1975), "THEORETICAL BASIS OF SOME EMPIRICAL RELATIONS IN SEISMOLOGY", Bulletin of the Seismological Society of America. Vol. 65, No.5, pp.1073-1095.

参考文献

- Kato, Tetsuro and Masataka Ando(1997), "Source mechanisms of the 1944 Tonankai and 1946 Nankaido earthquakes:Spatial heterogeneity of rise times", Geophysical Research Letters, Vol.24, No.16, pp.2055–2058.
- Kato, Teruyuki and Atsuki Kubo(2006), "Present-Day Tectonics in Four Active Island Arcs Based on Gps Observations and Forearc Stress Fields", Back-Arc Spreading Systems: Geological, Biological, Chemical, and Physical Interactions, AGU Geophysical Monograph Series Vol.166, pp.31-42.
- Kikuchi, Masayuki and Hiroo Kanamori(1995), "Source Characteristics of the 1992 Nicaragua Tsunami Earthquake Inferred from Teleseismic Body Waves", Pure and Applied Geophysics, Vol.144, Issue3-4, pp.441-453.
- Kitamura, Akihisa(2016), "Examination of the largest-possible tsunamis (Level 2) generated along the Nankai and Suruga troughs during the past 4000 years based on studies of tsunami deposits from the 2011 Tohoku-oki tsunami",Earth and Planetary Science, Vol.3, No.12, pp.1-20.
- Kitamura, Akihisa, Kazuyoshi Yamada, Daisuke Sugawara, Yusuke Yokoyama, Yosuke Miyairi, Hamatome team(2020),"Tsunamis and submarine landslides in Suruga Bay, central Japan, caused by Nankai-Suruga Trough megathrust earthquakes during the last 5000 years", Quaternary Science Reviews, Vol.245, Article.106527, pp.1-23.
- Komatsubara, Junko, Osamu Fujiwara, Keita Takada, Yuki Sawai, Than Tin Aung and Takanobu Kamataki(2008), "Historical tsunamis and storms recorded in a coastal lowland, Shizuoka Prefecture, along the Pacific Coast of Japan", Sedimentology, Vol.55, pp.1703-1716.
- Kozdon, Jeremy E. and Eric M. Dunham(2013),"Rupture to the Trench: Dynamic Rupture Simulations of the 11 March 2011 Tohoku Earthquake", Bulletin of the Seismological Society of America, Vol. 103, No. 2B, pp. 1275–1289.
- Laske, Gabi, Guy Masters, Zhitu Ma, Mike Pasyanos (2013), "Update on CRUST1.0 - A 1-degree Global Model of Earth's Crust", Geophysical Research Abstracts, Vol.15, EGU2013-2658p.
- Lawson, Charles L. and Richard J. Hanson(1974), "Solving least squares problems", Prentice-Hall series in automatic computation Spectrum Book, 340p.
- Lay, Thorne and Terry Wallace(1995), "Modern Global Seismology", Elsevier May 1995.
- Lay, Thorne and Susan Bilek(2007), "Anomalous Earthquake Ruptures at Shallow Depths on Subduction Zone Megathrusts", The Seismogenic Zone of Subduction Thrust Faults, Columbia University Press , pp.476-511.
- Lay, T., C. J. Ammon, H. Kanamori, Y. Yamazaki, K. F. Cheung, A. R. Hutko(2011), "The 25 October 2010 Mentawai tsunami earthquake (Mw 7.8) and the tsunami hazard presented by shallow megathrust ruptures", Geophysical Research Letters, Vol.38, L06302, pp.1-5.
- Lay, Thorne, Hiroo Kanamori, Charles J. Ammon, Keith D. Koper, Alexander R. Hutko, Lingling Ye, Han Yue, Teresa M. Rushing(2012), "Depth-varying rupture properties of subduction zone megathrust faults", Journal of Geophysical Research, Vol.117, B04311, pp.1-21.
- Liu, Xin and Dapeng Zhao(2018), "Upper and lower plate controls on the great 2011 Tohoku-oki earthquake", Science Advances, Vol.4, No.6, pp.1-7.

参考文献

- Lorito, Stefano, Fabrizio Romano, Alessio Piatanesi, Enzo Boschi(2008), "Source process of the September 12, 2007, Mw 8.4 southern Sumatra earthquake from tsunami tide gauge record inversion", *Geophysical Research Letters*, Vol.35, L02310, pp.1-6.
- Loveless, John P. and Brendan J. Meade(2010)," Geodetic imaging of plate motions, slip rates, and partitioning of deformation in Japan", *Journal of Geophysical Research*, Vol.115, No.B02410, pp.1-35.
- Mai, P. Martin and Gregory C. Beroza(2002), "A spatial random field model to characterize complexity in earthquake slip", *Journal of Geophysical Research*, Vol.107, Issue B11, 2308, pp.ESE10-1-ESE10-21.
- Mai, P. Martin, P. Spudich, J. Boatwright(2005), "Hypocenter Locations in Finite-Source Rupture Models", *Bulletin of the Seismological Society of America*, Vol. 95, No. 3, pp. 965-980.
- Mantovani, E., M. Viti, D. Babbucci, C. Tamburelli, D. Albarello(2001), "Back arc extension: which driving mechanism?", *Journal of the Virtual Explorer*, Vol.3, pp.17-45.
- Mansinha, L. and D. E. Smylie (1971), "The displacement fields of inclined faults", *Bulletin of the Seismological Society of America*", Vol.61, No.5, pp.1433-1440.
- Matsubara, Makoto and Kazushige Obara(2011), "The 2011 off the Pacific coast of Tohoku Earthquake related to a strong velocity gradient with the Pacific plate", *Earth Planets Space*, Vol.63, pp.663-667.
- Matsubara, Makoto, Katsuhiko Shiomi, Hisatoshi Baba, Hiroshi Sato, Takahito Nishimiya(2021), "Improved geometry of the subducting Philippine Sea plate beneath the Suruga Trough", *Global and Planetary Change*, Vol. 204, 103562, pp.1-11.
- Melgar, Diego, Wenyan Fan, Sebastian Riquelme, Jianghui Geng, Cunren Liang, Mauricio Fuentes, Gabriel Vargas, Richard M. Allen, Peter M. Shearer, Eric J. Fielding(2016), "Slip segmentation and slow rupture to the trench during the 2015, Mw8.3 Illapel, Chile earthquake", *Geophysical Research Letters*, Vol.43, Issue3, pp.961-966.
- Melnick, Daniel, Bodo Bookhagen, Manfred R. Strecker, Helmut P. Echtler(2009),"Segmentation of megathrust rupture zones from fore-arc deformation patterns over hundreds to millions of years, Arauco peninsula, Chile", *Journal of Geophysical Research*, Vol.114, B01407, pp.1-23.
- Miura, Seiichi, Narumi Takahashi, Ayako Nakanishi, Tetsuro Tsuru, Shuichi Kodaira, Yoshiyuki Kaneda(2005), "Structural characteristics off Miyagi forearc region, the Japan Trench seismogenic zone, deduced from a wide-angle reflection and refraction study", *Tectonophysics*, Vol.407, pp.165-188.
- Murotani, Satoko, Kenji Satake and Yushiro Fujii(2013)," Scaling relations of seismic moment, rupture area, average slip, and asperity size for M~9 subduction-zone earthquakes", *Geophysical Research Letters* , Vol.40, pp.5070-5074.
- Nakamura, Mamoru(2011), "Interplate coupling in the Ryukyu Trench: possibility of large interplate earthquakes and mega-tsunamis", *Proceedings of the 10th Taiwan-Japan International Workshop on Hydrological and Geochemical Research for Earthquake Prediction. GSJ Open file Report, no. 574, Geol. Surv. Japan, AIST.*, pp.19-28.

参考文献

- Nakamura, Yugo, Yuichi Nishimura, Purna Sulastya Putra(2012), "Local variation of inundation, sedimentary characteristics, and mineral assemblages of the 2011 Tohoku-oki tsunami on the Misawa coast, Aomori, Japan", *Sedimentary Geology*, Vol.282, pp.216–227.
- Nakamura, Masaki, Yasuhiro Yoshida, Dapeng Zhao, Hiroyuki Takayama, Koichiro Obana, Hiroshi Katao, Junzo Kasahara, Toshihiko Kanazawa, Shuichi Kodaira, Toshinori Sato, Hajime Shiobara, Masanao Shinohara, Hideki Shimamura, Narumi Takahashi, Ayako Nakanishi, Ryota Hino, Yoshio Murai, Kimihiro Mochizuki(2008), "Three-dimensional P- and S-wave velocity structures beneath Japan", *Physics of the Earth and Planetary Interiors*, Vol.168, pp.49-70.
- Nakanishi, Ayako, Narumi Takahashi, Jin-Oh Park, Seiichi Miura, Shuichi Kodaira, Yoshiyuki Kaneda, Naoshi Hirata, Takaya Iwasaki, and Masao Nakamura(2002), "Crustal structure across the coseismic rupture zone of the 1944 Tonankai earthquake, the central Nankai Trough seismogenic zone", *Journal of Geophysical Research*, Vol. 107, B1, 2007.
- Nishimura, Sou, Manabu Hashimoto, Masataka Ando (2004), "A rigid block rotation model for the GPS derived velocity field along the Ryukyu arc", *Physics of the Earth and Planetary Interiors*, Vol.142, Issues3-4, pp.185-203.
- Niwa, Masakazu, Takanobu Kamataki, Hideki Kurosawa, Yoko Saito-Kokubu, Masafumi Ikuta(2019), "Seismic subsidence near the source region of the 1662 Kanbun Hyuganada Sea earthquake: Geochemical, stratigraphical, chronological, and paleontological evidences in Miyazaki Plain, southwest Japan", *Island Arc*, Vol.29, Issue1, e12341, pp.1-26.
- NOAA(2008), "2008 Age Grid Whole-World Images", *Marine Geology and Geophysics Images of Crustal Age of the Ocean Floor*, NOAA(<https://www.ngdc.noaa.gov/mgg/image/crustalimages.html>).
- NOAA(2010), "TSUNAMI BULLETIN NUMBER 015", PACIFIC TSUNAMI WARNING CENTER, ISSUED AT 2082z 27 FEB 2010", National Oceanic and Atmospheric Administration, (<http://www.prh.noaa.gov/ptwc/messages/pacific/2010/pacific.2010.02.27.202736.txt>, <http://oldwcatwc.arh.noaa.gov/2010/02/27/725245/15/message725245-15.htm>).
- NOAA Map, "NOAA Global Marine Data Map"(<https://gis.ncdc.noaa.gov/maps/ncei/marine>).
- NOAA Natural Hazards Website(<https://www.ngdc.noaa.gov/hazard/tsu.shtml>).
- Obana, Koichiro, Shuichi Kodaira, Masanao Shinohara, Ryota Hino, Kenji Uehira, Hajime Shiobara, Kazuo Nakahigashi, Tomoaki Yamada, Hiroko Sugioka, Aki Ito, Yasuyuki Nakamura, Seiichi Miura, Tetsuo No, Narumi Takahashi(2013), "Aftershocks near the updip end of the 2011 Tohoku-Oki earthquake", *Earth and Planetary Science Letters*, Vol.382, pp.111–116.
- Okino, K., S. Kasuga, Y. Ohara(1998), "A New Scenario of the Parece Vela Basin Genesis", *Marine Geophysical Researches*, Vol.20, pp.21-40.
- Park, Jin-Oh, Gregory F. Moore, Tetsuro Tsuru, Shuichi Kodaira, Yoshiyuki Kaneda(2003), "A subducted oceanic ridge influencing the Nankai megathrust earthquake rupture", *Earth and Planetary Science Letters*, Vol.217, pp.77-84.
- Pinegina, Tatiana K., Joanne Bourgeois, Lilia I. Bazanova, Ivan V. Melekestsev and Olga A. Braitseva(2003), "A millennial-scale record of Holocene tsunamis on the Kronotskiy Bay coast, Kamchatka, Russia", *Quaternary Research*, Vol.59, pp.36-47.
- Rajendran, Kusala(2013), "On the recurrence of great subduction zone earthquakes", *Current Science*, Vol.104, No.7, pp.880–892.

参考文献

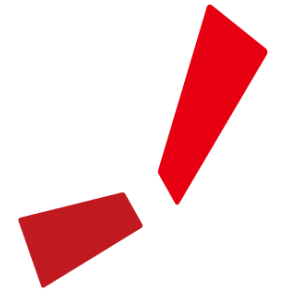
- Romano, F., A. Piatanesi, S. Lorito, K. Hirata(2010), "Slip distribution of the 2003 Tokachi-oki Mw 8.1 earthquake from joint inversion of tsunami waveforms and geodetic data", *Journal of Geophysical Research*, Vol.115, B11313, pp.1-12.
- Romano, F., I. Molinari, S. Lorito, A. Piatanesi(2015), "Source of the 6 February 2013 Mw=8.0 Santa Cruz Islands Tsunami", *Natural Hazards and Earth System Sciences*, Vol.15, pp.1371-1379.
- Romano, F., A. Piatanesi, S. Lorito, C. Tolomei, S. Atzori, S. Murphy(2016), "Optimal time alignment of tide-gauge tsunami waveforms in nonlinear inversions: Application to the 2015 Illapel (Chile) earthquake", *Geophysical Research Letters*, Vol.43, Issue21, pp.11226-11235.
- Ruff, Larry J.(1989), "Do trench sediments affect great earthquake occurrence in subduction zones?", *Pure and Applied Geophysics*, Vol.129, No.1-2, pp.263-282.
- Sakaguchi, Arito, Frederick Chester, Daniel Curewitz, Olivier Fabbri, David Goldsby, Gaku Kimura, Chun-Feng Li, Yuka Masaki, Elizabeth J. Sreaton, Akito Tsutsumi, Kohtaro Ujiie and Asuka Yamaguchi(2011), "Seismic slip propagation to the updip end of plate boundary subduction interface faults: Vitronite reflectance geothermometry on Integrated Ocean Drilling Program NanTro SEIZE cores", *Geology*, Vol.39, pp.395-398.
- Sanchez, Alejandro(2006), "Tsunami forecast using an adaptive inverse algorithm for the Chile-Peru source region", a thesis submitted to the graduate division of the university of Hawaii in partial fulfillment of the requirements for the degree of master of science in ocean and resources engineering, December 2006, pp.1-50.
- Satake, Kenji(1993), "Depth Distribution of Coseismic Slip Along the Nankai Trough, Japan, From Joint Inversion of Geodetic and Tsunami Data", *Journal of Geophysical Research*, Vol.98, No.B3, pp.4553-4565.
- Satake, Kenji, Yushiro Fujii, Tomoya Harada, Yuichi Namegaya(2013), "Time and Space Distribution of Coseismic Slip of the 2011 Tohoku Earthquake as Inferred from Tsunami Waveform Data", *Bulletin of the Seismological Society of America*, Vol. 103, No.2B, pp. 1,473-1,492.
- Satake, Kenji, Yuichi Nishimura, Purna Sulastya Putra, Aditya Riadi Gusman, Haris Sunendar, Yushiro Fujii, Yuichiro Tanioka, Hamzah Latief, Eko Yulianto(2013b), "Tsunami Source of the 2010 Mentawai, Indonesia Earthquake Inferred from Tsunami Field Survey and Waveform Modeling", *Pure and Applied Geophysics*, Vol.170, Issue9-10, pp.1567-1582.
- Sato, Yoshiki(2013), " Late Holocene Geomorphic Development of Coastal Barriers Around Lake Hamana and in Hamamatsu Strand Plain", 九州大学学位論文.
- Schmedes, Jan, Ralph J. Archuleta, Daniel Lavalley(2010), "Correlation of earthquake source parameters inferred from dynamic rupture simulations", *Journal of Geophysical Research*, Vol.115, No.B03304, pp.1-12.
- Scholz, Christopher H. and Jaime Campos(2012), "The seismic coupling of subduction zones revisited", *Journal of Geophysical Research*, Vol.117, B05310, pp.1-22.
- Seno, Tetsuzo, Seth Stein and Alice E. Gripp(1993), "A Model for the Motion of the Philippine Sea Plate Consistent with NUVEL-1 and Geological Data", *Journal of Geophysical Research*, Vol.98, No.B10, pp.17941-17948.

参考文献

- Seno, Tetsuzo(2000), "Why the Philippine Sea plate moves as it does", Journal of the Geological Society of the Philippines. Vol.55, pp.105-117.
- Seno, Tetsuzo(2003), "Drilling the Seismogenic Zone: Some Paradoxes", 地震研究所彙報, Vol.78, pp.145-150.
- Shennan, Ian, Ronald Bruhn, George Plafker(2009), "Multi-segment earthquakes and tsunami potential of the Aleutian megathrust", Quaternary Science Reviews, Vol.28, pp.7-13.
- Stern, Robert J., Matthew J. Fouch, Simon L. Klemperer(2001), "An Overview of the Izu-Bonin-Mariana Subduction Factory", AGU Special Volume on the Subduction Factory (edited by J. Eiler and M. Hirschmann) .
- Tang, Genyang, Penny J. Barton, Lisa C. McNeill, Timothy J. Henstock, Frederik Tilmann, Simon M. Dean, Muhammad D. Jusuf, Yusuf S. Djajadihardja, Haryadi Permana, Frauke Klingelhoefer, and Heidrun Kopp (2013), "3-D active source tomography around Simeulue Island offshore Sumatra: Thick crustal zone responsible for earthquake segment boundary", Geophysical Research Letters, Vol.40, pp.48-53.
- Tanioka, Yuichiro and Kenji Satake (1996), "Tsunami generation by horizontal displacement of ocean bottom", Geophysical Research Letters, Vol.23, No.8, pp.861-864.
- Tanioka, Yuichiro and Kenji Satake(2001a), "Detailed coseismic slip distribution of the 1944 Tonankai earthquake estimated from tsunami waveforms", Geophysical Research Letters, Vol.28, No.6, pp.1075-1078.
- Tanioka, Yuichiro and Kenji Satake(2001b), "Coseismic slip distribution of the 1946 Nankai earthquake and aseismic slips caused by the earthquake", Earth Planets Space, Vol.53, pp.235-241.
- Tanioka, Yuichiro, Kenji Hirata, Ryota Hino, Toshihiko Kanazawa(2004), "Slip distribution of the 2003 Tokachi-oki earthquake estimated from tsunami waveform inversion", Earth Planets Space, Vol.56, pp.373-376.
- Toksoz, M.Nafi and Albert T. Hsui(1978), "Numerical studies of back-arc convection and the formation of marginal basins", Tectonophysics, Vol.50, No.2-3, pp.177-196.
- Tsuru, Tetsuro, Jin-Oh Park, Seiichi Miura, Shuichi Kodaira, Yukari Kido, Tsutomu Hayashi(2002), "Along-arc structural variation of the plate boundary at the Japan Trench margin: Implication of interplate coupling", Journal of Geophysical Research, Vol. 107, No. B12, 2537, pp.11-1-11-15.
- Uchida, Naoki, Junichi Nakajima, Akira Hasegawa, Toru Matsuzawa(2009), "What controls interplate coupling?: Evidence for abrupt change in coupling across a border between two overlying plates in the NE Japan subduction zone", Earth and Planetary Science Letters, Vol.283, pp.111-121.
- Ujiie, Kohtaro, Hanae Tanaka, Tsubasa Saito, Akito Tsutsumi, James J. Mori, Jun Kameda, Emily E. Brodsky, Frederick M. Chester, Nobuhisa Eguchi, Sean Toczko, Expedition 343 and 343T Scientists(2013), "Low coseismic shear stress on the Tohoku-Oki megathrust determined from laboratory experiments", Science, Vol.342, pp.1211-1214.

参考文献

- Uyeda, Seiya and Hiroo Kanamori(1979), "Back-arc opening and the mode of subduction", Journal of Geophysical Research. Vol.84, No.B3, pp.1049-1061.
- Wallace, Laura M., Susan Ellis, Kayo Miyao, Satoshi Miura, John Beavan, Junichi Goto(2009), "Enigmatic, highly active left-lateral shear zone in southwest Japan explained by aseismic ridge collision", Geology, Vol.37, No.2, pp.143-146.
- Wells, Ray E. and Richard J. Blakely (2003), "Basin-centered asperities in great subduction zone earthquakes: A link between slip, subsidence, and subduction erosion?", Journal of Geophysical Research, Vol. 108, No. B10, 2507, pp.16-1-16-30.
- Yatimantoro, Tatok(2013), "DETERMINATION OF SLIP DISTRIBUTION OF THE 28 MARCH 2005 NIAS EARTHQUAKE USING JOINT INVERSION OF TSUNAMI WAVEFORM AND GPS DATA" Bulletin of IISEE, Vol.47, pp.115-120.
- Yoshimoto, Masahiro, Shingo Watada, Yushiro Fujii, Kenji Satake(2016), "Source estimate and tsunami forecast from far-field deep-ocean tsunami waveforms—The 27 February 2010 Mw 8.8 Maule earthquake", Geophysical Research Letters, Vol.43, Issue2, pp.659-665.
- Yue, Han, Thorne Lay, Luis Rivera, Chao An, Christophe Vigny, Xiaopeng Tong, Juan Carlos Báez Soto(2014), "Localized fault slip to the trench in the 2010 Maule, Chile Mw = 8.8 earthquake from joint inversion of high-rate GPS, teleseismic body waves, InSAR, campaign GPS, and tsunami observations", Journal of Geophysical Research: Solid Earth, Vol.119, Issue10, pp.7786-7804.



中部電力